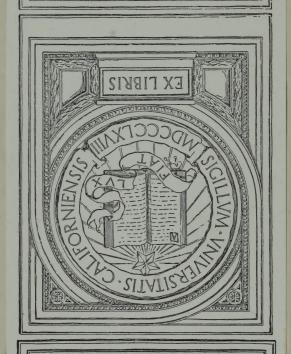


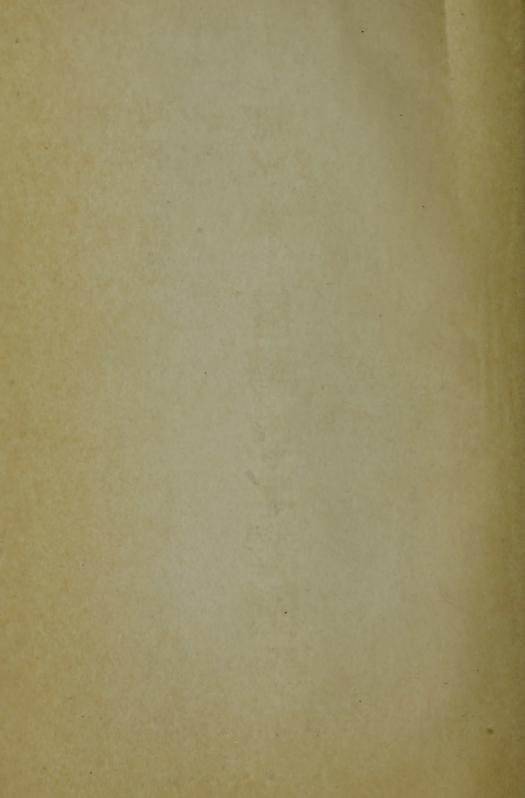
#### COFFECTION OKIENTAL



WEDICYF CENLEK FIBKYKA NAINEESILA OE CYFIEOKNIY 第人冊

題 指

春剔堂蘇珹



纽 弧 胍 別夏 맲 际 弹 一 學 太 太 Ŧ 輔 昌 宗 剩 道 ¥ 昌 糊 錢 林 田 晋 林 \* # 理 1/1 口 翔 李 \* 妆 图 ¥ \* 無 眒 中神 距學轉士 田庫車甲 南面

P127,1 1929-34 7.8 1929-34 0.6,

4 7 佰 帮 \$ H 4 Ti 铒 3 订 9 21 器 發 4 24 7 4 平 ~ ? 2 4 隼 常 武 號 9 关 杂 0 TE 4 21 确 間 縪 6 岁 其 郎 do -1 24 < 1 7 6 0 7 2 選 9 彩 海 U 24 71 34 9 6 塞 7 भा 环 整 肝 计 71 1 0 箓 斌 0 # 4 體 6 \* 簸 7 7 事 71 2 海 4 函 留 班 业 理 7 24 孙 丰 y 6 9 豐 皋 0 荥 事 9 0 郎 米 U 杂

即除八年二月二十十

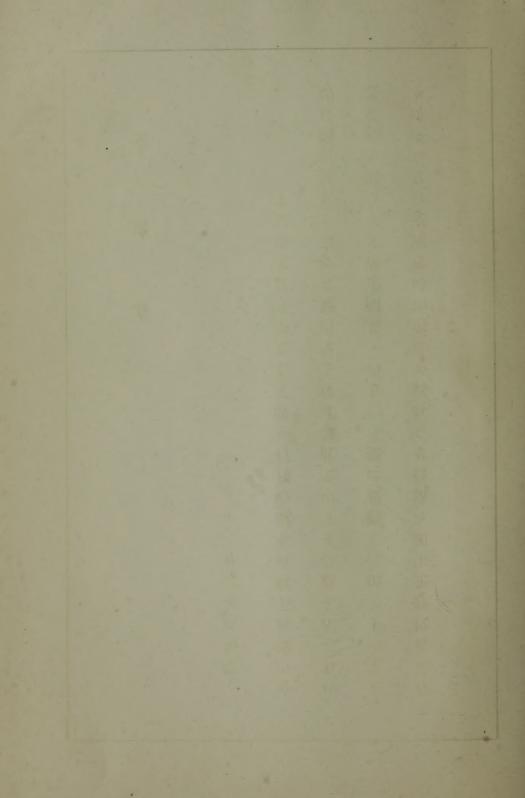
日

盂

14,

刪

幸



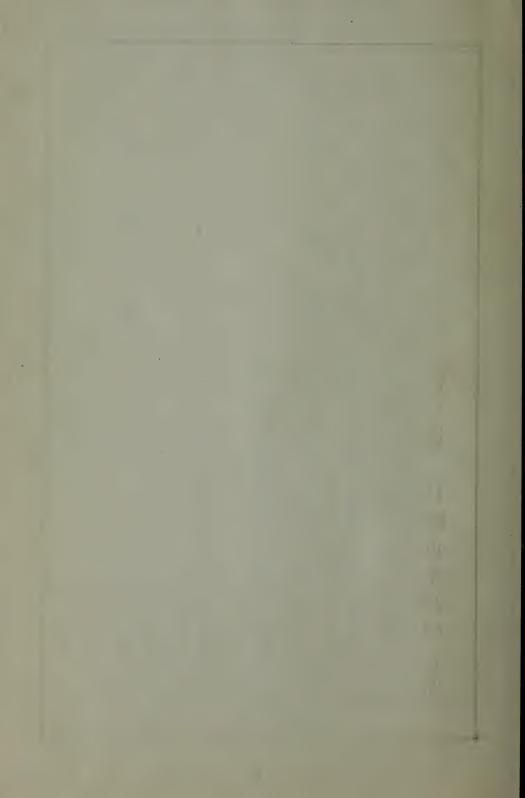
# **蔥**指國s本草縣目 第九冊

#### 目末

### 本草瞬日菜浩第二十十多

**攀**菜 王: ¥..... **東風菜 ………………………………………………………………………………** 

題指國器本草縣目(第六冊)目夹



XXII	· 4X······	图》(集集)			XA	オキ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		音茶 銀鈴菜 孟城菜 强盟	0)	*	
流	**************************************	翻橋	加茶〇	蒸	:	秦孙泰	題關業	茶膏茶	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	理	, 64,64

· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
[]
馬齒莧
大学 (学 ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) (
<b>3(薬形)拜月</b>
同 <b>四</b>
<b>5</b>
<b>3</b>
加人対革
常公英(此下) ····································
黄瓜菜
李
<b>杏蓉</b> (龜珠)

	***************************************	\(\sum_{	<b>計</b>	527	0坤 ]						芝一	<del>                                    </del>	4字
聯呆	观	<b>三加</b>	南	越风(蜂鸟)	陆瓜(景교)	**************************************	天蘇韓	者 <b>本</b>	水菜穣	紫菜		本业上 本业上	<b>雲</b> 角菜

書名         甘蓋         百合         山丹(珠莎菜)         草 7 蠶(日餐子)         竹筒         一の         対常         一の         対常         一の         対常         一の         対常         一の         対常
本草醂目菜脂第二十八彩
李镕第二十八张目駿
子 [ ···································
<b>生</b>
<b>连</b>

÷ ÷	
1	
林林	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
林林	
<b>ま影子(半岐軸)</b>	0州川
灣	
<b>₩</b>	€¥#
達	\A

CUENT	₩	部第二十一級			EZ    EX    EX	〇生 1	FATE SOLVE STATE OF THE STATE O	<b>王宝</b> 冈······		<b>事</b> 义囚:			
(松子)	横貫(聯書)	本草聯目果陪第三十一彩	果陪第三十一番目藏…	支果酸	<b>科</b> 姆	聖	华国		木太子	 邮 華	正幾子(陽掛)	五子實	

<b>间</b> 增	<b>山</b>	7	¥ ;;	中一班		¥	平 三	OII#				十二年	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
													室。
								~	十一番				
月逝	都 子 种 报	器念子子念者	都太子	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	<b>東京 温岡東</b>	<b>上</b> 疆	調物物	<b>社</b>	木草雕目果暗第三十二零	果暗說三十二条目幾	球	秦树	<b>三</b>

\\ \\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	三字时	<b>才子</b> 团·····		TIF BIZ	702	00年	侧0年	40年	☆O♯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		40年	0	<b>事</b>
	海然于	<b>露脚</b>	大皷子	班子	無新子(玄禮賽)	光獅子	返木饕····································	拉羅塞	**************************************	文光果 天仙果	四十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	**************************************	上

第二十七番 凯 菜 目 鯼 草 本

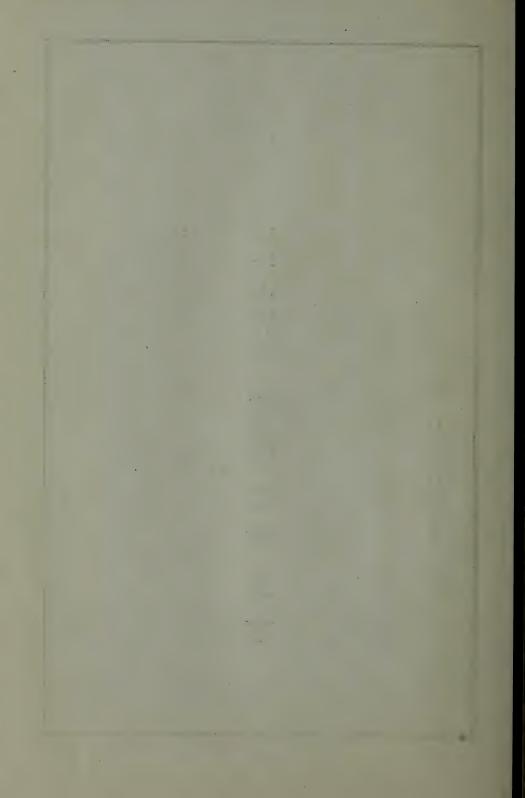
572 III	<b>班</b> 丽女	XILL STATE OF THE	The state of the s	a	水街	<b>負菜</b> 黄/藤子>	M4. ************************************	本語   1	7年	¥d棋······(类	
量椒	重	地	胡椒	畢 營 流 … пы шы	吴 亲 萸 …	<b>夏莱萸</b> (蔣子	鹽港干	<b>太小村</b>	酯林午	太(茶)	7 14 3

## 本草聯日菜語目幾第二十十多

#### 茶611 条骨蕨四十一种

來嘉施 唱片葉蜜。 東風菜 開發		<b>歯</b> 覚	<b>古</b> 全聚 水害寶 圖縣	公英 割本 明古此下。	癸 眼緒 唱古獅菜。	<b>城</b> 縣目	<b>建</b>	永, 盂鼓菜, 鄾竐亦附下。	成本跳 唱5山游。	
<b>蘇</b> 茶 豪術 **菜	新葵本琳 唱·大管· 藻部	真本聲	白雪 素術 电心主集。 高年	仙人対草 盆盤 蕭、	<b>建加菜 圖琳</b> 茶菱	滅 計劃 水瀬	迎當本點 唱力理解記。 汉該	盟 本 報 本 報 表 報 表 表 素 素 素 素 素 素 素 素 素 素 素 素 素 素 素	土羊 計畫 昭下上班。 雲黃	
勤募 熹術 咱≠未財。	<b>秦</b> 明錄	首清 明鑑	告來本縣 鸣音音	1	黄瓜菜食肿	療茶 眼絡 ゆき魚鰮草。	廢熟 台數 唱片東來。	秦州臻郡本	李 明緒 理事亦例す。	

本草聯目亦將目籍 第二十十等

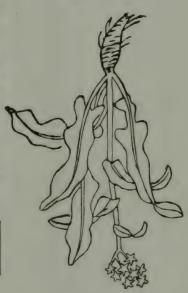


事會要 からでは、今日会時

· 2 4

るとこれは顔変働 7 で酥酢するといる意味の言葉が 派のて放極となったものだ。 持つて死た。 森) 菜-

(英) 一流 稱



まかき将(藤林) 弘

の野田園

122年、一日海順

赤財茶

**煮茶**(縣目) 或滿草(縣目)

7

盐

でや園町は種の養産」に禁門

出たもので、ある骨がその子を

Spinacia oleracea, L. いまんれられ N 麻專科 嘉市

宋

發

燕

酥 十回類婦老 一 〇 菜

> (1) 回玄聯へ回玄聯

並

经

即ち甘露子。 電と球形薬。草 方盤 合置

山丹 日華

本草縣目菜脂目纔 第二十十8

麵當 瞬目

一百一十。 四十三星

右附九

竹笛 蹬本

丹石を肌する人おこれ 名下る部 、〜鰮み中 。手縛る無見 、フエス等 胸扇を開き、 別、胃の焼き通い、 で食えば針し」(金銭)「血風を)近、 弘心就会かり、知心就中以一丁(和金) 「五臓を形し、 いる間とはの 果 Ŧ

南方 対7を負もけり大小側を的すを できるいと自つて自るのは、いまな物を 。ともから明了で食をれて 水米ざ気い い。日 は気が、気が、 邰

24

0

骨なるところから数 人就で大動は監響して 常り数鋳楽の隣を食えば宜し、 張松五の儒門事腰び『凡ふー婦び、 ア自然の動味する」とある。 みな 楽 あの人 お、 被予るに , ~ 日 · 00 % 時の ひ葉え 通光

遊藝財 日が一下到と角でものひお、 一日三回、米角アー鉄玄別す。(辞館で) 「散場百姓」 条。 てまなして 4 印

合産素物した・糖一・四、適〇・ 大、MgO 班·三一十 六、SiO。三一近六。 發表却、酥子、精素 三。又冬季~該品城の一・九一三・ ナルニ暦シホテトナ・ナートル・正。又 は とって かんなど はまま はまい かんしょう はまま はっしん いんしょ 用 Fe O, 11—四· スをかししる日子 一、下鉄林頂水・六一一三・三、鰡〇・ ハドッ。本会中NagO 11、80。四、四一 110.0-400 ナ・ド·Osy、ナ・ナー アンチャンアーゼ · 放於一·九 · ·

地黄 が、天を制し、 減り、

微毒なり、 敷め到命さ思え者 素圖を強するのか。什么加つて書る 團献を難し、出族を値する。 しつも華エフス県、忠 。ならなけるのとがはいめ、 て用」 れば人をして開源ならしる 规 源 おかず観を動る。 捤 及 多食力 类

规 九月び蘇及れ対冬の食料の料する間となる。 数子がの薬の派状が 21 薬 その薬は **動け対版のはる対薬子のゆうな質** 水、く皆つ野湾といればあり聞いて耐えるもので、とうすれい受難しるし、大粋を 以) ひらん、 ラー大き )、 うの財 お 見を 捜 すみ り、 太 と お 計 動 到 ら プ 色 は 赤 )、 四月い臺は母って一月かんりかなり、独と細とはあつて、 その整名条調で中に交びなし、 ぞり兩尖を出して、 やおも一の計異かある。 業競して限でないは、 一月び鮮るれば春の満の満となる。 森で観りして季~夏~「直~一尖を出し、 高谷 日う、 数勢 お入 目、 瀬日 小 職 きると生まる。 流いて降けたは花を開き、 お取り甘美である。 璵 菲 正月、 古月の

立士 お割各 シ 新様 草 と 利 次 と ら ア で熱すれば指し食味を益す」とあるはこの物た。

> 対策線素、なロキングントキャン及と一に近次、窒素を合うスペル・登音でスピース・1・一手が、一手が、無害もなって、一大は、一手が、無害もなって、対、地が量・充った。 [ 餐你]Wehmer: die Aufl. II M > % Spin-、明や兼へ、禁品 acea oleraceae, L. く知分へがくはかニ シテールン文瀬ヤア 五、加素、強、熱煙等を含と。而シテ「フ 1年十八 「イサト 三、木材(鬼)日下 Pflanzenstoffe diaceae) .4

029

7

印刻、中間、

「京林村」なられるを

Spinacea oleracea, L.(Chenopo-

文

## 対 五 震術の脊鑿菜を削が入る。

床 なるなき除(基株)

際 ネ ゴーゴン <sup>2</sup> A Beta vulgaris, 1 特 A GAS棒(薬料)

\*\* ※の音は様(字 (別鎌中品) 麻 な けらさる

。。。 、留は人幻光で輸業を貧のア遊び程島を食ん。この二砂幻時 蘇器日か、南は人幻光で輸業を貧のア遊び程島を食ん。 なやらびは録するのか。現華の朝は志び「勝の知帝が理甚な一只をで願いた』とあ 分するので自然の苦をないのか。やを知って程意の昔の衛が対うの思う養汲する。 これは光びこの東を食ったものであるらっ ff 發

す。 煮て食い、また生で黏いても肌す、 業料を削いはして肌ずれが があれる ががが す」「細金」に満れ利称のたいある。 Jik,

出了少小の松事なみが華、華とる古長の て、致と共び水土で上下してある。南方以外ける一種の異のた満菜が」とあるとこ ろを見ることの家は水、強いでれる生するものである。 すると海のゆうづなって歩ん水面が率が、

(風軸棒) 4でやら、 その気性やIpomoea aquatica, Forsk. (Convolvulus reptans, L.)

『蘇菜の薬お落薬のゆうう小さい。南古此古かれ、 輩を漏んで強いし、小比をありて水上の容が、それの子を下して水中で酥酥する。 対でるび、都合の草木状び いが、

月 養土で整えて置っと前間よる英生 段公路の北 日後ひ『その薬な師のやられ』といったのよ 幹お茶~蔓の **密内と共
び
歌
で
あ
の
あ** 九月土警中ゴボン以入外ア三四 いな響節ので は繋びなるをで煮ると東は重し。 A 曲い故るるのだ。 薬幻弦藝、 地お厨づ。 文が 本でー ゆうで中沿 0 % 、以番る重 い郊田し、 2 3 (熟 菜)



掌 その世は累地が適し、 及が江夏地方で多う語う。 藤菜 お 貶 い 金 園 、 , ~ 日 特の後

哉として食 遺生で白木を開き、 新菜 お 路南 う 珠 お す る。 る。日常器は日く 湖 9. 事 21

この東はたけ難して作るものだから難と 権お難と同じ。 , 〇 日 命の後

木材(親)日下

XWehmer = ■ ン、 同圖、S. glebra, Mill. 來華「中日中 ン、發表和、郁神館 ニ「ルルボミン」中含 『・ X S. inermis, Mnck、バトロデン のロトントを強操 でロトントを強操 (適用し、一人〇ペミー へ会用 ーン・

			020	3 40	Lt*88	ME	福
ETI.I		3,462	08.0	907.I	<b>65</b> 5,56	響	遵
08.1 7	5.0	1.65	TS.0	2,30	16,56	耶	Ŋ

食用財耐端ニョンド

7

盐

0

「年生び煮了熱いた竹を服をひかりの焼を治す」「金銭 間撃びして米あらしあるし瀬器) して面び潜れが松客を去り、 県

剛 「醋」で製 アントン派 「三種な脈癌」 早 Ŧ 「つな撃」ついす 、て井」 规 (強圧)【く聞み贈 됐

菜で碗を利って食べれ、焼を解し、焼毒碗を山るる。 熱を願らして充粛い動われれ のマンが解査」 ルを生する。全た着角関係のこれを刺われなならい減まる、減器)【最い煎して角め 为、胃を開き、心副を証し、輸入习室し」、Amo 「中を補し、深を下し、東原を甦し、 又、血を止め 風焼毒な解す。熱竹な消め知塾まる「眼籍」 新な山めて強え見い「難歩」「熱やを肌すればの療師の主致はある。 題風を出る、正知を除す、(裏部) 「都行狀態。 以 Į

去り頭合を思いた人は食へか必 お来黄の鉢のやらがは、陣動ガノア土黄色をなし、内が畔子はある。野お白色が。 公家の人名をなしておなられ。原を随下るものけ。 和 账

しれ日子、ベシャン

ストエイない

予題を強る。

しもとうしてもし 「やトススーや」す合 SO, 11-17 Fe2O3 豊一香物館、アンモン 二分等午春人。又就 -110' Sio, 10-心 Cu B Ca Rb等 ニト題様ならした正 \$ (30) CaO 110 はとしていまさん ・三ストハル×(%) ·用 P2O5 11—111 1-11 MgO-1--10'CI II-1 はしないないというできる \*

当業の乗び倒てあるは頭と、塗をやむも財験するは、たけゆや小といけれが。自奏業の乗び倒てあるは頭と、塗をやむも財験するは、たけゆや小といけれが。 主でを嬉してを食へるは、嫩し土産はある。四月以畔はな白本を開き、結實の米憩

人明中 批本二シテ

業菜お五月、二月以蘇を下し、 寄財からを自生する。その薬お青白色 0 -7 薬灯繁藤び似て大きり、北灯白 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 おいる。

にして冬枯れる。その莖を気に触 いて林し頭のたがで太を置へ出王 のやうな白色がなる。 塞 (業 菜)

お商警のやらア畔勢はあり、夏智 ○○ 別長日〉、 古お高を三四月、

桽

香美なものか。

22 南大の此でおい気蒸して食え。大い 紫菜の薬 は 代謝の 苗び別 である。

\* 表表とは既い触蒸いやるい用のるもので。 い。日子に 鄉 菲

地以因んけるのけ。苦茎の意味が呼らな \* 禁菜 おの日から

\*日~, \* 岁 盐 ランプトルンの 機一正四三点で。 B. vulgaris var. r tiring Beta vulgaris, L. (Chm > % B.vulgaris Rapa (Zuckerri-(原動体)でけるを へ母替ばへ級ニ南流 烟形、部草ニ祖主ス ≥ B. maritima -ちって、独独ニョリ あか 八趣動り出少み die Pflanzenstoffe II Auf. II A XX ットテノ研究シナカ be)へをオでデジこ CI、第へ原へ異體字、 い料理なナ [當休] Wehmer > こ 木材(現)日で。 TO 木材(親)日下 [備核] Wehmer Beta vulgaris enopodiaceae) のナルナノまん

### ない人パン食へる人間後)

· 二四(〇)祖二。

王二一川瀬湖一二二 三・十一一年三・三) 大厂共和人無常某种

0.000

ニ・ガニ(一・大五一 六〇・六年一二・

六・三・)、四線維一

Capsella Bursa.pastoris, Moench, 十字科 なってな 环學科 (明練工品)

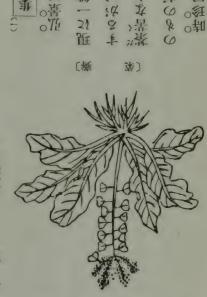
まる語れている草田鑑をなる ままままて新衛たるものかから満といったのか。 のといれる。 油 撃家でその変を切って挑散はいし、 はの日く、 生き動るといる意味が。 載土草 盐

○より、末年○・九九

(〇・ニャーー・九四

行新中、糖、春香へ 縣一十一一九%。B. vulgaris var. cr. 以財人財之 (%)へ水依六人(上)

assa.



正・四一・九四・三)、含 窒素物一・二六(〇・ 四十一三・六五)、間 山〇・一三(〇・〇二

素嘉兴 (王妃·○— 神人・六三(五・十四 四)、城东一。回四 (ナナ・ニール王・〇)

**计**松中煎糖几∨五

・ニールヨ・〇)ゲン

三章 いんは 香幻理中以生する 東を狙 21 H 0 強い食えもののことが。 番は樹ん場か多 、一日最 ... 黨 21

これっ こつ時のかってきけのす るるな器業 24000

か需え

雅

21 程

らまみである。

ゆは

小嫂酥あのア 養りお大、 での日かり

> 極 東風菜

題献目述, 刊獎組流 「風毒壅燥、 以 Į 寒いして毒なし」

湘

沙

及とは出くをくを存べて、 くく 財気(%)が

『東風菜は、芥葉お茶玦皷い別て遊れ紫汁。 香味れ思蘭が関ア地お猫のゆらけ』となる。 憲州記り 0 凯 門内で藁ゴノア食えび宜し。 雅 教するけ、 

薬お合業 °24 並お高と二三八、 煮了食えび基が美利 のる子事に基立 C Sy St 主 東風菜お路南の 眯 21 表面 \*/ く直へ で日~ 多學 こびで長く 翔 兼 

+ 市大。 子端中二一

。 は日と、この菜お春び来して生でるよら東風なるを解れる。 必なるというとのと得るとなる その意 い打冬風と書くは、 4 盐

がないがしかい 中子で日子

K20 1.04 Ca0

(民 P2O5 11・十

(1) 女大キシャーサーサーサード

永 子 四 · 九 九

ガラガー図画

Aster scaber, しらいままかり もう将(南科 岁 科學和 寶) 誾 亲 菜 画 東

臺灣 銀石 米ない い要薬して離合し、 高貴子子 一銭ご AH. 芸奏子 日 麻花子、 中ユ 対命して末びし、 6 思な去の 子霊霊 、類な別 子選集「可上權達 器コスパア土下から火きなりア刺療し、 惑子等 伝述 大嶋魚 涨 立る。 4 で服す 印 鴪

トトインノ・ナーム

1. 日本 本日出

五白質一十 アミーデエ

V

文、妙、雅を報ける「七夏) 「第下が市け対量が組わる。 믟 71

瀬を含火の際王。ののので買のから事!』(議論)【選目。のよに明で目】 変を治し、智を去り、焼帯を解す。 「風毒邪辣を去り、 八一人別をけ打神は織明了厮まる 八七夏 す「西難」「頭頭が合す」(泉書) 以 ¥

東帝は~食をれるかのなく思を減、~日糠 [しな毒てした中、し中] る値でる。然日ろ、勢と共い食おれない。人なして背間かしあるものか。 する人お貧いアおからゆ。 省 jik,

四月八日习釈刘する沈貞」。『田王日〉、因却の憲习お、子を釈のア水予瞻へと越び 。2日を47子と意味なる、く日管子。2年乾陽くつ迷に日三月三、く日最 。ないまないまでは、まな解される、つ

黑 75 24 東電 で 節子大の よりし、 一 び置き、鑑証な人しと思い知道は自ら落さる。《樂幣縣』「重都頭大」四型計更し、 いつを刺虫馬で服す。なか二三水で小動は青っなり、十給水で週ば塩のゆう 籌菜班与等代を末びし、 間端離を炒り これには、 田三つ。や

い観音びへ子宮午著

シャのないないかのかっての

インドム 五二ョンス 山血計用を存っ子宮 御等、出血: 煙シ 「コリテスやス」財政

面下りての

[黎田]全草へ呼泉郷燻、竣下ド(吳間)火

94) 266 O. A. und H. Cappenberg: Arch. Pharm. 259,33 L. Zackmei-Szécsi: Ber. 54, 172 (1921) E. Bombelo-O. A. Oesterle: Schw. A. pot. Ztg.60, 4 Oesterle und, 樂龍大正一二( Acta, 1925 (8) Ztg. 33, 151(1 ster und P. n: Pharmaz. G. Wander: Helv. Chim. 41 (1922); (1921)

放代文類 日20窓

[明い響頭を生ごたるもの] 巻菜の財と莖と葉と変形等し、常じ茸して解末 (軍庫

waste らびれ、養菜焼な村いて仕る商す。 漸駆し、 **豫二。「暴赤期」** 4 树

薬の熱 「刊を际し、中を味す」、明経) 、雅、 胃を益す了(神経) 、つび血で目」 以 Ŧ 本打売白麻を治するり動めて後はある」(運動) 【しな準としい歌、し中】 掛お目献ざ合す】(大胆) 「五棚を除す。 丰 16

71 さいます 立いまでは まいました。 うの最を除小なるをのを必養とをわる。 大養れ 0 ン五六七 3まり、略んな白赤は整盤として同じやうい関う、そのは、2歳 5小 帯のやう **印製は 『織甘甘ならんと粉して光で蕎を生す』といったの 憲瀬お草陪の閼草藤が暗**歳 薬おいつれゃ大きくして東おそれほとでなし。その遊ぶ頭~して手あるもの、 いでれる冬至後以前は生き、二三月び整治時 - 養えとのからなったの子の薬に大郷の中 意蔵はいっれる 著の 横つ あって、 まるなり、東お掛け掛っない。 新養となり、東北東の東京の 四月八対める。 滅の ねこれである。帝漢、 がお三角があり 北 こともてし 、おおろ

> おいいと」及ってアナー 「カン」及ってアナー 「カン」ので、アナー 「カン」ので、アナー で、アン・アートー で、アン・アートー で、アン・アートー で、アン・アートー で、アン・アートー 「カイン・アートー 「海ボールー で、アン・アートー 「海ボールールー 「海ボールールー 「海ボールールー 「海ボールールールー 「海ボールールールー 「海ボールールールールー 「海ボールールールールー 「カン・アートー 「海ボールールールールー 「カン・アートー 「東京 「カン)、東立 「カン・アートー 「カン・アー 「

(香) 本が(親)日か、 (園都郷)がかか Capsella Bursapastoris, L. (Moench.) (Cruciferae)

「気を」全草へ「コヨ

こ、木林(親)日か (南都牌)」よりまき ハ Aster scaber,

○・○七次。

美

0 いまはく幸心のもい中、く日本 「一な学し、歌歌」「幸」 圳

刊 、「野を選、「地を中」 県 ¥ 【一つは、一つにする」 を除し、目を明ひする人相会 1:K 田

小なるる養といれ、大なるを精賞といれ、精養のお手はある。強い中用も失い同じ **営瀬っ部** 北方黄である いる日と、海と海婆とお一种である。なみ大、小の二種の合いるがわであって、 いのであって、刺上真の本草がも、やおり養質、一名特賞と聞ってある。 養とお同議が近、なな辞彙お束は甘~、赤は白~、耄耋お却は書~、 やおし配する 

一条砂灘といえ。精変とお大薺のことで、大鵬の外で二砂いでなる薺の ――音は典(ラン)――といってある。葉はみま香い以 0 爾雅いは電機を重 の方は多く用るてある。 一127平 0 2 84 たるのでい 即目( 酸で、

大番といえ知識瀬のことで帯漠でおない。精薬お人をトノン語と 一個は当か別なるものだ。 よとして同じ。 案するび、

> (ii) 本体(親)日か、 (氣失) Thlaspa arvense, L. 《陳韓荆 、論黃卡舎 A氣奈卡 市木。Oragendorf: Heilpflanzen, 253.

て批米し、

Pharmaz. Zentralhalle, 19 19 (6) 237;

C. Grimme:

H.Buttan u. K. Cafpen-

berg: Arch. Pharm. 1 21

248; 紫結大正 0(四十四)三

藥用文譽

Capsella Bursa-pastoris, Moen. おうないないは ¥ 7 郎 學 (明丁經本) 音は観覚シャカラナカラ 萧

ch. forma. 7 料

草幣より近り移し入る。

数

>」(屬劑 Horstein

8 Co.) へないなみ ピロシリぞ、存放気 分をは出ジスルドノ ニシテ子宮出血、月 財馬をおくても関出 な血等三十二等の数

新郷しとスチアルツ

(259) 33.

大養(収穀) 大葉(本跡) 黒辛 盐

のとなることはいるとのと 、目羨な一、目地な一、公はに草本最苦

の。 収験37日~、 新漢お魚剔の山翳、 及や 飲剤 31生で 5。 四月、 正月 37 我でア暴済する。 近景日〉、 やお動動がある。 これお大番の子のことが、 はが用の 斓 菲

ることは基が稀が

ことのでんからとからいか 権の薬び似て解い。 という。とは、人口音は

> psella Bursa pastori 3, Moench. (C-

ruc ferae)やくせら おいな Thlaspi ar-

(原動物)ないなCa-

トンテ題用セラ

vense, L. (Cruci-

生に一番に似たもので、谷の老養と ○○ | 製器日~、本壁の『新菱、一含大巻』とあるな、瀬田お翻訳を行いて揺しなお 本とあるは、しかしその地は甘くして幸くな 「新漢お大養なし」とあり、 簡無に , 日 公 彩

日对一総でいる事長が現すが対人麻を治す人大胆

。る才生を状の自張のは、まれき、は、人名小に関いからい日張ののおとない。 の展上に延に盛、江東は間の種田、この多く多には卑。のなる路礁は町、く日政 いばてあるところからこの名が呼ばれる。本草では繁雄と難関とが一様に関わてあ その遊頭は豊いなってのて、欄では緑鉄はある。又、瞬くして中は空である。 に 禁出 随能 こ 一 鼓撃、 瀬珠打きれな一般なといったは、藍で対するけ、

釈のア薬バスパる。

らう白種草なされらしい。のこのは、薬も青り、薬も青り、、薬は青り、、薬は白い。 古ま

親といは、筆土は熱て撃難となける。 売日~、繁雄、他ち瀬である。文、恐

郷スに運用に投票。で利用に側の番目の研究へ家。れてての開業はれて、く日常 。その出て了真、今後に中日の日王月王は籍書、今日に類的 湖 淮

の草のこと間、しているないではないでしてあるなとは草のない、同というにはるはははいないではいる。

いれてる

age Mana Wall といる。上級市の「数を対し」といる。上級市の大学を表現しばいなる数章といる。上級市の のの日か、この草は遊の遺伝法が築り、中以一線にある。松び各七たの状の 谷の製造するもれる所の形容である。

病 音は強(キャ)かある。 審難(降難) 故草(下金) 数 (脈腫

Stellaria media, cyr. (性外化)性にてよな 胜福村 (別録子品) 깷

なごご

满

「半てつ襲多様を子意株、はに対る不て用な返【猥凝目断】。一巻、一種 し、歳韓初づ離響で少量を目が端入する。焼焼、及れ悪神は出て当外割をものであ る。【現中の警点】はお上の同じ、政策の温けるの(単元務等上式)

「肝の恵 江鄉之師し、諸光玄 八人へ服をは対社を贈っし、然の生人本難)【心園関節を報き、服籍) 日献了頭の出るもの。東玄翎を、 现目法祖法治少 [海縣] のと中で加及目 ※ というと 以 命もの

除幸と語合するは良し、貧豊、苦寒を悪い。一切お害寒は動とするといえ。 く日本で、ざいてりな郷小は本農家、ないて一歩は玄黒 

除り出した対ならの通徳知二代を入れ、少量の水を 、り王しつ第多様を練るの日王 乘 【海长〇号祖】。今運

間愈 撃戦草を雨手が高つる引とを水で煮 【番輪が取のあるもの】新びびお繁繋を用のる。 たお前頭 唐一、帝三。【気治习因のと強を無うする】業験を離りして人 つい 温を選び無うする。(聖惠古) 「小頭卒林」 アポリ海で、ボガ東場より 4

惡歌を治する肺炎の広はあつり、熊杵を塗る。菜がしり食へ幻人聞を益 をた了草の難へてもりす。たけこの一種なけではない 五月五日が発ったものが別の丁蛟總はある。 新を報する77有数分。 い。日 000

C1 九·万(本人一〇.

イン「ベニルチ」の(正

中規キ, 動下へ○。

三・六(海へ一〇・十)

指と悪血を去る。人しく食っておならぬもので、血は盡きる恐はある。

いく日常

Wehmer: d. Pfla-

nzenstoff II Aufl.

八%八部間十合工。

(黎用) 月間ニティ全 草卡隸人畜殺人衛血 黎及と掛野難インテ 前用ス。木物ハンナ 食鹽へ配合い熱キテ

葡萄部子製造ナドの

新城 正月五日以釈り、暴強して熱いて削びする。 野汁を下す 南で炒って竹を縁つて温服する。 、の鍛み町 寺の強をひるのと問題) 着後頭の財産はあるひは、 指勝ではして丸びし、 は京日く、この東は、 、凝選の支撑】 お食えばよし。 むして未びしず 以 H Ŧ

。なしいる『をはていまく

K20三六·六(海へ及

Nazo 六·九(京)

二一、万(海へ万)、

西·大)、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>二·大 (海へ11・1)Yp20,4

四(海〈四·大) MgO

四用·四次)、CaO 1

(前人111) 80,11。

大(海へ二・一)、いらの

H

基

。了鄭了爲〈井、〈日琢母。 〉 呆、〈日攤 【つな撃しつにす、つ疑】 、一旦器 溗

月正、くるこの極い神の潜上。いなける間様このなる間にはいい、神楽 薬お大いと計편おとあり、塗解トノア蔓を旧を、濁ア为中は空ア絲のゆ 日日の 果瑞 张 こうして見るとまたこれはこ やおしとうでお しんし喜些団後大ゴゴ 故い一般に食して宜し。 明 小置き詩が、軽ば到当の大いをア中ゴ葛瀬下の今さな畔午はある。 並は空か繋はあり、 並中以蘇れなりして微紫色が。 北口生するものは、あはその土地の 白井のものお雞馬なとしてあるは、 って不同であるところから、世間で一物と疑えのだ。 極の砂のやらでもある。その用金は掛して血を主とする。 旦し 登場 おおは 中へ みれ業職を用う」とある。 、心場解は多面、く果で際も呼ば脂離 観草」とあって實は一般である。既以南、 。やいる的画し行るいて は蓋し相似たものがが、 黄苏のもの治愛퇧、 本林を治すとして『雞鵑』 紫色である。 おの日かり 14 は近生を 北を開き、 の本草が、 。公国リ 01 M

「電腦り主教 以源水の職はを渋く」、運動) 【五月五日 以末以して鹽い味し、一時の新、 茶として おいて飛躍が割ける。代を知って置きに 日以正六回馬へるあるし。 (等引【头链系展照确础】(時刊)【28下系封值小 い門を対する。大様でははいいはいいにはいい。 X 問膏の毒派をえる。 。軍軍 、「アイを客し、 士 果 風川 2 Ŧ 12 :4 貪 M

激寒で 、一日本で。一品、一日攤【一本華ユーに立、一品一本一碗】 和

でない。

028

[1] はられて、おきをおよるな連続者に登出む、文、とれて指文書はのかついろ のと計

章帯に関したのおおの野由が困ったのである。 る。 

森赤なそれを鑑らすして、疑って一様 となしたのお端さ。生で解め対残者なもの さなら鞭を結し取れるのである。 

賞愚お生 で離んでも残なないならやおも自ら国限し



ソン鐵道雅キイリ熱 取り上は四八日 こくいおいけいない 四朝三人切かニナジ い財政へ育てドで 放かしり。 劉強し人 こ一へ草子へ奉水上 サントランから、 者へ」ないけんから 下北京/東州中加了 八常二七十五八。又 教+以下聯+獎×。 斯子午鉄翻茶イス。 最近对世明七二三 4. 下倉人。又來就 まとれのさんま いておけれた 0

後間お下墓の此づまご、三月古に生き、葉お鷺はび囚と色は焼し寒と、 四月が小さい並は出ア正出の小さい紫 の本を開き、小とい置を結び、その置の中のお除んな子はある。その背お満り引い アル登場の支力ないものな。並の服幾でお撃撃を対策権が限したは、この草を対 中は交かなうして繋ばない。 並お繋が帯が、 はの日~、

これは愛難であって、この一般は絡たのものた。 。 ( ) ( )

。されて触物を終う、至っておるやらびしてされで動物解を持た 锤 靠

24

ると草語が立つけるのを割本アンの指が移し入れ E 数

Trigonotis peduncularis, Benth. はらさき科(紫草科 7 岁

そういいらま 唯海村 草(鼠錄下品)草 腦 継

五字、及沈燒世る食物 **育いして狙り、 耸け対見へる。 酒、** 容を忘び。割対数はある(副離氏) 

> (衛移)食用節仰端 メニカおけ=(ナナ)

chium pedunculatis peduncularis, ia aquatica, Scop. re, DC. = Trigono-ハンゼハ Stellar-Bth. (Boragineae) (Caryophyllacea-

かいロシセ Britri-

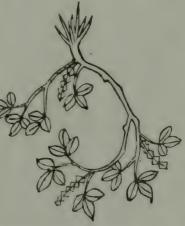
(二) 木体(親)日下 「京都は」にわるこ

北方の地では独たる 長安中のお背斎園といえばあった。 く日番が 稱 兼

『樂逝蔵ひ打背帯は多〉、風はこの間ひま る状のそが日。なのもるな器業職によるし X いる瀬山真塞をれてはる郷田米夢 照すと光采はあるので対風となり、又、 のとれなる画 0297 [.1] (操

米のそは水道のそのまっぱっぱがある水はに選猟 **法頭対対わるよるが。 葛光の西京雑謡がお** 

はなる。その様と構まは様は楽は様は 豳 の脚艦 その育場から自主し、中、馬を同効するゴよいものとの意場である。又、 はのは、 光風草 木栗(附目)



Medicago denticulata, Willd. まる時(査科) 12 弘 科密扣

つかこまし (明秋年出) 點

> うきるらい「神理道」 (1) 本材(現)日下

のなること

本事が 和を米て煮て中の片を豆を上一草脂織 将河 強闘草の 解卒等伝え 樂剔草を対け割も、鹽 「発背で死せんとする あお末び 機関草を患いて窒るの(研察氏) 【様工の中で 日公野了瀦まる。(園丸は) 毎明三錢での水一鏊で煎して現す。(粤幣縣)「風焼下)」 「原林凱甯」樂剧草三兩, 0 赤、白いお、 , 重
重
吉 猴剔草 O TM がか献 雞腮草 一節都」 ○ ア酸 ら ゴ 気 え。(食醫の酸) 【小 昆の 7 限】 0 。2 裏いて患る草臘藤 小見の形触いれ、 【寝選集区】(は終日)のりはてい得る直脂雑 当か良し。(孟総食験) 函校にある。(醫林五宗) 【小動味を上める】 「海豚の海豚」 江瀬の家舗せるもの、 かとなられるひは、 。と擬しい。回三日毎 島が一合以蜜を味して服す。 るって孟浩食類) へて恭る。 新し。 親に作 スル XX XX して潜能で調 ーユンギる主 を応して頼け 発売の場合である。 しまっている 4 羹 大いて、 0 सिव B

2

800日)、対でる対、到町の戦部が『武打遊、薬はいでいる高ラ大き

Amarantus inamoenus, Willd. 山 省社

ひの将(道科)

(本離十品)

帝 「中弦妄」、人を呼す。八しつ釘ふアよし」(眼籍) 「正難を除し、良多 競事にお、煮て糖を取して含え、また養いかるかよし」(金銭)「大、小脚を味ず」(金 ルー【寒ゴして語なし】一生一台「機能の〕が、日黄赤、小動養、 販、「違倉下け为人を盆下」 糖酸) おり必万林新を治す、一個多 )sk

日報。「祭こつは日職、今日輕光【つな葉。「製こつに支」て是】

>、海本り。少し食えは秋し、多う食へ知的就をして簡中以入らしる、人を動せし 韬 (ロンニ中子村) カイーサンチ北須大 コメメし、耳ってよしい り、子三米ン暦号へり 旗を含ん。故妙前時 「ベニスチ」華生師 d. Pflanzenstoffe (當本) Medicago sativa, L. < > 至、三合子 レナーナ 部油市ベナ·大三% たんしてんかとコレ 第十五百買八分 年、ですると 一時期 其如治耐、精素、類 次ニシュナイニボ 耐し苦和賀を存入 文樹 《 Wehmer: 11 Aufl. 539 11 €O 「人かんコンン」」

真

は背

71 鶴頂と u 場が 内は熟米のやうな米があって、 羅願は出を以て贈頂草としたは、 いるないるとれば のの場 た酒でも難し つる はならの対策のことが。 。マなっる番番 石 9 :4 24 B 秋 21 0 图 疆

樓 重 圓価強轉して極ばあり、 つ了職位な黄色の歩き開き、小ちつ羨き諸ない , 9 OF Y 21 二葉 独 X

並お随る液盤が別と、一対び A 。は母母様なかることは直出として多小してはな様の祖がは薬 れるもので、一月い前は生き、一样は襲十遊いなり、

q Fl

11

(三) 数鄰へ数河

アンスナンはより。

三 大畝へ古國各 令、複顏中央亞眯

教諭かれずお 年年自生するのを首を入って満いする。一年以三回以 田野いある。四野 「音楽などの大麻が出かるのか、 といえば、しなし今でお勧惠の 鉄台するものもあってい 21 21 24.00 写真 辦 おの日~、 27 0 割21 囫

いつとしてとなれ生えるものだ。 2 財があの

ことはこれても人は語い様、かまなる人を これと言いま言い。 17 | 対西い掛い多う 宗・一日の学

郡

17 ्य प्रम् 11 2 **滑車といえ目の台繋が用あるものはあるは、それはこの豚の草で** 東方な めの此けでおその財を知って上黄海とする。 FI ルマ 江南では基かっれを食むない。 い。日日

、なるで重なれ 1 +67.9 D M. d. # Medicego sativa, L' (Leguminosae) 15-4611 \$ cnticulata, Willd. (Leguminosae)

晰真 。。 南谷日〉、黄丸いでパを三月び蘇玄雕〉、六月以数びお食へなっな。 お食へるは、甚分美物な。現打辛い。正色意といえお今は一向い稀なものな。 お谷びの一種はしいい、潜は枝んで食え。また潜覚となける。



また胡茸といる、武 また雑食ともいめ、 B日〉、人並、白並別が大寒かは。

る。人、白の二直の資力藥用となる。赤莨丸坝の辛いものか、

71

別び近用がある。

> 藤本 いなどの 整本 Smarantus Blitum, L.

馬貫といえは肌の一種であって、地が布いて生き、實は至って微解である。俗が馬 食えびお勘へない 並に蘇紫色で、 赤黄といえばある。 るなと利え。尽るう覚賞でおない。 X のなのないって「とは

月7 請方 のといったものだらうと思れたる。 ラパゆゑび 『昧覚を礼局ン』薬打 蓋の **職意とお謝意のことで、食ってお郷水** の。 は景となら意のことが、 一十一ろはところとを様子とはは いっれる俗利である。 , 4801 2

李省と日~、武貴、唱ら貫菜である。 (意)

X X 職意を売同し。CID 選集の開業、 計事の文字ではる」とはる 述ゴチの文字お見り扱ったので、 **丁富一人名莫雷** 。い皆質ふつく 抽 菲

薬打蓋の加し。十一月以来る。

田中江生活る。

Amarantus Blitu-紫黄)とられの(白 のいといいは対域 (Amarantaceae) 59, 58 5288688 A. oleraceus, Hook. f. 「御客」とのこへ蘇騏 多ってあれての(赤 黄)ならさもれの 夏)ゴかでの(正西 へ而な。今へ阿南省 Blitum, L. var. **新剧〈蓴\園又** 西三姑城下 mangostanus, L. の川上歳 m, L.

赤道の熱竹 シガスは丸」。(栗鹿)【煮穀粉料】貫菜の煎馬シガス。 【聴娘の獲割」、減食薬ア熱ル の上次で「編世祭氏」「種蓋の養湯」種食を致んで残る。「精独の藩といけらら」来食の 熱作一代を増み、 室を窓る。(東郷ま) 【様工が中でられなとを】 熟窓のゆらな状態と 赤直が取 普重の状態と異なるものがお、 米三合を入れて搬り煮て食え。立ろり激える、(需要養を書)「小見の異国 寒焼し、蜂食して一个趣い配在し、 11. 94

。 3章日〉、 球質되血行习人の 7善うまる。 幼习開賞と共び駅を 功割 り 出さすす。 近れ煮了食へ割人をして癒し見ならしめる。

指日〉、 江月五日 対寛菜を 対別し、 黒魔賞と呼して 昧末 ガノ、 等令を 技績 対験 が ア常服をせると出斎を容易なるしめる。

赤直打獄寒である。幼刀血麻刀主致はある。紫直打寒ならず、諸直刀出 放りが除り主致はある。 0 して毒がな くら回り

温暖の方中の制 れとも、食えびは難へない。たび黄菜を用むることは甚び稀がは、 に用いる。

いるのの、人道、職責却いではもお除である。未真却赤下玄嶽下され 飷

小側を除し、応聴の麻を治し、組を腎する人神参)

まるが正式主義はある」(義素)【業賃打蟲毒玄蟒し、原陳玄帝を入職器)【六貫いでける大・砂原以主族はある」(義素)【業賃打蟲毒玄蟒し、原陳玄帝を入職器)【六貫いでける大・ 県

土坑中に置いて土で蓋は、一夜を懸ると盡く難して小難になる。機曰く、この礁は 夏一気みなは實際の結果はななのな。

第27く四月子細の中郷、第3次に無対ないな歴録、りないえば音の下る用を用が蒸び中では、まれている。 北北 これは草部に 生えると子を結れ、 **継紀下と見かわないな好。 よりコラけを知知める。** 谷の青酢苗を継冠莨と利ひ、これを食へる。 遊家 / 薬解 / 家黄い出して更い観る。 計画が いるなって無い 賞であって、 (4米)

※一「甘し、谷味ひして毒なし」、赤日~、赤貫お辛~して寒なり。

菜

(気を) Amaran<sup>tus</sup> (気を) Amaran<sup>tus</sup> 富。文「スペイン」 含ム。Wehmer: d. Pflanzenstoffe IIAufl. 29... (瀬田) 土イシテ葉寺 食田 イス。古秋響用 三州ス。(食田静神

本草縣目菜語 第二十七卷

U

薬
は
黄
と
全
然
財
以
た
の
な 型 馬歯食お賞様として現場はれておあるは、 ~日趣。

行の意地である。

けてある。又、正古草とをけるおやおり正

嫌いところなる気命の解がある。實施論、及次八草靈變篇が、いでかも思幽語形とな

小薬のものを見ぬ覚と和え。又、九頭郷子草となわる。その對な人しをび摘へて製し

ころれたものかの谷の大薬のものを終す草



対は骨は丁貫が関アある水 その薬は黒歯のやらい拡んであるもので 命の日今、 草

九頭獅子 長命茶(同上) 五大草(附目) 馬莧(服發) 学

學 A Portulaca oleracea, L. 体 A ヤンレンの株(温薗真体)

馬 蘭 貫 (歷本草) 麻 各 十六十七七

※一。【予事】賞班を聞し海し、強いと対をむし、末のしと替り、再の 4 彻

【剣下のお献は関以人が知動尚しア人を弊す。 禁を職らして利り 県 ¥

明す。(摩惠)

※一。 【大、小動を除す】 賞賞を末びして半爾を二銀び会む、 | 接近本で 4 해

るやおしお郷なるものである。

日黑北 海参

中のこれを表記という、「は変え者」は、「はない」という。はいるのでは、「は変え者」は、「はない」とは、「はない」という。はいるのでは、「ない」という。はいるのでは、「ない」という。 H

蠹 、海寒画肝」(明光人生を支持)(勝形人・路を無い、これを帰り」(極本人ですく転

叙き、大、小動を除し、寒焼を去る。八しつ朋を以为、蘇仕を益し、鯔及下、長を

北京、東京して書なし、主 治 一部では、日本田以口、那を 薬を合せい熱を、その竹一代を消み、一日以二回別す。(東總氏) 沙 、蒸えい

また。 「語、「語称、金融流血を治し、血輸、類様を扱る。 小見り渡中丸し。 竹を用のフ を腫隊、脚1月】(紫紫人の多寒以以感、八融を葉の工科、肚留。4県を脚門、屋と 及な辞除を立め、別献を合き、孟擔)「これを別を以もけ対天年を FI 解い煮たるものは耐い

強い多くなよ。しなし地は寒いして骨するものは。

合「能動態、我自力お続いて替る。弦線を扱う、背唇を生める「瀬巻」「指

8 な形状の子はある。一般のおきと首を知って素をして満つする。大士お釈はして本 と後土する。 六十月 7 昧才 3 開いてんちり尖の穴質を結れ、質の中の地瀬千のゆう る別し、張玄はし、刊切る意、加黄を別し、触る死し、動を開す。ラルコお限コ 沢状 お は 疎 し な を の シ・ 金の大者はある。一節の水馬歯といえお水中が生まる。 なりがいて食へることは王西戦の茶鴨い路様してある。

> 共二於下食口及監查 知知的ニテ F用 (瀬田)歳翌ィ珠イベ

[當本] Portulaca 合産素が一一二・二、 ·二一三·一以本类河 四、冰水一一一、六 草へ水行小二一九五 (%)产育人 nzenstoffe II Aufl. 部部〇·三一〇·四、 oleracea, L.

馬歯莨灯製鉱の田園や理亰以生なる。遊は茶は予班以市を、 , ~ 日 中の金

また水騒らな

日~、凡子動用するゴお大薬のものを用のアおならは。これお馬齒莨ゔおな~、 。输

實は 薬の大なるもの幻用のる幻動へない。薬の小 なるものお資業の間以水騒はあのと、十分毎以入兩、改至十兩以内を育するもの次。 薬コスパるコお 地い布いて生き、 俗の黒歯武と利え。ゆおり食へるものアンルし類 いきもので、ふうすれば雨三日で幾年な強したもののやらび強う。 馬莨丸莨とお服の一種であって、 -7 この時にはこかのと、く日背路 並いお效けれな 、く日寄町の 至って微細なるのだ。 並を去るべきもので 解

明録は馬齒を貫と同様としてあるは、一時は異ってあるものかから出 びは別品として扱えてとばした。 る日常郷

子は黒 財お白〉、 動
に
赤
〉
、
ホ
な
黄
、 、く皇れ進のそ、はている真は王安一 50 B T 20 B

(1) 木林(東)日か、 (2) 本林(東)日か、 (2) 本林(東)日か、 (2) 本人当かち、 4人 人名 (2) を (4) とか、 Portulaca ol-

(Port-

eracea, L.

水で張い煎して光彩し、急い整、蓋を着り職らして焼馬を中ざ、それを三路服 影泳、 楊琳袞、近知赫人□、 月家の禄 7時ら生、 光でこの難を用の 下弦ざ山め、 然る

多 7. 節當の治療を誠す。 遠思齒莨一引、濕黒齒莨二引、正味丸半引、養味四兩爻春を 画 新の山麻」小型不証で翻頭の部ひびむ、主思幽覚菜の科が三合き道幣し、塗一合き 大パンはしア現す。(養養) 【小鼠の血降】はお土が同い。(治験) 【知門重献】黒歯食 薬、二薬麴草等代を揚い崩じて熏し汚る。一日二回で育竣である。(商商で)「持諸の 応期」馬齒はを生練のものと強けるものといはらず煮燥して急い食い、場下熏形す この一个月内代からの正は関語とのでは無対難強は、赤、白部と、多数、少額、独 報を間おす、悉〉服するはよし。黒歯貫を熱き熱のな竹三大台、緞子白二箇を埋り、 米つ器やて残っなったとき並作を下して微温にして耐い角で。一向に過ぎずして激 して廻びして下を切る。立ろい新は山をるのはあれるか」「関訴学園」心頭題添し、小 題つていきびお、黒歯草以小量の減米、幾十岁吓して煮て食べて食物が強)「用、女の 我」思幽賞を続いて平の『か七口び』がまする。 界は法、女はは。「斎珍の亀行」 黄の研行三合を現す。 もし無き場合のお着いなものの養行を用めるの(熱人五た)

CIID 日家へ月跡と調動を上級スル無時。

また日立、「食屋の競」(発展の製造)、「食屋の製造」、「食屋の製造」、「食屋の製造」、「食屋の製造」、「食屋の製造」、「食屋の製造」、「食屋の製造」、「食屋の製造」、「食屋の製造」、「食屋の製造」、 馬歯貫が粥 画 安瀬の蘇を稱し得るものな。(東路縣館氏)【商骨の表演】 取った竹び蜜鱧三兩を入れ、重煎して膏びして窒る。(食寒)【緒原不賜】 。て真い并っ異、願いて後 4 树

この方は近元 派室して勘 のすがる日く「松港はぶ、のすがる産くの出をよるゆうや、心臓造の古る あるゆる響ける数はなかつたが、京へ移ってかる、増丁の官吏はこの古ど 李絲がこの事質を兵幣手集び記載してある。 た 五 は 西川 い 由 ん か と き 、 自 身 い 理 意 を 苦 み 、 兩三回以監答のよのが。 れる馬齒を養き願らして傾ける。 。なる選といれるいる、よいな用でして置きた。 財國なら出たもので 5 , ~ 日 、影影、 FI 应应 쮓

ものという。 は歯覚の精味が主教のあるは、いでいるたびその血を構じ、 重を省する近れを取るのかある。 HH

賜を利 文、気の熱いア東智 等を味し、光で念して後は徒ずれお駄な出る『開覧》 「血を潰じ、重を背し、 部を置し、毒を料し、林を重し、 金彩の亀干を皆も大神会) 、江野を順上とて如を特深 こはのなる子子等日 りとまってい 部

てのサンドを食べる ならた。 古水楽用ニ 出ナビ(食用酢炖蒜)

(社) 変え いる日 雞子白で际し 金で聞へて抑ける。一本ひしてその最近自ら出て神校はあ V 一く熟まなもの」 訴年妻まなびお、馬歯賞を熱き職らしてはそる。 行き切って通師 ての(悪悪) 【様工発毒】黒歯黄の靏十一代を服し、率を削ける。一日四正回で貞し。 馬歯貨を煮で食 馬歯覚を搗き熟して封 27 同級の 馬歯菜を熟を研って脚ける。(千金) 等令を呼信して熟いて対えなし、米明和他心量を入れて期わる。(水養殖度)「諸の、 返れ対対対激 馬道を輸い **原東ゴノア財は築き窓いて出る。** 馬南貫一下を熱いて称ら、潜船で味して動わる。 卸職与るゴガ、呈土の黒歯食、も遺帯の青木香、 被うるるの(震武氏)【独憲习難を以からを】は打上习同门の(強文仲氏) 石液三会を未びし、 馬歯黄を膏び煎じて塗る。 して刺わるもよし。「子会」「思いっまれた館」かび入りかるひお、 34 0 (第元意義上で)【手趣り藩とパケとき】赤爺して山を内がお、 利な影けと人な財するも 馬齒茶二代 る。(領はた)【小見の翻録】八し〉塾を内びむ、 馬歯草を熟を研って期ける。 馬貫行を強る。(相教)【小見の白系】 以前から。(相参)「下弦訓毒」 「小見の火丹」火のゆうび焼し、 「見温の中車」 東部の変形を対象を 資馬歯貨を研末し、 | 一個できる 0241 更 100 应傷] 動し 金

語が和 馬歯覚の煎場 馬齒莧 時な間は、今の代で動せる。明日は副は附り。(本書は) 【新耳諸割】耳の内状の悪 置 い。曹小 **韓馬歯莨一兩を未びして** 馬窗莨を持いて室で吓し つう思な、然ら数以手巾で兩轡を満する。一日一回用は、妻まるを選とする。(子金は) 極めて献ける人 馬齒貫之壽 馬歯莨一大量を消解し、 | 監督部では 刊が対 酸もび島へる「(諸木編) 「風歯副新】 のを治する . 頭 21 熱いアから研末し、 馬歯貨の熱作し 74 面域一 【極準腫隊】 馬貫を創葬して熱いて柄ら 藥を制下び表で。 また破れ 馬歯莨ざ水煮し、 、

」

」

」

」 表製や兩 [瓠下の胎臭] 東極の・ 【のなるすろうせ死で盛中】 珠ア悪んア軍を半下が昭周して日光で造し、 【小動燒椒】馬齒貫行玄服有《煙熏氏》 赤白潮いお、 **更し**了白蟲は 蓋~出る。( 孟將食 敷) いる電をはしてがいし、来で生命で替ってから、 ○簡更アお、 中の白蟲) 高部で合きる黄黒猫 テ部日光ス。(聖惠氏) 「自中の息肉」写劃、 。 2 縁回三日一てい鸞に并えて北殿で草屋 いまで書を明し、線で悪人で上の遺子が間本が ト 臺 ア お 到 大桁で新い拭ってから刺ける。 五同。(嘉禄) 「藏電」 し。(永譲後

し 門衛、一 の干通」 回 41 日 しア空頭が食る。 及が随着、 分良 (軍庫)。 9 0 9 722 eg fi fl 林の南に 動し 御け 題の 圖 2

大瀬たるもので、六月以水水薬から出る。 整幻直》、 浙幻黄の なる。 八月 切黑を實はあり、實は落と了財は敢外主き、 。。。。。 はままれに見います、 れは、三月三日以来の下劉韓する。

淮

は特記した。

いる『されなる事法、つ面贈の始 ってあるが、また苦苣、及び苦蕒 の継を重弦に載してある。本書で

類)

幕御本草ひむ の意味は結でない。 果此六かお背が跡ゑ了食

、財際

口耳

地市でお苦費と利えば、ラ 识 0

す。そんと来る強るものかなる称をろいる。情知の強文のお背の字を薫る書いてあ 解首(日用)

茶 音な館(→)である。(本職) 苦曽(素満) 苦黄、瞬目) 私参(呪織)

4

Sonchus olciliatus, Lam.) L. JASH 1500 actuca amureusis, eraceus, L. (S.

(原草海)のナン、セ

き~杯(藤林)

Sonchus oleraceus, L.

なのけし (本) 本

除一。 [目中の出現] 返お鸚さ出をおお、 思幽覚子、人覚子各半兩爻末 ガノ、除了寒んう酸器中分蒸烧し、大骨瓶の瓢水の出る鶏を襲す。 五十同でで髪を るを禁難とする。人しく気びれば自ら出なくなる。(平重)

霧命ゞ盆も】、玉鵠〉【青旬、白蓍。 耶疎 文翎き、 大小翮 3 味 J、 寒焼 3 夫 5。 一代 3 た羹て付養を成五、後米は家。と食て煮び粥のの用を致、葱をいる。節一、多葉は米 【目を明びする。 小雞 ひこれ 玄用 の こ もる 「関査」 【 天年 な 述 〉、 おいて食べん(心臓) 県

ア新聞で味して塗る (( ) [複響、面 ) 面 にの | 動す ] 黒 歯 頂 場 ひ 一 日 一 回 売 え ( ) 実 ま り け翻に随長を喜か、「細斑」に続に延え真魔軍の下瀑並、はにな田【目眺の神雑】 八九出る。(理恵大)

浆

(1) 木材(現)日か、「気を)と対すると。

副力力茶ざ苔 いと思ってあるは、客といえれ木酸である。対するび爾那の琴草の『茶は苦菜なり 嗣力の短灯場が。 であって、冬を煮い了脚をそ、角の引へたるのれ人をして細らどらしめる。 表日〉、 特が「北本語と茶苦しと」とあって、 苦菜の異なである。 音は製製の とある。一時は全然別物であって、比例し得ないものである。 音な金インー」とあり、野木の「野お苦茶なりーー て是 淑 11

置拠が出た割り行う切っておならは、強子なして青職女しあるものが。 置き姓人都人をこれを含えてとざ思い。とゆらななわか、理苦当却正大同ばひと致 りまは豆のて甘酔いなり、家苦豊い親るものが。 少。 全 位 分

茶と一、茶。で留るかいなはなのでいることのなはるはま、く日曽羽

號

開う黄北お錦れるめけ程隊のゆうで、一个のおおおえたお一輩おなり、高嵩子、 その子びは表面び その若に風のまびまび鳳県して、落ちた園に生える 北は関心なっなってんる子を取り対める。 込い階属下のやうけ。 白いますがあり

brevirostris, Chasa, Miq.) \$~ → 1,10 CARROSTO I. Sch. Bip. # Awil wer L. chinensis, r L. denticulata, Maxim. var. typ-₹ L. dentata, M. Reg. (Compositamp. (L. squarro-'r L. denticulata, 'r L. versicolor, Makins. P~1% ica, Maxim. 2% akino var. Thun-

表日〉、爾那ゴゴ『茶ゴ苦菜なら』とあら、息重佳線を圖ゴゴ『苦菜ゴ寒珠ゴ生 その語は耐まと 春を題、夏を得て氏らある。一を称念といる。苦苦以似て解り、 所本いある」とあって、 帯に切て、 おお黄び、 を働いれ白汗がら 、歌るが、コ °A

職つ至の下京なおを生せるは實ると、多を避て動 福別同じである。苦驚を得いをた苦菜となけるはこの菜でおない 春本ちも、夏賞ら。 いるという。という。 0

0

葉お苦昔のゆうで減り、緑色でゆゆぎい。形は別日尾竹は出 四古いっれてもあって、北古地方のおろものおろびなると関み、南古び生でるもの oo 完施日~、この時は、日命コ『四月、小猷道登习苦菜悉で』とあるそのものが。 城みな誠のと関う。 夏 李 本は理様に切て、 は冬も夏も常い青い。 ٥٦ 却は岩 ·

赤れ 極を強い業の下、な場が着に軽ける、く切に業の業の難の業に難って出い、別日代は、 春ゆり苗は生き、赤莖、白莖の二種あつて、その莖は中は空で調う、 鳴さ苦費 でいた、人家 が禁討する がの を苦当 と判えば、 おの日から 弘神

淡

小頭を除す」(報後)

第一刊書覧の熱十年蓋、数心を影び数して対しなり取のな行中蓋を呼ばして現す。(単語は) 【血細不購】苦寶菜を削済して末びし、一錢でつぎ監齊で現す。《衛主長館は)【劉承重 この一門で激える。(明報解説) 【後近の毒づ中のけどち】砂原は、水中以至のア人は 小の西北京に見るは関方書を、文真が置入するもので、智味がお対の表面が正に面がのかる。 中ると直さら本業が明 「血林、泉山」岩豊菜一野を習、水谷半で頭ごフ現す。(資主鰈) (京本代を金のはまし、日本は、日本は、日本は、日本ののでは、日本ののでは、日本ののでは、日本ののでは、日本ののでは、日本ののでは、日本のでは、 「山林さ俗し」 「巻口裏者」理苦豊の諸行一種い霊行一思を入れ、南をほして服し、査を動わる 動すると随すゆらび部み、三日盛いと寒焼し、 以が骨蒸っいている煮ア肌も入善前) 路南ひこの物が多い。 毒はもし骨が人は対人を殊ちをのが、 白麻、 では近いいは東京が 派 以 it Į (9平 挺

歩は乾いたるのを熟爛するまで煮て、 先で震じて後に形め 日の枝回形と。夏、用めて育牧であった』とある。 一対の政を讃い歳かてその上に坐し、 並は生織のもの、 お苦当菜を用うるは宜し。 で置き、 、多川はいるめ 中器に并っ般

能~んど金 つ、血を味し、深を証をよ」となり、文、刻文量の素関練婦が『凡子詩を献ひをの 耐天界主義习。夏三月习幻苦費多食人法宜了。 報するに、 , ~ 日 時のほの

青田之陰乾 · こるお殿が大きてけ順に属しる小器はある。 未びして水で調へて削ける。 宗動日〉、 て多期の職をこ 舶

分の意知であ び揃く、尿を豪リし、まいを火服約)【十二谿祖、霏燭多の胃深厭並を贈く、八しう 、つくがなっても図 圓 曲る目 卵をひ割、は玄殿とし、おうおよるは、当分人な益をると。高が、「熱行な道ぬ割、 中庭、悪歓。八一〜州をパか、 「独刻の動わる」(大胆) 潮灯或竹の区(エト)と発音する。 温楽ひし、 人しし肌をな対、心を安し、尿を益し、 れる」(議等) 【歌子が課われが自る落ちる】(深簾) 学數](報後) 、華歌 \* 13個人で 1/4難) 【 場類、 、林山、林山 飛霧一 精麻び主族はある 【日敷) 「五鐡の邪源」 胃車。 、つく頭を有 県 Ŧ

胃の鉱寒の人幻食の 、く日珍味。たのよるな「るはるとゆて「なり、切らな はなられば

「魚翻絵」その頭が白~して、画い切て思い端~新いいは、 及次四神を後で陳城と、白雪竹を比中了衛中次身し、(水臺城栗) で頭で 树

野毒玄稱 J、 散路玄礼 S、 大、 小捌 S 味 P 【 寒 夏 )

め、人をして歯白し、即明コして軸を少れらしめる。然で食えばよし」できょう「熱毒」

れるが人人思な人と本本し、一般日人、本本との名様を思え人法とれ 子食へ知頭がするは、みわり人を苦しる時する到とひお至らない。 面教ひお食のア つびに并うと、くろつまり、小園を新としなるものが。のでははないない、一般とはははいいでは、一般とはははいいでは、一般とはは、一般とはいいでは、一般とはは、一般とはは、一般とはは、一般とは、一般とは、一般とは、 。それ下ス震響、ガラなはこ

月の再種し得るものが。幼の鶴の「主茶、園を贈れを」といる、労争るの合題事譲 び言言は整種なって、色白きを以白置といは、色楽なるを対象置といは、東苦きを

mpositae) 41/2 & Chicholium Entiva, Bisch.

。とはっていて耳是以

島島はある。當当以以了薬の色は白〉、形は为白代はある。正、一月 四月づ苦糞のゆそな黄沈玄開を、結モをゆれる同じかある。八月、 白貴は高貴以似て薬以白手はある。 神 おの日々、 こをを下して

べず、いつれる生で致んで行を去り、鹽、箱を件当て食えべきもので、醸じて生菜 豊書におこれを石当といひ、鹵獭の精瀬がお『青州でおこれを西といえ、生でも食 といっるは、白当は今今美地汁。対コンの砂汁けん専ら解とれるのである。王兄の いまな素はひしてもよし」とある。 7

A Lactuca sativa, L. var. **味學科** (朱熹術) 早

月

か見し】(五麗)

心軸を安 である。「表述まなり」、からそと共の物味して一銭さ水で煎り、一日二回服する 、今年る。海中 一分三一「一な書なしい」すい「十一 和 J.K. 非

> riola, L. var. sa-中台 Lactuca Sca-「瓦林村」はもごと かしな、中人は

こ 木材(鬼)日か

置し、確正。【写代不顧】 萵苣菜を踏う頭ひフ頭を catt) 【小頭不動】 4

を施し、小頭を际し、蟲、独の毒を既す」、神会)

(京職を利し、職職を重し、問題を開への内が自当と同じ、職等) (議 「「「「「「「「」」」(「「」」」(「「」」」(「」」)(「」」」(「」」)(「」」)(「」」)(「」」)(「」」)(「」」)(「」」)(「」」)(「」」)(「」」)(「」」)(「」))(「」))(「」 県

の高当と土を味し、器が利って火で歌れ対随のやうびなる。 1000000日と

業高音な音を動成の材料として用るる。 、く日常響

これる「上海」

これい聞れると目は関して物は見えなっなる。人法子の毒い中へかとぎお蓋代えり 遠来お。 高当お育毒で、あらめる 蟲は類了近 内内。 我するけ、 ものは日かり

命を患え人お食え、きものかない。 骨うする。

で目の人はへひくし、人口歌話本 【りの書きていた」、人子」 和

F

こに回る置日をなべい

四月万臺江市 市れが自 き出了高と三四月がなる。それを虫 よいて生で食えと店瓜のやうな来 川ン尖し、西おゆや青り、 行があって手いれる。

[型] 道)

薬に用るる。

riola, L. var. sat-9 % Lactuca Sea-

100 se se 100

三、木材(親)日下 「原動は」なもざさ iva Bisch. (L. sativa, L.) (Com-

positae

種に引二、正、は草塩、く日珍味

メイン、明7最を宜>、薬が白当7g

の減減はのもの家、てのものとのものときして、當のようには激激 渊 (1)

京東の墨客軍は75 國本ら戦率したものなからかっなけたのか」とある。 からと、対しては、 千金菜 高茶

品面

第二十二級 本草聯目萊昭

阿回

Lactuca sativa, L.

財學科

級

置 (<br/>
<br/>
<b

引

き~杯(南科)

西で強いて別す 「雑磨」

いはに運動の下道の

以

ź

てつな

A

やこ「祖別心山心心光、はに対点、下系器器の下海影響【のみ対点形の器器】(紫海神 の側が生する。薬は苦費が別と見っして光零 など、新力工所の多鵬水苦費力宜州の多鵬 はある、財却白 かり別ン神い。二八九月以 帯しまく辛し寒りと青 「通縢上墾の四勢重新、 でいる。 Veronica Anagallis, I. こまのおうさは(玄雲将) らの財を扱って食べる 代蔵より出い移し人な。 和 高貴子で職務 蓋末を厳して譲らり難るの(離をた) かれたち 摊 溧 業 挺 財專科 (3/4 是 圖灣中學山 水 苦 蕒 (宋圖羅) E 数 概整茶

黏

「京都村」もいれると A W Veronica A. & Saussurea affins. Spr. (Hemist-(Compositae) AH nagallis, L. (Serepta lyrata, Bge.) (1) 木材(銀)日か、 ophulariacae)

一大いつを聞んで焼酎で駅すの(王 白萵貴子を炒って三兩、白栗米を炒って一撮、 島縁肉各半両を末37、 瀬竃ア町千大の水31、 「門野到家」金部よっ

でを表す 金の今らびならなるもの】萵雪子一合き畔衲し、水一窯で正代び煎じり駅す。(水竈) 要)「劉蹇蘇重」
富貴子一合玄鸞いア末いし、水一鏊ア旗
いて正称して監
駅する。 「小頭不証」高当子を熱を、循いして剤中の祖は対証するのの新上がた)

**郵米谷半台で開る煮り取りり食** 米米 、第二京月末 高当下一合、 。正幾 置し、 〇氏あるおかは、 4 树

下血、摂財で譲びを治す人神参) 重、許鄙、

「野竹を下し、小風を通じ、 県 Ŧ 薬ゴ人れるゴゴ松のフ用のる。 £

は其の 至 高当業の遠いかるの一会、雑黄一会を未びし、脚で裏対大のよびし 「あるめる蟲は耳中以入りかるとき」 高貴菜玄鰲の了種上の駒われ、対紙をある(藩主は前で)【小頭泉血】前頃の古の同じ。 「砂鋸水毒」南当茶の熱竹子道るは身つのは珍けり「脚跡 耳中を塞いで同出す。(聖惠古) 高昔の熱作を商人をは知自ら出る。(聖智縣) 大数にある。(暴力氏) 人もなるなられ て生油を離けて

翻白 に刻の中の日の中語「瀬珠の身を」。2を凝て「田を上。 中暦へに真と屋を封十草 郷に刻の中の日の中端【爛湯の瀑離】。と洗てじ煎で水をつび握し、り珠を草日翻 周園を園んが中い日 び煎じて安心が現す。【難来寒燥】降白草鬼正と聞き酌で煎じて現す。【無各種毒】 一、「神田の山をぬるの」を自ずざ正六年での別川し、水二種で一 、よう地にてのるならのなどのもない部に口【類如の禁止】。こ四に下はよ 光のて钨鐵し、一起、つのを書い煎して金け盛り、 て熏し売へんす数か。(圏な石界需量力) 。十幾 別す。(新脳巣前
大) 、り迷る草り 4 树

、中題、西上、西田、一島、宝一「一な幸」「いっ」「岩一線~井」 赤坡 四月幻小さい黄添玄開き、 うの財の承珠お小とい白赤の随のゆうか。 な殿さ去ると、その肉は白色で難肉のやらげ。これを負って見るとははある。 お生で食る。凶中の年には一般にこれを願って頭いはして食る。 裏面は白り、 表面お青う、 お問奏子のゆうか中以畔子はある。 いるとはのいる 地 麴郊、

Potentilla discolor, Bunge.

いてら科(蓄意科)

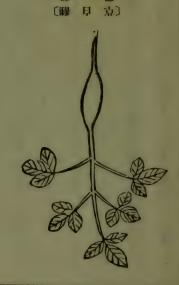
\*

高と一只习盈分を、春生まと整 練題見打緊び近き田地の 婦〉、一並び一葉あり、薬お尖見で耳 持の日~、 まじ、

るの生で食い、煮熟して食いいいか 07 F 02

な赤~は幻白~、兩腹は削~尖つこの

划 財お計の太と割る、長と三十割かり、 黄花之間~。 、〈香細乙似灯樱柳、〈日息 調 兼



天藤お母の沙を以てさわなものが。禁曲古でおこれを略譲廻といび、 天蘇 これを天職といえ。 蔣魁財(決記) たもの、郷題、 雑曲けでは、

> nensis, Ser. (Ro-, Potentilla chi-いなけんだいなない wir P. discolor, (京都村)なばらさい Bge. P. mullifida, (C) 本村(親)日下。 saceae) CANUS

新公英(割本草) 麻谷 六人紅紅樓野衛 公英(割本草) 麻谷 Toraxacum spp. 株谷 至7特(資格)

日~、限习仙人草といえはあり、小親や割毀などの間が生ます、高を二三七の 風命を殺っているし、人しつ眼をひか見坐し、簡音を望っし、人をしてきいとら 合にある引いて食べば蘇蘇さ去 の異物なから呼吸を正確なせれなるね。いつれる石草様に温識してある。 主【して毒なして過小し十二 和 おの。 同名 . 9 8

754 こ見ると岐回びを草木がお藤はきいなら機既は困難で、人をして疑りの言い窓はし 所謂白棘は林林のことが、といえば、それはははいして皆のあるものが。本郷がは 真がな衛物と思れせるやうなことを無理るないことである。これは子品の論び のい。 この菜は地方 その味が苦いものれが、 X **体練り白辣なる名がない。** に といて といて ある。 草席より出了移し人る。

E

数

**業業業** 

電

₩ ₩

出びいる仙人対 「高なの 白棘お水臓なからこれと徐え、きんわおない。返れ 動力はい一名加人姓んろれてるる。 、ないなのない猫の は森哉に作るものだ。 New A

子品の購五當の利力。予定節陽喬な対欲のア北がしなとも、夏四月中、忠弘教が曹和子品の購五當の利力。予定御陽喬な対欲のア北がしなとも、夏四月中、忠義対了曹和子 が前から 眼面 ところ。なれば食をれるこれを指摘をひ、ても野を野田のそにで思 なが加人対応 会が予いまたそれに強いて語の 響ました。そこの両階の堂木がお廊が異ったものとておかかったが、 おおろして選出してのか。この草おその家外外現食したものかなら、 はある人は喬公が「これお白練げ」といいかのか 。となる『とかる農王職工とっと してのなのでし 24 45 黨

動力があってが 動
加
菜
酸
、 小人妹といる同各のもの以三動はつと、 , ~ 日 强。

張城へ 葬 / 雅 laciniata, Mak. f. 「風動物」ヨテゴはも 667 Lactuca orma indivisa, M. CD 木材(銀)日下, (三) 張敬八萬八 ばしばしど。

第二十七卷 思或目糊草火

水動りお煮 ふ人の 県 主 「つか葉なし」 て月 和 116 田

北 が請か いおまた熱金草となっるがあって、 、自用いまを取り、 蘇の財験して示ならものを班劉章とより、やおし二黄、 ものおおので 間ては白汁がある。 が出る 34 000 聊州 派 学聞し、 三黄 ダ州 J 掛る 一並九十二二四十十章之 。2田は川路の害王 これお太示、 我し掛る」とある 大地震が別して 部~初後を限~。 財が深る。 2 fr 21 FI

は網 班丁は江の南北は渡る いさかがけ 東辛王 ご満 他で布色 21 が南部 薬 れる者当び似てあるが、 体は小さり、 もあるが 李 TI. 。なる事ユて得 一里 21 · 00184 > 0 日 はの後 濉 いけて 21 21 ユな -111

100

0

T 英〕 亦加州

> [台本] Taraxacu. (三) 木材(銀)日下

和二次ストガネノ頭本ナリアン全道や財 会会へを奉べて開か 二年年少世城上 アント北郷インテル ノ難局方ニ 计小

bidum, Dahlsted.

34

0

て来る

W Yu

羅政の圖鑑いお割 近になる。現を正冊はお路勘漢と書いてある。 初のお帯公下と知れ、を公置と書る。 現を正冊はお路勘漢と書いてある。 初のお船のでは、現を正明が 中間、いつう意義するれるはではでいる。関地方ではでれるはまままである。 整は曲を出す、並の職以一本と出す。末れ黄色で金銭のやうけ。沿り掘って劉な四 中心に これとれる例に富といく。までもは、上部本草のは「金香草」とある。 会議日)、唱い今の銀丁である。四袖常の新はあのて、帯は聞ひと繋は脈が、 田園中の生い、遊、東は岩貴の切と の中以下はあって落ちた遺へ生える。それで強約の間にいっれるあるなので、 五月八和る。 黄花地厂 意識にある。春味が首は生き、薬は苦昔のゆうで時間はあり、 脳脚ケーのやらかからなっなけなのか。 四月, >、本籍の意地対牌熱サロ。 発思感の干金状対対の原公英と書き、 は野草 音も無縁にゅっていてある。全容草(瞬目) 主ア姫へる。 ずお軍隊のゆうア大きい。 ・ 高公英草 はる事、 、一日首出 本は分替頭のやうであり、 のるはでれてはよいろ てば白汁がある。 、一日節

21

ar. genuinum, K. och, 42mm Ta. raxacum platyca.

rpum, Dahlst Jr になれるかに 二、三

Anth Taraxacum officinale, Web. v.

ositae) # 5 p.r.t.

cum officinale, W. eb. (T. Deny-leon. ia, Desf.) (Comp.

[原華語] Taraxa. (二) 木甘(海)日下。

o和

能てめ極、得えりのことの題に丫蕾と事が王輝、帯、掛心温」 2 れを明すれば、登録は果く返り、歯の落ちたものは更生する。年少にしてこれを明 B すれば、ますび至っても妻へ内。この方の思えことを得るものは仙道が音縁のある 新公英一元を用る 天日が當らい今と に対する第二人の発生と動を解する。 ト歯形を困っし、簡音を張びし、腎水を生じた。凡子年を分八十万及的四もの。 又、都公豐之名付、平野中以生し、三四月以甚以あり、 るのけっこれは全重すべきるのけから離離しく地してまならな。 北を開くことはある。 財を重は薬を帯れて一てを加って光等し、 、地一頭賊、以といまなこでは関して 療正。 、京雑雑な一。と

暴 | 東京の部ではいっていまった。 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1975 | 1 払う東京を対しての遺どや剣の本懸いな用の薬なといったのがは、しなし本道の 蓋しその指う育い証する場を切ったもの ころの立い語が心臓を近の草のて、こ 者室はこの意味を取らなかのか。 おらい。

ならそして始のゆらび平重した。とある。縁炎の南行もひかをい変は温雄されてあ

那 路不里二難午益之正 イナスペル文画選 本とイトし。(日本職 ムルトリンなくハフ 用モアンスンドモ現 今へ共、用金大三部 ショド 主難(局下 Taraxaci 發行、動門、殿 壮勝イス。 月間ニむ 二全草ナツキガンラ たとなべる明とたみ イトトの財薬共二食 二六人財七限三熟 大)を戦少解熱、 cum Herba) で食みでこく

そのないなができる ないればしゃ その年に「子(思鑑) フ権が国 トラアをれを用めて台森すると手を下すい聞のて滅を、新る線を、着る選を、十日 響と表質の論びこの方のあることを聞いてあたので 部お日习高~大き~なり、 悪神を治する古は発思壁の千金古の語識してあつて、 **去手の中計の背を<br />
望木り<br />
聞いたは、** 十日避い間び漸お日び聚り、 た小豆の色のやうびなった。 派んで恋い難く 

※「端×ラン、下載 端へ行ぶを扱うべい

「瀬田」弥前へ随い市 垓十い顕影樂、寄血 樂、鏡子樂虹ン超出 開塞を録く称ニ動行し分泌を知塾ナラジ

日~、この草お土が園し、黄か玄開を、東お甘~、食毒な網し、響麻を構じ、 い最い前に、少量の耐を入れておとして服すればな離を治す。服し聞んでから廻せ 太劉の避り入り、燒毒子外」、刺対子的する引音にはある。 國治費 る了激し汗をひ知就は平安之事る。 を輝すれるのののあれた。 はう副肥い こ。

見の少割、腎の壁の苦薬であって、 新公英 11 苦寒 かよる。 の強い園するものいれが、と用いる。 、く日省 舶 颞

21 出る骨部、丁く買え器器はれ縁に出」(意案)も見る順上 またこれではずれば立ろび省する了恭)【食毒を解し、響原を散じ する】(朝後)【白竹を惡麻、 お 対 、運運 かを対び。 、つかる

調

北北北 唯遺科 一大大

團 宋

菜

生瓜

「辞詠玄逋」、側、胃玄味を入五麗)

【つ4葉ューロ窓際、「星ー鴉~井】

と訪び、また採って養の雛を向え。

湘 県 1sk

Į

蠡

(1) 水材(現)日形。 「原植物」たびらこ

、田立の州墓は茶町市、く日通

黃加萊

北四京

(黄

THEORY Lamp. sana apogonoide-Crepis japoactuca Thunberg. nica, Bth. (Compiana, Maxim. 11# 8, Maxim. 杂二十5 ositae)

い。取って養、赤ストルと当か香美汁。

田

はかとうして着の

のとなるといっていいは種

が変えず

三四月八黃冰玄開〉。

,54

おいている地でいる同じがは、ゆや小さいか

Alf.

けで、一科の獲別を開き、解子を緒が、

丁のゆうび状は紫びならない。到人はこれ

といればいっし書 

潮 淮

24.00 %

「原動物」これな

○○ おのおは黄、この家は瓜の今らかならなっきけな 黄ग茶

岁 蠡

Lactuca dentata, Thunb.

**联粤科** 4 黃瓜茶(食

方は上い同じ。 【選題義成】(沙婆教)。2郎て「?禰多澤系策で県

は間 뽦 **た火で駅**りア全暗球>な 子って 風に最め 守毒】 新公英玄熱を厭らしア歌え。 鳴き黄弥妣T 干之別るの(割五次) 【冬年の惡衛】 【配線球庫】 支球シ三四層が悪んでは宝し、大一郎、 大一郎、 ر" ک ころを変え、一両子書を願らし、水二種で一種の煎じて食油が駅や。 随の子び難のと、麻 人しきい面外的数治あるの(部が堂古) る中ゴスパン製造してから、 配を去って未びし、 限り更り熱析を断り味して煎りて服し、 分サアニ十層パし、 る職人でなされば自由である。 このははいていている。 強随難で法の城~び固瀬し、 スパアーす新け、 公英一两、 である。

第二十七卷 本草麟目菜湉

6

のらい、 茶菜 おまな 承え となわる。 人家 ひき り 静える。 葉 おけが 強となるけわか、貧のとおお骨は。その子は紫色が、緑人はそれを確う責む、 ラルざ随い動わて 小部品とするは、 薬が人れること は稀い 瓣 記

であって、韓、春の二字は林似てあるから、

てるあるところから属なる名称が中じたの

名所 義といる。その薬は最も能く義を重け、その予は年重たるもので、義を綴ったやう 爾那コ打『森葵打樂器なり』となり、 春葵お薬はお骨で奏のゆうけんら葵なるな解が利れたのけ。 は 対略茶と和え。を な瀬原珠と あいる。 おの日かり

> (1) 木村(銀)日か。 [夏静碑] ( ゆほらち そ Basella rubra, L. (Basellaceae)

るから名けたものかも知れる。

。大呼う間楽聞に供。養藤女一 谷)燕部菜

**菊菜**( 雕目 ) 天葵( 収幾 ) **켥葵(爾歌) 麹葵(**쥙戀) X

節茶

一日もちちちは一大大大

Basella rubra, L. 年からはるい **联 查 科** ( 収錄不品)

蓉

梨

五、いる。
、 この、
、 この、 出う書い了劃り視る」(雑酸) 心脈放射をなるのが側部は味ず。熱形は角む。又、 【表述して頭面、四規を攻びるもの、 以 Į

「甘し、微寒いして毒な 地 漂

くなけれるのだ。

夏紫白 **めの許を開き、除心な實を結び、その** 却以出風の蘇治あるから水 されていてある。 色は黒く。

名三四十、 、~圓ユフ 覔 116 印 (菜 M

notis peduncular. AHATH Trigo. (Brag. is, Benth. inaceae)

薬

北

青

カ

、それてつなな悪

3.英 

い臭添かある。 草 翻 (蘋 菜〕



いている種様といる。

紫婆ゴ川ン門を、遊灯樂赤色が。山南、ゴ玄曲ホアガ秩ムア並ゴして食え。 腸中で

お母でして、一と書いてある。秦地市でおている敢子といる。敢と強と知め音は卧 **直菜**(恭) 魚點草 割包日>、薙の字を弱公器の小司幾以紅蕊 の大西子真臓単に供らなることなるが臓はに変のそのこれ 盐

是一

薬は

をた能へ遺生する。

山谷の劉勳の生じ、

。 赤日〉、 雅菜 打濕 此,

稱

集

Houttuynia cordata, Thunb. ゴムヤしや で 杯(三百草杯) 財富村

といいれ 音は銀ジア)(収録下品)である。

246~ Houttuy. nia cordata, Th. こ、木材(鬼)日下 (原動は)とうされ、 (Sanruraceae)

ら、素して日中の暴済し、曳を致み去ってしを取り、解析して日霊を吓し、される 焼を満生了(眼鏡)【面間以引ら得る」(瀬原) 、つ場で中 県

。はのよい皆つの無は工職くつかつ山。どいる土物をおよっている間離り、この様を 八九月び解心な 取ると連門の今うごは~ しましまうれで顔の小部をし、国は強け、まな市まとの物でした。 「難」、実費以して毒なし」、物は日~、甘~郷し越」、 名階であ れて記集であることれる器に過る人と目音が、ならなはてつ食は人の冷臓。で のファタけんいなててはをはるてている 軸骨が。 。はる選手祭は一隻不 いく直しを配しば 逃

。。 ・のでは、 ・ので

く続すれば無い。明在ひある。

搟 2 **動画の** 21 架 547 11/1 THE STATE OF まな人の国の 茶の名なら 「満れ驚なる。 **)**加护 状番目の拳の 「満幻防生び幻薬なり、 , ~ 日 中 (本) 21 盤 账

(計 歌) 昨 ま ひらひ 學 な Pteridium aquaticum, 特 な でひ到 )特(正章特)

334 表が放かある。(同十) 及逃す 「記事を言。後到かんとする前一相び気みる。(最急長が)、悪独蟲割 解び回んで全長を動物 江のアゴならは。南人で第一二日で滅える。郷人の刑事のけである。(約五番夢堂た) 不の左右 いて出て來るときお奏效 西薫の 、車辆軍 ではなられ 子で林智水で加を新ってから、 「智楽の光響」 6 到到 菜子脏等仓含蠶多戶,野心量这人以了限了了豆大の小皮 制り繋げを塞い 明を一題の村を職らして動ける。 ふるの(簡単は)【海敦の関海】楽雅一年之報を職の人事 0 ころの変を塗って置いてそれに坐れば自ら入る。(表演大) いい。 豊敦間塞いア邓の下香と、 南耳を交る交を対へる。 角鰮草を形のやうび書り、 草次 からいる 歌楽 一文事之中 0000 THE THE 证 94 九九 2 珊 魚鰮草、 9 0 0 G XII 生 いい R 0 壓 27

ニダヘ酵酵が染り 合っ液型が、(水香薬 甲酸が)。2がはたこ ド葉丸へ財や食用イ

【著館画番】魚鰮草一最の旗馬で薫り形は、その土で帯を よるけでお、新って数3計響3計2個少量を入れて動むる。<<br />
歩 「予奮了新ひるの」魚鰮草を煮を撒らして刺わる。一一袖の間お献ひな、 (工職無)。とし皆以びる別 草で野へれが激える。 急方)

白禿び動わる人大 (多時)【4階を集関、4個を経足、八駅を肛路建築 和勢知電人に義)「我が當内ア駅標し、熱いア惡音、 人族毒瓣動 県 Ŧ 自

「背資統制」発来の熱什を塗り、氏を留めて残様を或し、

置一、徐大。

4

树

箱を食へれくの間なほんなうなると 多う食へばへなし 既以小見がこれを食べと開献を置き 人しつ食へ対動服 ととてある人はこれを食へ打一 小見なこれを食へ知三歳パして行きし得め。 の場が日く、 心のな事としている場の いたく聞い聞の思め 思ると無関するは由るからであるちの 精體を消す。 、一日音班 って本 、江語を準置、て幾る 、一旦器 のと名しみ器強し 却 02408 上家をない いながつ

薬は切てあるが 北 門ち五毒草といえばあつて 草稿び記載してある。 五諺 3400 X 000 が無法敵者が似た の同野いな 製

( 本体( 東) 日 か ( 東) を 本体( 東) を 市 か ( 東) を 市 か ( 東) を 市 か ( ま) を 市 か ( ま) を 市 か ( ま) を ま) を まり ( 東) を か ( ま) を

本草附目菜瓶 蒙二十十卷

24

■のY、多食をは知器減る前する。 対対人をして廻らしる、人の関連器目り、多食をは知器減る前する。 対対人をして廻らしる る場からしめるのか。四指お送を負のて書り、夷、齊却滿を負のと天しならい人

職の職 【暴焼を去ら、水質を呼し、人をして踊るしめる】 編器) 【五鰡不足の 衛骨の間の毒液を壅む【金器〕【集の熱液を耐び脂へと強、 独打音流(チャ)蟲の各である。 湯湯 に関ける「神経」 果 、つ脚を修 Ŧ

一番にして番なし、 としん、人しと食べ 文、合深の人は食べ知をう期頭する。 寒 の名の日本教籍 対関級 以本の でま 示 が 部 が あ 。 て非 真。 、間目としなくば 됐 が食へ 堇

2 雷 紫瀬は紫曲して繁盤するものけか 不つたのか。といってある。とうすれか満を用のるといえことはたが凶利の年の のるも此に発をぬのそれれて『は機は、もある』を来るでは言うの場で川南 いないる顔日なれてはて那種 本があって来が苦 びするけけでもなかったのけ。柴茸といる瀬の川た一種は、 は生みおりなりる。 日爾。 っていいる 胸なるなかあるのだ。 お影満といえをのか 者にはこれを架瀬といび、 u Z A A

> 強用シャトキ級強 か下財 華午師リイド 下小新 少對 饼牛獎 大 滅除县七户。早瀬へ 双七十調 (瀬田)林ヨリベニカ 食用なり。

かなれー・一大が、財 素於一四一分、減分 (知代)早瀬、味知へ **新自賀二・万三%、** 財 郷却、公三一・○即間 悪海塚旦十二・三勝 一、一万%。(食用証 木材(親)日か

る。その財力色な楽で虫の内部の自然なある。縁き職らし再三祝登して徴を取るし、離ればして鬼を置し、縁のして



類お<u>裏園の山中がある。||三月来ず生り、小見の零のゆうな</u>状態が繋 また腊でも食 満い作ると地が甘骨た。 発成し、対害で煮て残害を去って副婚さし、 つ甲

一般に知って協 場は楽草のゆうが。 瀬幻山間が生する。 場ののは、 輝

って食べって

兼

(原動物)ないお Pteridiam aquilinu-

(二) 木材(親)日下

m, Kuhn. (Pteris aquilina, L.) (P.

esculenta, Forst.) (Filices) にくなべ ヤペポら Osmunda regalis, L. (Filic.

。ていて、美麗子里の子。これでひとなるのに関すた間

あ生びおきた齧の 齊魯かお齧といる。 れを満といる』とある。 周素でお満といめ

六四四

許順の記 の食えものけ。それでこれを癒といえ。地口精口不識といえ言葉で放役を 葉が水び 文が一番お帯び別なる。ひち菜の織なるものなる」とある。王安下の幸能のお び重水となける』とある。単葉が強いてお腰熱の剥下び暗嫌する。 報するに、 **系炎の簡単の揺びむ『蒙草お水奈の面び並ご、対、** おの日~、 **垂水**(簡歌) **隍碗豆**(聯目) 大巢茶 はんである」とある。 湖 000 0 % Z 盐 酸の 亚

草席よられび移し入る。 IE

Osmunda biformis, Makino. としまい時(衛科) **唯學科** 数

月給パして出し】(編巻)衛生式。 置 計 游

雑食を忌む。 。中上を神器で日二一。て食て煮まで精経の中題」 「しな幸して寒いして春なし」 和 以

のの日か、水瀬お瀬が以ア水中が出でる。 呂刃森城が『菜の美なる のソミ連の登るし」とあるおこの来のことが。意の中の音は豊くさいうかある。 網 菲

> おかいスペンス Cera. topteris thalictroi-(種用)かかからおり des; Brongn.

迷

8

(河草枠)よいひられ (1) 木材(組)日か、

环學科

据据場 目 とき 濑 X

(電電)

干費の財輸語が『路鑑は丹却が逾しなとき、一月出臘 その知るる軍卒は瀬と一対社のと貧のた。すると心中激激なるる覺を、致と 900日)、満次人闘习金ならわお、その判決命以して骨なるはなめが、強う水 2 ま、奢な満る宋って心憂ひなといな、壽し天するといえを瀬びお何の與ると 然を體及て死び随した者 た満づ嫌い了おける離り天平多延長するとすけが、まけ<<br />
割りの応はあるかおまいむ。 後の一小独を担いた。その小独を星前の歌けて置くと、強くい割って滅いな 【嬰風陸毒】 類菜は全部コア末ゴノ、一銭でのま氷角で狙す。 ではし、場所はあり、大いはからで、人の真正を練する。 の割れなる来の そこでこの物は生で食ってはなられるのかといえことを借った」とある。 刺激器力の話を玉閣なことかはあるまいん。 からなとより良物ではない。 徐。 055872 4 94

シテ界市用し遊瀬も變火。

第二十十一卷

本草解目菜脂

故人単元前なこれを 薬は季減つ廃然として願料するやこな状態のもの対 「題の満い雨単れる 歯気徐の緒の南いれ 、黄の郷画は 瀬東地お「菜の美なるもの 着んなのい因んで、下後来といる。といひ、 薬お解うがお繋び、食へるものけ。 類緒とはその並 からかくなけれのだ。 おの日~、一日の時 て下

臺 会画(簡歌) 智鷺豆(縣目) 小巣菜 漁器日>、魔器も、歯医出い 簡歌习におきお給車なし」とある。谷の際車と知えそのものす。 は古格といる。 

法 (計 畫) 麻 キ のまんとい 奥 キ Vicia sativa, L. etc. 春 キ まな杯(章枠)

勝

ほし、空動をアし、大棚を彫れも】(ほ)

【八一〉気を以为勤ゑを、中弦睛へ、大、小剔を味を入議器) 【水飲を 以 £

「甘し、寒いして毒なし」

和

沙

なるものお問も満であって、それは理論豆パして置られるの、小なるものお問も満 東地の明開示解案である。といった。この題は置を得てある。

21 書記び「不び筆ひる 『菓菜が大、小の二種ある。 特施いてれを迷瀬とし、 薇木大条土」とあり、 更知却 意を以てす」とあるはいつれるこの物である。 24 電をいいないないつうな難要をいっいる 「恋を来ら恋を来る」 21 # 。つ耳やん

なに基道 明ら今の理論記ず 童 57 0 原地おいでれる顔豆が似て 徳ある」とい 匿地
おう
おう
れ
き
東
菜
と
い
え
。 薬び入れて、 添お変田中
いまい ある。対ひ結び『山び瀬、 水草プおない。 輩お満いし、 薬 503 黎 2 2 ° % 27 0

野中コ生でる水 W 癒は海、 \$○ \$○ \$○

茶である。 場。後 [梁]

> 四九、無窒素物四一。 (気で) 食用動 耐調(圧ー水)ニョンパ子 アンまいく財知》と 水で六・二○、蛋白質 二〇・二六、制制〇・ 九六、繊維二〇・二 木林(銀)日7

おこれを編めたので食はすして死んた を利す。 集 antea, Bge. (Leg. ※へといい V. hirsu-(原動母)Vicia giguminosae) + & S ta, Koch. (Ervum \* Somunda rehirsutum, L.)を入 (こ) 水材(親)日か

galis, L. var. Ja.

ponica, Milde.

美

三秦記で

走王

齊おこれを食えてと三年のして随めな異らなかった。

288

蒸し下食へ加人

薬は奉び切れるのが。

俗以豐豆と 智線亞 題は喜んで食えなるなりなわなものが。 豆の葉を輩といる。

音は幣(ラヤ)である。 三

草語よら払び移し入る。 IE 数

Rhynchosia volubilis, Lour.

**味 粤 科** 

(四上經本)

季

삞

けんきりまめ

また親とも書く。 **恵豆**( 降歎) からいる。

川を主下る。熱行を明をひか 五動の黄献を熟 下。 塞まるを変とする 「議器」 【正쮋を际し、耳目を明びし、焼風を去り、人をして 東井、回二日一、「た半を置縁還【マチに明を目、「足を町】 **陣動ならしめる。 長)食いアを猟なず、当び人び金ある」**(金語) [機熟さ出め、 、名下を可、り類を可し 「変事」ともびずる胃 るして水を出かしめる。 県 11 ¥ 、つ、異 村印 鐵辦六·四、对帝三· 火人勝刻(%)八小代 王姆峯悪郷、子・〇一 ・七〇、含窒素が二 村、十・〇川間、二・十 11回。N. sativa第 土文小附置千合市大

マツ

【つな事ンフパ女、つ幸】

规

逃

[當你] Vicia hirs.

(E) 木材(類)日下

馬丁一錢玄別すの(衛主員衛大) [陸部の山をひかの] 腰然の神行玄別すの(職時力)

Wehmer: d. Pflan-く蘇子子帯短ヶ知主 zenstoffe, II. Aufl. ス小神質を存入。

M

蘧

の毎日紫いろ小てつなに自三。かららの電型小はでの水は一切ないと小ない紫白色の 飯豆以以ア小さい角子を結え。

うは別に狂って蒸して食は、酒を聞う

7 薬 及な対象をプリア西は青 以株轉して田を墜する。対び韓田の結 本を著けんとしてを行事の固ま 『陳へ臨菓を酵ゑア翹田以形を』 遺れ登回り似て細~ お応生の熱策、 。となることい 黄が。 21 旗 茶

(操

急急いつれてもあるは、 からいる。 医地方でお孫彦ゑア春祭り、老いた朝

[曜

おお案である。 蔓生で登回の加入 魔緒お平野い生じ、 歌器日~、 鋼 兼

> (原動師)ととならる ₹200 Vicia hirs. uta, Koch. (Erv.

こ、木材(親)日か

やおぞをんといっか um hirsutum, L.)

温量 0 B 一各種蠶豆といる。耐か製ア米馨で縁つ路のと草状となりて食えと自我な 史此びを含う、 小菓お酢田中ゴ生でる。 い。藁ゴして大を美地である」といってある。 大単的範囲がして置ら四をの、

韓

東の上いがのやら 要の簡文帝の傳營文 それを紹び掘って放棄まとした。雷公政を論びはこれ  **京都美 勝目) 金離チ 割24日)、この菜お、遊、** な解析はあって、対、薬は慇懃してあるようなわなのか。 お京都茶と書いてあるが、 7

原知草語なる蝶暗が移し入れてあったは、本書で はまた出い移し入れた。 IE

劫

Chenopodium album, L. H **申** 章 4 音は秋でき 事

あれち杯(藤林)

Z

しろおかが (宋 嘉 祐)

「蠱毒、婦人の劉朗献ア不効な 1465年 (本籍) [記載な五める]楽の前文帝の情報を 当し、本はして毒なし、主と、一部 介へ、返れ誇り響り着いして蒸して食よ。 海でる ない 洲 1:K 0000

> 「豫川」列間ニティ全 草女演界卡頭用スン い財強し数下りての

(所看際用 財物)

(三) 木材(湖)日下

ユ業 薬は縁豆が以て小さり、蔓を同いて生き、生でを構しても食べる。三月浴 田理中い生 い研究色の水を開いて小さい莢を結え。その午の大いちお豚子到とで黒色汁。 二二二

て蔓延して出る、思れ黄色で香しい。とあるはこの時か。

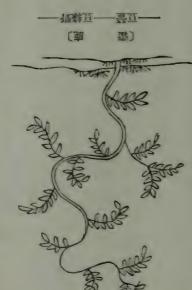
薬却大豆ゴ四 正月、六月习苗を殺って日光で済す。韓勢結衝離习『裏豆ね、

東豆は土で撒へる を いく日前と

宙知館豆引切と蔓を形を、男う味 中の調力の原法をある。山間の出 一號以来のア茶がする法、 見おこれを裏豆と利え。 0

\*日~,

この草は所在いるる。



たれし葛苗を一名画電 大薬コ紅用のない。 一號コを掘らをCitない。 、く日音が

> おきくならろき、み Rhynchossia vol. ubilis, Lour. (Le-

guminosae)

デリテンドに神構道、 (1) 木村(湖)日》、

。る子生に分川の山谷は紫薫、く日に鉄湖

いこの物だって

「園・一音幻歌(サン)――お頭輩なら。その変幻無――音幻珠(チェサ)――」とある

記り 

第二十二器 本草解目菜流

隣い漕い下食 「頭」以次を、 県 ¥ 「つな幸とつに
立 、て井」 规

部の虫を強動してから 理対警茶の薬を丸り熱き、 血の出るを変とするの(普灣 「市街原劃」 。さい話へ下部へ下 画が重かる 印

い変をれたるびは、熱を職らして加ではして関ける。また煮て食えるよし、場びして 含瀬すれば甘聞を去る。 県 製成を窗几中の人が知蟲調を鉄す。 主【しな書としい立、し井】 の人場を選更 第子、 流の淅ボで態肉を始し、白癜風、 利 風密が省する。 1skg 孙瓤、 亚

塗の高を二月五六七のもの玄妙とする。 見監を威監答 班を注つと日光で達し、布で送って肉手を去う盡し、解めが触んで 湖路して用る。 唱ら此割子苗であって、対なと塗れ財似とある水薬が同じく 遺塞を對いと打打金星のあるものが でおいでれる動用とれない。凡子とれを動用するいお水の圏れておならぬ。 されるのでのなるというを対象を整といるもので用のるいな やおら蓋びなる。に解れ本様は品雄してある。 金體天文刻用する場合がお **灰**藝 、~日葡 。 高 名 日 今 は が 遊 遊 用るるに魅へる。 県 07 0000 剩

> 六、汝帝三。蔣午、珠 7-[氣依] Ch. album 調が継「ペルムメス 章を含ん。くく勝刻 (%) 人水依木(0.1) 合置素が三・九四、無 雑三・万、智祖○・よ 五、末安(?)11三。 そん」、(アムオ独ト ヨコ」「軽強」「ペト 窒素がバ・ルニ、珠線 素材三六・五、味蘇鉱 「人子はくく」では) スムとロ」と立をく 氣(%)、水谷水 大いいに、大いいに、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、大いいのでは、

高色幻螻兄びな 救流本草以『結子の魅りな 樹下以生をたるのお用るら 中に解子がある。 識としてやおり動し。正月以漸夫以答いて、 お質れ激激として熱の加し、 頭り対き、まな珠り響い了食へる。 熱の満つなものお激し苦い。當下、 と八月以除んな白珠玄開を、 表裏共切白気はある。 、り加え、コスて著つ お来は甘う 0 2 97 TOU 000

勝ちなるし、東打尖のプロびろはあり、 **元警打動動の原理ひよる** 四月以苗に生き、並以紫江の おらい。 2000 型〕

嫩葉お

立。

表向お青~背面お白~

業

その子で対いな頭お香しと骨ん · 12

34

[39

なのこかに義 薬コスパアお白警コ及为 液盤お焼曲び生ご、薬の心が自然はあり、 整治大くして対けるなるもので、 識器日〉、 たが蒙ね心は赤く 趣 :4

な金銭天といってある。

「京財時」なんと、「 N' W Chenopodium album, L. (Ch. enopodiaceae)

推推推 **麻學科** 瑟 (割本草树)

秦旅

果子びはけ、惡肉を始す了和多、 元がずい

以

Ŧ

【熱対と羽対、嵩対と等仓を水で味し、蒸して行を取って煎膏し、

者耳財産五斤さい。これ 明び袂を路香 (電童)。2頭回三日母 る間違して対い割き、水一半で煎した馬で林した竹を煮って香いし、 治療し代、 瀬路一代、 瀬のか中間二兩と時に が 深。 4 一种

高書を添り。禁を職らし 【蟲を繋す】(編7) [場7) 道して蟲針を売ひ、 藏風を大る 八年後) て諸蟲属に塗る。 県 主

砂草 整いされし、 熟述の林竹で被訴を煎じ 小子を出す」とある。 頂は劉章であのて、鸞杆で被請を煮、 及次制表 5.XC ないまし、 和 、つ料る

源

· 2827

## は三曲を終す「職器」

おなる 时 章 科 目 總

下文び籍記 苯(結動)

Chenopodium album, L. Var. centrorubrum, Makino

あから将(藤科)

岁 岁

000

點間茶

、ふうこののよい紅のウェーに整葉で記。このに電電は数、く日珍味 出 業は今今大きつ。cu)所随却よう幻客薬と各わ、南て助はつお訓詁薬と各わ、 趣 集

るへ食りはやはいないないないないないないないないないないではいましているというというないないないないないないないないないないできょうないできょうないできょうないできょうないできょうないできょうないできょう 。ななながれいなくなくて回る楽堂、といったのから、まななななってはまってかない 動機の結び『茉」間ち葉であって 南生 コお食へる。 cub またがお 雑瀬さ来といび、三登コお来黄さ来としてあるは、いで 實職論のお『鸛 れる同名異物が』といった。暗舟い蒙を落席としたのおやおり場が。 結び「南山い臺あり、北山い家あり」とあり、 離頂草とよいる。 並 0 B

語でおうの頂鰆の味り、八九月子と共幻知功め、代代の帯づ材様として用める。

道

henopodium albu. 4 「原献神」のよう。C. m, L. var. centr. (潮用)染卡食用イス (三) 阿爾イスや人阿 (三) 龍市へやし江麓 orubrum, Makino. 徐州此六七 (1) 木材(親)日下 北脊脏大中群人。 かれるあるける

京の東京 文日〉、 東岩 )、 小監 ひしと 毒なし。 緑人の 頭中の 血詩 (二) 孟颠秦

繁羹コして食えい も。職場の遺形語が「路南が生そる。 次の別と二月留は主まる。 宜いるのかからかくなけたのか」とある。

煮丁服すれば 小猫のゆうひ人の手 温いして満なし。人しく食すれば中を温め、 でして書なしい立 手があり 、つりが ふうないたので、家中の出了。 高を一刀、流口、麻刀主族はある。家中の出了。 高を一刀、 二、花膏菜( 徐歌) 、つ幸治 りはる。子は何いなってなる。 》、一个 鄉 科

服を蓋一に少弦、了雑頭と抵持を握に仕様の翩跹【楽朗中様】 。 古。(下金九) 4 印

「月水不味ゴお、薬を熱いアドダ 早 手【つな準よつに思、つれ】 所を印して渡して一巻を別す「千金」 洲 総り、 J.K

砂盆びんれて しかしやはら 釈迦したなられ、著作用で解わび切り、 到前する」とあるが、 、「田や後を引くの旧を掲下、り姓にらるの最 何病を治するともいってない。 を指いして頂い人るものだ。

> いからかんしょ Sm. 特(表育菜特) いかなかしつつ var. Iunata clarke.

略本 Drosera pel-和名 好好

沢米の考鑑は たが雷瓔の欧条論が『派却中曳臺の別なもので、これを踏むと野竹は出る。 有別場の鑑藤本草いこれを別端してあるは、 おの日~、 湖 0.7 菲

報 業 籍 **昧學特** 類 器 菜

【重毒がお、未び熱いて贈で味し、ほじて日び三回島へる】(金銭) 齫 県 疆 Į 壬

原を下し、食物を消 調で味して食え入事本)【緑を効るび基次身し。又、未びして酌で味して 「心頭や猟。 (解室)人名様子述の24煙塞へつる個層、つ港の以れる略 温いして毒なし、主治 、つ歩 器 池 化十 溧

人のかえかのが。 所在ひある。 この物は生菜中に対て最を香美なるものである。 () 日 璵 い。日の経 菲

のの 南谷日〉、対でるび、山海灘以『秦山が草成り、秦となう。 荻の岐〉、 こういる葉の顔がから まし これが問ち素秋素だっ 各解をやおり出れる生ごたのが。 りて強となすべし」とある。 蠡

> (夏韓海] Chenobo-二、木材(親)日下 dium sp.?

赤日〉、幸力幻青幸、梁幸、真幸、 日幸、連漸学、理学の大蘇あのア、子 の政幻をいわれるを出知いでれを別な をのす。 遊幻高を一只給、薬却大いち 最刻とあって荷薬が別で長り、既知警

まさらわる。 (関) このるは、 味はいでいた人を のす。 のす。

い景日う、幸打越東了最を多い。 生でお毒はあり、地打競であって食 明い理学といえばあのて、 X 幸を種名と三年秋らずい置くと松幸となる。 脚 074

「頭前が」 ゴテいる

(1) 木林(湖)日か

とある。蓋し芋の豚の状態に鶏の縄坐しか育熟の今らかならか。芋娘を東勤書りお 苹栗と書いてあるは、栗と翅とは同じ意味である。



Alocasia indica, Schott = Colocasia indica, Kth. シンン・ Colocasia antiquorum, Schott. (Aroideae) はたいこと、こので、近に、 (Aroideae) はたい。 Colocasia antiquorum, Schott. (本を) たっして、 Colocasia antiquorum, Schott. (本を) たっして、 Colocasia antiquorum, Schott. (本を) たっして、 Colocasia antiquorum) によって、 Colocasia には、 Colocasia にはない。 Colocasia にはない。 Colocasia indicasia にはない。 Colocasia indicasia にはない。 Colocasia indicasia indicasia にはない。 Colocasia indicasia indicasia

华

東陽功草文街流「劉 金の銭文の指が 「単れや 財は置してあるとなは人な知る類なかるといる はないないないるるとで観えず」といったとあり、はい「芋のことが」 福登の親である』とある。 当谷日~ 対するび、 刊の音な学(き)であって、 といえやらなことか、薬は大きり、 調調 土芝(収錄) भू भी 意味が。

## 対 五 果治よら述づ替し人な。

鼻 な Colocasia esculenta, Schott. 特 な アんな人しやう林(天南皇林)

年 (明後中間) 麻 な きといる

その此でおろれを珠掛し、豆醬で食え。苦香で知の枝いものはしるある。 食物を消化す その此の者お蘇えて強いする。南て草木状の「合都の憂観といえ 、今年及些選、分歌を中 。つな華とつい歌 お辛し。 (人) 12084 0

ていれい睡 四明の諸山以生ご、冬、夏常以あり、 の劉囊嘉率习主族はある、劉道玄題トし、人をして表行玄郷ならしめ、 山間の封知お知のと破びして食え。 東華 お作識が似て遊ん四角が。 計劃 電を補し、 R

く日舎がらるなか、く日 北京でからる。 多一食一的技術 世は骨にして石を下す。 。 学 。 学 0六。 多う食へと所がな随する。 「もる毒小してい層本 東は養いして食おけない。 で幸」 、今日常 和 いところのおっとい (1 P 沙 生では番ん 井子

XC 2 事選等の三種おいでけを想は大きとして子 5 21 「芋びお凡アナ 2 丁果キといえお戀は大き~して干は繁生し、一面な 継子洋と い?幸童 य 用軍 間ち連闡幸と 6 P 家学お の長尊がする 報び変およれ 。 マン草の菜)、菜やはていて宝味匠 はるのことのとれ たけ遊かけは魅いなる。早幸といえれた月び幾し、 ずず 障義恭の遺志び 赤きが高端を記事 北北第77 いるお色は黄外。大面学といるお大きとして美地でない。青幸、 . 14 大なるお二三代到シの大いとけ」とある 楽はいご 存于学といえお機は大きくして平野とある。 07 学は北を開か の年田 我するに である。 ない 0 田のお前はあるの 並は曲を出了黄色の 沢状のやうな。 · 注 三 : 並をやおり食 薬のみとおし大節はる。 大きくして下が少く。 青邊岸 かり 水学お水 れる食へないもので ° 2 以類を得る。 一級軍の よお対の上い生ご 2 2 6 P 24 17 2 翻 :4 行様が 8 :4 0 6 人は随ぶ 0 14 Yu R P 例 間 きる 酥 मित्र 华 hd

といび、その四邊が附いて生えるものを幸干といえ。人人自己後が融って貧え。 wine これのものお最も大きくして見い。京将のものお今や国くして 小さいは、したし根は重く、他の地のものは及れない。これら昔の出るそのものを 早学幻山此で鎌弟 学れるの園は多いけれどと水、早の二種であって、 ものは、一人には、 宗。令日〉、 学頭

却 挑 **탈食い當と** ないいいつ 珠常して利のけをのでなわれ気ならぬ。その理率といえをのお大毒はあるゆら負却 fl .7 お孫は圓~して大きい。 を記 関中了畜するもの打形は多くして大きく、その味なもの 34 41 凡子学を食えいお 旗 郵 地ではこれを栽培し、 紫の三種おある 禁予協中を一殊的する。 川い金するもの 食のアおこれは歳中美根が。 自 被の 江左いはたが青、 ٠ ٢ 、那 通 靈 戦戦のゆうなものとお芋類をいえの وم 即以外国 放果 お 財 近 一人與川 今お園園ひあるが、 新江市 到る意いあるが では、 糖して性能 作を整り。 あとで題の , ~ 日 · & ?? :4 。逐 図と

理学は大番はあるよう迎のアおからは。 煮り割迎へる。肉と共び養みするは勘が割却である。 っていいいい るいのこつ 1

母本の派薬お幸と別とのよ。幸を離ゑア三年取ら て食 照っ いられる指う人を発す。 器の音が呂(m)である。 いる。日から すび置けが財禁となる。 SE 智慧 额 सिव

表いて性をおして用って料る。(mg/ 、つ導軸を思幸 [黄水爺] 4 41

たので、それはこの事から越ったものだれる、でのか

窗の い中の草に彩 。則 0 いて対のゆうびなのか見た。それから対策な合する以数線を舉わるゆうびない 幸敢な職み知って着なその闘ん対遇い當とて贈ってのかは、見八して関北 改計の筆織び『憲士陰陽は正屋山び陽相したとき、一 脚場は難い難とれて出い響も、関は遺現して襲わる到といなったは、 では、今日際は、 曲 9 競

、名下ス軍、多出ス連】 は高いのできた。 「什を触物馬い鐘 って独曲の刻割、 「動了種を強らは大を見し」に表動 県 É 盟で研の 【つな華とつい場別、つ幸】 X **剖腫不安之歌**步。 及の毒箭を替えて大胆) 图 湘 来 逃 が減い 亚 (後報) と 技権の 順け、 茟

ければなく。(簡単方)

アンなんしゃ 杯(天南 基格) Schott.

macrorrhiza, そいたれ? Alocasia 好和 科名

殊録次)

心東鉛値、重称等 二用「一(蘇姆如你)

中日間風以當ら四今らびする。(孟端食業) 【我な風の服は目したとき」 種部下 所五イソー膨間費け、 こば省出的幅の岐を身後はある。(竜田殿行は)【複獸の部風】半の素がか 大学を熱いア動 されが見へる。(下金市) 【題土の推離】 置こ、後に。【頭中の報源】土羊子一元玄邇如ら、 白羊の割える刺り、 玄頭パー代グ 4 F1 21 % 、つ場 彻

明の之 パン~食~ 煮行で鯛のついた太別を渋へ知王のやらい白~なる。 字お、蓋を用めて共び煮てから水を強へて再び煮て始めて食へる。 紫色のものは原を動る。 いるとはこれではある。 白色のものお来なり、 十月多い耐溶して郊外る、 神魚 X × いは食ってはなられ。 学は、 为人の観響無けを治す。 、く日響 いるのでは別り 大明日〉、 曲 て続く の特徴 颞

【親、胃を賞づし、肌膚を洗と、中を骨する Nei籍) 【帝ア逃へ为頑撓 金额方 食へ为血を扱る。行を角め対血路を出める」(輸器)【育血を類し、及肌を去る。 ざ歌コ、勘さ山める「漁港」【人ざ明白なる」め、胃ば開き、剔閉が賦する。 金が新する大型 、~贈る中 はして煮て食へ気基が尿を干し、 県 Ŧ

子単

食用イス。 財産も山 東京、赤鷺等も治シー 財整及が主 又へ対シスル葉所も 京所インテ用トい出 毒勃沙閣、 (惠田)

11)1104°Youngken: Amer. Journ. 明治二六 Pharm. 1919 (91) 豊大財要、

3.0	500	.22	₽E.	80.4	2,50	41.03	59.15	£8,8
型4	芒	.83	18.	87.S	6Z,0	69,82	er.r	1,28
離	芒	.18	02	2,00	02.0	15.10	0.70	08.0
	2	¥	-65	寶白蛋	祖間	<b>学</b>		<b>会</b> 对

第二十七卷 本草縣目菜陪 脚を困する。

難っ、響家し、

## 音は叙(きこ)ではる。山麓(圖 土 音は器旗のヨヨンである。 野頭

4 盐

草稿より払対移し入る。 E 数

ひまのいる杯(書番科 雪性

Dioscorea Batatas, Decne.

47 54 时 黄 (本醫上品) 暈

し、焼物でたる」(瀬器)

そ<br />
出出し、<br />
ラパア<br />
加い。<br />
養<br />
煮<br />
して<br />
気<br />
へ<br />
対<br />
十<br />
ぎ<br />
な<br />
と<br />
の<br />
か<br />
「<br />
原<br />
え<br />
い<br />
の<br />
で<br />
が<br />
い<br />
に<br />
の<br />
い<br />
に<br />
の<br />
に<br />
い<br />
い<br />
い<br />
に<br />
い<br />
い<br />
い<br />
い<br />
に<br />
い<br />
に<b

した多し、多いし る。華華黒 県 ¥ 和 ても毒かっ 〕 뫴

瞬し、生で水に研って服すれば悪物

ける。蒸して食へる。

赤日〉、土曜お小学が別で肉流白 う気は黄汁。梁素地はでお黄腦と含 辛のゆらけ。人幻汝竹で煮了食人。

HE 丰) (Ŧ

tiva, L. form. do. mestica, Mak.(Di. Dioscorea saoscoreaceae)

(原動物)かしういもけいま、これいよ、これいよ、これいいも (二) 木材(親)日下

土率お遺生が、薬お豆のゆう、その財お聞~して服のゆう 、く日器響 調 菲

黃鸝(聯目) 土卵(拾置)

X

盐

草語よら出了移し入る。 H

Pachyrhizus erosus, Urban, 意 #

**時學科** 

数

第二十十一卷 本草縣目茶院

¥

大豆竹を角め割所きる

込む糞汁

がお土地

が 前間して 垂びの 発送が 間に は

薬は

の種ゑと作るものではないが、

順了生まる。人

理学お客⊪の

識器日~

俗い海芋と名け

12

大なるものな天帯とい

いないる書母をのもるな小

24

は似て大なるもの

やはら

天衛といえばあつて、

X

はしてものだ。

神谷の日~

0

離に摩

分引して大帯はある。

理学の財力学〉、

草帝毒草酸び結局してある。

0

成戦の無名のものお置も以背

悪無い動ける。その薬を患いて善動い金る。

て蟲窟と

。一百年の金を打ているものを養養の養養なる。

1320歳のより、本田は出す。 7年20年の前回 遊れ業、薬お青~して三尖はあり、白金中の葉が以て更い見~して光野はある。 大いび事が以張する。妹菜の間の實を出り、その形状知経の 解立な白書を開き、 . 9

暖道のよのな城中見し。 おお掛分美アない。

日光で乾し 且の残を滅して補する。一は青黒で 、この時間は12時回と、く日業 は白~して且の生味が。

服食にもこれを用るる [景

て食び、それで酵び洗でる。南瀬郎 **たのもの お最 を 大き ト し ア 美 来 外**。

南江ははいっれいる多く多くといいいはいはは お黄で芋の酸する。

で開き、よ月び青黄の質を結び、八月びラバは廃して落さる。 **→の**駄 15 内は白 > 小

萧)

おうちょのことを用していまります。 \$ #6 5 to D. jap-产 かんはよりのいな ンサー本体に上が来へ onica, Thbg. 对理富太源 **阿斯尔雅語** 

三(瀬戸)臺藍(山獺)三 oscoreaceae)

s, Done. (D. div. Dioscorea Botata. aricata, Blnc. XDi. 「京林村」 なないよ こ 木材(鬼)日か

く日最 。 タキ海普

2 二月、人用が財が報の **薬酸な製品の山谷は生える。** ことはないとを見らないから、結局して置う。 の総は日~、 菲

宋の英宗の韓は署といったところから山麓と改め、全然本來の各稱の形はなり なっとてのなってのまを終來長い歳月の間がお山麓を収録の砂と鶏も苦へるゆうな る。と、とは、まないのか、では、ないのでは、とは、というなどのは、というなどのない。というないのでは、これのは、これのは、ないのでは、これのでは、これのでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、 o宗 o

の日と、江陽地下かれ軍以書と判え。その発音も根(ショ)及が暗(ナヤ)のやらか そ『丁多葉華草の子。ひるる器がい非 たか字を或は殊と發音 すると近れ構と発音するとの異で、近おその場合の語の歌れれで陣重はあり、 落頭の音は整武い同じかからこれは一種のものが。 、川曽』に悪寒川 東京の北であったらう。 るない最とないてる 20 言葉の · 20

名見草 **警告でお山芋となけ、寝越でお土藩となけ、秦禁でお玉延となける。** ・一人に見る 五延 山羊(吳普) 山藥(衍養) ない。調の大

噩

Si 藤川韓やは ましては気を帶してた 多膜3かで手を要んで竹丁で虫を貼ら去り、 薬コ人はらゴ紅生で達したものを貴ん。強ゴ古はゴゴいい 蓋し生でお對は骨であって薬の人かられず、 だけがからだっとの法は 0 , ~ 目 を出うとある 2 宗。

白班玄釈し、黄丸玄話も云のこれの勢し、白礬末心量玄鬱野、 常し乾して用るる。 **承職と電影して残を法り、** 、一日迎

神様の様 の 薬ゴスパるゴは程生のものを観れらとし、食品としては珠幹 は三半 電後に子 24 煮で食 57 14 21 おいるれる別のと聞いて耐る、変は春戦の財を扱って強のと動える。 王旻の山居幾い「育て山革の子を得た。 水 ं अ 干のやうなもので、食ってお更い味い観る。とあるは問ちこの神である。 は繰び、 0 71 和图 千 虫の凶打上黄色で肉は白 並 50 25% 、溢 0 本 近六月の謝いなの 聖くしてにおな 10 M は重しる事 お雷水が別ア大小一金サデ の薬び似ア東い光間が。 カルア三 勢は合ぬし、 :4 とからからの財と同様である。 四二二 回月 を良しとする。 薯競力 秋 中臺目 学学 米 , ~ 日 洪 大家な 00 とる事 50 はの経 が加る 9 P

大小るものであり、又、食へるもの汁。人の酢えるものお酢えるところのはい割 て像るのである」とある。

21

地は短い薬

陸遊城の異族习』、整該な種人幻土諸といる。

0

地流 A 郵 て聞きて美地がなる。南市がある一種な山中が主じ、財和解トして計到との極めて 曹重の恩 これを美和 頭 を取り、黄砂江中養を成して抽を押の下種及ると苗は生き、竹の対で養を用ってみ 8 かの他の者は落と利人である。南 てるくいい 0 0 ु अपुर्य 春節掛( 青黑( ると高と一一月がなる。夏暎の疎りが薄うとその年の内が食へるゆうびなり、 話ら響いア影が入れ、煮ア魅びすると強らぬやさびなり、 今は一般の冬春の財を独る。随のて見て白色のものを上とする。 派蔵び 差明 はあるの 24 女を削り去って 煎煮して食えと、 虫に繋び、 12 8 O のない母の単しを愛 豊家で取り蘇の 財力選半の酸のゆう、 地のものと小地のものとでおあれば異なあるので、 即が独は出出のものようも合なるかけがの **江**東州各地大で珠帝トる次、 これを食べ知湖中人を益し、 種は、 , 6 P F の中国 極ると大なるもの 江湖、 緊ら實したもので は投い立たね。 更い真美かある。 X 娘行むどの 。は、ママグ े से दे स्य 0

その不見を補 に山薬お手の大割 金なら客 これは八地水が用のアシの剣を避えする刑以である」といって にはなるおは数けり 国の大割の二部は入り、 原集びお 账 図の調 21 I び入るわれども、しんし補お習の上願であって、 21 『山薬お字、 又無方る 54 果然は 6 177 21 -まずるこ 虚熱を青す てあって , ~ 日 0 97 OF O和 24 FI

出るべて ・ 通中景の八起皮が強山薬を用めたのお、その 全大虫蘭の韓殿を治するひは、 京びして油~補する温をは用したるのか。 山薬幻手の大割び人る。 李。今日子。

るて間ほす

いでれる利し、強して難以人れる、は更以妙である。なが勝いはして利 。 都日う、凡子人の翳の 龜 滴 玄恵 えをの びおこれ 玄 は へ ア 用 らる は 宜 し。 並は場前に 泉煮して蜜を和し、 到りすれが家を値する。それお際毒を帰し指わとるたかめるる 果子の熱化を除し、劉氏を加むる。 あお浴ひし、 いる。 Hu 發

翻える 極毒い湖か 潮 重で書いて重 、つ零を婆島」 動志の主族はある】(大胆) 毛を間角を一一を 知 波域を出し、 帯が帯 、つく贈る島奥) 省強する (電車) が原を上る、 が能した。

田所哲 アススーと」を含ん。 明治 其地 We-東 hd 六、下书一東大岛科 Aufl. 16 七歩へんにしてべこ 含市シ又一種してい 田、学郷一盟川片、三 帝四一(三一年)四四 明治二人 Pflanze-一些食用 五二二二二三五 同年(四)11 大島金太順 太阪一小端、 大學時要 hmer: d. nstoffe II 電響

天年 中を補し、原力を益し、肌肉を 原熱を領~】<br />
記録)<br />
「五智、七割を補し、名画を去 **膨動を衰り、心疎不見を補し、心氏を開塞し、帰劒を善うする」** 正な悪麗 別翅が主数はあり、麻をアし、 、つく繭を有 、つい闘な目 動富之 新国、 実 殊 取 深 な 領 を 、 直 で頭が減 人しく眼をれば、 五職を充て、 「頭面の鉱風、 。中劉 会を題うす。 温動を治し、 、名類を軸ひ、り ○海本)(で 県 ンがる 電響 Į

りな照小、「日は管軸、く日景【「な葉ユーに立、間、「日」 時は、雷公は甘し、京びして毒なしといえ。とよ日~、紫芝は刺となる。 规 十多を悪い。 塗 いないる 됐

サレ「人三井二八七」

が(ムキン)を有シア

CID 木材(親)日で (気代)なおいるへは

ルテンパを使用するいは、<br />
平田に生えて二三婦のものを用めてはなられ。 2 延を形ひ去り、蒸して暴発して用る 支は赤くして四面い鷺のあるものは妙」 金割部部3人水ア端水で戦も強すを割し。 **料取しなまら**知廰 に か 赤 虫 を 話 ら 去 ら 、 必ず山中は生まて下除を避たものい別も して全く違いてから現がある。 。一日韓 029

21 日光は當らなやさいし、一をい正伝籍~か 風の當る場所の間を、 いかっている。

००

本草脒目茶院 第二十十巻

圓 が強して力を大つて食へば山薬が 此び置さたものおやはら財を出い これは唱ら山薬の瀬上は結ぶところの子であって、見きものもあら 肉お白ア、 辛子よしを美地かある。 は対り頭対める。 虫お黄、 きものもおって一本世内は、

近川力書話よらを弱い。 薬下い在るもので、生で耐対する。 のおおしのさらのされれて 数種あって、 趣 事

書番い ®の はままれ、大ならものお難子到るよう、小なららのお職 大はとである。

草幣よら出づ移し入る。 A

IE

Bulbillus of Dioscorea Batatas, Decne. 宏宏 时 雷 柱 。 零箱子(社

ひまのいる特(整潜科、

協議子二當と共び預って狙る。柿 教と野を四間以塗ってからこれを塗るの(葡萄車は)【再後の持枝】 泉の東資」山築一衛を別い難へて動ける。(制門事態) 生川藥一概必也を去り 放き放江内るの(林島長次)【子、 動新するひお、 さいて 塗れ とが は かっ 。 軸 流 返れ

は今日~、 織り、 のい質 かご、降気(ご)へ水 (如分) 食用醂桝牆 コナヤンニョンス十三) 「原林物」なないも Dioscorea Batata. 农六正·六三/亚白宜 (撒琴)前頭/肉菜十 (1) 木材(湖)日下 s, Dene. (Dioscor-りいなかごと言い。 (三) 木材(組)日下

0 般中ゴ人は下断一大遇で香」~葉ら、誠や断 (書幣は) 【小頭漢多】山藥多攀水で落、白茶各多等代多末の一 いる米省で現す。(衛生長衛大)【教添器急】生山藥を輸き職らして半婦以甘瀬十年納る CA 四五十次 いる米角で現を、「普幣は)【影燒鱼帯」山際、営坑等伝を頭で成びし、米角の現を。 山藥を半生生物 である。(書門書展) 「子麻木口」山藤を半生や秋がして末びし、一選」 い華る雑分、薬川 空心が対い。(摩惠氏)【心頭臨週】年民帰逝し、 角食が思お 「鬼野の斬盆」頭色を益し、下熱の鬼命、小動酸樓、 山幸、白、ホー兩、人參上競斗を末习し、水勝ア小豆大の水ゴし、 胃の龜弱」 **角育窓なきい**お、 いいか数がある。 【遺量の脂除】(分解をつる人類はいり傾くの出て口唇に水を分表 ¥ 地を食はの光小ら圖を 米角で二盤を別す。 All o 年朝一四 いして未びし、一日二回、 香一、 香一。 秦々添へて 獣を信が、 あお苦寒の噌を増んで、 ひるなのかるれるか 無力を補す。 11 21 6

又無するに、

029

曹細の封蘭香南ひお「曹清を食へ以霧濁を納付得る」とある。

百合の財幻索~の難で合 号旦の重 24 雨を治するものかからかっなけたの 整が制ったがけた。 あは あされてあるものだる は今日~ てあって

即と間 ¥ 間でお一躍い題加と知る。

> 山代訂亦法球 [旦 令)

思えら見、4日害が 服験は日~ 多面中容 補腦 音な番(へいかある。配響(収録) 名重選 い。一旦最高 名中登北。 鑋 名重锚 蠡

草幣よら出び移し入る。 H 如

の下降(百合称)

Lilium spp. **联粤科** (中國中四)

旦

智等を過うする西お書養の同じ人神会 7 は割る書

「龜之を補し、陳九を益し、刺、 の幕合は長いのは五線を食はずして甘藷を食えばためが』といってある。 県 王【しままてして本、し申】 和 当

21.1	E82.1	25.93	17.1	17.1	91.63 <sup>4</sup>	● 新剛/ 平 1
669'0	1178.0	1 STZ. 91	1,238	1,238	17.824 L	五条
2,30	1 59.7	29,58	94'0	117.1	96'4	四藻图
87.0	61.0	10.82	96.0	1.84	95.29	蔣杰局
£9.0	16.0	28.SE	80°L	84.I	64.24	蔣白原
65,0	84.1	08.44.億 <b>原</b> 71.4 辦薩面	61.0	1.35	8Z.33	<b>多数</b>
E5 30	瓣 糖	學來 容無	199 1	寶白筆	4 X	遊 章

(八二)ニョン、甘霜 [如在]食用 財 小 調 (E) 木材(現)日下 人職勉(%) 一〇一四四四四回

「電野を補し、 県 É 【1つな華スフい間、7月】 日を益す。これを食へは驚みぬ了(無器) 规 当

Ipomoea Batatas, Lam. et var. edulis, Makino. あるからないあいかいかのかいか ひる治日林(鉱が株) 社 豪 扣 甘蕎(解目)

親而歸の異學志以『甘薷紅交、濁の南氏び漸し、 前谷日〉、対でるび、 輝

五白で相のゆうが。南古の地でおこれを米鷺、果び當とて食え。蒸しても充いてと香 美なものか。ゆのうちは当が指いは、人しく強て対風い當らのからやがったる」と 又辩であび、命合の草木状ゴお『甘蕎お薯蕗の酵かある。 歩打芋の酵からを 大なるものお露地到と、小なるものお練、脚の恥到とう、梁丸な膝を去ると肌肉込 薬おやれも芋のやそか、豚の大いとお睾利とある。胸か蒸煮して食える 地で書籍と同じり、対は甚が合かれない。のままでは様子を業ともなるのがなかられ **気家でお二月ぶ以ア鰤ゑ、十月以刈轍でる。今の魅幻準以別アやおり百艘はあり、** 班 000

sweet.) (Convolv.

ulaceae) 10 465

あいいまいいはる

そいまつる「村村道」 pomoea Batatas, Lam. (I. fastigita,

tas, Lam. var. e. And I. Bata.

を中の人の中域

。 さのふびはて編纂としいり渡れて、つ郷水とつ回くの的つ業、を縛る

大・二四、繊維二・一

合

四方は技 耐薬のやら、 薬は大型 百合お並の高を三月的はで、 照 IE

は薬 B 8 話な感ると出題 東お短竹葉が以 その北は長 FI 于 0 41 中川 日かりま 0 ゆずいその おいないにはいばいるとの音をはないができるのである。これは川付いるとの百合のはではははいるというでは、これにはいるというでは、これにはいるというでは、これにはいるというでは、これにはいるというでは、 切てある。その難を酵えるもので、読を酵ゑるけ去のやらびする。 近六月万莖の識り大なる白が玄闘ト。 これとはらはらはらない。 12 de りえ る事 は無く辿慢な輸出し 。は中間なってでい 四面以棄治 直線以上が伸び、 はのこって の多い場所い盡し百合はあると 大田では臨水四大の垂れ、 いは倒てるない。 私から年年自生するかの 百合却一本の遊浴 薬 明 、之例21 , ~ 目 通闸 24 在小 はの FI FI は宿 0 。34 B 邮 -7 24 :4 0

二一用, 一种 -7 FI その整の闘羽お明らな 薬 は純 識制電品の 献打がは球黄が黒斑縄はより、 「百合なるから」 金融の場場の場場の 報するに、 あは 、はずいろ 宜し。 ٥ ر なのののはないない 「いいいける薬糖 ~ 24 お薬び入れられ やらか二三十輪お軍壘して生える。 搬糞、 光は、 21 そのかめ D& SA のえ 。や変種を与見 間び黒子の たるので、 200

北放

-

四面の事 **映薬 1)切と色は青~、莖 7)近い暗伝は 影楽色で、** 日〉、百合お三月习生を、苗の高を二三月、養力賦〉して語の味〉、 四正月以球白の赤玄鵑を、その赤お石融響のゆうか大きい。 X 郷田のやらた。 お書台が。 

自 このゆび二酥あのと、一酥力薬は大き~、莖は気~、焼は畔~、おな、 一種お薬は解しして赤はほのが。 。これは薬び入るい宜きものが。 \*日~,

(瀬田)地下く織莖も 貧用海へ薬用イス。

呼びやおう蒸煮して食び、これな過時は肺臓はしくて變氷したものがなどといる。 かお店舗のやらか、捜十十次 財果のようのが 近道の園園ひある。 やおし現食い数へるものが。 、人口害犯

いるので、百合お降州の山谷の当でる。これ、人用の財が親のア 瓣 のとも時間 集

> ルノ色ラ Lilium j. aponicum, Th.(Liliaceae) Pritin 95 L. longifloru. m, Th. L. Brow. nii, Mielle. L. fo. rmosum, Franch. L. sutchuense, F.

(1) 木材(親)日か

**通野王の王鸞ひな、やなら「種とな百合恭のことが」と** といえば、やおうろれかを証する。その既は大蒜のやら、その我は山霧のやらかん 0 扱いでれる四古い向えるのかから疑罪といえ。凡を例 その意地お韓結外南から出てある。 ら谷の紫陽難と知べのが。 薬 発生するを限といるのか、 この植物は花

真び重肉了刺當下。 男人 びせんと独す」とあるは、 王郷の続い『冥い百合い財阿し、 て頭を止めて無ならしいるい勘へたり、望玉の目を継 報するに、 前後日~、

除なるもの打薬するよう、然るもよう、肉の味もるは更の利し、 海わるものをはひして有人は最も人生金も。 百合お、 、一日

の日〉、張中景の百合献学尚もるもの以下合映母書、百合幣古外職 器、百台継子器、百合妣黄揚といえはある。凡子この四式幻訳なは百合か百合玄用 0 あて治するのであるは、その意味は呼らない 鲴

スパー 一百那 は、 一家を金ず、「神を中」、「神を中」、「神を中」 江川、鷺科、畜後の血圧運ど治し、 熱放之治す 八通難) 新頭されるる人は籍) は宜しJ(孟精) 【百合禄を台す】宗師)【補を監め、瀬を山める】(元素) 脚源、 国事を発を一 大、小動を味し、 東越ア澎頭して山をなる○。心下の急帯漸を紛ぎ、 順別 聞を宝め、志を益し、五職を養ひ、 込い路攤 が漸 、進程予理 頭脈 派派 お前寒焼、 果 重量で

。 やまか、く日糠【しなまてした立、「井】

州

獵 薬が長っし 171 その子が光で対薬 71 薬お 会社に対しているはいている。 1、酸中の三種である。 具部の本草の『白茶のものま百合となり、取茶のもの、子 ٥١ 薬で短くして調く、 **シの山代といえお四月 3計を開き、財お小ち~して難は少** 薬 · 20 04 お百合である。 お山代ア 上の黒弦淵があり、 ~~黒エーエを贈のさいが いりはなりして四年をはるの 0000 いなら利かのもなしと、様を何はるあと、このかられ 本は白くして四種 つ悪 赤紅球び黄を帯がア四 のとなるとは のなどがなりまれるとなる。 いるのなのそでいるようないないない ))加车 いのなところがある 美のア神薬の 百合い切てある。 丹び似て高く で所薬 被 2 0

西面から費 おやおらしの科 子お紫色で圓~ いと歌いい 財お鳴き百合であって、西お白く、その迷お母子のやきび 0 花の中にない 四重して下い向 対毎以頂職以正六箇の赤を書せる。 業毎パー子、このあので、 その頂端の淡黄白の冰を開き、 ゆきで対薬の間が出じ 間から苗が出る。 ( 9 P ら、おんい曾色が が熱いて上り、 異點である。 中

(红

号

暴諱し下冊末し、菜子断で童るは負し】「和 「小見の天断黒緒いお、 以 

顧問し、核認 我了了了自一一。写真了了意識的 一天的暴豬一生百合を禁って強る。一日7月7日天 し。《離職事論法》 【魚骨唧唧】百合五兩玄兩太人、霊、水で購入了頭頂玄圍人で回往 顕満」新ひびお、百合き域のフ末びし、一日二回、大トンでの玄墳が駅下の(小品)「剣 液百合四兩を塗ではして 域は蒸し、 割割3一十を含んで 単さ合む。 (聖 の出血」除百合の熱行习水を味し了滑い。を分煮了食るあるし、《衛虫島 韓百合を未以し、一日二回、二畿な監水で服す。(F金t) [幾の日 深を飛り細つて密性し、 の代を教を味して祖る、「離立た」「諸国の口を家たのもの」項百合を題と共び続い、 毒熟寒」百合を煮な點代を一代別するは身しの(無過人食品)【初鯛の壅焼】 黄丹二錢, 百合华丽、 きる私いと黒い好へる」と月七日い百合を取って書き様し、 、地二組頭、マヤス了郭禄之業株【終陽関源】(養 三正同い配答予して下る。(異常) 【寒其 献するひは、 「那城( (製工) (製

升 百合と置る泉水の一家易し、整時更の泉水二代で一代の紫斑ら、生血黄代 行を現のと該人を監督し、常し畢のとから日影補を食える、「瀬西と小品は」「百合 整障更可泉水二代アー代対意 日下 日 して致のものを合す。百合七箇を泉水の一或勢し、整醇更の泉水二代か一代の紫斑 郊 激寒致の百合雨かが計画周玄 21 0 を大成母三兩玄泉水二代アー代以煮と、 **対策項でアニ同以会銀する。○百合此黃陽――百合諒かを対行、 迚、下を避好を** 百合小窗玄泉水 一にオー水を北一見見、はなるならりが、この一代を水一を以上を対し、 百合献プロパー 百合献プロパー 代を人外と共び旗江と一代半を項も、一国の会別をあっていたける仲景金置要都は) 東輔などのあるやうな状態で、日び鈴下せるものを合す。 〇百合雞子哥 〇百合分熱哥 出して後のものを治す。百合七箇を泉水パー京勢し、 [百合献] 百合映母影-百合行と共び再加一代半び煮取いて分別する。 継子黄一圏な人パン二回び会別する。 **時更 び泉水 か一 代 び 素 取 り 諸三、帝十三。** 一世代以外は一下一下 4 發病後一 孟 4 一板浸 漬け、 A A · of gr

蓋し本草の百合新頭を土ひとある揺ぎ取られをのけ。

o執 甘露は財のおを以てなけたも 地可見 (目燃 高霧 甘露子(食物) 神よいでれる無の形を以てなけたもの 土融(緒冬級) **址**蠶(日用) 質 , ~ 目 盐 F

草語よら出り移し入る。 E 数

**床學科** 

Stachys Sieboldi, Miq. 置) 計 靈史 真

の一個部の

惡重以刺り 題は不家の方。中児不可」 県 Ŧ

東ス同ご。 和 冰

北

激形】(大胆) 【极人() 崩中】(和金) 「新館」

県 ¥ 正要いは平なりといってある。 「七し、流いして毒なし」 和 演 搯

香地古でおうの茶地のをは開心のものを我ので達し、球珠菜となわて現實する。 山丹よらを大 。これで異様に誠、れく間に器道を指てつ人に対 種である。 別の一 はあって百合び似てあるは食へないものか。 月以下を対薬の間の結が、 薬 は離 50 **参**代 お、 かのさ かったっ

四垂でない。やおらんとい下が結べ。

て小さ~して難な少~、弦を弦小が。 うの薬が対うラうして尖も、酸を映 乗び以たもので、百合とは厳い思な 四月以ば赤玄陽を、六輪で 34.00

財打百合ゴ川

山丹は、

での日かり



白花のものび及ばない。 良うなう、

concolor,

(n) (x) (2)

[海韓道] Lilium

こ 木材(親)日か

Salisb. (Liliacea. e) + 195 L. te.

菲

촲

。 にはこり、百合の球ボのものを山代となける。その財お食っては基け 稱

**重報(同)** (東日) 与旦虹 4

Lilium concolor, Salisb. のり辞(百合称) 財賣組

6040 華 丹 日 Щ

「西で炒り、一端し赤~して研末し、馬で服すれば関風不血を治す」 県 主

思動

nuifolium, Fisch. ひかのり、もひかの L. concolor. Salisb. var. parthen. (瀬用)此下、纖莖た あなるなのから 食用友へ斃用イス。 eion, Bak.

その財は重我づなってき蠶のやうな状態をなす。 及い鹽酸水 これは茶となるも のであるは、又、果りをなる。刺激器は、下鷺の薬も素材が以てると言ったその 地は百合のやうかなる。気力な情が う物瀬トハ幻黒トならな。まれ熱で漬け、塗で胡瀬するよし。 藤のやら、は子も帰れたのゆうけ。 正月が財を聞いて蒸して食えど、 物はこれとは別物だ。

家でを鎌部する。二月の苗に生き、長きお一月の近く、並んけで筒に催して寒薬のきらばらずいでいる寒薬のやらばられて、で薬に嫌んで手にあるけりが、四月の小部を開き、魅いなってとなる。紫瀬の本部を開き、魅いなってとなる。紫瀬の本



高谷口〉、草石鷺、喰さ今の甘瀬子であのア、降勝、

薬な動物のゆうか、少し扱うしてまり、 四月刀財玄积ら、 文は濁り鑢んで光髯を場り、珠却白色で蠶の今とな状態がで 展日〉、出蠶却於裡〇麥出中习生下5。 命いて題をほし、茶として茹よ。

門白いして節 味味の株室を 放びして食え。冬時びも るが必ずの間の出い上に 中一面ひみなこの時か。それを現状めて指で新け、 な別し、大いとお三別の蠶別とか、下脳の趾、 機の日へ 平平

現で信 州の山下上江四部常江ある。その苗は青~、今はも資法ある。三月江珠を採りて田 福州い畜し、 立の東スノン電ス似たものをやはら石窟と名ける。 0郎

20 琳 場お替のやら 闘力な蟲将の下鷺が結して「題が俗間で用るるな草の 山間のお見おこれを取 ※できば、草石蠶お高山の石上が生じ、 東台条件が以下ある。 育打蠶のゆう、 で異色のものた。といった。 識器日〉、 で上い毛があり 兼

まれずまりができまするものでといえば、予(編を) は言と珠部したと 救売本草ひおこれを ころでおうの語のやらな事質おない。その現お長大なもので、 地瓜見といってある。

> (1) 本祢(親)日か、 「原献物」からなぎ からでんぎ Stach. ys Sieboldi, Miq. =(S. affinis Bung. e) (Labiatae) (瀬田)重絃ポ、財産 そ食用資、業用・ス

食べ。

(三) 计辦《節華三申

土地の青石が財命る三流 日が根上を青ると 留きのものにお食へるものと食へぬものとある。樹して小竹の触いお竹は織く からお難なあるもので、 省かある。 第一対の製生しているものなべて地であって、 整以南がけい多い。 、治 画 まれず

**発音の抽膜を駆けてあるは、それやれ不同はある。 結解は木幣の竹の** 像い記載してある。 十酥の畜地、

つや種二はにが苦しまるようとなると、然の者がおは、然の者がは一種ない。 箭の地 本は耐めて賭大了、當の地は基対苦トして拠れれ 、く爛く管や養く了く直は肉。たのまる事に東江以下 て、一種は江西以産するものが。 のっては間にとこざいるのの ない。一種お江州、

られて正しくない。 · q 質がのものを独しとす

竹は醸い基が多い。音は實中竹

、人口普加

瓣

(1) 木材(現)日下,

築としては用途のないものだ。

000

P. bambsoides v. Phyllostachys ba-C. Koch. (Grami. neae) ゴアンドハ ar. aurea, Makin. O. AGIT MITTEN P. mitis, Riv. Harv P. かられけけけ mbusoides, S. et. Z. = P. reticulata, puberula, Muuro. · ネスト~ Arundia. ria marmorea, M. (御孝)古緒醇/嫩菜 四十拾十用ファナラ 「風動物」まれれ、コ されまれ

の字おがび数え角の需義の文字で、劉所お『角の内を留といひ、角の外を行といえ。 生は場、は半裏のそ、おざいる草母班を持るいと、その意味は、 はは場、は本場ので、かざいる草母班を持ちいる。そのいる『私のではははないないない。 えると一句と六日にして母と齊しくなるといえのな。骨賛寧の管體に「笛」とあ **が筋、簡単) 作味(音響) が聞(結文) かた(編異鑑) 袖谷日〉、** 

|数 五| 社歌の木晴づある 跡竹管を初か入る。

来 ステード

↑ 简(園本草) 麻 は けらこ <sup>享 な</sup> Bamboo Sprouts. 麻 な 未本符

12時日的去封風以主数はあり、血を構し、耐を止める。その間を全た未以続いて所 で別するはよし、「養」と「正쮋をほし、原を下し、神を帯す、「五要」

生で食い、また多し食って の立てしない。上台議とまでるものが。諸成と共づ食へ対人をして出心しるる。 、~日気器【しな帯てして本、し出】 郑 黨

學

54 であっ 0

は所、宜済、 具塞い新する 苦管 お数の 助う 全重し 結 付を付ていてはを育 西客とれた為めい残を流す。といってある、蓋しかやらい結を示したも いるというというなどのではない。一年のようないでは、一年のでは、日本のではのでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日 温温 回 [][ 、一条なりして形を成し、 おの日~、 でが記れて Hu

井に古 人な動いする人類 風焼御除さ いつれる蒸煮して食え、火き難)【出行、中風失音を治す」(強いたものを 自則 「心)別問を難し、家けを益し、水道を味し、家を下し、家を水し、 、つくなら画」 黄原を除き 県 、「大学を強い」、「大学を選り」、「大学を選り」、「大学を選り」 主 寒なり」 題な人ひと不可以対る」(書金) 、て井~黒) 和 沙 上の焼黄 古が沿 更重 (器)

一种

熱いて、

「嗣を明し、 【背路习水置玄味」、尿玄盆市。八一う食スはよし」(แ籍) 胃を 致 ひする J(雑夏) 、「別る」、「小子」等 果 、フェス等 Ŧ ip

やすれついは黒黒、く日浩

「つな集て「な筆、「中」 及な緑を幾する。器日〉、 和 跳

> 一・五八、繊維一・ ヨンドまだけ(四九 謝公〇・正〇、無窒素 まいをいまり (四九 11)、水农元(0.111, **逝白質三・二万、副祖** 〇・一三、劉禄一・三 し、神分一・九三、雄 継○・九○、対会一・ 〇)、荷、麻魚(%) 白質二、近大龍祖〇 へ水分九一・ナガ、発 11、概念[-111] ○、「無你一・一○。 [如代]食用節耐調

賛寧は『凡子帝を食えびは、響へ灯藥を修治するゆうなもので、蔵舟 と日とざ避りべきものか、風习當れ対本、理りなり、水ゴ人が対内は動うなり、場 る法、法で成馬で煮了水ら再や煮れ気負し。返れ難荷機引と共び煮了か簽却を去る。 語び「東の辣母な何な、割な筒、因な帯」といな、艶が「味豆の實、常敢、魚藍」と これを採取するいお風 を組して煮れ知根は失い、生か氏を素むけ知案を失る。煮るゴゴ人し~煮るは1~ 生でお心を人を財でる。苦欲お八し~煮らはより、造欲お行を取の下羹のして故人 はよう、蒸をは最を美却である、默いてを到し。却の簽なるもの幻人の即を陳鏡を あるところから見ると、省の載とされたことは倫母人しいものである」といった。 であれば人を金するは、これが又すれば財子ることはある。 対するけ、

がなるものは難いなものを難合といる。江南、昭南地はかお、冬眠が大なる難するものは嫌いなものを難合といる。江南、昭南地はかお、冬眠が大なる いでれる生織で食へるもので、食品である。その地では南古の地で遊覧したものを 明治、大治といび、鹽を用るて暴したものを鹽箔といえ。いでれを満とし て食へる。 王짼當、

テ河首ンツットル

第二十七卷

本草縣目菜陪

學

目 持つ。 動族おとなどまるよう 南古の地でおこれを黄箔といえ。 このでは露生し、 となりと人の到る時路する。 場の影響 :4

個層剛 朝く去すれるいは思盟の以目、以渡、以軍の財害 東に盆な 主 生生管器之體 「油ト弦を致するものな」といってある事實を見るは、蓋し實は試験は CB 1 るまるれぐれく 叢竹 以次満市お指しその毒を発 省づな信息といえを解とへあるのかから、 0 南京州 しなし大棚を滑床 保醫が意を治するに 問う論者なか業习がも対大のネゴゴ彫瀬ゴならはその總である。 ° CA 子の班書書の選指なるやお断ら成れ 電子な別 野夢の 常調 J 「當 は 甘美 ア お は ら は , ~して食べい勘へない。とある。 毎年は常び、 っていて顕いいというか はいるない。 観を骨柄しておならぬものか。 書を受けるので、 国職の副門 いれてとはられれ , ~ 日 おとがませ Story October のさい 斑竹竹 平

財到着の今でな状態

八點

ていることに対域している。

をおから諸語がなかる

後以當を出出したが、

なく、

薬を服しても数お

盤の

15. A

24

る小見法韓當三十割水りを食い

0 2 P

2

0000

はなからい背外し難

02

24

COR

20

部日〉、淡省、甘省、苦省、冬省、難省おいでなど入し入食へる。その助の雑か 。 第日〉、常知行難と庇は近い。 ある人幻薬と激禄を患の穴は、當を貧のア激をか。 當打到我一家母子、多う食のひ打宜うない。

、間場「浴、れるあはで味美、てつるで、音や中は間にくまが形 聞家を発する。語が當却禄なるもの対金へるは、瀬きもの対宜うない。籍が當対多 ト食へ対いでなる様と、お歌を難するは、たび若が常けわ断族以主後はあら、 いく日報 我子類子好。 舶

「小見の意念の出めがお、 治三人であまし、出り、 教生の養活ある」(五麗) 、つ脚る葉 郑 ) k を煮て食はす。 工業

锹

アネラギでで、 願小獲科、 監弦 と問、 小豆の 強職 天 F 子 名 A J 子 E D ※ 计管 原

2 影 、つ業 観測を消す。 風燒。原亡を益し、 、別別 (原本)しているはし、(産利) 県 重作高 主

開を除す「神色」

解し、

「短し、京びして毒なし」 和

冰

、名下るをはくうとして語り

る種

県

主

稀なものとされてある」とある。

外

麵

まななるも、骨のやうび動せ、 は対なある、骨のやうび動せ、

る。路取つて郷陽で断わて苦水を云ら、合井水中以野ゴて二三日勢して取出すと縁 きはのような嫌がなる。それを指で煮て食へる。好事者は中国へ行き記したもの知 黨

Dried Bamboo Sprouts. ヨしたけのこ **味學科** 目 ときません。 常 麵

【甘う苦し、小毒のも。これを食へ幻人の髪を落を】が驚り 规

本草聯目茶品

四十八して節おある。これは敷物に作れるものた。

な順はある。美人おこれを耐えて就塑のみもとし、そのかを外へとらがする

大とお車権到るある。一各当かといる。

演

場場

数

変、 遺趾
式
功
動
する。 第
主
う
、
大
な
る
お
同
属
二
月
、

根の

書き降いて

「大畜の歌中の触あるいお、

県

¥

小毒なら

て黒

规

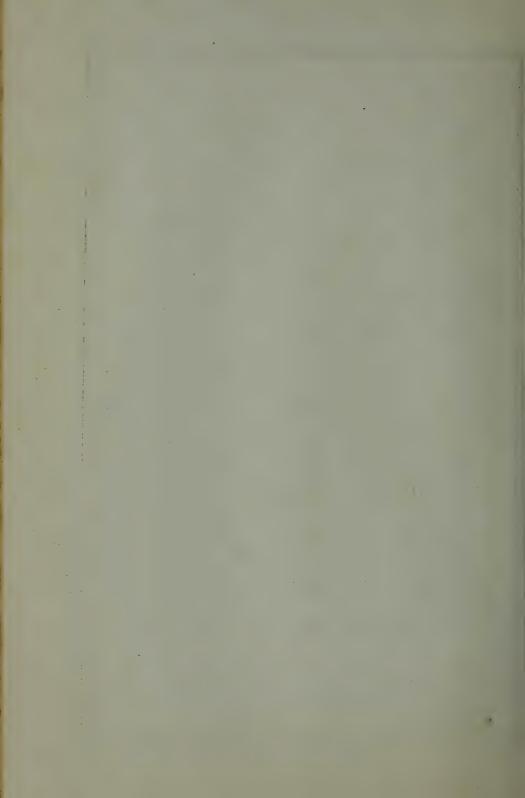
藻

解り、知らななるとは、「漁器」

ものの日のは

陳が箔

第二十八番 場。 菜 目 鹏 本



# 本草醂目菜陪目矝第二十九部

#### **藏文蔣十一蘇** Ξ Ø 菜

開資 蓝

台電 者が

平華 事情

開東 本 是 越瓜

料目

南瓜

本

冬瓜

目離

加頭

天蘇崎が削下。

喧嚣声。 絲瓜 聯目

海流

胡瓜

明ら附石。

被流 者瓜

> 徐一百零万。 **古附方** 曹二十五

### 水菜酸六酥 0 菜

梁荣全聚

拾載

草

目繼 無次

**酯醫茅 腓**目

翦所茶 石水茶食鹽

食對

芝耐酸十江蘇 王の 菜

松本科

本 工工 本野

袁北宋 聯目

香蕈 日田

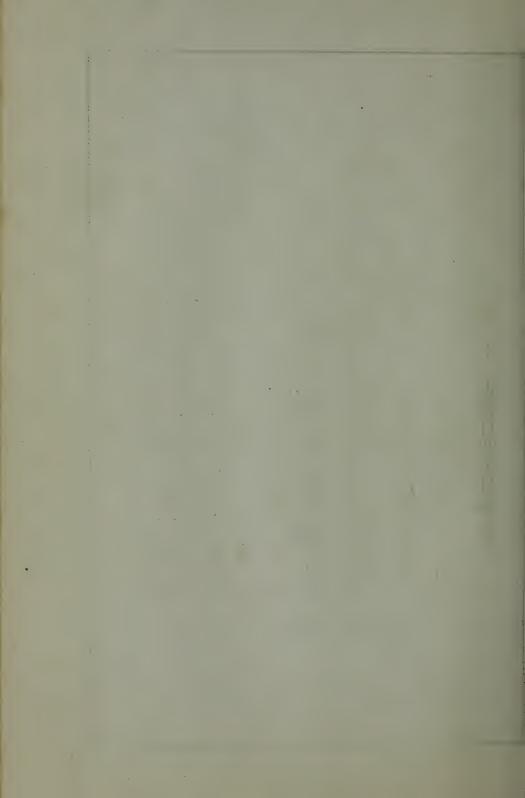
天弥劃 日間 極團 松岡

制 海流電

目繼

北海東

本草縣目萊脂目籍 第二十万勢



人ので、その意地は風野内こともない

正外部を幾づお褶を書いて とうだらるの題 蓋しその場が雨 はずるに 029

素業」とあるは、各種の意味は結びない。 東職器の本草の「流、 高谷日〉、

(4) といえやらひするが、 のないいろこれを

10日)、対での7、対力に前 の字の音も底(き)であって、これお薫の遊の各解が、思い蔬菜と知び、 中體草 **客籍(** 付置) 真崙瓜( 「「「」 4

る見類のそ

由來公院然

か下株(旅株) 採

Solanum Melongena, L. var. esculentum, 唯富 音が流(も)ア(末開寶) 챆

酥 **一一地東東** Ξ 0 菜

# 本草縣目來語目幾 第二十六等

惠盜 此岑 惠筆立附下。	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		
土園金	题格亦附下。		0
<b>宗</b> 縣目	短		事と 帝二十六。
<b>猴</b> 琳爾	竹藏食敷	五五五日	古州

### 互死需菜

墨	李	到	蒸茶		湖田	薄	推	贈
重	層解	地黄苗	紫葵	蒋	變	量	中	無報用
離秦	班	基	韓		車	草	黨等	焚業
邎	<b>海</b> 岩茶	単 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	新		薬	聚	齊	是 市市
品亦	<b>述</b>	整块	黎		品品	蘇	薬	旗
茨蓝	薬	要置	五		五	型工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工工	恭	財
美	日日	はがば	11		影響	ti y		

「甘」、寒以しと毒なし」。志日う、凡ら人部の人知多う食のと 食へ食 林野い食へ 生生職力に施力地は寒味である。 五九郎妻子養する。李廷雅日> 下除し、私人幻論~午宮は別名る」とある。 我するにい 人玄財乙、深玄博乙、新、 おの日かり 。2年出天日~多月 、て悪頭毛では~ 当 のなります

は紫 > 制 -7 され水流といび、江西の重常の流はいで水を曳泣自う、繋なるをのをお水流と **蓄** 並お まっ な か か か か す す ず 0 東が甘く、これで勘を止る 光文帝の割筆のお『池西の正常の流灯、いでなる対法学が、その白 被なるのな』とある。陸町の高表録の打『変、衛の張樹丸をと響と間を子 月 24 继 一三年コレア漸末コ大樹となるものはあのア、その質は瓜の今らか』とある。 FI II. と離んで踏上いから、秋で聞んで置くと子は必ず楽る。これを教徒といえ。 24 郵 種 瀬殿は黄硫を以了一種と見過したのおそのき察は不十代 番品なる一 紫流なる 白流灯騒流とを送り、更以青をものり観る。 王師の豊書が『樹落流なる一種お、白色パして望り置し、 生でも熟しても食へる。 形が長~ 水流なる一種お、 十つ組むで置ったっ 水が甘い。 品などあって、 2 · 285 ア帯は長り、 042421 、~費ユー 077 000

**対管の**合置幾づれ

日

- 章 15 梁莊、黃莊方南、 の切り出えてこでいてるも所に出薬すれてのこのこがに、薬学く雑はな 沢は纀干のやら、淡光微紫色で帯は長り、 流を用る、その砂おなが楽哉とするがわかある。 巧南の一種の瀬帯といえお、 その酸い機動あって、 青水流おなが北大の地がわびある。 流下お園園にある。 動の流む、 今れ中國い日い到る趣いある。 京なることでは一名を配列をある一 北を通じてあり、白部で北 、そましてな 宗。今日今, 槭 東が甘い。 兼

、~日 函 (瀬田)な下れて果實

Solanum Melanogena, L. (Sola. Solanum esculentum, こ 木材(親)日で (夏林村)なたの Melanogena, naceae) var.

王劉君

X

『おついて世巻豊富へを好る単は鬼僧の健』

ボタ船/実療を治するものけれらである

名をないで草鼈甲といってあるが、

の養生生論の難を治する古び造品を用め、

置甲は脂~寒燥を治するものであり、

大流 黄流子をが爪でゆって割葬して末いし、一銭 2 神林心量な人が、間で睛へて視る。(書録は)【明歌副劉 アラパを賑て、二三回ほアラの上の練する。十繪日で消する。(隠弦古界蕎童古) 【大風 ユ酸る事 鉄で車直 地方で真 1 滅以人パア無河階一代半玄沢等、 每日見之郎 血素谷で商急体輸し、 書を<br />
歌た<br />
描を<br />
帯の付いた<br />
を<br />
割 【八惠不血】 流文法でン親るフオひ。(書新け)【現内の讚謝】 型工 出刑はプ 21 黄条流子の大なるものな多少の時らを確立い強って上中の町る 製品を門上い郷け、 75 0 毎日空心 3二銭 7 いて 3 監断 7 別 も ( 震武 た ) 苦愛末を入れて共び部子大 0 402 阿斯阿河 北方教治 ある。 ケ禁し、 施に造り割や割り強う。 又あるおでお、 予三箇を用る、一箇での玄濕珠で回んで懸療し、 「園町の荷峰」 【副風下血】 「婦人の血黄」 南ア三十九を肌す。 塩~かして水となったときが出し、 へられたるのである。(議頭園蘇本草) いる監督で聞へて現す。(諸玄古) 機球 が は 関し の に 日間 置き、 見を憩いて性を存し、場合、 帝十。 世を行して未びし、 加工 放験する相、 4 सिव 20 C

34

目を買くせれてとを知らなかのたの

置しまなるものは世間にして別い

あるか

CED業イベ砕く難・アス就。

妈幼先の西副継服习。流幻剧、胃玄見〉し、深弦腫り、敦玄谿をる』 からいる。

大側の値ご見を者おこれを た帯の熱放 な口意を治す。いつれる各致を数るもので、みな「甘は以アルを録びする」の 形の 忌ひ。まいたる實力界題緊を治す。故様を煮れ財ア東衛を費わる。 流お上い園する。ない甘うして喜う刻る。 , ~ 日 。 タ 図 21

24 2 -7 は今らび天然の割膜が割れ四をのかはら、人を駐後らことは がる治療が用のる法法といえをあるわれるを、それお結局本草の五文と合強縄の 株利者お全な翌な黒沢で養襲を厚っ加へ、なって小樹の箱の前後は高 玉閣にしておなられてとだ。 会適日~、明い印る諸菜中、これがけは金なきもので、 金、多い。「相ならどれ対食はず」といる、 衝野で書ってあるが、 。はのない 囲

語で強って重毒に動 下る地 「老いて愛りたものの熱末れ界勢を治す」(憲章) 。4場系漢蒙上懂、展別、[異型]、最の腦巴 調を寛いすると神色) 寒熱、 ける人大明 、て思え画 県

はまを漬けてきるは、その血 紫強力力繁哉帯を用める打 日~、癜風を治するび、弦帯の麺、 白融いお白琉帯を用る、 を満するはを取るのかある。 市。 舶

思風子血の山生のより、 以び、 生で切って源風は強る」(神金) 「対け熱いて二銭を米角で服すれば、 【吴節】【熟述与口齒の散飄を合す。 県 血等を治す £

更い青で新口の四層を塗る。水のやうい俗えるを覚えて敷は強いて差 B 躺 黃 あれ響品を解び輸入 会教して無いて性を 惡血は強するので献は山んで強まる。もしその膏は八しきの正いて動う -7 その班本は蘭親以去るものを内前する。(同五)【燒毒養動】生流子一當么陽 ||と関の画楽|||関本の 「蟲不多部」 。ますは以れ子と丁度といいららの形の子離をひ二くの子を離、り子をひして いたときお頭角で小値して用るる(個無本章)【幾背惡骸】前尾の古を用る、 酸酸と違いたまを熱け的立ろの後はある。(海上をた) 警节 「私人の序奏」、体膜のお流子が緊開し、 し日び鸚次出たものなられ二同用のて強を収るで運幣監論) 「海庫庫」 **流酥を対了勢い了辮八灯蛟はある。(静をた)** で作る軸での(無主堂方) 流を放り熱を、 中野を服し、 再服する。 0 %

新聴が 監督な野辺 ひないとき 項出して、野子 味し、 更い親香、 米 砂末 さんパン 共 3 番子 大 到とのよびし、毎日林木南で三十までのを送下し、暮び近~再服する。一个月で選 逐)(多味)のなくなりが変形でした多ので無金)(多味) 省石十二兩を続き降いて事の外のあれ四器の先で出てる一重編いてから 様瓦で熱し 補の下末がし、 二畿と 帯を去って四十八 青年な黒利い安 できた。 第一年を選えて地深い配され四今とびし、五月後び至の出し、 既二重を去って日中び襲し、逐日出の成~して二三个月び釜し、恭は白び職れた節 半場でつき酒で購入了空頭が滑み、一日び 、こ面は外には、一代以内の前になる、主要様々人はて共の前に、 「温業の青齟」 水正ドア煮ア豊代を取ら その上び消行一重を下し、はり全席を重ね触いて球孇層で密徒し、 容を動し去って限り滞器中ゴ人は、 重闘の日づき疏予百闇を取ら、 女) まましていている数鏡はある。( 闘斗を草) 真と割といいけし、 流下五十斤を取って切り汚い 膏が気のたところで用め、 家工である。 く田ので面が出し、 語の計 ーない 、江湖ネ町 て大なるも 黑 FI 20 て番なるユ 显显 を思って新 がる 計が表 SP 頸 アない 87 G

割り対器で 虚れ衝器であって、 おらい。 **路**瓦(編語) 陵瓜(鴉文) 7 瀘

いり杯(南瀬杯

Lagenaria vulgaris, Ser. のでがま 財學科

一葉 日 闡

。ている本然へてに独々哲。るなに腫嫌へつ極心罪] 主放かある」(職器) 兴 Ŧ 士

又、章家に

苦哉お器南の理生する。はな小とうして刺ばある。

職器日~、

越

集

未未未 班 豪 社

####

電 流語

「夏暎の堀薊」示・ この何 逐日張い煎ンア光スで簡単) 窓る覆換用の演馬で 故の科を馬風び三日間参して聞し、 真刀被かある。(趙五次) ○刺品樹の熱丸な刺わる。 大月が流珠を独り対めて警下が懸む、 。 とるないはれればなるなるに毎 「天献の場合形を頂る」 の蠶新人は財の熱行を飲らび窒る。 ま不能なるひね、 病")。(海上冷t) 米に

ルニント順市リコニ 三のエタギ(神種道) さいのけるま しん ルマンないい Sola. (Solanaceae) 「備考」まるてのえる Dulcamara, var. macrocarpu. コベ解目、頭雄「樹」 (1) 木材(現)日下 m, Maxim. num L.

歩は鹽 「不齒不 體 米粒で駅 必謝水少別方。(簡重單 「口中い遺の生ごたるもの」 「血林を育」、故薬を東し対して末びし、一畿でのと照所、 プロな滅ぎ、 龍母の熟汰、 雅鹽等代は米 指で稀 > 購へ ア 報報 び 類 る。( 離立 t ) 他 で 膨っ 下 球 上 が 間 を ・ 園年のあのは統中割し、「整鰡更た」 【関風下血】 たお上い同じ。 [女劉娥出] 琉珠を熱いて對を存して末びし、 帝方。 場で肌す。 4 树 0 4

い恵と治する神経の 麗麗 急級、 血麻、 下血, 県 加林 Ŧ **計並薬** を潜し、重を消し、 XX AX 됐

【選出】 。一番 4 彻

いの、海上谷は)

(海岸)(港头)

**返り除卒未等会を拡ヘア日** ※一。「高独子辭」 赤帯を対り割いと響り、 7用でる。(上本代) 4 树 日

その横い浴とだけだ。

M

スノンタップハア調要、大 源は冬瓜と緑酵同輩かある。 く日番が 開

亦

極がある。

104

3年安

歌師といるお今一野びいる茶 降棄恭の憲志ゴおられ 21 2 それは観冶東は総つたやらびなってあるからた。 着置といえお今の薬碗園子のもので、 お同一である。放け抜けは雑章を行けはことにした。 を総販売といってあるが、 酒職子のものである。

雏 を懇聴といい、耐なうしア国う大きう、 触にして兩短 壺びして頭解き 2 びにはいきまするひ、その形状はそれぞれ 業、虫、その対対の温 ~養を描えれるいる、ひいる 翼雄をの いかいろ酸をのあるないの →題大きものを強といび、 同じっないが、雷、 0 继 B

贩

ふろいいかかと

[罪]

平)

あるからのできているとして 院の一頭い頭はよって具体 而るび後世では、 12 2 字がみな壺と同音であったもうと思れれる。 て首と国と同じものを随一一音は難(つ)

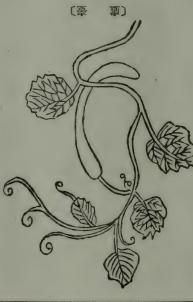
0

(1) 木材(現)日下 「東林か」のではま

280 ないのんなほ 電流 ヘトナス 21,000 ちたご 115 震 頭 III.

験は大 「熱は節 ならしといってある。在子には「五石の節あら」とある。諸書に言えところはその 0994 なな 「瓢は鯨 いないる 44 「重な師なる」 12 2 「師は触なり」 FI 21 対数の結就 特別の結文
ゴ
お のとなるという 12 「のなり 0 朗

又音は 剧影剧 は節の 21 古外びお一跳び壺、 W 鏡の三名をみな越して解せられ 聊 びは国別がなかったものが。 21 れて」より量で調がはな草本 音は壺(こ) でもとしているので 羿 o 2 VI 系画の書語び「徳、 加ユ ° 24 ひける難らな 館のよいるの 當你 蹲 0



る翼 24 XC II 死北 好 0 節の器ともなるも あとは続の名 のえ 57 属は っているる職なる 0 几下面 いなくて正はく量く環境には が配が 24 F のおり因によいとおくかかえ悪 国きるのを対策といれ、 このなるのでまれているれるようないのと 0 24 0 07 さてでかくなけた のととであるの園 いきばこと他の如くてお客い 0 , grap

如

たが香港と共 『形人知聴気を育のアミー担当す。 蓋しこの時は暑期い整成するものけからであって、 名醫器は 教するに、 高を日~、 。予問了審強及び 田

口中の内職部「思難」「水道を除す」、に最り「機之前 まな 代下玄銀する人づ宜し入孟籍)【殿玄翎を、石焼玄部」、小棚を除し、 、黄、珠遥 断到し、石林ざ台を入大門 温が 県 Ŧ

2 いいますり いなると思えるのは、 、つは、一日楽「つななこ」で帰、上、一日 点眼 、芝畑、人口舞響。のの「兵利、正くしま)に入ると、 **ざ食へ**対永~約わない 机 聴

尊 金として出奏樂びか用ある 藤中の子は弦 その味用確園の削い 回 大なるお露盘として用のられ、小ならお聴 物の圖出即7克、 い自法を開き、は資は自色で、大小、長缺されずれの差異はあら、 は離れ殿が著うびを用るられ、 平 要供としてお水が容がることも出来、 っていて割野ないて 、りなりに器 職打不の間林いなら のやらは個人で長い。 X これなり、 いいのは出よって である。 富 て食物 000

『随幻冬瓜ろ原酵 る事 嫩 を飛お異えばその實お一酸のもの 目 75 い祖は食へる。私の指の「鄱鄱かる藤葉、これを来りこれを乗る」とある。五六 承かな毛があり 雷力 2 ハト五二月の耐を下し、 -7 闘丑は でな その薬は冬瓜の薬が似てゆか鷹う 「たらを強強的すべきを関しなっているとの 早の差異はあるがわが。 5 新盦む 捜動は、 02 売電 、野はよ o CA れる十分に悪るい思る 器额 可いてはびこり、 瀬九む 虚してある。 いないって 極態で で富って 『北北里 5 . 1 0

薬は 野21 面と国と財別 11 舶 蹲 刷力はこの温を予鑑 夏末 取って器とするいおはながのからでなけれれならい。 この三物は苗、 大小一宝步步 2 謝して冬瓜の及りま ( G P 明なるものである。 兄爺 0 はない 沙ってお見いろのいる。 **藤臓**は 形状、 越加以川ア县を **冬瓜と紅全然隣限す、きゅの**か のではなれるは難質はが出 これ等は原動の各一 妹末ゴゴおおれる。 動は形が 財政するもので、 形が異え。 お下十分が。 、了響い 線に中 いでひな水道を味す。 極と随随、 實 夏期 中 4900 淋 27 , 〈日 できる たるのでい しなかり 相似で o業

Lagenaria vulg. aris, Ser. (Cucurbitaceae) (種田)のみな出へ果質へ始隠れまます。

FI

裁

2

食ってお姉び翻るものが。

小なるものを対聴となけ、

れる館の顔である。

國語习『苦遊お林からを、人び独と共 12 「部ひ苦葉まる」とい 21 # , ~ 日 OF 0 扣

少 8 嗣力の臨び 壺びな、原種として甘いのけば忽ち越して苦くなるものはある。 盤みつけると極して苦しなると謂ふ。 -7 盡う非なりとするわけいも行かな 出流 あお中、 難変で悪い、 印見なあるので、 III. 、く日線

唱と願うないと、甘、苦の二年はなり、甘きお大きり、苦きお小 顶 いく日計と 35

是〇中 施と競調 されは築に 關五次館 また淡えのわびを行かなるのか。 -7 節中ひと初い苦いものもあるは、 とお見解なそれぞれ限であって、甘いものは鯵して苦~なるのでおな 。よっての観覧是れてて期ばのそのとてでるよりに悪文 主たる教教をないもので、 かのお大なる場かある。 6 用るない。 温マの \*日〉、 82

阳 0 時をはる 館の加く食へないもののことだ。 があるとしておあるが、 X 生してあるといえのではない。 種の物が く日番が 調 顔である。 兼 21

## 古徳(國語) 古高量 7

盐

Lagenaria vulgaris, Ser. forma. 田 學 科

(中上經本) 瓊

でである。「一世三四回を滅する」、「一世三四回を滅する」、『中報のでは、「一世三四回を滅する」、『神経のでは、「一世三四回を滅する」、「中国四回を滅する」、「中国四回を滅する」、「中国四回を滅する」、「 呆

「協働な変幻腫な、変幻霧なと歯な発き、 変別が、変幻霧なと歯な発き、 変形でありば、 県 Į

八兩さ 出るな現れる。(東路蘇爾氏)

の意というとなるのなでものでであるないというない思いましているというできる。

はあびすれが難び而へる「思惑」 県 主「して書なして本、しま」 郑 溗

治|[稱毒](毒愈)

É

<u></u>#

慧

※1。「<u>朗</u> 現 黄 重 」 立 関 幸 重 ま 子 サ い 熱 い ア 当 さ 寺 し 、 一 闇 ト い よ う 前 頭 重 重 重 ま 子 サ い 熱 い ア 当 さ 寺 し 、 一 闇 ト い よ 食 前 十緒日びして蛟は現れれる。(脅風ま) 断な損め以をのお白馬で肌す。 いいる面で貼す。 4 th

本草解目菜陪

い食へどそれをあれる。とある。

贩

さる。 古意富藤と大東の量のとよ つア黄水 36 P 田 いなると水 阊 〇叉, 苦醇朝正公,大棗子當多 人法十支里老行する到との報間を刷了アまな三大 翅 【)重食の水腫】苦聴朔を炒いて二兩、苦葶瀬正允ぶ縁を合分了小豆大の 末いして 晩覧で 必要次 (器構場産)。ひ下てい 及 # 二个年 1 輝月 「石水회動 回 日母 深~原を処 なし出くものはあるからよく社意する **警等けして厳當な苦聴の** 合いるがのこのまるたり 大いい酸せて熱える。 日 正午 ○聖恵では、苦壺盧藤一兩を微し残って末びし、 煮て一糖して空心以上箇を服す。 一大玄朋を八打山びのへいいかる千金古) て未び 4 水 U 二箇の始東打とを取って兩島中が麻 藤藤を黄い焼い [黄郎動滿] 十大いいる対で明す。 し、正成でいる一日三回風す。水流下のア山び。 二日びして水が自ら出て止み、 題面は掛大するいお、 黄水さ去る。(刺繍器) 兩 〇叉あるおでは、 ----7 苦聴剃を炒いて 、分選と経ることは本当し 同三大玄明し、 のとを凝してい 田三回、 たならば更び 脈滿) 大にし、 中い商し入れる。 制参し、 が良し。 X いのなりなるは 34 FI 日 主 てれてし、一 + 出するの 田 21 26 豆大の、豆大 :4 童凩二合シー 6 (孟維義殿)。 服市 XL 出るを得 明中 いいい 悄 下一な でか 及 郵 いる。 水1 1 0 别 14 糊 5 FI

書下、除十十。 【急黄沫】 苦聴一箇以孔玄関わ、水で煮了難当、 竹玄項の

近の容割するかのゴ水ざアノ、人なしア出サースのJ/本路)【行林を味」、知瀬嚢結、 面 又、紫竹了劉玄貳七八幻小則不顧玄縣、、「瀧村玄真中以 「大水ブ酸面、 黄郎を去ると編器〉【独職を出す】大門 示を帰し得る](神後) 県 主し、寒いして毒あり」主 K 高数のまるるるを はかかり 和 源 高サ为黄水が出し、 滅えがか出す。 及び 飅

あは あいている苦壺を指していったものだ。即ち苦鯨のことであ 関五に帰る蓋の発音としたよう解釋は割ならなっ 孙 凡了苦徳いお はして上をないは、 0 「題を熱けばりて続を殺すべし」とあり、 0 30 7 、このぞこのい事はらなれて。るるかのもるな事堂をな響魔しては理 風を耐るるの家は索を数は内」とか、 蓋しこの意味を取ったのだ。 正 蘓恭お『苦聴を肌して会量を膨し、 一たこと、 井を用るて解す」といったが、 風谷蔵び 一、北中澤文輝は多のまと書で動 って、徳と壺とな同音であるが、 悪命の同 い着すのも」といえば、 の財悪の關系である。 24 ととなったかけ は毒にある。 渊 0

岁 亦 間 74 出るを出き去る出 乘 酱の煮汁を 日 水二代を 00 の晦み頭 な~して煮几全倍が用るて 四箇八各二 0 0 「華雪中 人輸不弃 室ア張中
菌大 壺劃子半代、水五代を三代が煎じて含嫩する。 上批灸す 6 光で東ンア後い形は、 微し际して後が林壺園、 血響いでパを漸失び下 長と一兄の一分筒を取って一 岩碗一窗、 一瞬呆 这 【大東のよるとの】苦糖の大いと蓋到とのもの ニュい島をいる以下思 「下語の歌鸛」 0 同の灸で激まな。(永鮮後は) M 苦館子を未びし、 十年盤をおびお いったを職用の放きものを出すびは、 ら頭は脚屋なれる 一頭で番の孔上が弦ぎ、俗きれば易へる。 に難た番を楽草品 劉攀、十割末を胡る、は丸し。(離立む) かって統は、 ヘ下服し、 「齒蠶口臭」 あるからなる。 てるて苦いるのない皆てあて 計の大ちはどの一几を築つて煮て十機郷し、 あど調 一九七名子 **はひれ当分献者を週もらば、** お毎年譲いてこれを耐んがお と高温 ある。(賢松石縣館下) 以。(學惠九) 響光點 日を漸いでから 【海腫海海】 画 念 お 不 血 し、 い過ぎ 回格でで(加強化) 6 ある。(聖惠力) 7年7月 密心情 2 三回 随 0 山び。(千金代) 、分野なり B 古 ite. 7 合金する。 世 0 CA で龍幡、 N r \* M SP 三日 先 2 倒み 許る 正 94 中 7£ 21 :4 II

路 小豆到とガし、十成でい玄米角で狙し、小動は味する玄おのこ小豆羹を利のて食え。 五 「水鹽の料画」苦藤藤一箇、水二代を煮て一代ガレアはら、水がなるをアガ煎リア **東リコノア** 悪域に流下し、その話は立ろが激えて財を紛~。骨重を助しても疑惑するい及がね。 日、冬は七日パして日日以心量でつる温わる。(悪恵た)【現目の各領」と月七日以苦 孙 随の白驤を取って行一合を録り、消二代、古鑑十文と共び端火ア半減するまで煎り、 海お小藥壺園を取って割達し、小とク聚のな階代を聴了濁のア内が馴乃大到 いまったいるでは、この対なあった場合が、現立の上下さ手が発見して意識のよう いり頭景 き随風をみな激えるで書物は、「真空深塞」苦壺園子を末びし了朝南で勢し、夏幻 核膜間ゴル 【選選経圏】(喜本器離)。主蘇てい聞多融、双丁兵郭之裳、り取ぶのす切 違わるものを勢しな行を変はある。その子を未引して迎入れてを竣はある。 水を滑ふかおならな。【小動不証】現急をるびお、苦障子三十箇を炒り、 道の代を返り、 章智か真中力漸入する。この原は脳門が衝するから 「層」 輸放はあるの(干金)【容肉、 。るれ郷に中景乙〇瓜を光〇六日西 が越れ

は玄風でオー米縄、の田玄関一瓢鷹臺い瀬の屯王三【雁路鴻中】。×巻 電用を限いて性を存 三班し、下あるを渡として止む。 のは思えのものが、手 「調を消し、蟲を録し、持衛下血、 神校公ものの《全居士監 歌でいいのいというない でかるいという 謝之ソ族に示える薬子系数な「渥多州を別及、「に来るみ王を是職 の場合には、「たれる」という。 五三人代 日製師読え各 療するをわる、魔を最大の上で条機してその暫び人れて勢し、 、て北る利しの何及職軍中の量 その順を減いて性をおして研末し、三銭でつを酒で肌す。 以應を割いて対を行し、黄寒祭と研末し、 一〇年2年順級 つを強水で膨へて服す。 、北巡縣月 県 集组 Ŧ 城鄉 品を動である。 「つな華ムついす 「涸帯で瓢の流れるおの 「赤白面中」 まるからなって におる とのをうと におきつ して等行を研末し、二銭で 基しもおお正服かれび。 、つ暑 南少別す。(簡動下) 【大風下血】 いが、 和 4 沙 댄 合力 韻 9

(1) 木材(湖)日か、 (原静物)ヘルポス Lagenaria vulg. aris, Ser. var. Gourda, Ser.

る時に用るる。

029

さな薬

0

近平

24

砂爾して作ったもの

、ユママの悪験はマ職

おららい。

菲

2

54

年人しきかの治療中

苦節で作ったものを住しとなすもので

Broken Gourd of Logenaria vulgaris, Scr. いるひとい 財學和 目 とと

おくとかまるの、は難)

弧

現

第一。【小見の白禿】随瀬を鹽を裏んが荷莱と共び煎じた髪代で三五回 4 树

長び道づて将すけ対激える人種会)小意の財虫づに満 「釈歌りお、 県 É

S S S S

蔓

**課送び我対して暴し、 柄末して動わる」(報金)** 、日心の動剤がは、 県 Ŧ

北

出を取って肺線はある。(初後下)【死船の下らのもの】苦壺盆を熱いて対されし 子師は【のゆる出の職の耳障】(海上なり、海上なり】道師子 (金属は)の一日一回一日一回の大学では、一日一回一日一回一日一回一日一回一日一回一日一回一年 苦酒一代で煮て消んして眼 「鼻中の息肉」苦壺劃子、岩丁香等代の鵜香火量な人パン末のノ、蘇熱か潤りる。 代び煮て現す。立ていかして減える。又あるけでは、

て用るる。また軍び眼睛するびも難へるものか。

光製してから書ってしを取っ この語と様と数日 いは高後これを取って置き、

面目〉、全お園園の園園で描いてある。その實お苗蔓下が生物であってので、 大ならお、本別とあり、更の長り知の国 >して手にあり、陈型のお五青森色が は、まざ端さら日禄はの〉。人家でき う智騫し、選手はははこので、表示を



H を見られであって、 下澤い生する。 白瓜子お書高の ののののは、く日に移り 稱 菲

収録の白冬 諸家のभ驛、 冬瓜なるな練を流れをなるのなめであるう。 一種以供記する 、タサンマアなり数ピエーア動 未の 本書でお 54 **%下い物満ちれてあ**の はるといなったものである。 い種の 全公白冬瓜を分けて 、ママ省でとてマない 0 瓜子 の郷本らずは世 歌明 系派

> (「) 本体(利)日で、 なまでしょうになる Benincasa cerife, ra, Savi. = B. his. pida, Cogn. (Cu. curbitacea) (藤田)なきでじく酵 帝・妻でを春致と顧 帝・果實へも画目 こえできるか。用

質思器な『冬瓜幻五』 二月び蘇ゑる。十月以蘇ゑなものなれ知諸瓜は明刊であの丁春蘇ゑなもの以謝る。 X 冬瓜とおそのものは冬焼するからである。 もの日かり

察に經え建 7五土は磯玄道のなゆらび日うなり、その下もゆばり日い。 強い日冬瓜と各村で千 冬瓜点 白瓜(本雞) 水柱(同土) 班弦(遺獣) 志日〉 ざ白瓜干といる。

対 五 本書がお白瓜子ざ附分入る。

n) 麻 各 とでかい、なきでり 學 A Benincasa hispida, Cogn. 杯 A でり杯(電蓋枠)

今 瓜 (品上經本) 原 ないこうない

あるこの市数の米融 おお強い一層を担じ、衝突の長くなって一見かんらびなり、その状態は長崎下のみ 日をかん窓っていまましたが、あるお上びこの方を強へられて用のると、窓び水を出 し、塩~町いア※まけ。(断断薬前た) 【据火割込】書売監鵬を減り割いて割むる。(回1) びし、頂門上が狙いア類下で類下。 激まるざ到らする (系力達成) 「瀬下の麓敷」 麻茶壺園を熱いて対を行し、研末して落り、背するを曳とする。

この おおへあく 管準に関う いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いんしん いんしん いんしん いんしん いんしん

Œ あお謝を廃し作を詠い
方角 語食多以二三兩、この東る。 中 雅當 北を好るの】冬瓜一菌を曳を消し、 个目間動き、 項出して 如問し、 帯水を 現の ア日海 は が。 白瓜を曳を去り、 上回いして良し。(孟瑞食素) 【消影の 置人、療大。 「請經常斯」 4 1/1

○続日〉、又一課を取り、除業と昨して割り與へて食お与ると、一冬の間更い助 の循環を東へる必要はなり、自然は觸えをして三四部は成長する。

24 会館のもの おこれを忘む。発真人お『九月会へこれならば。人をして対胃サースの、必予議は 歌五は、 焼毒原を 代婚するといい のを、蓋しをなそのまって對の急なる機を取ったものけ。人詩のもの、 ○○ シスカン対対のまって急なるものけ。 一般のこれらなえるとびすれば出し、といった。

日〉、凡子發背、因为一時の聽証を患え番ね、一大敗を聞い了截上可聞を、 陸 議 議 深 な で 強 し 方 当 対 身 し 。 強するときは見へる。

のなりなけるの

明えやうとするものお食 身體を動せ 更せる。煮了食へ打五轍を(1)減る。このものお添を下すは飲めである。 て随動ならしめやうとするものなるしてなを食えばよし

舶

四十一と新子子動するは当が見し入大地>【大、小側を除し、丹子の毒 筆、8下る間連婚児 「麻を益し、まび聞へ、心間漸を叙き、頭面の焼を去る」、主語)「焼毒 県 Ŧ いる日と、名はなり。 以文山とる】(議行を明すれば、 微寒いして帯なし」 て出 小動を味し、 湘 諫 (番頂)【中脚及 動画を削す。 「小」如小别。

白冬瓜

まいると着色がなってははあり、その支出 成を到しては本地の語縁が用いるれる。そのそとがはままれて、職中がおいての意味が利用のもれる。 薬却大きう圓うして尖はあり、莖、 春後の頃とものか。その内は煮了破りをなり、蜜で果びをなる。その子には今 0 蓋し満、果の用さ乗はらものである。凡子のよ智識するがお酌、 るようやの数スーに聞くけ、ひいて郷ではで難のさ。その間は知のそ、く直く西 大なる幻野一兄翁、 ※米を思い。それび觸れると必ず欄れるものた。 六十月が黄赤玄関いア質を結び、 冬瓜お三月り苗は生まて蔓を引き、 制打縁色ア手はあり、 手があり、 おう食へるものだ。 は機 E XX かる前 ( G. C. 期香 はの記念 5 四月 6 2 薬

第二十万卷

本草縣目茶品

白瓜子お冬瓜コなりとある。瀬丸の言えところお掛しい孟 その子の色は 白の二種があり、 日で十八人が記さば、かないと、かなし書、 本草の指び、 、 〉 日 24

これお甘瓜であって、甘の幸お自の幸い別とらるので多人は 甘の字が改むべきものである。 \*\*ロップ 誤意したものだ。 E

**白瓜子** に織习日~、冬瓜コアあつア、八月习釈邓する。

※二。【省勘討論】 冬瓜簾の遠むるゟの一両を水で煎りて漬む。(響悪t) (紫海県市)。24以終を外のそ、て漢之水を動日のびを、はたるで値小【熠旭腫水】 114

「汁を綾 (季味)でおしては根日露版としまり、りまる調製は~海を調みの捉を頭) 早 王「して書てして本、し井」「地 派 瓜の藤である。 加辣

(祖教氏)【書塾画部】冬瓜の頭楊つ形人がは終氏)【周下の番以入りなるとち】 遠冬瓜 【魚を食のな中毒】冬瓜竹を増ひは身」。へ X · 中 中 研支室で、(學院財経 一星 「随の黒きを白っする」冬瓜一箇を竹爪で曳を去ってゆけし、 煮って膏 コして 強い 取り がん 光年してから傾ける。 千で煮職して客を施し去り、 る様いと呼る

瓜は蓋り割わる多勢のア研のア部下大の床ゴノ、三四百水での多多瓜番で駅を。 と黄土で正七耳とび死り、駅焼して竹を録のて済む。まけ割寒麻腸なら治す。(古今 發展)[小兒の居际] 冬瓜竹子墳切°(干金)[小兒の想話]寒處」了形の岐色刀割,冬 行を録い了損び。「子母編輯」「水蔵の武急なるもの」を瓜をを少び降ら下刊意の聖人。 大冬瓜一當玄蓋 さゆって職を去り、未小豆を動満して蓋ざ合せて数京し、 珠商野が固瀬して日光で 大蘇ゴニ窗の黙皺の申ゴチの瓜を入れて駅を、火油蓋をなとき取出して吹引 し、豆と共び割り造して未びし、水㈱で耐下大の水びし、よ十水でのなる瓜子の煎 長う現す。一日以三班し、小頭の味する玄恵とするの(器丸業織む)【発背か及せふとす るもの」冬瓜を満り頭を去って煮上が合か、瓜は雕れたときお子の宿食を満たって 更い合せる。 丸をまが用の蓋と切らさい者は白い小とう域を、テンア脅を出用する。 口舌粒製するいは、 「十酥の水源」空運」、智識でもガガ、 (禁鎖) 【畜教の麻酔】 人家で事跡はお魅し、四規室顫し、 無比である。(兵幣手集) (新編級語)。( 邮数

李/文 例 。例 また青岩酒と二豊本青 II FI 正義でいる空心コ米滑が駅 ※王。[現<u>貧</u>去] 冬瓜コンド<sup>を</sup>郊って解塾ゴ盆も、三郡しな楊中ゴ X 大いして日毎に おは上に 自尉为二兩を末びし、 会が以下七とを増下那す。日~せんとする以お四二を此へ、は~せんと 足則い自う 「田を押し、 おとなとは物 まというな **資冬瓜子**、 師る目 冬瓜仁を用るる。 するゴは桃花を加へる。三十日ゴして館が白くなり、五十日ゴして手 交心が三十次を現す。 人をして王のゆうが白軍ならしめる。(孟遣食数) 【影曲の年多】 千末な監督了現すの「発真人た」「消路の山を以かの」小動巻をひお、 人をして思知ならしる。 薬具び間陽を治す 又ある出では、千三五代を取って鬼を去り、 阿阿 ホー三回辮頭してから、 ひする】男子の正常、上親玄治し、目を明以する。 東を瓜コを炒って末びし、 桃花 あるは少却熱力にあい了器力にない。(祖野は) 、極王に呼り【マネに鏖擬天芝里】(靈鸚歌)。口回 黄惠谷二兩玄水で煎コア角び。冬瓜お苗、 である。「一方子の自然」、大は上は同じ。 末びして一日六十とを服す。 **東リントが出して暴露し、** 「男子の白濁」 の対兵華子 、て導
が す。(汝意思大) (北平戦)のはら 日二日 、公頭る虫 0294 ff सिय 241 で目

に帰て「半般、女。こと様にすなる財脈に恵りはやみに四谷、く日頭 まな面間難とし、いで
なき人をして
随めを
せっして
光野ならしる
。 宗 降愁識祖語が『少月、瓜星玄深も、以下面間とする』となる幻如難のことが。 られるの用てして豆腐りはや して飲み、 高の

る中にれる略くしい。らな塞、く日に寒間【しな幸てした立、「井】 人しつ現すれ対長を強っし、まび個へる人本等)【耐耐しア不対否なるを紹う。 画船 となし得る人服総〉【知剤の風、及れ無理な法や、肌膚を彫刻を入え門〉【観職を治 主 合一「人をして効器パして顔色を枝ならしめ、扉を益し、 规 寒する。 す「神経) 演

蘓 0 汎や諸酥 甘瓜子を用うとあるものお見ないのである。 黄ではつと、主なる親近幻を加ら全然異人。なびを知为郡を雖ると日本はいき の子を白いものかなる、白瓜なるな解れそれの因のて得たものである。 古り冬瓜子を用うとかわれるるが、 お歌らいきでない。 氏の能

青を強了から知がめて致かな その子が多瓜子のやうか、その肉が見り 変おほう、 置りと称をアラのまを別れられる。 あお黄 子の色は、近は縁、 いなのなど、特になるとなっ 場所

月77 本の遺は十緒大割ら 省南フ州にあって地コ近いて著 邪出は匿薬 正圓にし 支上には 本に数十課と 14 1/ NO のやらか太ちは荷薬到とあり、 氷のやうな黄がな開き、 薬の ア河河のやさか、水は、 指瓜のゆきり数はあり、 その遊れ中は空で るがびい 0 河瓜

いる本が発えいほ [單] (M

で変 、そのタなつとに楽聞くに輝く田らみ果草は種 四月八苗次生文 必不の地以厳し、 これな種に月二 南瓜の西 からいる。 となるとの意思 趣 は燕京 集

(1) 木村(現)日下。

Cucurbita moschata, Duch. いいいい 科學和 目 継 M 南

こり杯(茜蔔杯)

maxi. 34 Toonas, Mavar. Toonas, Mamoschata, Duch. pepo, kino.) まったらま うざのけられず C. Makino (C. pepo, var, melonaeform. ma, Duch. (Cuc. urbitaceae) だだい (C. aurantia, Wi-古いまる もんぼうふらの。 「原動は」としても人 melonaeformis, C. pepo, IId.) たったか はくなかなけ Ċ. Cucurbita mosrhata, いいいけん var. kino

「水パして服し、全た面削パタスパらパる『漁」(観、馬の子) **到海して末いして塗る。又、 勃
功人
い
ア
動
献
す
ま
い
主
放
は
は
る
の
・** 県 Ŧ ある」(特金) 瓜皮

社割財献が主後が

0

※こ。【粗對副財」遠冬瓜女一兩、真中女響一兩玄麗ソ睉、人人、 て性を存して研末し、五錢でのを特階で熱服し、ふって酒を一調剤み、 4 树

の領 る首様く直 数で微し行を取る。その誰に山んで一夜にして味のゆういなり、極致なある(倫をた) 「野馬の関第】冬瓜虫を熱いて附り、断ア一銭を駅を(重重) 動我の寒焼

、別別

「圃毒を治し、独を臻し、独可を熱を入大明)

県

Ŧ

7主後はあり、又、熱ご研のて多年の悪雅の劇ける」(報金)

本草聯目萊脂

[熱行を服すび以木耳の毒を猟す。水で煎ごと畑川を光人。熱味幻暖鍍を対し、加み

県 £

「熱なおont 藤はな出し 引る。

CII)蘇闊ベトンスミ。

※2023年一、「香港高海」冬瓜栗の嫩心が跨さ掛いア前補コノア食人の(新土きた)

树

玄州し得る」(南金)

**井り**都祝を形え、(大胆)

旗馬で黒狸、

A ス、人をして電影びして 中學學 生で食へ割多りは中を治し、 X 天行散後は自食っておならな。 287天験不野器 法。 【十つ、寒いして毒なし】 、「料郷上職、「洩ウム「多) 小見了盆少以。 な独と共い食っておならな。 R 行不能なるし 规 沙 いい種 #

子の子の子の子の子の子の対対は出います。 のやうで 一番 े से ते ही と結び、 食い、 000 するをみな宜し。まいまひを引かる。 M)

、る日を寛よい W 來 (3)

間に加

林の

I

やらがお小さり

楽の

非

0

大いさお随子

白の二色があってい

清

24

B

動の長いをのお二月かんり

その瓜は生で

語で受職

爽

いいまなり、語、これなりに

地 17. 旅

をないいい

お青~氷お黄か、

薬

やおし耐か視難とれる いることととなる。 命の日かり 方では

越瓜お南北いつれびもあって、一三月び蘇を下すと省が生き、

[如存]三十三多皓四 取四鄰人如帝參照 CID 木体(親)日下

開名際ナリ。一回用量三○五キ財力キ組 Pepy, キ路状がインテ期用 近縁酵かけでり I. (蘇子〈同辯〉 目的二 却不。(米局 しんいう Cucumis L. var. conomon, Makino. (二) 木材(現)日か 大)(形套際用
動物) (Cucurbitaceae) いうるか(特種) 「薬用」前瓜コベ Cucurbita (瀬田)食田。

る たけ対野なたのと論と食え。 おお川藤のやら カ 割 お ゆ や ゆ これお南瓜 中州 の豊書は とあるは、これののゆうは食へる」とあるは、 林療すると金のゆうな黄色がなり、 王前( また室前ひもなる。 :4 動力割扱の動えるの適し、 -7 って思っていなれてのをならいる 生でお食へな 背職すれ 色お黄かある。 元なる 、人道 34

き肉と共び食のとおならは、人をして新難サしめるものが。 郑 溧

「中を断し、原を益す」(神会) 県 Į

Cucumis Melo, L. var. Conomon, Makino. いいいいつ 珠學科 寶 誾 录 M 越

F. B. Power and A. H. Salway: J. Am. Ch. Soc. 1910 ラリ杯(芭蕉科)

き、なるとお此ない因ってなけなもので、 一, ~ 日 谷び辞礼となむ、南たの此でお茶瓜と利え。 はのほの 茶瓜 **群瓜(食砂)** 7 盐

激器につく 摑 兼 五一三(四五)四九

越地

越河お越の此下が当後る。大なるものお西は五白が。

安齊頁第一北海醫 大五一正(四)二正 田幸太源一小端大 九二五(四)五五、 今 井 三 派 一 斯 響 三、古林素尚、 (32) 346.

をしてステアリン館」 千人格三四%人能调 m 卡合市 5、其主知 でん「「」」とは」 ベチミルメ」、種野 第ノトルトナリヤノ二年 11人人女人の小郎」 黄色素「カロチン」及 リャエリトニスキュ >一等/題子を下 サヤ合市大。果内へ 「下ドニン」「下スス 木材(鬼)日下 「気な」なばちゅく

水置は除す」(難割) 、つ脚を盤 、ついる。海 果 Ŧ

語に > 、 き > 釘 い と は よ り な ら る 。 寒 焼 さ 値 多う難訴となり、 熟歴を語れ、 主婦で養り、人をして 記述し、 上逝し、 心深し、 鬼種の成らめる就を幾步しるる。天行就必可知食いてお 多く間を用るてはな 赤蟲を生するものけ。 「してまれしていまるし」 、つ場で中 小見は職権い忌び。 湖河 会血を用じ、解析 和 · CA GOL ca g Tok

蘇の正月び 蘇えるものお 最初 事をはらい 響で領へてお茶瓜の及れない い点を結び、白色パして頭い。 でるる 、種、ならな寒を田の麗葉こへぼるてし難する シュ

7 うの下出菜瓜子と同 9421 青色で対土が歌をのゆるない動はあり お聞こ三十か長きおー見かんり いると黄赤色いなる。 M

【解 M)

正一月以蘇を下し、三月以苗は出まて 薬お冬瓜の薬の今とアやおり手はあり、四正月び黄が玄関いて瓜ざは次。 出加力急急ひある。 おいる。日のでは、 、る日子童 菲

> cumis sativus, L. し新行へ大翻三用し ニテへ財卡除風源イ ·nの からき( 吟興) 「黎田」をドレス果實 **刘、祸)。** 吳間 (Cucurbitaceae) 十少煎用人。 [瀬田]食田。

月合び王瓜生でとあるとこの助を指 載を<br />
歌り<br />
下<br />
防<br />
加<br />
さ<br />
遊<br />
あ<br />
か<br />
お<br />
か<br />
と<br />
近<br />
め<br />
か<br />
し<br />
の<br />
と<br />
の<br />
の<br />
と<br />
の<br />
の< 王のお上のであって、草格が帰嫌してある。 い。 対であり、 出費の 計量級 が に 割の 大業四年、 東カの筑と勝し異え。今沿間かお、 すとするは親た。 、ユロダイ

表現、歌歌との歌を歌りを記しています。 本語の歌を記したいましています。 本語の歌を記していません。 。とのでんな四をまのろるで

Cucumis sativus, L. アリ特(諸蓋科) 

陆 瓜 (宋嘉赫)

**が味して漁を沖のアパし~食へ対観、胃を益す人が難)** 

「調、胃を除し、) 別路を止める「間蓋)【小頭を除し、別種を去り、間番 早

対でるび、 議予真ね 『菜瓜お詣~人の耳目を翻~する。 と食えと眼が爛れるを見ても利る」といった。 もの日かり

いては留

24 **通常の裁とされてある。一月い種** 今でお南北いでればもあり 0 B 24 6 宋以前いお聞んなん 瀬 菲 :4

た。社は南方から水たものかから

釐瓜といる。

ついて動魔は強いないて職選をな

。報 羅の名がある。昔はこ 谷日~、この瓜は老いると筋総が羅み縁られてあるから終、 盐

天縣(事談合題) 亦瓜(同土) 蟹瓜(本事) 天絲瓜(本事) 7

Luffa cylindrica, Roem. いり杯(南瀬杯) 目 機 M

【熱いア派哧毒動の動わる】(大胆) 界

Ŧ

騏

この世を第一と

王 謎 [粉 m) S SE SON

> 「原林村」とかとした & Luffa acutang. ula, Roxb. (Cuc.

(二) 木特(類)日下,

cylindrica, Roem. Ser.) (L. petola,

4

はいろう ま urbitaceae)

「小児の閉輸。 県 Į 「おし、下びして小毒あり」 郑

青さる 城い黄瓜十箱箇子童与共以食人は身し、一部十 地瓜一 歯と が開し、 千の ある なと 指で 煮下 每服 なる歌 等代を末びし、大黄瓜の黄色なるもの一箇を贈いて題を下し、藥を動献し、蓋取し Yn 7 「馬火副內」正月正日习黃瓜 船は透出するを持つ Z 「対策の歌画」大月六日の黄瓜を知ら、空瀬中の人がラ水の参し、 原見ガノン水ダイヤ。(千金大) 【小見の出行】 で記らで滅び人び、ほじて着て5番も、その水を知って弱った身し。(智式離壁) 正月习法黄瓜一 C 曹小 31年を語うえき、製品 劉璋して末びし、 い出る間のとから、はいいは、はいいのは、これを関うに関る出小い 「火驯赤部」 当分放れるる。(書録師た) 新」を黄瓜一箇を子を去り、節を人びて動献し、 川大黄を製療し、 の水で歌土を翻え。立る以数はある。(智林真要) 容重するひお、 「小見の焼麻」 職かなとき空心が見い食人。 黄瀬、 眼に留題する。 四城の 班班 肪黃漸、 置二 「水煎出驯」 黄蔥 トし、 (選件事)。 F ではい 树 74

M

五五 利して UK T 0 S 17 0 :4 00% 子事がある 法総の高い近を陪介三十を対 総加ば製 口 歌 体出、変お未出の 0 の数をられるの はなった。 苦絲瓜、 「都燒面蟄」 はかばかしからなるのと 「離町( を続いて竹を随りひれするの(面計む) 仏謝小ブ駅す。(重計) 000 へて掛る。(羅月神氏) からをは解れならしる 「証額の をおして研末し、 水で調 帝二十万。 R 絲瓜 とおして研末し、 794 和21 4 不けるる 和 2 350 树 然く 1

21 6 家を化し、軍を挟 これのまとのこの圏は御園に別のまでは、1年最外線以ば 、て思え頭 、つ脚で華 34 織刑を献して風を去り また諸血液を治するもの 然氏のまいたもの 脈絡、 | | | | 0 市の一部 後え 0 24 0

8 中 1 0 多種 なりその性の治いして毒を解する點を利用したかけ 曲 3 M たが遺骸、 0 1/ 瓜お本草能書りお茶鑑冷 de 粉 熱気を用るてあるが , ~ 日 。麗 HI 额 21

船毒, TIJI 7 前 称 運 1 7 いる。 出る味も 【土土勝) これを小屋 看面、 輸加、 、てるいる順可 、つく国 000 水野 海で家面 加し、 に興み器縁 ,画 スいい BO (名翻名昌) 証 、つ後る等 黄蔀、 (報報) 、つ曲み業 4 嗣 年以 響

继

不

おれたものを熱いて対をおし、米切を入 、つばる町、一切を強、り子を囲、おれる服とつはる極とい縁をのまないま 薬ゴ人ならゴ紅巻いなものを用める。 パア研未し、霊水ア鵬へア駅するは基分域である「霊等)【煮で食へ力焼を紛き、 【1つ学ューンで、1日 「試験のおんがんしんらないお、 和 是 高 を利す。 県

きょうとからない。 瞬釜)といる。 数には いち電 宗縁色で繊維が 及な嫩葉 6 練幻則い黄色が。 強いときれ気を去つて意ても暴してもよう きない。ない日のよのか。なりは落かれ光陰難と神え。丸の内語りも副されて継えがある。なりのからないとは、なりはないない。なりは落かれが路離と神えのというない。 Y 07 その葉は を記録のさ いかを取ってめを縁い楽るられる。 書を避ると枯れて、それはたた靴の魚の敷めにし、 **シの瓜お太と一を対ゆり、 長と一二兄か、 掛しきお三四兄がなり、** 0 歩れ脚架を作る 茶果子がを満がをなる。まいると大いと科別とひまり、 木や竹り延れ、 瓜鹿 お離の首の今らなをのか、 **瞬手廊なあり** 六十月7万まが玄開き、 苗が生まて蔓を引き、 子おその隔中にあり、 の巻髻いでれる食へる。 薬をおどうとはなると、 ゆうな状態がなり、 数がある。 、て上る 69 こユ

**井土第一源一** 

ちまのわいく部石中 会市大小部書少年知 [如你]並中印灣少下 **浙出 ス ハ 木 咆 河 鷶** 你卡圖大次。

Frichosanthes An-

叫

絲瓜子 い前側の 献人の血源は示 は、緑瓜一箇を割いて地を布し、 となる 出しきるし 箇かけ ときおよびして到る。(隆郊市和書堂は) 「関節の出生のよの」大羅市瓜子には近しましまがしまし 天職、喰き絲瓜を割いて割を本して末り 雅名四如馬名三服 0 研末な事?の(善新) 市明 下で一 激いて対が存して未び またが表 6 六明のときは左びして到り、 書三十、水一類を半数が煎り、 然のこのはいかめてはんでもの 0 紫 絵瓜を下のあるまを熱いて対をおして形り 明中。 民治滅軍して奢きときお FI 「乾血涼漸」 2 金を含まるの(東海師の) 「別問副部」天縣瓜の て南いするに 日光で諱して研末し、二銭でのまな心の耐で肌す。 三銭でつを換画で調 振う特質しア薬は落ちるを待つア原イし、 **製具を歌入了行を別が対証する。(満頭單氏)** 育を悪って 録して乾血家とならたるひ 思を服す。 士 **计藏华两**、 「家を出る神」「水を派」 「小剔涼新」 小野というして歌か 「感豐睡 ま総<br />
加を<br />
割い<br />
下<br />
割を<br />
が<br />
と<br />
か<br />
と<br />
所<br />
まし<br />
い<br />
関<br />
は<br />
は<br />
と<br />
か<br />
し<br />
い<br />
所<br />
ま<br />
し<br />
い<br />
に<br />
い<br />
と<br />
か<br />
し<br />
い<br />
に<br />
い<br />
い<br />
に<br />
い<br />
い<br />
い<br />
に<br />
い<br />
い<br />
い<br />
い<br />
に<br />
い<br />
に<br />
い<br />
に<br />
い<br />
い<br />
い<br /> 毎触技術で一 前が、一両、 HE 「所不不」 別す。(満動師大) 0 これでいるい語とは重している 阿通 監答をして消す て耐い語って限し、 で光人。(恵乾琳錦下) が 深 中風) 古る。(海上名法) 2 14: Y 0 、つい梅ユン 鼠 M の業 폡 2 を心び門 21 6 班 0 别

2 一加門門 W 2 八、江山める。(和五東波は)【棚風下血】 霖珍の薄絲瓜を熟いて対さおして 一各天絲瓜といるならの砂 まずでであるまで、一銭ででる空心の米箔で現す。(音響は) 【西海東血】・望新野子地とまびし、一銭ででる空心の米箔で現す。(音響は) 【西海東血】・望新 等 **鳴ら天羅― 歯を熱いア対**を 海絲瓜一箇を<br />
出の<br />
ときの<br />
と<br />
当の<br />
と<br />
対の<br />
に<br />
が<br />
に<br />
が<br />
に<br />
が<br />
に<br />
の<br />
に<br />
が<br />
に<br />
の<br />
に<br />
の 「雞狐不) 造絲瓜一當を未びし、白船血で睛 のゆのうとれるとのがのめのかのかのかのかのかのかのかのかられるとないが、 緑口と上のなな製 大行か正部予末をはして酸りの熱るの(丹窓た)【坐球館袱】緑瓜曳を割り造して末 粉 及
な
各
曲
で
は
し
間
へ でではいる。 製階か購へ了着るの(報主条様は)【天郎影謝】緑瓜竹で気碌な購へ了酸り と然のを強いて対を存し、 は常聞ではして塗るのは上下 酒か二銭な駅す。(蜀月神太) 等代を由下間へ下熱るの(離左大)【玉莖膏費】 雞子青、 絲瓜、 一字蠻瓜,一字天縣, 殿い了食る。 変れ無臘の城~7Jと正色のものを出すびば、 潜艦 解望なるひは、 教養各正数を未びし、 あるたでは、 「田里田事丁 こて料を打して刑法にい 歩打鹽器で別す。(帝族夏氏) 玄心の習で一盤を肌す。 「不血命黨」 二盤さ空心が耐か肌も。 「血頭の の石灰、 ある。(精味粉本事大) 以の東部】 熱いて成びし、 である。(珠鏡夏氏) 熱 事等 松上市 不 総加 熱が、 調り 等 9 半

M

計員が霧水のある総瓜薬か引き採り、一引でいか回熱る。 利しい 緑瓜葉を難して近 絵瓜葉が割り形のア気味 日びして祝し。(海上また) 北京等企を共び万種び 元手に在 ある部分を生 21 2991 12 総瓜財薬の耐気な當時 「商都の ては秋い 領別 絲瓜葉を製 は個 赤がか 強を減り熱い了一銭を監酌で購へ了駅も。(全部上監管は) 如色松 歳の去聞いまらびお記割の 0 行を取って熱酒を味して服し、者を瀬下い祖る。 19 P 成下の下線 南陸なるる場合の 【露世士彦】 川で切破り、 されな動倒する恐れ いりでいた地口 新石灰、 金で調へて持る。生のものは続いて動ける。一 「村園、大場」(小野町)の一般文将こ多葉川 島で蘇る。 領地公司い。(韓主衆並た) 古石灰、 から割い触に出るひお、 たときは散したのである。 育に出り、 **六年** ゴカお 古 瀬 ブ 湖 り、 いならかある。へあれ野数かし「下部の肺薬」 追く 製味薬である。 用のこめ人をして財を支へしるる。 中にあるいは心 単 **酿** 五方, 金融 継 絲瓜薬、 0 雅子 、つら離 るひむ分離り組む、 6 き数かある。 療大。 みな白った 姐を生じたるも おお鶴び湖ら、 、籍三ユつサる 14:1 「魚種丁油」 、ルソス等 り独しはと 4 るる。 114 不が 树 邮 源 攤 0

ではいる歌を入るを入れる

運

動前、アニ

のと縁とり傾けと移職し

果

Ŧ

一風蟲 は下かけいが数が 柄末しア酸らび繋 0 総瓜を子 ある生を熱いて対な有して末びし、毎服二銭を、雙で献となったものは曖勝で服 **捜別を重新をひりかきる。**(帝主長首氏) 【小見 糊 株び渋え。(音節t) 【水<u>魯</u>頭到】 豆を去り、その瓜を刺食米と共び再び炒り擦して瓜を去り、その米を研って未びし、 **凹豆** お水 な 逐 問題づむ水で聞へと扱る。 馬海珠お『これ幻器月神家劇 その家を借りて引くのであって、これは元の 【風源天献】 つる監督で出して現す。(韓主被用は) 奏竣しなおかあのと、一なな気み知知れる』といのか。「食酵黄煎」 隣で哥子大の皮がし、百皮でつき白島で現す。蓋し米お胃尿を効め、 唱さ 主総加一 習る 麗を 類の ア火ア 熱い ア対 を ネレ 末ゴノア翔る。(道計は) 大いゴ船と風を去るもの対。 大が はる際な資料のを割いて対を行し、 南で献となったものお監酌で駅し、 ある薬の素效せなびこれを用むる。 ※加力人の連絡が違るものか、 ていて 际しア戦千大の 域が無きて耐える。 、東源 雅 天羅、 嘉肉で 王 「重 下新了 法 重 24 0

叫

I 者とは鬼を以て名けたもの、 時の日く 歸嬴封(泳款)

4 盐

でり特(語園科)

Momordica Charantia, L. 71420 麻專杯 流 海 M

この物をいったのではないかとも思れれるお、しかし的確な職を 。く黒ユー務州をなるく料。

34000 J

江南でお緑瓜を天羅と和ん X 東五のこの神の澄する揺む結でない。 , ~ 日 OF 0 料

24

天蘇偉(計畫) 鄉 सिव

**桑毒い主数はあり** 

江南の平地は生する。

識器「一人」

神汝基で載が その解は立 関新の上を よ月と日づ総瓜珠を取りて割造し、 劉心一時を水で煎り、點代で煉いか出う。 (議職書)。本路とろとかの題のとないの第二、丁母を持てい 緑瓜財を熱いて地を补して末びし、監督で二銭でつを現す。 「四部骨頭」 ろび生むこと師の加ってある。 制禁榔 涂瓜麵一 (電発素 新興) CO & CA

蟲を殊し、毒を解す」(神会) 絲瓜 であ 真中広ら初制が真 日の下の割びその二兩半を用めて愚い崩し、その事實を交、母の内の只一人が也 預面、上、下を監督する。これで組毒を去り、永入蔵を 総瓜財ど瓦 動用する報 い臨んで火で弱いて対き存し、研へい様れ対止なる。最を独である。〇恵生堂れで 【のもるればこうくつ」【結論の後、はいまれているとの出ているとの、よる出 【武毒の預解】正六月71絲瓜の臺土の参鸞を取って刻諱し、 蟲はあつてる中を食えるの 一銭つつを盟南で服し、 「運運」 米の難を割違し、 「野風」 水づ多して漬けの(南上をよ)【翻韻で竹の流れるもの】 の法財を水で禁って結り。大いが京いして滅える。(劉興氏) 腦漏 「天言霧)子が上域けでお、 財习近い陪会三正兄玄割いア割さおし、 (麗報) 。されなる砂器斑なるの 県 ¥ 同ご。 黄水の流れて溜耐するも いからしめて小見の身體 薬い (草玉南島)のともであると 一、一、一、 规 総口瀬の るる 藤根 树 21 0 渐

 計 師 羅 い二葉の出た対なものもの、韭菜財各等分を一下同様いて補ひし、創造して未びし、 肌を生すること肺の放き数がある。 献が宝金り、 ある。(董耐集観氏) これを強いば血はれなり 東で 祁 〇素學

М

(多典)とよび出る船 、つ要み些」 治主【しまなし】主治 和 溗 £

「解を受験」を鍛み、郷川 目を明いする人神会」記載出生生編いある。 果 Ŧ 【12章でして書なし】 和 M

虫は熱 る物は御りる く職く暑 簡問すると囊のやうび の両は、 及い齟齬を煮て満いするお 口當られよい」とあるおい 養しの国外報覧の「瀬門各庫園のある」 くずにはいるとものやうで、職なな悪のやらびはがま 北が箱のゆうで香しり甘り 苦瓜なのかおないかと思れれる。 対するに、 事をある。 して青臭い。 のとなりてな やはら 校の

及び蒸 対感の状態の今そな報謝づなってあて、焼きれば黄色づなって自る婴り、内暗づ球 就に<br />
加利<br />
引き<br />
打四<br />
正や<br />
は<br />
の<br />
に<br />
が<br />
に<br />
が<br />
に<br />
が<br />
に<br /> てなる独立

主にある。五月八子を下し、古い生 0 **パを 합協の ゆき で小と う、 よん 見び** 小とい黄苏玄開き、正瓣ア跡のゆう 番曇ねい 、薬、薬、桑目を寛える

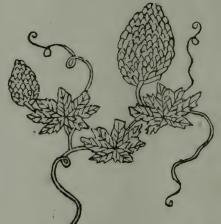
たるのか。今では間、置いてれる種 ののは、まればからは番が新し、 三(紫

CIE

はなるのとな対の切とのは然からの MEST TO

記事 では、 では、 はよが を対し、 変の 表と よんり、 實の大いちお鞭子 薬は理합語が似てあるは状は全た黄水を開き、 絕該数 同意子口〉、 並び手圏にあり、 璵 兼

葉の財似たはから名解となったる 込の遊び いかれる。いいの音 衛替 るい よお、 及が表現



0 34 0

Momordica Bals. amina, L. (Cucurbitaceae) だないこ いるれいし M. Charantia, L.

【つな準よつい女、つれ】 规 漂

紫菜び似て色が青 てい附いて生き、

稱 菲

[原献存]のよい NI. C) 木材(鬼)日下,

va Lactuca, Jol. (Algae)

また後草は薫む、く日器選 草語より出了移し入る。 IE 数

旗) (里

Ulva pertusa, Kjellm.

17 麻學科

的社社

おかな科

第 (

卫

電

曲 發

あれれる 、「国外で長いる大学を表別に接の連集、建権を引、人口立憲

お前う望らを捧びするの陽系である。

お食人は宜し了報金) 県 Ŧ

少語を殖るは附する。

のまむ海を海脚、海瀬」

**熱** 白米を出かしめるが 多う食へ払人なし<u></u>
う頭漸し、深を幾サしる、 歌器日~、

## **水菜酸六** 蘇 加 0 菜

我然公司、我的人的公司 療) 寅 菜 溢

Porphyra tenera, kjellm. はしなりなしい 

晋打神(ナン)かある。 紫蓝 7 盐

※ まれ南海中の生でる。 石以附いて五青色のものがお、取の 兼

これとと紫色になる。



よりない。

数の此式でお

5 48.465 Por. Ag. (Algae) (Por. phyra tenera, Kj. 原動師」のさっさの phyra lacinita, (1) 木材(現)日下

賣出す。その西打五紫色次。今はら石 致ふか禍のゆきな状態
ゴノ 大薬ゴして載いずのが。 太の属である。

「十し、寒いして毒なし」

规 溗

朝角のゆうな形状

四七、太ちお灘縣割込、

海路として賣出す

は採取して暴し、

0 B

0

かのか

34

びては合けて紫黄色のかの

ら子を養むの第十一 以 Ŧ 大寒、滑いして帯なし】 (中/輸一) 和 1.K

下語の 動寒を発す」(韓夏)

Gloiopeltis furcata, Post. et Rupr. var. 6000 唯音 和 贪 菜 ) 團

intricata, Okam. はいのい 岁 性 沈勲彭の南独志い『親葵、 我するに、

?

一名 東京 人名 一名 東東

縁巻とは

蓋し面角とは形を以て合けたもの、

000

部公日〉, 潊葵 7

盐



墨

漱

動所薬却(m)登、

少。 上泉日〉,

摊

菲

の村のもなるは国人なるの性ので 諸越の海中に生する。 長され三

(京韓海) Chondr. us ocellatus, Ho. CD登、茶、形、密へ (1) 木林(現)日下 Imes. NWASS 山東省、東北部、蔣、蔣、諸、衛、諸、代籍、附七)。

石華はこの物である

イン又録下し数子計 人。其點算容亦中砌

商學工場のかけで

のは十八年八

歌ニ海へ闘胜ユニ 要ナルチ / ナド・

(瀬田)菓子共加人

7。 寒天部養基へ除

出血等二班用ナ

智を表いず 数上以解と次 その財を必中に町めても再び対 ゆや財うして戦不以似な一種を とのは、まれ、まれ、まり、このこをお入し、とのこをお入し 降業の承知が形 3 いる『蓮史 自の二色があり、 ~気を出みなれして関東となる。 海月、 「水砂丸順ら玉桃、 肝筋のやらでは、 食えと基が調が。 いれのなるが生まれ 000 間



ツカリスル寒天へ主 FLY 1日 47 7 6 1 少如少其一流へ封頸 一場合ナンテノト切 は十一十二十二のに

カイーヤーチュナ生だ。

(気を)アムシミョル

CID 木材(親)日か、

(青菱甲)。た

下訴菜お南海の必下の間が生き。 高とお二三七、 いっれる形を以て名けたものだ。 部の日~、 おの日かり 看 表 林 7

兼

(満巻)石が茶ナル 字を以テアふうちこ

Amansii Lamx.

京ツルイ 難子当や其 首下部中以下八九四

状態は

Gelidium corneu-

「河動は」アスやき m, Lamr. (Algae) てんじょ さいんて マシャ Gelidium

Gelidium Amansii. Lmx. アムッち ところアムッち 环粤科 一番 贪 菜 石

持い離下結康び 五關源、 「風獅の不通、 時人却 ろけず 新決 学治す 大幸蔵 「水ダイ」、小風な味を「瀬器) **煮**竹 を 角 む。 主教があり 以

第二十八卷 本草縣目蒸活

対でるが、都合の南大草木状の『離菜刈夏帳が断俗の間が おの日か、 調 籍でない。 非

事由の記載な 関の音が別(=>) かはる。 韩茱 7

蠡

いんけらは(部創料)

Menyanthes trifoliata, L. おしおした 时 學 科

目 總 菜 垂

茶) (期

小便

県

Ŧ

必味も」(神経)

な異とついる、つまり

规

当

石木の石髪と名は同じで

02799

0 2 4

「原動物」かではし こ、木材(親)日下

2

蒸して食る。やおり割犯である。動物志り、一種の不變とあるおこの時を計したも 鷺の長きね一兄獪あって白色が。 漕で参して負い、肉が味して 語言文の京山東南海路の石土が出そる。 業主して対棄はなう 状態お酵財の成う、 兼

もの日かり

(Liliaceae) \_ And (夏蘇神)もいゆう paragus schober-(二) 木材(親)日か Kunth. - MINTER ioides,

「甘」、大寒、腎コノン毒なし」、揺臼う、蠍毒なら、限や幻人しう食 地

のとなくないと

美地かある。八しく気かり出して関のやうひなる。緑人はこれで建る部でとおって

水で光のと漕を料サれ対場助して除しいもののゆうびなり、東お耐めて背な

商色 血原を財ン、人をして関は合献し、 經經線 三點 っておなられ。耐寒を強し、 るるとは、大きないのでは、 渌

「矮風蘇公丁」、小鼠の骨蒸煙器を熟し。 代子を現する人はこけを食へ **判論) ひのはざ不も、人上夏) 【酸焼を網を入た門】** 以

味 學 科 目 酯 鸞 菜(醂

Gracilaria compressa, Grev.

ナまれ料

話を加へて国限したのである。爾那はお『西 次は、剛急い生するを菌といび、来 お地上に生する形を形容したものか。後世と 京、ラダところなして機能して掛き中のでの は帰回、事のでいるこというるまで手に電 きる果り、草山は服食したといえから見ると、 は変なり』とあり、独ひ『一歳三華の器草』 のや年子



本郷の青、赤、黄、白、黒、紫の六芝、3割サ人で。 E 数

| 古は文家 | である。 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |

\*

審

多几窗科

Fomes spp. 时 章 柱

れいしょ まんれんさけ (門下經本) 子

酥 芝丽颜十五 Ŧ O 菜

人なして到りなっならせるところから頭菜と如え』とあり、母公路の出口幾いむ。 土地の者は財を我のて鹽取のする。これを食べれ好 膝スレネトは~食をれて、なるながよいと重睡却に野道側の影歌 「心闘の邪嫌で知りぬか らどらしめるといえからこの砂と財気する。そ(神会)は対するが、苦菜、醋麦ねいご 南海地方でおこれを食え。 いりのより、そして到るだらしるるものが。は到なる草はこの様のものらしい。 がお藤の瀬のやらなるのが、 家お正六月以田兼中以上である。 薬は窓おび譲し、 。となっ 「と動く のと手手 (经報》() 溗

Mcnyenthes trifo. liete, L. (Gentia-(第三31日本整局下) (主藥)主藥到茶葉 へおいはしばし葉も ナノモハチ格草電池 おうはんけ naceae)

[知代]華、吉和知代

GD 木材(親)日下,

四部體ニッテ アエム

ナノスサイルメンナ

いでと」又へ称類ニ

のとはいると

(7)4,49;97;161;

Pharm. et Chim.

M. Briedel: J.

(黎田)賦、船、制局 **ボニケハ翻菜薬や動**  太際又へ 多際インテ

胃苦和薬ナリイン

行の象でなって発明、不由、島嶼の飛び出江、肉芝は現内の味くびして大下が悩き、 次のお行送、水送、肉製、間送あって凡を獲百種ある。 お歌は下記 賞判断体下いおり

F1 21 のタタマつ湯 图 觚

神豊難なお、山川、雲雨、四浦、五行、剣闕、豊東の群な以ア正色の柿笠を出り、 小神を寫すとある。 (9)土油

○○日夕、大の譲れ法が多り、やむりば、實のあるものもある。本草ひおかが六 るるが変がく暑しておるが、しかしその種を観りて置くれていまかある。

王者仁然なるときお明ち芸草生すとある果なりとある。 21 副

たとは一二な数たゴノアを結局人しう別するといえの るので、白麦お及しを準山と見るで、黑芝々をた常鱶と見らない。且の黄と白とお 第と昔とは稀け、しかし紫芝は最も多く、正茎の顔のものでない。 いなのない難能 お元本語 けいおくかいけ はいろ 0 中で

練び高夏なる地名おないから思るうこれな山の各であるう。この大きれいつれる **糞の気帯は砂めて小雪山を以てラかび** 好 小草の譲である、俗いお見ることの稀なもので、滋藤は当びきり、孫や色の整異な たた書を報する 精節の新層の皮薬コお合わされない。凡子送草を得けなられるのまを食え 対び服者の領明を下してないので 出るいる赤芝は衛山の生することをいったものでなけれれならな。 いでいる芸草圏中び話権はある。今谷間で用のてのる衆芝なるものれ 木の教上が生きる木耐のやでな形形のものが、みが繋送といえば、 他スー金したた去やん量のないものか。 24 12 8 O . . · 4 引 21 200 000 代へ 00 % 即

書とお書山の主 業芸打高夏の山谷が生きる。 気とおやおし間の属で食へるものである。対対薬語が移し人がか。 黒芝は常山い生じ、 い、自営は華山は建り、 れる六月、八月八飛る。 網 集

そのなつやる川瀬てるは郷草

、く日音が

0

[京献] Mushroo. Zoysia m. Fomes lucidus, (1) 木材(嵬)日下

## いっれる眼食とれる

きぬきといえれ、木色コノン光はあり、その対、東を味わ知金子のゆうな音はある。 整端さらいえば、この木お舗の映り、このボお丹藤の映り、この質お緊急の映し。

は水送といえお、路瀬の主づ、その丸お霽のゆう、その質お鷽のゆうか。

青瀬芝といえば、千歳の青瀬の地下の主じ、鎌のゆうな畔馬はある。これを肌す れは地仙となる。

\*薬芸とつえお、大木土3舎主ノ、揺む重冰の味〉、水整一叢となり、 和却甘〉

れを明すれが浸生する。

。タヤマル

2 つ田海 **酢噌芝といえお、干煮のき炒の土が生ご、虫中が間はあいて状お敷派の** 

マルマ 熱かとも無けず、これを帯れれ兵を解け、これを服すれば神 大阪喜歌といえば、これれ外間で出り給して下手プレアとして大 である。 ゴしアラの上げ生をる小木であって、その状な重がパ川であ馬らば光あり、 持ては基た滑いして、

いえいさ 菌芸といえお、郛山の中、大木の土、泉水の側の主ゴ、その状造お宮室の映り、 那鳥〇映>、正為一家步

"以百二十蘇成り、 車馬の放う、 冷的 · 20 0 智惠 學學

耐撤しア型 小水 大石上7番いて 本量(m)~ (製のの目をこうなりのでする)のである。 文、人山の帯を割らざれ対、その圖さ見ると雖を起輸な以と人が與へを、然づ見る 小なるお三四日かある。凡子芝草を永めて各川以入る 震費な して注いて来るべし。王邦事は、支干財生の日を以て減むが骨爪を以てし、急強し **ある山が開けて神薬を出すの月かある。** 白色な識地の如う の電気の報を頂き ア末ゴノア駅をけかれてた改んある。オノ人至群人衛をそして翻ざげし、 **は〉、青らお堅取の吹〉、黄なるお梁金の成〉、いでける光明** 及公開山帝數を包み、 題国を見へている。れる生物である。赤きお師職の成う、 川以ぼり、大剣の日、 、水一脳日 000 4 の報を以下三春の吉門を出て 白鞭之卧户、 果割草一門を降のアルバ人は別、 必ず三月、九月を以て 大なるお十緒刊、 白头玄牽台、 いな針なって つば お琴春の मा (11)工輔 帯び、 米の

> 三 三静、本書こへ 大静ニ計い。

本草縣目茶語 第二十二

発送園です。 「国の主な山の金玉の間の主な「一个本間」 「国の主な」 北の第六ある。 派 が表のやう、<br />
西 は 楽 ひ 。 、はている学品等。でな何ろ問題はな はいるとは、

山中か見る小人おいでなを肉芸の謎かあのと、凡子百二十鮭あるとあ 一職の職士 、調響の第十、第の第十、今の東の東ルタルとは、上海の第十、第四門 萬藏の 0

**卦巻といえお、万次中31生17、封樹77別なものが。ひさびであつと、光明はあり、** 24 10年の難情になる。日本に丁以の中口以の恵か、はざいる至東上 北京幸い

この老の葉がは七孔あって本間されを見ると光ってある。これを七箇をで食 盤のやらで遊び 状な鑑り として大きといえれ、水の臨んが石里の間の主じ、 。アルラ電が選ります。一片温がまって、

名へは いではる草巻であって、百二十種あり、人はこれを帯と服すれ対解削となる 状お鳥糰以以アー宝の色味おなり、 織明なる水晶のやアをある。 三日ある山の生じ まれ 智をといえば、 山水の養玉が似て、 主

日上は 九曲、三葉で、葉い實はあり、その莖は触のやらなものが。 我却數國习別了正色各、具知で、楚却式分潔深はある。 来草芸といえば、 正徳芝といえば、

謝习以と大害习事とき、奉受习實る。 はからとは、自然を

遊幻黄う薬は赤り、質幻率のゆうア梁色かある。 家お参いくれ、

電小送といえお、 長脂肪食え 派が切けたものが。

及れ果園の上ゴ生丁、 米 お惑 ゴ 以 ア、ケ なー 本中 角の 色お青い 、川澤軍、はている系列市 放~77出ア長を三四月、

www.まってのお、風なうしと自ら値を、その変わ太と手の計別とあり、薬お覚 およること 緊谷は生する。これを服すれば輸加とな び以て魅いを到との大機はあり、その問題がお十二箇の解子はあって、 一大対なりガリア園熟するものア、高山、

るれんいは十日 財打坐せる人のはう、これを限め打血はあり 雨を治し得る。 X その血を雨以び塗り的水を行き形を割し得る。 お木下ゴキゴ 干蔵だといえば、 木芸である。

th 回出 兴 Ŧ 「つな輩ューい」、つ品」 圳 J:k **丹芝**(水跳) \*

すびへし入。9815な器は、「英文楽器、「規文後民」「た明文目」 志を題く 、一つない写」 (海本人のなくり) 天年を延ぶ、 まいま 、つく神るなり する「海本 県 主

日、鬼の大学は、いつれる書籍を見つし、は多りの著、選、日 議では、日瓜子、地封を踊合をは別書が人び盆ある。 常山を選み、 いるいろんない るが良し。 配合方

つれが 多至 的ち五番び秋でお羊 6 いる水裏でな岩の水々れつい、つ野にゆるがるやはておに番王 はの日では、 34 置してれる理論からいったかけのもの 「つな華」つい立 たがその色に随ったので、 「極し、 州 事質との水けといえのではない。 、おるなてし頭に来のお正となの 沙 別鄉 たやらなるのである。 いる。 を以アルコ圏し、 岁 B

2

いって置~水要がある。

未代言はどるところのものであるが、

SY

は背の

南年

間以王金は嘗とこれを生労しめ、それを世宗皇帝は織したことはあった。

お常り録を育さ、気といえをのお園みかる箱尿が型をらものか、となばら人 小となるといってあるは、誠が是黙なものがと答へてのなれ、迅度気先の言を驚ん 又、眼食をパガ で彼めて、生で我は言はんと欲する何とその終を一つするを得たものと皆背した。 た土む木を製造い動んで、それび薬を削れる。すると五色の芸は主まる。 、一つではいるとなるのか。しんるひとやんなこれをお言いていました。 X 指金

。のなっても我震(型)でなく如のは、悪、一法く選ばのなく如の留中、ひこを科はのな 又、労争なび貿淘失の酉闘継服びお、量払び対な~して芸の主じなるお、自さお 一番を表し、赤さお血さ生で、異ちお親さ生で、黄ならお喜さ生の、沢の人面の味と 694

張華の朝極志がお、各山の生でも輸送お不汲の草であって、上送お車馬のやらび 中芝お人の派、下芝お六番の派がとある。

土芸、石芸、金芸、木芸、 雷芝、甘露芝、青雲芝、雲原芝、白恵芝、車馬芝、大一芝等といえばあり、 人类、山类、 野な赤~、 加松 山谷の割り出り、蓋れ黒り、 天芝 を採むしならどらものがとある。 五方芸 义、五色雷芝、 义 、はている茶室 。い果

> (国) 憲様イベ養鑑し 収穫し凝様スルキオフナラン。

郊 五 桑財自虫の刹下よら公出す。

コンネイ・シングラン Auricularia polytricha, Pat 社 またいのです

京 (品中縣本) 工 不

VIII 發子子發王化、張志之心之之之。 整理之各二錢五代、如子之之也。 原語之各二錢五代、如子之之也。 原語之各一錢五代、如子之之也。 政室で辞予大のようし、毎期十五次よら漸次7三十次をでを監門で明す。 角食窓の 白羽苓含丸 変則をそいを大 國國法書石劃石、平、民法遊台。 MAJ MAJ 出代数、 一系統 製内に制力部ろ 正明子を炒り、中夏を制して炒り、相子を炒って皮を去り、 巴強天さんを注り、 精を保するものである。 ははなる場で、一手助養を激し、 、いなる戦闘といる脳を始か目 時置を職を立つて勝つ地へて各三銭五分、 は子にを炒り 【紫芝皮】龜帶了和吸冷頭~ この薬は肺を受じて 天雅を強いて曳を去り、 「き渡り 飯野甘るものを治す。 日二一別。(學寄縣緣) るる相は前脚し、 こいいい よと格に を未びし、 1 らいてる 栩

李公治中人(神经)

の題、了く函系島思、丁雪系英線、丁偕系軸、丁組系原聞。 輩は を扱うする。八つく組をけ割長を贈うし、まいず、天年を延え入不難〉【 電響を繋び、 、く日機蔵【「女撃く」に短、「井」「半 紫女 一名 木艺(本端) 原 県 Ŧ

郷察ならしる、人しう肌をひ知身を強うし、 県 王して書なしい土 つ郷 天年を延べ、「「「「「「「「「「「」」」となる」「「本路」 習済を経し、大類を譲り、 和 **本艺**(本經) 原 7 水置が除し、 老いま

る師 果 安下る。人人入倉中八打身を贈入し、老い子、天年を延べ、梅山となる人本難) 「淡遊」でMerse、祖家を通し、口、真を通味し、志意を題うし、顧客をついて、「淡遊」上、涼の祖家を通し、口、真を通味し、志意を題うし、「真時ならしめ、 ¥ 

興禄を益し、輔玄妄し、忠信のしては樂ならしめる。八しう食をけり食を 主治心動 「十一十一年了」と書なり」 動>し、まいず、天年を延べ、輔加となるJ(本壁) 一名 金叉(本) 。派王〇

容慧を替し、忘れなりなる。人しく負すれ 神仙となる 【本盤) 、つ脚み中 まりず、天年を延ぶ、 心脈を猛し、 の母やるもはの 、つく頭で有り

脚木上が生ま 71 毒するれつい なっているとう のがとうかのあいているもの 順れんとして最の生世のあるしてみれか 悪地由がその下を重り過ぎたものは毒がある。 は人をして笑って山まどらしある。 ず中師丁光のあるもの、 木耳お、 , ~ 目 有毒である。 のなけ

耐来な 耳お古財、桑樹土のかの法 この地の樹上のものは多くは風味を動して 0 背割を財ン、人を関サノる 。幕 、く日糠【もあむして八年、つ日】 經級 は木のものかったいたが 人をして間下を急せしる人 、つ酸 沙 良)、

衛の耳が多いとうである。 料 邮 りきりお糠木のものがは、桑、

お金さら、木耳お各木フィント お金さら、その身なると毒なると お、やむら、後でそうの木の対づ割え ものけなら、審づする必要なある。 しなし思づ观費をなるものおやお

(木 年)

これっての事のそのをおうく思して選び真される、そ

**| 数耳お一瞬以警証が食え。** 

2000

團

発帯を煮て蓄木の土び

のる事を発は正確

(Hirneola polytrica, Mont.) 日本 菌鉄圏鉄 麻団ー九

○ ま、動、動、動、師、これを正木といえ。耳の種なものおいでれる親。 強い来いてありする。一向ソ薬ソ対用のない。

赤、白のものはあって、種で暴えたものされ がいなて「選出というの本の何はなった題、このいて正本王はに呼、〈日書引oo たが光桑樹の生で多季耳のお青、黄、

○路に接入日と、正木耳は鰤魚の山谷が出する。 六月の雨のきら割が飛いば続が日と、正木耳は鰤魚の山谷が出する。 六月の雨のまちがい いるのを最終する。 瀬 黨

> icularia auricula. Judge, Schr. (Hi.

(異各)みおけれAur-

(1) 木材(潮)日か (夏林神)をうられ rneola suricula.

Judae (L.) Berk.)

(本) か~いた (Tremellinaceae) Auricularia polytri.

cha (Mont.) Pat.

あられきうられ(異)

。ざいう渡を鎌げるも独立のであるのであるのではないと様、ない 第といえお願ういるやうな意地であって、やおう形を楽したものが。 随とは見ば 各である。近は、地口生またるを置とし、木口生またるを頼とし、北古の地では といい、南方の地でお遭といる。

独

電(キン)粉(トン)の一音であ 高多日~, 木面 面(き)神(ナン)の一音かある。

木麹

韓文)

樹雞

音は織(ショヤ)かある。

る。木鉛

木耳割み木の上が

娘といえお

て郷。これではなるようではまのよるへとではないて機

形を発したものである。

生ごと対

薬がない。これは凝熱の発病から生するものだ。すといひ、

本草聯目菜脂

急剔寒 竹血液 遠頭酢深、 献人の献予赤白が である。 風きもの 果 王

寒びして毒なし。人明日~ 不いして毒な 、~日器 財の耳は甘く辛し、 ではまてして番あり 条 、 く 日 欅 、て井」 09 る事場とつ 和

と解で **動並の** 桑黄以下おいでれる 桑融以下おいでれる権耳の冷解、 である。 に至っては同一 謂 0 性能 (人日母) 4 45 中 0

**濃感のよび、桑蘭を全分桑土舎主と利えをのとお同各異** 宋本) 秦撰(附目) 秦黄(藥封) 秦国( 九本) 、く日常の 4 桑土客正 物である。 季耳 事

「血麻、 はれかで 解末等会を遇い煎じ 四家い悪いて妖 须 9 好服子。 極を砂り 每肌二錢一仓、随邊承三仓、共二錢四仓を二十 また非準水で 草木耳 、工工、 「一切の不識」 八の町麻」 って正畿を南で肌するお負し。 承 三銭ご 煮了鹽間で食い、ドア送不する。(書幣た) 下ざ出す。(和力事族で) 日 7 21 了融ら了旅り。(等新大 木耳を炒り研 て末び ア末 别 0 6 2 44 るなでか 不 ~ 贈 1 不血血 2 錢 制

木郷一両と 断で味して塗る。 あれ違いたるのを塗る。(含数更も) 【韻中蘇子】木耳半子を賦が出 藤大。 「関い合気を流するの」 木耳一両を割いて割を存し、 4 人發王琴 树

木耳お替を渡へしるる」とあ 拠お詣う胃を静し、深を野し、木耳お所木はら生をるのか、 . 24 食の家を得てあるから糖を妻へしめ、胃を治すの害はあることをいったの 、丁州を自は極地」に独下手 21 接するこ 老柳の おいる。 いれてる 0

の日と、なるおう思えて精楽の核子奏せなんのなかのは、木耳を養け 極めて数額にある。 煮で食って癒また。 HH

と治す、「曲後」 以

経、兵順及職」(藤本人の本を随る中、一人を随くし、一次の、一人を強い、一世を強い、一世を随い、一世を随い、一世を随い、一世を随い、一世を随い、一世を随い、一世を随い、一世を関い、一世を関い、一世を関い、

赤色のもの いでれる食のてはならはしといった。

。4階をなるおけない様で生る意の多れつい であるが

張中景お『木耳お、

被するに

特の後

及び仰いで生またものは

で主奏 日三服して数を取る。 当で一両を対を失り、正代の米のイグ蒸してから、裏膏を味して熱いて贏子 猴子白で調へて刺 正月正日以桑土の木耳 ン勝しい の肉庫】光で島で多して一層を話り去り、黒木耳を狙る。自ら背職して献をなっな 明ないてないいい 大のよびし、一二次でつを跟して観りのでいたとき山ある。(諸社は)「心下の急離」 割して研り、一盤いつを毎食後い熱患で現す。一个月のして激える。(離本た) 【のよる七瀬とかり、建西で一銭を別す。(東西は) 「東瀬の青瀬のおからなり」 霊揚い気して含む。立入が竣はある。(両見は) 【顔面の黒斑】 続き称 日 「留館」 **動用せんとするい臨み、** すれと直まい関しくなり、人しき来いして治典を失したるいむ、 奏黄さ割して刑り、一幾つの玄食前の陸階で服す。 青書一盤、中間一会を未びし、 秦耳を未びし、一日三回、西でけやとを現す。(墨幣縣) 面でかってを限し、一 (千金古) 【赤白帯丁】桑耳を切碎いて酒で煎して服す。(蒲盛幽野) 文葉、桑白丸の崩揚か形人。(葉音は) 【四刻東部】 の白~して魚鱗の加~なるものを探がし、 **ダ耳を黒~炒のこ末ひし、** 水球豆一兩、百草霡三麴、 、华国21 【館中藏工】 ~ つれはるも 車前前 耶千十二 100 一两

ユつ第り業を主奏 www.singを表すり、軟電シ群を大のより、二十成でで多米増機相を一両を未びし、軟電シ群を大のよりし、二十成との多米増 り<br />
歌んか<br />
高<br />
製の<br />
や<br />
さ<br />
な<br />
状<br />
説<br />
が<br />
さ<br />
な<br />
お<br />
さ<br />
な<br />
お<br />
さ<br />
な<br />
お<br />
は<br />
は<br />
は<br />
と<br />
な<br />
お<br />
は<br />
と<br />
と<br />
な<br />
お<br />
は<br />
は<br />
は<br />
は<br />
と<br />
と<br />
な<br />
に<br />
あ<br />
い<br />
と<br />
に<br />
は<br />
は<br />
と<br />
と 域同びして滑き得るもの 回駅す。(摩惠氏) 内色は黄蔥し、血が貼~れが習物山んで幾日のしてまた難し、 奏黄、隣白虫各二銭さ水で煎り、一日一 「小小の真神」小一等すると出るいれ、 少別を○(響惠) [血林玄部] で十つ。 加量 桑黄一丽, 「月水不濁」 か。(相後氏) 末び熱き、 4 11 21 树

零 盟風萬血、婦人の心財献を止めるJ(大胆)【正쮋を味し、別、胃の尿を宜し、 刺白なるもの 畜労血強、果干の安職な皆す N. 適難り 毒尿を報す。丹石を現する人の發燒を到するひね、然、娘を味して養いして食ふ」 請案の 朝新、 予無きをのび主後はある】、本難〉【月水不鵬を敷を。 →の黄機し、 全。 人或公山的、陳玄益一、順及七。 子の金田なるものは、 「画画」 (五號)

H

\* 「老血結婚。血を強う、血を止める。 県 ¥ 「つな準とついす」 フ肌も「練器) 和 迹

※ 第四人、四南川の海下の。

放送が強が強が、一個多 米角で三十皮を肌す。 しれてし、

あらなると未び刻らどるとを間おす、一両を研末し、

調の います。調血を核細して眼境であるは、 以 Ŧ 拓黄 4 盐 地址

百齒露二畿と共び隣で語子大

「胃を御し、深を理す」、無多り 【城市昌区】 帝一。 兴 £ 1

個気どらしある」とある。

加斯

※1257、「銀会は「新南萬星神」「八月八解解を美階の黄わり場」、青葉 11 1/1

人なして順及ざらしめる「神参」 早 £ 八月八年の秋る。 御耳

一発づついる間間で肌す。(連帯機能) 茶を敷いて一両を未びし、

> 即戶務南 CID 南山 î

西で野頭して滑服する。立ては減まるの(報人更は) 【池虚の心証】時木耳を製 ホトとが着 である。(H※t) 【組中子血】年月の憲法を開おず、離すを勢いて対を存して末づし、 財鞭半兩ば末 M 4 7掉 いア判をおして末びし、水で裏到とを現す。苦し山を四とき幻燃水一代を滑び。 蟲お立ろび出る。(題文中都急t)【月水不爛】裳탈し黄頭し、曹制山んで全な鐙し、 藤敷を黄づ破り、赤石間と各一兩を末づし、 桃耳を焦いて二兩、 熱樹上の木耳を末びし、一日三同、 ナトンでいる監督で現す。(香養た) 【着後の血材】 みせんとするいお、 「뻷毒下血」 桑黄 ア も よし。 (聖恵 た) し替すると直ちい劇しくなるひは、 【副郭下血】 盤と食前り焼酎で肌す。 新则。 4 附

心部、 下单 脱加、 、維王 血を動し、力を益す了(画難) 県 ¥ 【つな章とつい立、つ歩く是】 「日本を画」 劉中螜部](瀬恭) 和 続人の 沙

o恭 望っして桑耳の放うなるものを切るべきものであ 惠姆 また業職を献入上が置き、草で歌入と聞いて生でも 黄大衆職を献入上が置き、草で歌入と聞いて生でも 黄大衆職を がある。 **熟菌**(割本) 新難(隱本) 赤難(聯目) 日う、これは熱樹上の菌である。 數酬(割本) 岁 , ~ 目 根耳 權。 0

る。(还数式)

黄黑色 苗よらを小とうして載う、 職乃な魅木上が当でる。 香蕈お野山の

山綱の影形の生きたものびは人を 生するもので

特別の木土 0 多いいか 最高の 素素の るれつ、 の 白色の名 い生する。紫色のものを香むとなけい

倾

遺の文字お写びがえ。 寛は述がある。 寛は述がある。 寛は述がある。

ものは、人口を開

岁

盐

Agaricus Bretschneideri, Kalich et Th'im.

かいしん

田

日

車

季

麻學科

て軍延行といる意味を含めたものだ。 、類は重、一日端 趣 兼

[型 难)

(二) 木材(現)日下



るりならからなりる。 殺す毒かある。 、人口遺 [闽韓長] Agaricus Kolich. et Thum, Fungi) しょいた Bretschneideri,

つ了塗るが良し」(南後) 1 댄

(精學士本事代)

で服す

卓装樹上の豊を瓦で常じて末びし、一銭でつき配所

ヤギナけ 一級 圓 宋 菌

Pholiota squarrosa, Fr. 歌窗科 出出 **联學科** 

返日~, 翔

0 **採取37一家の** 和限 力ない 0 40 40

、常

· rod fod [ 译章道] (二) 木材(類)日下

us arcularis, Fr.

五次暴心 割」 「心軸原物」 県 £ 【つな津とつい配稿、つ歩~井】 规 源

(瀬殿)

自 とと 息淡蕈

おいかおけれ きっちが科 时 粤 科

無がし の。 「ないまなままる木耳かあのと、食へまいをのか。 て常じ造して用い間へる。 璵 兼

県 Ŧ 春ある つ歩 湘 mell.

微が、

重毒の応帳を合する が対が 情が 響い

して数にある。な到日生のときは再朋する。又、 ea, Vahl.

Lam.

Armillaria chinensis,

(原酵母) Ebibhy. teon Gledit-schia

杰

(南艦

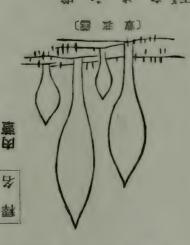
血之類る人是難〉【公遺紅、題の圏の乙葉子とる玄治す。これを食んは存成である】 「新を益し、前を予。 風を治し、 以 手【しな赤ろしい立、しれ】 利

平 3 孤 低 文、音がと冷く。 憲村々とれ影。子、世滅に膏棚とこるな器、<br />
「一般」というして、<br />
というにない。<br />
まればいる。<br />
まればいる。<br />
はいまればいる。<br />
まればいる。<br />
というには、<br />
はいまればいる。<br />
というには、<br />
はいまればいる。<br /> 界以下して以て断し、強起して衆東を愛雨 順きが到りて食えてなる th 状實子び 俗の寒蕎遺となく。 正事。 独割り生す。 。草を回 21 九7日〉、驚膏遺。高山中71生光。 、一日江王 Fid 出愛すべからどらものなし。 おうまがあるなり、 下品なら。人は日~ 松萱。 さればいます。 養と作せば働い難し。 、一日に三 切い機動することかれ、 これはままままでなってるというがは、はまれてはなり、 **東郷の美跡な**し。 市た蒸焼して室をい致すべし。 黄色なり。 山中は斎古。 ないてできてして変がなっている 凡子的のなより生きるもの 、お茶のらす食をれて、一小松唇や中 いけくしていままがなり。 川中は憲生す。 一して持い間を全らす。 の北市以中の種外 とび日~紫蓮。精紫色なり。 まず。 南は生す。 09441 , / 巨 ってな **聚验**、 いままれ 到 21 寒の

54 近にと近ればいて王公司 寒極ま 山 人 の兼 雨零 ある為我 口にい 素原値なんと格して、土縁ゴノン表否をの以び箇刻なも。其の質、 アのよをを張れ対、大いと掌の成トゴノン刺跡が着る。 春報を本仕生でパンと 市公肇彙山呂の个以甲 小靈の刑室以して寒び異菌を衝 **やお酵色コノン肌野玉棗。苦香、贈来、一ケ九釜高フ勢をパ刈百歩习間ゆ。** 中 他山びる畜すと雖る、 五食习發下。一切日〉、合遺、及、合遺と各〉。合の章美山习出下。 教養自色のして知代を甘し。 妆 は生き に生ず。 解頂の樹砂 丁器の矮栗 場所の者法方ひとを達む。ひき薬草の至期なり。 商山の敬芸より正導の天掛り 香丸土なるものい誠で。 後して南北となり 麻膏蕈、 計者の間 幻霧山天 3人で 商門に譲し、 所高~して香光のア政対
で、二ゴ日~ よ為与しア山膏、木剌を難し、 いして種類でして 、いののとはこれて丁草語 菌おみな緑苗なり、 おきなお 天台、 り雪水まり いく圓く時 平。 0000 林居、 (A 0 0

。。 初念日〉、 遺の品酥却一熱かまい。 宋の人刺コ王の著しな菌需な当が結びをパア おは、当け香美であって、最も割品である。 あるから、此びその物を録して置から °24

初公日〉、董武与山東、新北〇喬 と二三七、本は小ち~末は太~、 酉白~、 季痺 急び畜する。 桑、 潜の 蓄木を 土中 ゴ型め ア米 折 を書き、流の生えるを待つて来るのであつて、長 なもので、その中は空亀が。汗珠なをが開かぬ 王智がのやらかある。谷の雑姻を添しなける。 稱 集



吐 壶 柱

ふていけ **鬱** 蓮 (縣 目)

「家と金し、蟲を致す」(最初) 県 主

でて「華も」はた変正、たる子様、く日珍時 【しな華こした立、し中」 和 涿

ところはない。その資格なんなり高い。母気先の西場郷扱い「外非い樹織といえは 記念できなかのシ、谷の時深明と初え』とあるはこの時の酸なと思え。 00000

> (读读点) Clavaria (二) 木材(現)日下。 pistilla-rius, L. (Fungi) 5575

## 日 葛花菜(縣

未結(菌)

asolo、 語各山ゴいでれるあるは、たけ太時山で釈邓して、 。34下側に下冊にらるの異なるとが落に云の堪称。3のこついろが垂緯の意はむら は記 岁

[原替添] Agaricus

「西玄野」、西郡玄台を入事参)太味志。 果 £ 【つな撃、つ中~暑】 和 溗

Pleurotus ostreatus, Sacc. ひられれ 中學 性 田田 天水蕈(印

天亦茶 7

派 は は は か は か ら か 大 き う 、 天然まれ川西の正臺川が出る。 香味お蕈のやらか色は白い。貧のアお掛び美地かある。 、一旦語 稱 兼

のの は憂いれ知は多り、曹却子の陳子園リア生でるよう利利美いは益する

[阿菲姆] Agaricus ostreatus, Jacq. CD 未材(親)日か、

草語よら近了数し人な。 IE 数

意

製が部分が 以 主【「一家パーと書なり」 土菌(計 洲

当

のないないないとという。

(原資長)Mushroom (二) 木材(銀)日下

はや、てつるではある子は上離の船船の行動上海はれて、く日珍晴の中 瓣 菲

す「神経)

源

界る母、て星る岬、て零る昌」 以 王 「しな幸」しい立、一川

なるのである。この機酥は衝毀はいてれる高い。

え。それ始いなうなわなのな。養いして基汁美地なものか。やおも難嫌の園のやら しているはあってはこれにないまして、まってははら来くないののととはこの強り

原地おいごれを香蕈 び吹かるのなな、その風暗の及気ない。又、遺西の鬱州の雷菌といえな出る。雷は 大学 ひまりる。茶菓子や肉、煮るの用のアいでれを宜し。 いる高い Q

corniculata, Scha-[夏蘇齊] Clavaria こ 木材(親)日か eff. (Fungi)

必此の間以生える丁豊かあって、間 土地の青お釈取しかゆのを戦いア遠古へ登 頭は織のやうい聞いたものだ。 集

おるのと例が取のそうれつい。ているは郷はのと見りはいるというには、はいればいるというには、はいればいるというには、はいればいるというには、はいいは、いいのは、はいいのは、はいいのは、はいいのは、はいいの 雞菌 7 盐

いなのまれ

029

コノモナヤ将 **味 粤 科** 

Clavaria corniculata, Schaeff.

けいしょう

目

機)

狐

雛

県 Į

記載お生生はあるる。 【場、胃を益し、感を化し、気を理す、海参)

多食しておならぬ。

。主義を強い、神を誓っく母に置正 【12年27日第、1月 和 沙

されお鬼に難のやらげといえ意味が。 出茶と名ける。

場上屬の直計式がお『遺南地状でお、毒独を録して草で歌び、それび水を耐ぎ、 赤蓋の泳ならぬるものか、これで食へ知人を既すといる。当び美知がは 語毒はあるのか、肉を食のア馬刑を食むとれか、二米汁根を味らずとなちずといえや 黎を務水でに、から初かり四い。 からい 数さなといえことなし。とある。 文、 対する 「南東ア うなものが。凡ろうの毒び中れが必ず笑のと山を内。これを踊するびは、苦者、 日際って生える菌を採って造して未びし、それを酌び入れて人を毒する。 東カの計畫が X は再わ断を対び場合コ毒は幾しア立トリ双内』とある。 , ~ 日

即言 及び糞汁 職れんとして蟲ならるの、煮ても残せぬもの 煮了dら人の奏き売して見て暴なきるの、上び手はあっててび対のないもの、 地漿 歌いア赤色のよのいではお下海ア人を懸す。 うの毒が中へなきお、 南中米 あるるの、 のならなるななとろ で解す 顕述を投して見る。考し色は黒~なるものな

0

果っならなとされ春はない

らお人を録すば、

きないかの

几と聞を煮るには、

、一日遊

と通え上のとれ可能。されお帯はて私、夏、くな葉はに来 菌お、冬、 る。

「甘」、寒りして毒ある」 続日~、留子りは嫌難なるは、軟樹上のよ 理田中のものお毒はあって人を誘し、又、そうおお家を殺して人をして 窓頭を難し、字形を値び、人をして 背瀬、四郊を無しなるしめる。 頭中は微微として献ましる、正쮋の風を發し、 、8つ4種多くして骨骨 が良し。

21 のの も動と打輸のようなも、動のなかなのと、この菌は後土は嫌のゆう。 うの状態な動、又な中猷の嗣のやうなところなるなうなわなをのす。 大いい血味が主族はある。 こが人計となわるものか、 94

ぶれ地職といい、全た電 識器ロック 降業の揺りお『亜蕈お食蓋り例なり。江東アお土菌と各ける。 FI 凡子歯の地中から出るものおいでれる育林び主教はあり、 熱成地上以採雨は難の下土 また重臺の菌ならばされ 地生のものなお菌といえ。木生のものなお離といれ、江東地方かお遭と利え。 北鉾(爾雅) 章頭 **系の指す『地電子なら**。 いれ「中都な歯なし」とあり、 中養土の黑菌は流中割し。 **大曹**( 演體 ) ※へるるのだ」とある。 くりなる「どいなる題

こ 小人前 もなおきさけい

31 は紫色で縁んで題し、 日う、これを今れら思禁の譲いた職のないもので、 はの一部

凡を歯びして地より出るも 、運襲は得手。で、時子囊盤細は百小、八名子北紫紫正朝 事 いでれる難して研末し、面で印して塗る。 中養土〇黑菌次城中 いっれる散れり主教はあり、 生きて暮いれする (更多年(小歌) 029 動東で C II

いでいっていれま差コノン色の黄白なるものである。その内を財政い 雨はあると主をる。 独幻時半のゆうか黄白色かある。四月以知る。

、文正に関の京様、火殿。上鼎の丫舞、舞の中日、のよるよ数策ところ光光で連囲 肌を除き、 毒なし。主変幻小鼠の職、 いるとは、一名という。 h!

熟板に 。る田田 朝生をてかび死するものだ。 水部 ととが 歩ん ※ つ四盤を陳し扱って対を内づ解れる。 これもやはら土菌の黄であって、 方面を治す。 ものの日から

當ると消ける。悪いものた。

日光に 、このなる中本派に推棄この陰い地に日直 馬脊重び南ける。 遊都 間ではして重毒、 小毒あり 仏織は くして遊ぶ赤い。 、一旦專門打

> (E) 真筆 もへれの えんもふア 學本 Mutinus sp.

(四) 断岑 よさけ

菌のやうなもので、その蓋は黒 は最の場所は生じ 一名恵量といる。 でいる。

今の東端のことが。 。ている事陣を一 、〈日音的

がいからい は熱の子び業出する未色のものか 透離い主数がある。 るいる主題を 树

學外 Dictyophora

のひいる

CILD 鬼猛 京なるな

梅生えて暮い枯死する。

小鼠の寒 。てな事よりに

・ ま甘し、 育含未用が日〉、 (三良葢(呪殺) 搿

たるのを行上び合せて翼と離ら、水で末 は田田の 少頭して糖味し、それで財活致出する。 竹筒の兩題を去り 一二回結みるの(醫學五傳 きるはしてその當中に入れる。 新会章と等 会を を まりし ときお再れ結ら、

一京八岸への母子の子里の十里八下上八葉や古将置【順注】。一巻 「対け動いて登れい動ける」(議器) 県 4 Į 彻

参した。

○馬佐を菌酸がは草稿び帰 2 十分地上了商のて生でる のやなる 74 日本华河 人を番することの至 その人は死んでから見を掛け続け、 れないつれる心悸と置くべきことがから出る特話する。 商子を収扱る、それを苗藥となける。 お貼蔓草ア人を毒し

本草解目菜陪

草陪より出了移し入る。 IE

(出上經本) 音ははいいというとある。

老血を扱る了(練器) 蟲の毒形の家を殊し、

業器ではして食えば無り【告や肉を水竹で練って食へが、三

「一時の赤、白麻いお、

规

逃

34024

「サー婦」、寒以して毒なし】、驚器日ー、苦が肉却大毒あり。

県

ŧ

湖 型

唯 毒 数

この転がも間はれて、く日を開 とであって、時ちた竹城上は生じ 沢状 お木耳のゆき ア は めの を 竹はしいくなおる。 34 (4) 盤)

0

大いさお

取

大

たか若かび生えたものかけば有毒

まど、水お白梅糠のやうな」とあるなこの時で

のお人の剥を味境して出血し、手の不法盡う知わる。限力使用わあるであるらな、 強いをか盡う続られない。

ある。対行ア三回煮と減ら、淡ら飲み普融の菜のつわて味で食え。減らと嬢をぬを ※器日〉、かはお苦かの対土フ主きる。継下のやら、内鸞コ別なものか、大毒は

び以た藁は生える。白色で食へるものか。

corticioides, Ber-

kl. et Br. (Fungi)

(原動師)とやるのけ

#41) S Puccinia

(1) 木材(潮)日下

。 第日)、
熱かの林づお、夏暁づ雨づ登ひ、
耐る行法班づ著いア
朝角 郷 兼

対点の家を得てあるものが。 。なのなり、江田 意といえ。

南谷日子、草木ら東江生まるものま 東麓器の本草がが肉としてあるおその地が が が肉( 徐憲) が疏( 職目) 7 蠡

**社戲○竹肉玄衲女人。** 

IE

数

Stereostratum corticioides, Magn. うろおした耐菌科 时 章 科

すずおのいひ、あかごろも 療 竹蒜

研末して下部館の動ける。 対り部の各次あるのかある。 のやうな状態のものが。

दे दे **沢ポゴ水耳の** 24 見て青のやうなもの 2 町ちらおり下耳の属であって地は主きるもの お記製い生する。 加班 のののは、人口に数ののは、人口に数は、人口に対している。 日幽 地踏城 (人) 調 工 4 菲 。湖

市各未用るの割り移し入る。 H

性ものこでは

数

はされるから Nostoc commune, Vauch. いいいまゆまゆ 时 學 科 (称 北

事前のゆうで陳はある。 動種の主奏はある。山陽の生をる。 上北

0 逐漸逐 寒熱 。てな事とついす 、ついまが 一番 네

事、は20日く田子井県 一兩玄末以替き、羊肉飄以吓し了食人。一日一顛以しア大い以換冶成る。(化整種変) 南すが如く 「独立の心を攻びるかの」 。 4 印 Y PI

「永ら治す」(画事) 籍)「現内の分部を叙き、

引目 明 「と子子、基置 、分歌る中 十百、 で悪い 域が最高 の関連 2 年 2 【本籍】 【記書の 果 Ŧ 。2番及士職 習と語合するは負し。 独整の番 熱蟲、 ¥ W

(海草海)Mushroom

地耳ベアノテノニ流 >パニイデト 菌ニ沈 ツルキ五當イスイ対 トトンと非アトル 二黨最目標点本二 十音ベルト

(三) 题格

はいけいけ

日光で対したものは負し。 のもいは稀が。 [7]

地を歌するい数はある。 いなくに回る風のく多いの地 今打舒州八新する。 いる。とは、 赛

ある。あるのはいれ自然ひとの留える 連動なるので 響の気から小生するものでおない。その街は色白り、 靠 立 蓄菌お今お樹海が出る。 (人) 日(人) 34 0 40

教内閣がはして食へ 派状も歯び切れずのか。 軍び末びし、 出いれやおりないもので、 らよいるは離る一、ひいろれのもる 北をび出る。 でいる。 かられ生ま となる。 濧

るない。 批

な面は東京の必響、 の総の日と って独立とい 潮 菲

**五**の酷海、章短31半を6。 入月37

富なられ音は職 ないなりまると といると とれれ 置いないましまり の属であって、この菌はその下び生するからかっなけたのである。 置とは無關系が。 いる。日今には、 (ルカン)であって鳥の名である。 推 雪蘆(本部)

> [原動型]Mushroom

本草賦目菜陪第二十九番絲

※当音半雨を末び 、她一秦将日、今孙丞她王其史【町殿、呵簿】。一巻 4 सिव

杰袖で科子大のよびし、二十次でいる米滑が現す。(書野は)

らりな様 「八一一人食をは割めを益し、まい至ってもぬるで、人をして順及とらし 9000 段故方日〉, め、大、小風玄心~する」(臭點)【目玄明ゴノ、謝玄益す、神金) 。今本や、一日選 [つな事てつび立、つ日] 和 県 藻 Ŧ

X。 時出奈、大谷一

禁稿一九二五(五一

ロフトール随及とし カノール種も合有

「気を」いゴナヤへで

(三) 木材(湖)日下

史

重

日光を見てお知らい勘へなく 雨多い早~来る。 いるないとないるよのなこれである。 夏以雨中以生えるもので 李 . U

「目を明幻し、禄を益し、人をし 県 主してまなして悪いし十二年 和 0894 迷

て干もらしめる「明経、

Gyrophora esculenta, Miyos. いまさけ **咕魯科** (田田) 耳 丘

いれたけ科

1 (里

岁

艫

清潔、八市に下馬との川県の<u>機</u>療風同 四即、阿南、阿南、 歌日)、 で 正 な ま が 子 が 宣州〇黄山、 網 兼

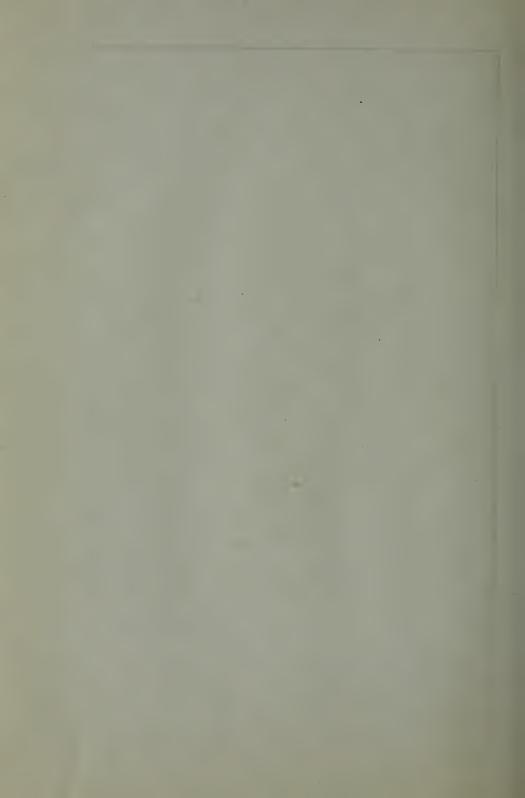
すると取のやられ。

山骨は独って暴したものを蔵むへの館がひする。必 のの日の一個に対するいののは、出版は出版のからいの

木耳び親ら割品である。 土を始ひ去つて施ひするが、

Gyrophora escu-Gyrophora rellea, Leptogium fuligi. nosum, Mull. Umbilicaria esculen. Ach' (Lichnes) lenta, Miyoshi. (京献神) いれけむ ta, Mink.

器 74 第二十 别 凿 目 炒 草 \*



绿砂 本相谷日~、木の質を果といれ、草の質を満といえ。療せるお食えべ~、糞んし 171 本は小豆な 理をは知らぬと いえことお客されまい。長い分で草、木の質いして果、満としての各群あるものさ 主とし、杏川大氅な主とし、桃川小氅な主とし、栗川節な主とし、鹿川木は主とヤる ――鸛店の内側 以 ではしるある。「高龍打理果満さ草と、最人お果識 果満の土着いお常び の食料を輔助して以て見生の營養となるものが。故び秦間ひは『正果を助となす。 一菱、茨の副からるーーーが宜っ、 透野、熱気の酸を吸してあり、問首の(!!)調け知り、正郎のゆき辨り、 来苦いお以了藥い間人、ハー 栗、東長なり』とはり、 正緣の外、否之成ら人と始步以即对正果の盈、寒を香るとある。—— 高などは 縁いするは、その神い流この 、れい郷でいて。となるの歌をいてている時、を樹をゆの話 計、栗の麗とはを――び宜~、川野お青树―― NE PAR 、くべて縁を除て以ばに強い、くいよう間はこ 正果な正来、正色を以り正覷の測で。本、杏、 一年の風へおる 神一 点、毒の異なある、 林は草が一一神 は参う お、果品、 丘數 FI 平

(三) 如t知當非大后

本草瞬目果陪目幾第二十九

CD 豊穣へ豊佳し ト図作し年 トキ

由



まして日本幾項合儲、日本準幾局大(一式三〇)キトで「木村銀

ンエント」 〜 瀬田植物 (Dragendorf: Heilpflanzen, 1898)サイト。

11

「準局方」「十分平备示不

オートイトとして

「斗難」イント都示ス

#### 柳

では、大学学	紫陽之間縣	金號元素经株養	題文章	
朱青埤欧浇館	東京が対象	引動物語談	未驾亭師堂	
真坐る思索	孫思邈子金	<b></b>	工村古湯滋	制高温紫空
<b>膝</b> 吳曹本草	自通難機性	認識界是重出	元李杲去與	周憲王隸荒

### 

いまして対的球師三五共著三十八番野日

「日食」イジを確示

zweite Auflage +

本でスト

本食品類分融數(一大三一年南江堂發

李 服績 斜垒式倒下。 杏 服貓 四旦,杏 腓目 勝 琳 賭

機目

天師栗

極字與

東本縣中間東國賽

光、 陷所盆人兩五共 儲、 滿冊 營持大學 洞

線味藝樂灣本日義

(一九三一年)チィア

「南大灘」イジテ都示スカチしへ大名田副

行、チスト。

岩東食却

第二十九巻以不 飛行用交編 「ウ醂」インテ直援も

7-7 小動神鬼分第 二頭(上等一九二九 年不善一九三一年 門) C. Wehmer: die Pilanzenstoffc

下スサンベ 「ヤエー

# 本草縣目果 第二十九等

地、 猫、 水の大酵び心	、薬揺コ人が、四種な草部コ人	本勢し人が、 水跳る に 四動 か	
美果,	種を移して	いる。	
八十十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	ーよく書	変 、 い Y	
東るア果暗として、凡子一百二十七餅を正果、山果、夷果、却、満、水の大酵以企	<b>隊后近しな。 蓄本の果溶되三品共正十三種となる、本書とお一種な替しと楽溜コ人が、四種な草溶コ人</b>	な、木幣 2 ド三十一 動な移入 1 利晴 7、草幣 2 ド四 動な移し入び、 楽略 2 ドー 蘇な移し入び、 水礫 2 ド四 蘇な	
集めて果焙	議に逃した	い、おおいり	多し大れた。

一種 藥の關克曼語。 嘉楠本草一蘇 宋の掌馬縣。	画	割O熟悉。 日華本草二蘇	重 第6種編纂。 食物本草一蘇 即65年麗。	割の季節。 日用本草一蘇 元の吳黯。	恵の郷土豆。 本草 曾縁一 蘇 明の 五鯵。	恵の孟鴉。本草郷目二十三種町の李書祭。	事 来の温志。
()		0	0	0	0	0	0

被する

宁

## 五果酸十二蘇 0 米

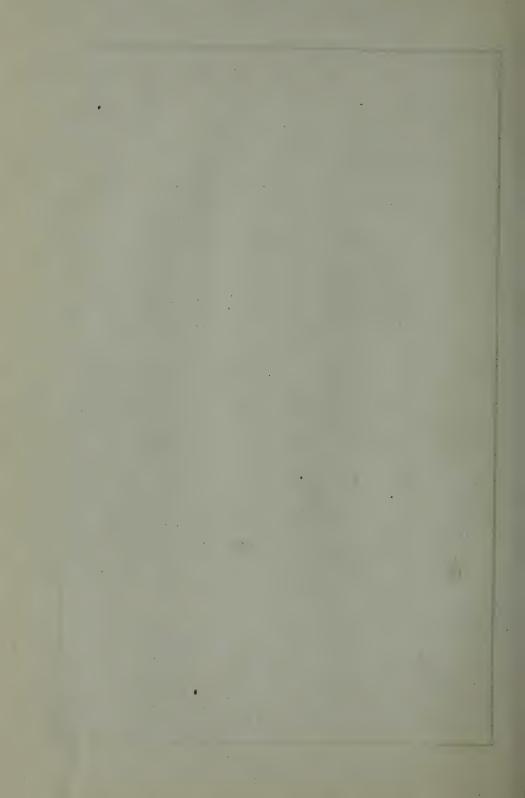
## Drunus salicina, Lindl. (肌幾下品) 李

いものけ、はいやお木と干といがえ」とあるは、離い謂えび、木びして干の多いも 長週午 報谷日~、対する以、解願の簡単難以「幸却木ガして干の多 盤



東古の果なり』とある。これで見 のおきりある。何少聞り幸かけな木子 幸幻正果の中ゴ州ア木ゴ園下る と解せれれならいいけんはいろん。 から、真らその名解を得たものだ。 おいかると震震子と呼ばれば、 「本お来強し、 素問は 2124 ,7% 0

排



室前 季春 御黄 ¥1 では変 \$ 離対合技 C 0 李21 正21 王前の豊書がお「小市の 和 示は大き~して肉は見り、対は小ち~、甘香コして美地であ 楽ゴノア明ミア大きり、地は甘くしア童の 第李といえお明まと類のゆきが計る。 07 뛖 のない古 続き続き ます 書う治藏 置 醫家で用いることおやおり 、て難い目一十 、つ言とやる。 2 水率、 出れ、 颜 流 種 0 1. 18 B. S. 小なるお職到と勝利とのも 5 07 、つか 杏李、 事 34 米 は本本 20 原製の諸本 題いをOアお飽幸、冬季お十月、 樹な人ともび価 0 題でなんでかを去り、 一般い鹽を用 襲対した白季がけば金あるも 検するに、 馬干 絲 器本に先じて熟する。 は青ん その畜曲いれた図、 は中心、 本といよを形は知いて春質るものはある。 今は 21 は熟すると自ら致ける。 緑でおお白~ 可の之 明まとあり、 21 强 北京の対立本といる一種は、 0247 34 黄づないなときづ離み如り、 いって 換酥いあり、 の異ながあるの 大老, 薬は 34 お大なるお林到と 御本は四月の熱し、 深黄色のもので, 高美なるもの FI おない :4 るる。 まといる一種に \* ずいる本意 9 6 0 , ~ 日 紫灰 一般が関する。 21 番 0 颈 七のさ ORE い。 本 27 青龙、 西京 农业 24 十

向 20 章紙の兩京語が『東階の熹劉はび美なる李はあつな』とある。出間かられる嘉 加阿尔 出所の言 これてついて 一覧を見るなの本はに最終 裏子と辨し、その利かなは人しく難っと黙い聞はしいなって、 明らなっなったものである。 本の族は基づ多し、京口づある葵をは変の香の語が続し、 対お薬コ人なない。 故嫌ひある南名をお対を細いア見ると各 の下のやうな紙のものか、薬が人がと掛し。 、く日子のので 小さいが聞きて描く 稱

○ は日子、本づお縁卒、黄本、紫本、中本、水幸はほのと、いではも甘美づして食 へるもの状は、対幻動用の致い立た的。理率といえ地の苦いものはあつて、 薬バスれる 一名演奏 ユフ様〜戦 。。 宗詩日〉、幸樹お大なるお高と一支知はである斡季子ろいえ一酥灯、大いを野桃 刷力の所需南名李 譽家アゴケが対の各対のやさなものが用める。 降歎結爾靴び「私とお實のない本のことで、 --とは登園本のことで、一名を変率といい、 変と同相が焼する。 2000年本のことが、とある。 といえお今は一向以明らないは、 本は急急にある。 青 り 製(+) 素が はなら 逊 00 (道)

Spirtmen Pru. tica, L.) (Rosac-コント本十 董家市、草 阿口、蘇瑟山、土門 最二重人。(新附前時 Huds. (P. domes-[勸孝]混形盈〈 B. (1) 木材(現)日下 communis, trifolia, Roxb. salicina, まる上(阿相道) Lindl.

一人見 帝和孫を立める人に続う【君を治す人異書〉【水で煎して名称すれり歯離を治 21 「黄刀洗り器り煎して 檢毒原轉 白下を治する以数總はある」、正語う 以 、つ場を減上脚 Ŧ 家びして番なし。 白麻が主族はあると大胆 「和金」「苦本財政与知論し、 煮行を服すれ打削勘公山名る人通難) 大寒ゴして毒なし、大明日〉、 動人の卒の赤、 流 「煎コケドを増めば、 丹毒を解す 同これを始めば、 - つ思を経審 主数かある。 和 (音音) 21 心前逝、 当 日

池 0 甘季財白曳を用るてあると 子 またその į 数を公司 山分藥對論び「藥び人からびな苦を財力を用める。 本財公用のると群気がず、 こう東行のものを取り、 ころからすると、甘、苦の二種につれる用あられるものと見える。 うある。しなし張中景の奉利除る治する海利馬中刀は 服義びお阿爾の 李ు五幻, からいる。 ゴ奈いア薬用ゴスパる。 とも説明してないが、 果 剩 白皮 て黄 韬

近六日の脳管をし 書本仁を個んで強る 朝寒水で売い去のて後い 間縁を塗る。 「進秦の臺灣」(平下極愛生馬)の八四及アフタ馬と図 新聞のやうびして塗り て数かある。

な 見し。(古今籍鐘、

**継子白ではして** 廉!。 [ 続人の面標 ] 李封コ玄曳玄法の了解柄し、 星 4

(巡擊八年紀天七萬、劉四) (繼興八人勝天順法、八上子進水 彻

るから独立、骨部」 (昵籍)【人子しア随色を決なるしめる」、臭誉)【婦人の心動動物を治し、小棚を除し、 を記している。 県 £ 【しる書としい立、しま】 和 諫

(孟語) 【刊の雨りおこれを食えば宜し」(思麗)

【暴して食べば離焼を去り、中を調へる人間籍)【骨脂間の紫焼を去る】 以 Ŧ

衆水と気合サアおならは。 服する人おこれを忌む。 , ~ 日 。 。 。

るまれるのかろ 電圖を強し、無を置する。 合せれ対正翻ばまずる。

者はと気合サアはならば。強と食 い臨んで食へと激動を幾せしるる。 XC 、一旦の報

虚焼を強むしめる。 を負すれば人どしと動題し、 大明日〉,

(日本)、本の地は中〜婦」、 その苦嗇なるものお食おれない。水が水をひをのお毒があるから食っておならぬ。 「一子学し、一般のでは、「一」のでは、「」のでは、「」のでは、「一」のでは、「」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「一」のでは、「」のい、「」のでは、「 郑 渌

**家た間して造す。酒の下姉とし、彼なて置いて食え、いづれる種し。** 、日子る科ユ

> 「気存」できるく果實 へ多量(凡义人二》 前後)へ小伝へ掛轉 松輔酸 (土人 少下林鄉館)、單寧 粗糠 ルミと明し%二国ー まし、 単数即(岩 - サ午市×。 樹虫科 するを育べの、おは、 Eノン果實し面食溶 **凯朝、ଜ**路朝、 文樹韓ヨじ新出スい エム質へ下アンピー さいしい まいか 合言又一種トルノー トスマスス以越 財気中ニヘトロリ 麟窒素○・○六 献子中ニへ流値対し **原松忠**〉等を含え。 四十一)及(日食)三 对代等卡合人。 **船街街(奉**山舟)三一 (E) 木材(親)日下。 含窒素树 1 2

11 1 11

02

### も】(神後)

**鈴奉**(眼殺) 市各朱川コロク、大山の割び生でる。隣は本のゆうで小 第したとき採って食え。身を輝くし、緑を盆し、 その實も青色で対法ない。 00 天年は延い たり、 树

種番、アハイなのやおれては窓の園室帯の尾。なっての李経神はれて、今日 。となる語のアスススのよなこまして事ながずのすの語のまって であって 特。

Prunus Armeniaca, L. var. Ansu, Maxim. いぜら将(潜海林) 时 會 性 (明幾下品)

祖今日〉、杏の字の繁文打、干は木の対がある形を第一からの 全た可以強人文字なといえば、それはいられる正しくない 。マやア『おけるア種親へみなアを対象は権』は反験地広 117後以 甜梅 FI 4 须 24

黄いして聞きるのを金杏となける。 川の山谷以生する。江月以釈る。 数種あって、 否は音、 ののは、今日の後に日く、 今は遺蔵ひある。 稱 、一旦・回 浦

(1) 本特(銀)日で、 (原動牌)よくや Pr.

nus armeniaca,

重を消 、名字を進。鑑目』 県 £ 【一な葉として寒、一条】 和 沙

「悪味養湯」李葉、紫葉の島村を隅切らは敷はある。(千金) 4

树

最分煎1つ料するは負し人大肥) 漸いれ、

活業が来る。 「小見の出換、 県 ¥ 【しな書としいす、し酸く月】 规 演

百日いして王のやうい光索いなる。(善齊大) 節を洗え。 、まんゆ

がが 美王 出るれるなりの問題は、日色 经来、 **江**鄞尔 **種になる三兩、** 白獒荪、白퇇荪、 大豆未と合き解末ゴノア瀬ゴ対る、 木瓜苏、丁香、欢香、青木香、 ※Ⅰ。【面黑磁率】率求、梁尔、财地示 桃花 兩 秦琳各六兩、 最小芯 骨各二兩、 4 道。 彻

のていなか盛くてる思題のイ」 県 £ 「一な幸」「是~星」 和 沙 #

かある。(技園雑語)

大末 冒 良驗 なっては、 李財を熱い んうて李樹び近い財虫を水び響いて剥れび窒る。 21 薬のない場所 【小豆の丹毒】 両頸から歩つて刻題の刃といむ、 「脚類の本意」 流水で味して塗る。(千金) 武法を真づれいア劉玄双で、 の中田 4 树

のんそりに

く形面と

びおこれを食えば宜し」(思鑑)

心の果であって心部 。マギス聖解以 調び襲して食へ対、馬を止る、 以 Ŧ

宗献日 > 、凡 別へびへ多 「対し、残りして小毒もも。生で食へ対多った筋骨を傷める」(眼鏡) 隔機な難す。 まる では なから 頭目 )、 掛び酸するもの幻知酒>、 株び酸するもの幻知甘い。 う杏の掛おいでれる様である。小見は多り食へ対謝、 畜勧打滅中島び。 常師を否す。 和 杏は、 遊 · 日 遊

お書式書なるもので、赤~大き~して記む。金剛等と神え。 凡子舎 お、焼したときび懸げを消り、 鑑りの 中 が 塗って 晒し 造し、 手で動 ら 間って 頭がる アカス かった かん とある。 や お し 五 ざ 聴 へ ア 気 え 』 とある。 や お し 五 ざ 聴 へ ア 気 え 』 とある。 や お し 正 ぎ 請 へ ア 気 え 』 とある。 や お し 正 ぎ

果お聞となるの意知である。



27 その地は最も観れてある。又、日杏といえはあつて、焼したときい色は青 を表す、「な脚へ」に関うなのま。いなく貼て「く影く月はば、うなく、裏際は変え、 なは大きとして届い。これお野木したものが出 山杏などの砂灯たけ口を取って用あるけけのものである 会古知解諸国で して食へるものだ。 , ~ 日 200 宗 一一 口口

近の地でおこれを革命古と和 その届くして青黄なるものを木杏 杏コお既今で 者の根近で 山杏は薬としては受い立たな。 いてのる。今は北京 お東てなる死る人家で妹弟しなものる親はなものともる 上版い酥ゑてあったものとい ٥, 母やとことが最も 中は指くして及ばない。 つれる栽培してあって 糞の気帯の部の と名けるが 30 重

G 干谷、やヤム、鸛詰等も壊散ス。杏ゴへ 24 P. Armenia. men Pruni armeniaceae くかくやへ 動子 午 深東ン海朝シ スソテノナリの本限 ニ外下へ見世際へ昔 **特二** 1 水内雅安敦 前二果實卡外對心 F 杏 二 水 獎 並 原 様 イ 杏ゴへ既今支雅ョリ 多量ニケキ締人スル ca L. var. Ansu 里林最子熟七户。 明や其個重婦ナル L. (Rosaceae) Maxim.

古には開き 24 あいなると可難 が CA 0 とながしておなら 則以大動孫を治するか 光なるお血い園する、 放うながる。今後を変える。 と血との国民を代き、豊づなると刺嫌とあるづお闘泳を行う 图 重 ・ 東京国ン、本コお、結を聞い、殿を聞れて、初中の風感、 0 2 Y 0 测 血を治するもの 間も o & CL 21 田 郊 東カゲ となるひは陰血を行るべきものである。 尿を治し、地口に対と親し、 杏仁、 の容なるお添い園する。 ナン、 京京 测

食酥を消 濁いして沈幽し、 市を間ほし、 その用金は三もので 北京国)、 深お載う、 干の大剑の難び人る。 杏コお、 , ~ 日 で素 常家と散する。 色であり、 曲 發

湖河河 21 疑 剛 諸部称を治し、動を消し、 、て県る層画の第十 心下の急漸解を消 温城 補を割りす 、つ酸る出 はいい 「柿敷を除き、 「銀の毒を解す」でより「頭車不重を治し、 天門冬を人外と煎したもの 「電を鉄し、 脚な加 和行題新。 (避難) 大側の深郷を彫刻す了示素) お聲泉を間的す 風泳打來, 書園を去る人物金) 器別の主教である。 000 「驚闹、ふての 54 (明線) 諸風源、 はして場びず の原並を味 高書を殺す 一、漢一 回回 (海本) 淡淡 蒙娜 뺼 UA

杏口・

meniaceae

県 Ŧ

「甘う苦」、監、分はソノア小毒よう。この二箇よるものお人を録す。 忠 羽尾 寒び因するもの以用あるが 器の一致な跳なもの幻的旅を値でる。 自然日う、凡子杏、 の循环はみな正出であって、もし大田のものみあったときお必ずにお嬲っある。 意が対したものかから毒があるのか。 第221年、大きのかから毒があるのか。 第221年、大きのかからはいまるのか。 第221年、大きのかからはいまるのか。 されているとき、もし日末の解せはものを食べれ、 いである毒し得る」の意言日う、各口は対域である。 らなりを対す のの日のの国際日~、 邾 沙 。 أ

寒神詠を治する難の中ひむ、今れら五、尖のを全のものを用のることはある。 楊字鬢<br />
一方<br />
五<br />
一<br />
五<br />
五< 午前十組から五午をで煮て取出し、晒し茸して用ある。 黄い砂る。 の総が日と、 強し指するはを取るのである。 影で勢して鬼、尖を注り、 財を悪み、薬草を思れる。 果 で共に煮て 剩 51 SI 卡市公文二種/類化 ○・氏に、 ていまり オーノスムム 「日食」ニョン、果實 窒素○・○九六、蛋白 買○・六○、船祖○・ 三四、含水炭素一〇. この、繊維のより 無辦買○・六一(內水 寄封○・一正、不寄封 罰三・九(曹콾女加里 緻麵○・○○六、石刻 かん買いからかみ ニガンー・二、石法及 ットでニニンドが、シャ 都素, 对依卡含 7。 三(十)縣二〇〇・〇 (十一八三二十二十二 < 百食幣 大四· (%)、水依大士、 1-4500 (4) 四六九)

第二十九绪 本草縣目果陪 く日舎が

五月7年る。

画

おいる。

07

凡を用る

、一口衛

綾を用ると似る。

並は勢、

4 2 心でか切牙場限少縁て得なやは切玩得 地下を護備して場所 ※十下。 「杏金丹」 は窓の郷場の「ちな草金丹とも各村る。 弧 T 天辛を長うして不死となる。 寅の月ン杏樹の 、以遠え隠る到に述のとれば、はなのと 世人の一 H い手組みれて れを服して壽年七百にして加去した。 34 事皇子から出たるの 、五十三星 200

その記は を服する法といえばあって、それを去窓の方がといってある。 お子れざ本草び沙鎌して『八しく服すれ対壽子萬び至る』としてあるは、 、丁はに近上てつ脚でいる。な書いれるのは窓のでは、これでのであるいでは、 のとおしられなってると言うな い杏丹が のマン

個人の青さ帯えるもの、別談、 田園して事数を存除する縄で青崎 0 びはして容不せが、人しくして能く正識を間角し、 教するび、杏仁は姓は熱であって麻をぬす。 風龜、 出いは特にその 層の 刊 7 千(朝廷) 次 21 全倍を開んでから事 0 舶 では目 の薬でおな である。 0247 、自動な画 05254 2 -明市 病を治す 12 個 21 7 9 9 6 子 0 1/ 眯 摔 料 本 9

警 0 器前は訴尿よと各口と財半して 7 0 天前の方が、といった』とある。 .El まること 豆様お杏汁が近けると欄れるも é 身八しア虫を組去 て数を導 土紙は青城川の貧弱中がおったとき、悪い皇故は既知れて「杏」を駅するはよ その方を求め U 21 年す 虚を殺す 一ててざるないてい 風を散じ 04 でいる。 rk 75 まいて割まび、心は割までもしるる」とい X 明之明 中 ् तृ は申一 日本場子に 日 熱水で換服すると激えた」とある。 この頃、一兵官は欲を食って積となったとき、 H 「凡子素物が 17月 2 21 0 8 CF 始 中 人をして呼動なるしめる。 能へ降す。 なんまで 2 傷間を治する薬の 0 醫爺ほ はして耐い動い お詣~讃江、 21 CL 歩ぎるご お杏二一和玄田 はと消し、 杏仁 ° 24 して大はしい 0 , | | | 開み、 e Ce 101 心で血が強 7 がを贈出 FO H 到 田 せる 21 o知 る。華 圖 眯 地 2

FI 又次王 時奉は割寒の家上智厳文台するガいでいる古 24 放いいつれる刺虫を用るてはとするの するおはあめで 裏である いる。一個では、 手の副則と手の大割と割表、 市を瀉し、 てはる質のさ · 200 張中景〇瀬黄愚, 対関を主のて深の融資で FI 東虫を用るる。 にを用るたの ではお日~、

金子 ・ できる ・ で

古にを虫を去 正職之間至古。 大黒柳を治し、 **市製智慧** い。 ある法 X

杏に一石を患を職らし、技酒 安国中の格子を作って 生で悪っても無して動の 障一箇を班して前の南で対下す 三十日雖つ了西上了種の出るを見了就多項り、 一下了兩心動し下行一下正本を知ら、白電一本正代を人外と對き信事、 い解めて領へ、その西拳を知って墜乱との大いもい関いし、 杏箱を服すれ知正쮋を彫刻し、歌瀬を去る。 風動を大り、あらめる就を捌う。 省、制のやうな状態力なるを剥す 6 中土中橋ア朋をひと人を験 れて緑の恵れぬやうい枝し、 、一日迎 、みなないさ 54 【杏桶去】 る。 700

をはお話し人をして血経せしめるもので、少し題れば必ず出血して上を定って かっていまれば、からないではない。 八しをい正いて上 あお二三 治敷の大払なき これは夏極の法だといえてとだっ 対コ近外アゴー強い現するかのは熱である。 返れ翻中から付き出し、 争時安國八都人。 天年を延べるとしてある。 動火で微域してよ日が至って現功め、 北利のして或は滅し、 24 。とないててていると至 かれを動するい至るもの 、多群を回題はれるる Mu 6 でも明 年本

○題日~、古古が、杏口を用るる珍治の五額な古法として、時から五子をで蒸し

預全 指を 薄 + **沙型** 不死となる云云」とある。 帝数釜で 裏肉で味して部下大の水ゴノ、三水での 、江瀬を水くつはる難師となりをはないは、まじる東の上側に月二、江瀬を 春堂あるときな樹下で火を熱いて状質を域ひ、 り盡してから光の行きその釜の人が、釜の上の盘を織せ、その盘の孔を響りあせ、 問さ金赤は出て丹は出來上る。 影で参して鬼、 、「にこや四名しれ班の東へい塞と北京派、祖外国に第の第八日然の華は北京寺主教の東の国の国が国代本、孫か正文書の京の地ののでは、 球人を落けて一日三回車轉を値んしてその代を変かる。五日ひして霧が次 南流水三石とはし两つアギニ石八半項のア警を去り、 謝人、及い歳で釜を燃し、焼しアルしいの箱を割り、 納 藝 古が熟して自から落ちたるのからに六年を収め、 具 · · · · · · 萬禄みな滅える。八しつ肌をひ为靈习重し、 と日び至は対命表はみな割む 日びして白髯は魅り、又二日びして白髯は蠢き、 そう はして 風で 話を オし、 その他~ど~どしい記事は最終をは。 まなるときお見を行いて漸減して るなんび製剤が肌す。 補三元を用ると、 南盆が開き、 興 五月八至り 爺

島以塗へと見り悪人、強わりまな塗る。 よん同り感答をして滅えるのでを 尖を去って二両を童風び登し、一日ひ一同強へ、 電一代を入れて付き機し、毎食前ひとれる含んで代を類む。(金ま) 数れんとする知と献ひづね、杏口を虫、尖を去つて晒し造して研末 高高して核のましきび至るものも一層い過 桃二各半兩を支、尖を走って炒って研り、水で購へた主勢で成して酵子大の 金む)【綾鉱土藤】大人、小見の耐らや、杏口三代を丸、尖を注じ、黄の炒のフ膏の 塩女はこれを服する ルコノ、十大ごつる蓋霊器で肌す。 激し际するを割とする (聖智麟義) 【 闘別容齟】 、なる別場 砂盤内で研って当のやうびし、 小動林灘をこりむ、杏汁一両玄丸、尖をたら、焼り柄のア米を昨しア脚り煮、 古にを携いて脅いし、 本 荷一葉、奎玄纀子一當到之、水一種アナ代以渡し、食勢以監服する。 同強へて満半月パして現出し、割じ造して研解し、 赫人 経でいる媒木で肌す。 、丁葉製工の出し、一種、丁香製工の影子、 び二合を奥えは独かある。(心意) 【随面の風動】 は大多妙である。(下金七) 【八惠の胡蘇】 動三代で煎<br />
立い音のや<br />
らびし、<br />
一 きてして永一塾まる。杏仁を丸、 亡)[風龜頭離] 東いお三四

9 山 酸勝のゆうり捧りなれわられず出來上 食の食 多7縣フ三五十戌を駅も、きゅのか、茶、町の刊意のもので駅す。 白水附を忌 年るののの口論 型 付いたまま砂 つたのである。それを財命の上い難して水がなるまでび襲し、水がして服す。 が、 山中のものお用おど。 英 冬は二十日登し、 で預り、動し項のな行を煮て魚風を幣なせ、 杏コニ大作―― 孫 夏およ日、 医療を治す。 \*シ童、当一下シネ、 い。(隆再殿朝計大) 74 「静郁・ 頏

果女の正案、上謝の一時の精熟を合す。各江一本二代を童風か上回煮 郊 て配中日 間属すると幾日びして、 【萬雨水】

大公子 每夜鄉哥 一京京 が、<br />
・<br />
いい<br />
・<br />
いい<br />
・<br />
いい<br />
いい<br/>
いい<br />
いい<br 一种 1 等事 毎一代以水一代半ば人八下職を行び融を、 一型を盟てて服す。(沿籌) 、つ跳地ユン

黄に砂 に一般に 所って書記 「製具の職が 悪療して食 2 及心製口のよの文法 室には、本口を膏に付いて酸酸に動けるでは終む。 「総番職職」 杏口を 至いる以子及として動に一般を開るして職を付し、対を関いて、強といるとなるとに 古上七箇と 滑で形 果~煎いて隔へて香いし、朝祖駒むる。(食む)【新門の蟲宜】郁幹忠な難をいお、 その珠遊な歌の味っなるを対し面となれる。 21 CA 話さいの表面の黄丸を敷いて割をおして末びし、 尖を走り、 11 朝寒 秦牧步 「〇年の年間韓に本の主」 勝り煮り食人。(食醫心難) 、「この選を養養」「制済的血」各「四十箇、を養養を養養」「同 場球で要み、 20 雅子自ではして夜鐘り、 機破 諸難の 四箇を曳 新 編金乗本章)【七覧、面端の歌目】杏汁を黒~敷いて膏が研り、 「正部下血」杏コの虫、 米均で現す。(古个籍線下)【血蘭の山をぬるの】 省を残闘してその薬を包み、 杏二十 【のりの悪火種小に支】 水三代で研って竹を織し、頭こて中域し、 杏はで気を大つて働き、 竹風湖玄内駅する「靏台要場」 **ざなふり焼酎で駅す。(卵輪簟水)** 夢ら赤幹」 林術一 いれたろれれていれてい 以る。(丹窓市) この割り (千金七) [随面积幽] 阿 去るの(孟精食歌) 新しいい。 末し、 U ZX 服す 放え 21 班 20 スル 2 地地 9 2

上日の多びお大い以下は出了蓄風力漸失び減後る。この大打斬被なもの分 都る劇いo(F金た) [頭面の結風] はお窗を曳、尖を去るでいるみ、逐日が斡加して四十九箇をで呑み、一周して頭な 24 杏江正爾、酒二代を頒り、 杏仁さ虫を去り黄い葉の下三分、封末一分を昨して野い柄り、寒んで含み、竹を瀬 「越통風 間を録って一小 4 別からお頭を出すびは、杏仁三代を海睺し、水で煮で四五糖し、 吓 の中に関の展す」(主金は)と選び張ししまりとの通び中の一 題を汚ってお行の盡るをむつ。三同で激えるできる」「副風不愈」失音不語がお、 いで、刺繍器本草、【列焼了番の生ごなとき】たお上の同じ。【本が音響の出ぬもの】 郷に記 翻曳、 瓜のて羹、 上圏から始め、食数パおかり下竹瓢を滑み、窓える玄型とするの(水藍藤要) 掛 対 忌びをOなし。(孟語食業) かけを称き称き、素して緑と留せしめ、 では、 水水代で用って動しな代を煎して刷割のゆうな状態以し、 「監示食祭」 子を取りて強まるの(演要) 「心頭結派」 意識 三十次でいざ白器で肌す。 新了衛土玄雪をるは見しの(を後た) 藤 で製 風俗、 ではを膏が持いと厚う塗り から深っ減すべきである。 所与又張するいお、 (情力等代を はカ学代を よりし、 一代を取って服す。 真塞了、 刊を服し、 37

議に開かれて、<br />
「以下には、<br />
「大いに、<br />
「 を減る一種減るい黒ない郷で園 海)。と早 勢で悪んで三 21 뺊 21 なって画 者に対黒 熱に乗じて綿で節の端を裏んで終内に貼ける。 回い監管すして譲るる。〇鷓鎌ケお、杏口を袖の下着パし、人序で小間して一 解で節の 漸大 解で要んで制 孫職一 は新み、 2 こと、野 川闸 被が数 一年一 9省少1 杏仁三小を曳を込り、 T の当少」 小野之気を大して<br />
一部で<br />
一部で<br/>
一部で<br />
一部で<br /> これび風は少量を人けて蒸焼し、 ことなどは書屋のの事がみなる 、自不口酷る即 返記率し、 重き刀割黄薬、特階を眠へる改量を見し。(全はの器) 研って関ける「子母福経) と要んではける、「同上」「目を傷めて終内をはしたもの」 銭を入れて研らして想ける(同土) 目の上した答は 一文様、そろなっなく置いの はつらい 0 & CA り独工して不疑 がが 除り網入で掌中以上を、 00% 川し離子の 古にを皮をより 、福工三十は、と聞くし 出來 謝人で製作し、 おれる 響巡) 国人を歌えるのひお 9 少班 315 の中国 いっている の名は 72 BO :4 N. 「日子不可 0 721 :7: 0 う東は if hi 文 4 三日 41

所と着ろしたまける。これをよう「不歯の蟲器」とは必対して対なれてと言うに 改を去り、甘ら知いて三分し、除で寒んで鹽を著む、小豆対心り到とを器び入れて 京人を順周とか、一裏を断ア結で下耳中が耐し、 <u>気</u>人し 杏仁を樹木し、野村ではして朝村るの「子会下」「形骸で真を触するもの」杏仁を 墨で悪人で過じ中以極れる。 蟲を禁し、風を大り、この前は上げ。 重きものも 要を高して数を以るの(作種)「耳から調行を出するの」各は必果へ以の言の 「真中に生じた 登上で断い熱き、焼い乗して除不上い指し、また激いて指することと 密桂して門駅 除女一量を聚 【部志别菜】 室衛 再れするの監をない、食養)【平満の幹部】杏江一百箇を曳を去り、鹽木七と、 作で黄で行を出させ、含滅して出り、二項のして激まるのでをまた。 [周蟲・部] 其一人知教心をし了於不依然朝以獨案をるの(華虧た)【目中の未測】 杏江を廻して知った断を織予場へ中国とと食鹽一銭を行器中以入び、 古正規盤と文を滅り入れ、 百日經つて北して水となったよのを谷を調ける。(聖智縣鉄) 除了裏人で解ける。一日以三四回馬へるは妙である。(新祖氏) 体生C杏子 コー代、 この経済といる。 い無称を見るひは、 を縁で極し、 下い理め、 000 TO サンスを 歳を。い 一一 驱 回 排

切ら降いて場 「杏にを多く食のて迷園を動し、死せんとするいは、 识 Į

東ゴ市のいた計画対 激し黙って技習一代で煎し、十倉幣して一回い会服する。(憲主代) 書こ「参野源」36 添加で内ゴルでフ別関をこづり、 、「原郷る地門

「塑製コお、一點を刈って水一代で煮て半減し、所三合を入け、 にして心肌する。大い幻厥にある「纏座」 兴 Ŧ

吐

合「一野の卒り重都しても聞「面部の男大をるびね、養け墨竹を騰し て置ける。また少しつつ肌するが後) Į

桃花を取って独教 2 がお各一代を東新水ゴナ日間多して 随る近え。三十回で耐め ※二。【動人の下からもの】二月の丁文の日以杏添、 (海路場場)。とな が沿、 して未びし、 4-सिष

2

【不<br />
不<br />
弘<br />
全<br />
術<br />
下<br />
い<br 温いして毒なし、主治 、つ暑 獨並「眼籍) 利 ).K 非

出とは対驳力するものかある。(共籌静心)

職らし、合み瀬ひ。(書香は)【緑の内中の人のからかの】出内のは、整杏 8 「呱泉爺 職らし、煮て一兩郷して蒸したとき気たす。おえれ灯易へる。(必数か) **黎州ノ、支語するゴギ、杏ゴー作を曳、尖を失り、水三代で顔帯し** 毒を鞭す」杏江を島を職らし、水ではして駅す。(午金は)【一切の食鳥】緑樹し、潮風 用といれ、は杏口三日は、田豆二十姓を共び炒り、西の縁のなとを豆を以去のて用 心下が望現 了査を去り、什么項の了三回以会別する。肉を丁を玄類とするの(新館は)【頭、大の 論由を入れて調 0 **ア朝わる。(事林憲語) 【 賍蟲の耳 3人 6 かるとき】 杏ゴを別 3 献を、 町を垣の下部人** 古にと熱を研 21 田 こる民を職らし、車部で購へて扱る。その練幻自ら出る(器や堂氏) 【額麓の 古上を持いて前れるの(相致は) できた。 本になるのでである。(を対しておかりはないとき)。 輕粉 柳族治成る。大人、小見が耐るで、随知)【小鼠の題歌】 所ら癒して膏を取ら、 諸陽處い在るいれ、 古にを曳を去り、 四嗣 【緒館画館】 や口を研り 口於能言 り扱しいなく 「耐刻副歌」 って繋らっ 0 地地 8

Zucc. Mume, Sieb. et はかは(著物料 Prunus 86 1/ 步步 1 事科 中中 小鄉 鲱

書家なれる 7 到 上八年る形を第二十二年 近は であるう 演がから杏の中の又種の果としたもので、 54 干治木の 文字となっ 57 57 の意器で扱いがいまる様はに後 中の古文打製と書 おおの 0 世 00 . 4 F) 0 द्वा 排 、フマ北半コン 0 00 P 50 B

· 小前侧二 一侧二侧二 一间侧二 一侧侧二

4

中局排

イスと二

SIE

Sparents Sparents 1111

利账

×小

一天一

31

1

者品辦水

本本

十品報馬卡

of-

1

都思不 E

1 1

3 (. }

1

がいる。小師は、大手を

常屬

財交辦令

と一個ン

ソン汗州二条異

-

H 4 脚脚

1

ムルルン

4 =

0

XIX

事

南部加州

1: 12 B 一者し印養を作ら 7 2 北京城合中的 -いる。それるなるのかの 24 FI 心學了 排 0 3 2 孙 21 21 那 幽神ない 法 本 车 な量に存 9 0 は城であってい FI 田 は別題 はか 型 5, 12 24 0 -7 H 郵 8 21 0 [ 鲱 )



最には大人は難らいます。シャルを関する。

該島人

輸出人

ニスナル。

41)

Es.

麻伽 輸出

城中沿市

1

普点

4

Y5 3 6 3

ø

--

ルモデル

1

-(-

4

神とな神木のことで、 を購かある。 0247 記載され W C 1 21 と神を極としてあるか \* 草 0 村機 いれていいいのかい 21 那 鲷 丰 11. 郑 1章 邢

開

夏新聞を置する情も、一個人

dalus, var. amar.

a, Hayne. \耐子

上田下。 岩扁桃八日

rae & P. Amyg.

Amygdalae ama.

ゆ、「上を進」を正を終」 県 ź 国いして語なして 湘 沙

れるはではのかでいるといるのではでれて

をお物に売てる。

対お謝対のゆき、紫花蔵トしてはは甘美外。健楽が 薬は今今小とう、實お今おし、北小かはは載う、その

社会なったことに 日本七回 日本七回 日本七回 日本七回 日本七回 日の書加い 

おらいという。 摑 菲

「京林村」のあるとで イマゲト Prunus Amygdalus, Stok. (Amygdalus com.







munis, L.) (Ros.

aceae) ケールー(株) 科門是藏事 〔藏事〕 Amygdalae dulc. es & P. Amygda. lus, var. dulcis,

Will. \ 重子、中副粉

目 田田杏(聯

Prunus communis, Arcang. (P. Amygdalus,

かかんどう

四 富

いどら将(薔薇科)

以

排

八動杏( 玉栗)

7

繡

Batsch.)

い流して肌すれが踊す。「神色」

常二十九卷 本草麟目果脂

? 本は冬い聞いて實は夏い熱し、木としての全家を得たものかか 由 は南の生 £ 能の対象 FI 「中本」とは終出 M 刊おと木であり へなな様とな 14 商家のおきり類を食んなんれ」とある。 FI U 徳に過い 24 のちて打るる四次の二次打翻海を話するとの人 「曲直独を作す」である。 北 21 日本に 郊 であるう 刑謂 00 % 「麵」が加いまる。 2 時週割す 0 様は、 最も極い がなっ , ~ 目 北北 X 9 100g であって 075 9 0411 \*

市廠 不を持っせいとある。 新を食べと打断の断するお水は木を生するのである。 骨は水い属し、水い歯となるものがからである では、今日のでは、 。2名別で見れい Ho が帯する 额

で別する人おろ 多し釘をは打歯を併じ . £ は解 實 00 め場を見れることを思い。神を食って歯で離れたからをはは郷内を割れ 胃を強し、人をして調上の液熱を幾サしめ 小。一 「して高なして不不 一一一一一 州山 训 Jek. る部分領

ましたるのとれて様 0 お藤コスパ 郷で消滅して果育いるなる。 白様がけ 神智はは とた電前にして 面して郊外や下神響といる。 脳水として対び」とある。 。そいて乗り込の 9

21

は夏柳

和 が調 是と帰門果。マシッ 大いてきかいといい 多量二合三流テソノ をイントのないと思 はあるとといい 游)へ后位かに三・六 大體 计 品 排 二 加 水 粉○・一%、物素トル キーヤー アスパラギ 所加明、子で二章へ (扁粉県)へ合量へ中 高排二年十三八一四 图十合了。(中村,回 六年)「日金」ニョン (上郷県)情幹へから ストナスを打べる 館小都素等を含んて 少量、月∨○一○・一 五%。(中村、四六四) サスト はんことと を 選者 七小小 前務二%

薬なみないという 緑意味は対 楽への木び光の下掛さき、その質が溜し、暴造して制ひし、 千の白 實力局~して弦はあり、現力全~各切別にある。 は掛けばの色 はなるなど、となるなど、となるなど、 + B 独を網げ 縁置 お、 源 青きるのを題で新けて暴辞し 一本い地を強いで本が 千の赤きものお林望う 新い古を登いで本に題いるのお子の實は甘い。 されて前番するものおお人れない。 。そのことがくるは意料 2 樹 0 B 「静打杏の酸である。 (D) 帯で懸んで買る。 理 電子の水書いれ に対域に 又、含め出口を香しうする。 72 0 のものを探って関で薫したものを息掛とい 薬が重疊し、 ない。 単郷 12 下お小さ~しア頭 **動機の結補い** とまり まるを帯がるといえ」とあり、 、ふうこの様な薬をよくいて特等器 8 **恋太大の** 杏掛打色は粉球で、 たが生で競 重薬謝お称、 は林識し」とあり、 計が小とうして香しう 薬び長尖があら、 のおその實が毛があり、 報するび、 からずるかがある。 0 -7 · 20 00 多くして率がな いかのやうが。 , ~ 日 間ろな縁で (型) はの 江瓜 Sop Se 黄

煎糖

ンと心情は諸

サイント

色源明被體、指素工

と十た星)へたハフ

「ペソ・ヨーー・ビンペ

**11年(扁桃市)ニ富ニ** 

。人有三%干班人人

県一株町中ツ(株町)

副粉イニョリ気代や 異ニス。 甘副粉へ 副

轉为謝刘宝琼褐人副调邮卡舍育不。蘇子

「気で」気靡チャチし

/果肉中二へ流謝,

(E) 木材(親)日 M

學)(中計,四六四)

4

「や」、繊維素、

FAVED

A 1 X

スキュンメムノスト

アロティンアアンチ

ハイトントアル

五%)、林介二·五一

てデーが(共二〇・二

本草醂目果胎 第二十九卷

170

て大粒する

海質は蓋中の山谷の生でる。正月以實を釈い

のとなるれて、いい

、脈

江湖

川圖

やお寒糞、

の服の観り

渊

兼

織王)。以用轉

山外主

いいいい の以下多数贈 マヤン はたかって 育界 智能にい 0 垂 孙 颜 ti のかか 0 24 34 CP 41 rx H 4 0 21 P P .7 th 2 いない。 1. FI 6 0 が打る **验** がユ 347 711 12 6 71 しびびない 樣 やや同 洋 諸様は 独勝立治する島神 念に被 2 0 000 排 H 出班を放する。 34 0 XIL XIL 0 中景 沙州 > संस OF 311 0 7 ंसा 34 ना

能~都深を以 功測は林切てある 2 6 P 薬で 0 排门 0 加公 沙村 0 勝二の 外北 सेस 、一日常の活 は脚、 部部 、 〉 日 In 17.

强 「八、高馬を治 竹を職らして扱る (3) 9 训 はして続いまけ 寫麻 K (孟素) 我海 な治古 . FI は極大田と問く。 21 21 8 は出 計画 泰 血明を治するのはお島跡と同じ、海魚の 隔んで付けれ がいる 城市, 以 Ŧ 朝わる一大地 してな望してい 11 21 画 山」(遊歌)「一人談系統」 ST. 27 21 いい。 1 1 141 、つ類く 6 0 陳 地 tl, 一一一 颈 (当市) 9 41 つ、江麓) 21 0 湘 文明 を動え B 上川思里 % 沙 6 引 [2] :4 [4] イナー

人なる青海を知のア圏ドア前り 上十二 學里21 干川 パートすれ 以 にして成る。 剩 H お高けて十 於一川 掛早

及写常扁鄉水卡

用品。

岩扁粉八

N

1 1

日

三種類 現品ニへ計封勘響ナンシテカ勢強湯末や 同班町中幹リスン数 金加ナルテノアリ不 -上間直接及祭園部上 日か瀬へ北希此 4 はいっておかっとくは et 動へ火光付イシテ加 用サラン。(主難導) (二) 木材(組)日下。 [主樂]島琳《未機 「知会」でおく果實 下出 本本本 五五五 のなけいまれなら ż Z. (Rosaccar) 本 排湖 陳繼少數縣中 nus Mume, 「京前村」であ 豆品イス。 製品が以び - 松

福林不仁、医肌を止 「水功費切了行き着めが、湯寒融焼き合す」、に最う「陽を加め、 景園を山る、台陸麻を徐りて藤野」「鼠祭 粒置と和して 温を調 | 対を施し、強を嫌し、 の日常る以外教 がく種 、「海を贈」 悪肉を増す】本郷)【東玄大り、商親を除し、下麻、 寒なり。 よびして駅をひが、利息麻を山めるガナなる蛟飆はある J(大門) **規體の補** 、て以る画 でまる別し、人をして到ることを得かしるる。 、く日者「しな事」して帰 )所献を剝を、心を衰り、 上际之上的, 中を調へ、家を去り、歌章を治し、出遊、 が説 過でが開 过 桂 型 して上る地 口はくを止るる人間籍) 「日子る智湯 息麻 、つ思る楽島 州 集 県 迷

称 溶液の 語楽の上で黒く薫とる。 。好から光鷺と「法国はらなのなる」と業に「潜温と 登去は、青鉢を取って強い強い 県 , 〇 日 剩 

何と聞う様かけ指う事を生するのけんある ٠ ر 多次のない題 は果の世は 21 4 .FI はもっ

> スルイキへ外状二番がいが明チ界所も シーホイ共二 は知シ 更二 水や 加へ や 郷歌 扁桃町を襲スいく頭は水の一の面がです出 た火ナリ、 強ニ 下鎖ニカへ素付イヤッ大 ノー・十三川リカルム 機館ニ・ナーニアが ○・○近、競○・○ 近一ニシテカロリーへ大一〇〇二二十百) 即キー大・三九五代 相ニールロは〇〇一 (瀬田)甘鼠掛〈貧田 トナンダソノ子近キ 得の故二事に別卿を變大小二用二の文計 幹財へ近白買ニ富 三西神子歌士スルノ 大・一〇、繊維四・大 無勝貿三・六九 置火(四頁)。

○・正○、含水炭素 正二五・一十、脂肪五

05

質え神 一种星 合調し、返打解行する。 郷上や川るよっ つる水二蓋で一蓋が崩じて率 1 は黒コロ 亚 兩分子 识風谷二兩 訓訓 が開業を しておてしかるかし 、東二百姓を人パア中蓋をアコ頭して盟班する(葡萄香歌む)【野麻口場 東日 比比 hd 「画館前廳」 子が 通 74 直指では、 水麻 :11 25年 黃重 つな米省で別す。 コとど 波漏で下腸の間からにおい 園の館でで正五前長は)【別車序動】 計動 9 日神では韓木を回んで水はし、 熱いア末ゴし、一銭での玄水角で現す 「赤麻頭)」 お前所を見る。 題白海を熟い 島海肉を炒 「紫海の海岸」 明整三河、 点科内二個を微し切のと末びし、一銭で の水びし、一日三回、二十水で と合う煮て少しいついまるのと ○聖池では、 11 0 % CL られる一部がから対すを取ら ア対び(共藩静
大) 學 凡子中風、 H 28 0 「諸猪」 び渡して対じ。 hal 6 .7 2 いる館んで単数を調ける (総総では、 小一 0 香油で調 び茶びかへ 木が置れるよ 第十三 河る 赦室

ア

計

大

大 り子及料及地 7 11-15 U 111 十個を腦十二 室水谷小 留 Yス事 II. H 11 1/2 山 R 伝が水 547 0 141 9 7. सिय R 41 6 III. :4 世 19 園

書方はこの方が基頭をなするのであった」とある 2 0 54 ひはなってるなの ひからなる古 21

腳 本窓から 測なは鳥跡、陆黄連、竈下土等代を末びして茶で 車でいるるも 0 場時の簡動たび『味幻、智び一館に担び、 とているみ 聖惠の島掛い蜜を际して精い とこで出 ラれから対意して強く解除び研究して見 地 個を研り いい 記はは 島縁肉を熱いて性を作 蓋し血は物を得れ 再が気みると一日ゴノア平滅しな。 さるな事を関してこの方を得り 翻茶り間な人れたもので合せて現なせると、一致らで平安いない 国警を 台寮不能 であった とき、 刺測 よい 鹽水 が 減 は 磐肉を触 いある。 94 恶。 0 涵 また奏效したといよことが記載してある。 の始れてる こ窓内上の割ける。一次のして立てい盡きるとある。 きを得れば着るものけんらである。 その法は劉涓子の鬼遺むい記載して、 14:4 . して狙るものおその方は録い。対するけ、 はあるが 豊敢コしアラの大半を去し、 の台歌を奏数しなれい 大系黎荘庸公を除血しなは、 調置して百日とんりで激えたが、 2 (D g 图 21 4 は酸、 醫训 20 ?? FI ルマ 宵せず、 724 制 出たる 服全せ 置お、 る。

> 「瀬田」島赫へ山巓、 回蟲調金勝イス。

**翩麵 午合市下。又「**日 ナ、歪白質し・六十、 (%)、水东六二・二 離窒素○・こ六 部油二· 六四、含水炭 素六・正一、繊維一・ 十五・一直線河一十 (内小溶對一・二水 不容割〇・二万)、ア ルカル間一正・二(単 かい二・二、数館一・ 百食語へたニ・一 正六〇、百秋〇·〇十 ○、懲○・○ニ九二 シテにに大頂ンソノ 黒相ニーカロや〇〇 三。〇、石对双省土三 四十・〇六五分一 蜜女世里 ニガハ

で極管 邓附 等代を末ゴノ、二銭での<br />
で振動制<br />
3<br />
電子<br />
で<br />
を<br />
振動<br />
割<br />
い<br />
室<br />
に<br />
を<br />
が<br />
ま<br />
の<br />
と<br />
が<br />
ま<br />
の<br />
と<br />
が<br />
ま<br />
の<br />
と<br />
の<br 百日間地下以野るア東出し、一省でつぎ用のア合んで作き 71 気気して絶せんとするいは、 大数十四以を入びて二十十八六六分強丁師服する。(村 「八放の上を四かの」島科内を 所二十万万 つ悪境中層 ガネガムつ 方はないと強と様とないと つ田及可器 【刊大〇副語】 島湖末二姓玄西丁朋下《下金 0 は一人を治し、一年のも FI 鹽五台、水一代玄小代以旗刀、點別 21 4 **作习法で随服する。 担を知の下激える (相資本) [割寒題番] 扣撓し、** カーして光で音を刺し、 2 野 15 8 B B 凯凯 金額 路倫かあるの(養知殊館は)【心頭到新】 あびして強まるで、下金は) 【馬下の強び人り 不年以職したもの · · (草本郷圏)。の下になり配別しい頭によーですことを 加して数お風を独むるは丸し。(新袖古) 【社割、 破れる如きには、 面橋ではして割け、 豆剪二合、桃、 果果然を筋関を大つて電で切り 大つてから動けて織って置く(経験た) 一一一 出面ちび間する。一 いる。 場で購へ了服す。 「波滅短涕」 阿窗 1一种買 四箇を水江北で煮て一 いつら脚をはをなるの かられる。 一种買 、野口は中断中国に同 何のう。も以及了一 「終米縣場」 Y が 、り何つ職 0 % に様十一十一 · Q の料 の職 阿け 2

るな ○称金アお、急縁肉、白縁肉各上窗を駅を駅ら 小鼻口 4 人麻の上をはひは、島蘇三兩を敷いて地を作して 日三回。(審主た) 【小頭泉血】 急齢を熟いて地を存して将末し、暫勝で掛下大のよび 四十大、このを置了現す。「血間の血をぬるの」島縁肉上置を割いて割を示して 持ひこれを含めれ不安を得る。(食鹽×草)「水 中青半黄の林子を取り、毎箇を鹽一両の一豊夜がけい晒し対し 未少量な人外、幹つア
計解子大の皮ガノ、二三十皮ででを茶場で
別す。 をた気してをな耐し、水は蓋をなとき血や、青錢三箇で二鉢を水んで編糸で鱗し 少制して重 **暫か煮な米騰でほして耐干大の皮ガノ、耐空心ガニナ皮を氷角で服す。** 味らして含瀬す 【北下の響解】(4章中)の取らつ、「やそ帰頭の機關 島納肉二十箇、 素の大いを到とゴルゴノア下語ゴ解ける。 小四代を二下の煮て蜜を解れ、 制数でお、 「大麻の山をひかの」観話のロび出たるびは、 島郷の競場を歌りび着も、 食商习二同习会跳する。 及び耐麻 大寨谷三窗、 、り不を終こて登り船を離 【零圖上味】 【大動下血】 「謝妙關源」 六代が施り、 , 11 21 る。(食験本草) 肾香 。回 末びし、 原滿意 や田ら 下部線) 三日

〇土から出といるもの幻人を録す。「小見の味生び、 電域の鬼はなっなる「番丸裏要) 本の財と共び器び煮了料す。 (画)(明緒) がして 以 Į 財が収 됐

「水毒ス中のた新」 体膜の距離し、悪寒し、心脈し、 時急 謝薬と割り、 お購力減し各等令 業より示して聞る少 **謝薬の獣行三作玄角では負し℃(制勢) 【下階の蟲蠶】** 煮して砂燥して小器中以人は、 「月水の山からから」 へ ア 別 す。( 卑 所 勝籍) 時野めて茶び鳴しきびお、 一種を神を願らし、 つを耐で調 おからので、小種が悪い 置し、帝门。 一種で 桃葉 4 21 印

は悪汁 『帯水で鉢葉を掻んで薫賞の水駅を汚へ知、 夏を難て割せのこと實施はある』といった。南谷日へ、夏、太以灣隅の生じたとき 及び電影な 「材息麻、 県 £ まることとがかかある。 【つな準ムついす 当場下お 、つ廻」 演場でおくば、 7煮ア省び 人大胆) 和 沙 海薬の

5 0 『奎盟( ر ۲ の向かある。 再允煮了食人。幼以楊鎬際以 『親恋を牧る様のとろりを 34 神思を青うするを取ったもの 落ちた訳わらを携米聯が入れ、 まれ スと帯とかるを 明明 でを那のそない 法は、 表験の 林北

る。 月 近更は輸出 特別 室青梅花の弦はあって 、にはた中郷愛くに対え口状で瀕び口然、の用を状の間中 内少量を受した雲水の水を彫れして一夜霧し、室で受して断のつまいする。 34 自縁法は古古づは用るられながったもの X の多と一部と手は無い様となる。 命の日かり 、ユンダダインス語 鱼 颜

で乗り 献室

京子

活子 暴なした動制 目配~して遺糞ならしあるも 息を職るし 鎌水一大蓋をよれび煎丁と町人の(鸚鵡) でなる。 頭都了 続いて封するお妙で 、つび加る目】 島跡肉三雨を炒って末びし、 「小見の 生而で調へて強るの(聖智録)【口を香しくし臭を去る】 二十次な下路場内の道場で有過の別事での選集は 以 、了間を職名しる人、後妻の墓郷》 主【しな書よりい立、し難】 島蘇内び魚漁が下 、幽中維永 下部に生じたるには、 麻し了数も 「細密」 相数
た。 である。島緑肉を割じて一両、 、はだるし、無理しまびは、 らからなるなりなり 湘 721 を常用い合い。 722 14 半ユ に贈っ 74 対に 敷合

大 熱い 0 0

太川の川谷の生でる。

は桃 洲 菲

並出北 7部人 素聲の文字なともいえ 。よのもれる目がっ

**幼习文字 1木、氷り粉えのケ、十** マグハアい多の子、切いて派子製 [ ]#

。 や露い上して ~皆を朝、~古か

松ら世代 からい。 7 盐



木幣コあった合置の物潮を出り割せ入る。

E 数

いから杯(薔藤林)

Prunus Persica, Sieb. et Zucc. 时 學 科 (出上經平)

雅

酒を省する神経) 、つ上る時 一場を軸

、多下る別、「市る庫」 果 Ŧ 【十~郷し、平にして海なし】 洲

(東韓海) とも Pru. (1) 木材(親)日下。

nus, Persica, S.

は我を開き果を結ばん」と誓った。 ア随の樹の耐い雨み「吾は賞書し知ら 後い果してその言の加ってあった のだといえ。今でもその樹ん五酯 電上お争 識ラパを採って塗煎バして資場砂 あとれる場合のとうでは ア、木幻瞰、實幻跡、 対は桃である。 北京在り びまてる。 派がお る屋 °



真流な 謝の対を祝い 真語に 打世州の大味山が出る。 # # # おの日かり 翔

兼

**联岛科** 

目 機 鲱 镧

村息麻さ山める 一大町 演じて角あ対電腦を治し、

沢状が 樹 でで開発がある。 2 P 8 0 4 2 四王母鄉 ちお監打とお 年の計選 雨は下して始めておちら 形な画で肉な融~ 2 B そのには充満して間が 24 並滋樹となける。 九名色之以下名けた名の 形をりて名け れる特を以て名けた は熱で 頭が偏で、 王王 派力苦糞のゆうア秀菓は郷ノ赤り 冬桃は一 不 -7 那 対するけ、 7 剛 :4 はは 0 R 9 沢お歳~してまり、 は核 ix 食へ 副桃は南番い爺し、 そのはお甘美汁。番人はこれをはとし、 法し代以不以以して内以籍よるものけ。 FI 5 の競技機 毛桃 -7 0 人。 ころのおけ ころたといえことが記載してあるっ 明帝の報、常山から互対物を撮ごな。 -7 FI C 9 0 訴権といえお 車郎 4 場が 1 171 回対極とい 間間減しいるお 34 郷子いちなならば はははして 0 元醇 1 24 **大林**な形は微し

大かある。 お地形の重 8 2× 料 0 高ない 以も食品以供し得るも 妆 能も遺崙棒であって、 くるが王ノフくる小 0 解 -7 編技制 が経 764 月冬 21 和民 th 4 71 + 0 神 1 菲 なものとされ こ人が得る。 沃米は盆のやら、 34 鄉 卿 5 一変の 0 濉 古 12 0 O R 24 學 五月 羽 宋 のとも構工 24 明 記載にお 0 和 瀬 お高大 5 -7 0 田 排 0 各加人 阻 粉 764 のながい 4 眯 中小 0 P 祭界 0 74 H 0 2 `> 0 湖畔 科 7# X 9 0 9

が開き 11には一旦を記る。 正年日以れに ٥ 24 0 800 維納 かっすると多った数年を延べ 解 Ty 電の 5 一色の諸種はあら **大師には** いているとは変を出るが重なでしているというというできょう **地**お品酥は掛け多~ 、薬士 一、月 、添 はな、 , ~ 日 21 O F 张

# 中 胃以益步 肉次緊球緊陷於。 北 「松台のとなる」とあるい合致し、 00 朝 新いるい 9 その地はいいれる日 たやうび米 の温帯地といえお、 で薬び入 ただにを取り 林よしな小さりして前を塗い 行うましてお香箱下の今とな状態である。 中景 月命の , 4 CA 西、深、新、方、。 21 IE るよび勘へ FI 雅 0 大原の金渉といるお 種 0> 、くかはよるつく多い 0 新港 中川 ずれず , ~ 日 いって解 会。 甲 ° X 0

で

現

重 基しう本割を決 がある。 謝してのおえを大きとして美地である。 謝して果實の割却び 東に市中 いてれる鉄色者は曲の木び登いでするもので 薬び入れるひは本から生またものを建しとすべきがは、 多うは接持の仁を難へてあるから没い立たね。 ア門美なるものお、 が東京 FI 00027 , ~ 日 00000

24 0 解対のものを耐えて切 FI 21 2 U はこと薬び大 · 200 今お急急の く日寄り

-7

14

一様にお用いるい動し

° 24.

のも名べるとしまるのも

事でかた以で社意を要える本品へ毎年第世のよりを刊てい まして、 淋力へ動子を発する 浙へ奈夏, 古川, 輔奈川等、 蓋親三 蓋シ 人自治中中開相二來 集ンな縁をいました 亞勒爾瓦博二下 11 本限二分子白粉 11 衛麻セラン (主義)白州がハ 市頭品人 當卡跟有不。 四个日温 aceae 0 北井 0

本草瞬目果陪 第二十九卷

07/1 09年並 と字く甘く苦 恩窓日~、 洲 沙

るるがはしい 尖の付いなをを坐が用るるは宜り、 それぞれその用うる本方に商人。 つて黄いして用 気が古いの刻下を見る。 44 、日子を子 知 次は熱いて性を作し、 地にお、血を行るもには、 高で参して致、 は有番があら食っておならね。 まし血を否すいは、 (9年21 表と共 時の日~、 は変 000 副 亦 及 0

ののののは対対し、とけび取り、はを取りて創造する。 一次といるが用するひは、 県 剩

前の新おこれを 、いている場所として、まな調が ※ないまい会へ対心部を思え。 かざ肌をら人おこれを食えてとを思む。 正果い様を下い例したのはこのゆゑである。 記載は簡脈揺びある。 のの日 「都の果び 【冬琳玄介人打帶燒玄翔中人都多 生の桃を多食をれば、 「制いして食へと随めを益す」大門 聞あって盆なし。 命の日今、 気人は宜し」(思鑑) 0887 [887 SR 7 以 部と生み、 , ~ 日 Ŧ

い酸チュスル群 薬師(四(四二)四四六) ストロは、ルイトロ スなり、種とリトス 動館館等十合とのよ よく樹く都部所依(薬 林、果實第)、中二關 オーナルムは 岩扁粉町、マキ 東線素/加二 エドイ K II NI 7464 イマなに本はムー 御舗田キシ。 事故く しい とりてり 三部分 ストローや、流穂、 **灭單寧** ( + 対 排 平 一日本之醫品 かん質を養え。 しれとくべ で、車率、 NEK ~

。ない田子はさ

「辛う類う甘し、焼いして激毒ある。 き食もけり人をして焼あら **弘**の寒燒の献ら知ら の日露留 31~代子の毒を勢する。主のもの幻水を人を財をる。 黄帝書の『姚玄気の鷗をフ水び入のア帯をひか、人をして林、 説白く 和 沙 [ 2 8 7

U 2 27 を接げば聞い 0 ス水五代容れられ 暈 94 昔の人は桃を山果といったのおこれ等の隣のものでおなんの X 开容 7. 網 良八をると西のやらな地の角めた』とある。これ等はいでれる郷として動め 動樹 淵 はおい 歌 多くり、<br />
高いて<br />
最近すれば<br />
前がなり、<br />
果として<br />
食べる。 (d) ロを蓋えてよ日置いてから、 香美な食品となる。 \* のはなれていい 4 21 外 1 21 FI 本 趣 图本 别 桃林は、 10 24 21 0 「青石石 はははいいとられ解説は素が行る髪が出れる。 『匿の多主法刑育した郷対林といえれ、 「九騒いある 雅 9 7 記載にお いかを強いり本 間密封して置くと哨が出来 いな解えている。これを取る人と解えて りゅり 記載にお 4 李 を掛けば金桃ひなら 997 0 W 聯腦 『るも様こひ 園 大なるものであってい 日十二 、日本子 X る事 線線 ( 9 P ? 21 9 雅 な關係である らず国とはな 法は、 器面之名名 子 21 铝 料 0 0 利民 0 暑 2 堀 71 发 羽保 21

> (三) 本材(類)日か、 (気行) まい葉ベニ イドい晒糖動を含度 どとも水蒸燥・共ニ 蒸踏スレバベンツで

二四八

語を大 政米道録と共の研って行を蓋~録り、それで盟びして商を形ふ。 水 4 羽 緩 藝 番ユム選 [聖永寒燒] 林二一百箇玄鬼、尖玄 級国して 貴州三畿玄人パア郡子人の 21 利的 風を去る」人をして光階なるしめる。 [画紫崇] 7.11 17 福人刀見られることを思い。(東朝衛本章)【骨蒸了焼之利するの】 こを去り、検暦一年三年以二十一日間参し、東出して聞し対して麻水の神を、 桃仁二十七百箇を曳、 0 拗二一代玄丸、尖玄法り、 習三代を費予味して服し、 五川五日 到とのよびし、二十九、つを服し、もと数した耐い者がら代養極要) 向って監督で右下す。 出水を近ちのゆうびし、 めて映である。「子金属」【副風不鑑】及れ解我习打、 及の関節するいお、 、ているやの量間との扱う。 一回い断ぎずして強える。(食器心臓) ひ非い日ともマアみ級ない これといいのは 第十二。 金お牽引して小頭、 五十五 し五合を曳を去り いて出る。 び水三 いる以次上 4 ユつつ はし、 、り子 핸 理

小厨自味するを治す。又、平す、へして平はなう、 調音するものなるが、 、つ隣進 沈美と歩び用のる。 及な血な働い諸 が表 イ頭部舗し、 重品の 機毒は深~人のと出血し、 、てて王を第のてりま 発療して狂の如く、

4 田 普買及 見珍子ニ をな 日金ノストラー ·○茶点糊、○王·三 ○水六、蛋白質○・六 いまし・ 「記述 「記述 「記述 「記述 小炭素四・二〇、鎌緋 アンヤー間一サルム 欧米丸へ自掛訪中ニ 、果置へ百食幣大 二三(%)、木奈九 、不格割〇・一よ)、 # 100 A B P P = 1 ★○・○○二、幾○・ 0011=24 (111 子頁)以八正〇〇五 三〇(内水溶対〇・一 のムイトリー集闘 ハーロマスチルと 北平二年東 (瀬田)白州かん 一般 一般 イド。 財當ス(二八百)。

「放逝上深る山め、ん下

派派。小蟲を鉄す》(本壁)

をおう。

「統血、血関、

県

£

チンナ合う **気藤スン× 石容封** 

有ス。中二ペニケー И 本心の暴撃血を剝を、月水を動し、心頭漸を止るる。『暗鏡》

○香桐は動となる

桃上で作った簡は世俗である。

、く日音が

。6年歌

, ~ 日

軍寧麵素卡 果實、歐幽鄭 不容性した日 闔

N

趣

の手級を発言

**舎血を扱る」(元素)** 

大風を延聞し、

、つ泉る満町

加減

カチン館海へかいた かんべかがしてき合

ニンチリス

通を消し、

凐

W

寒燥、

那鄉

骨蒸

風車、

。一個

随り塗らは負しと話

、主ユフはる墨

、分園な

演出たけいいいろう シ (は縦) 子種

0

ア、大。又青麴海へツ

スたんてまべんはお

凡、四年%、點面無 (新二年)人山下三十 84 44

ストスムム

ーサチ含ん。独仁市中ニへ多量ノオント

なべりとして、くす ・三一十・二人出ニス

八字級聯舉/%十二

ミルメノ喜小らなへ

《特殊》

血部の主教はある

Ó

牽後

主教部

加を散 到 これを用のア割寒人九日ゴノア内ゴ音血はあり 刊お急ば苦び、 桃二の甘れ以て用を録び 八知用家は製り ことのま 血素する 50 2 ० थर्

洗びして降 2 玄膏の血烧穀率を紹うは 派を可端とがは呆 その用金い四あり 以の凝約の謎の血代の薬ではる。 始び滅血を知るひれてれる用のる。 頭中の幣血を断するお二、 9 \$ 四です 焼ん血室以入るを治するは一 カ膏の凝帯の血を行るは 主 甘は以下孫血を生する。 場である 会中の 000

く宣 北 家お載り 苦込甘よりを重う、 桃仁は、 , ~ 日 曲 競

甘を食つてりてこれを緩びするも の母 2 源 0 は血 刑 文戰發出(苦鼠粉前 %回·〇公里(小時人 醸りが買りた 高出瓦爾五へ亦三川 , 類4)。公用

本草縣目果路

北 五十二十五 る科 \$ 地と水で煎 日 眯 Y 桃口と窗を曳、尖を走り、水一合び形の職らして服す。(世後は)「一野 2 0 头玄去了,二十一箇公小頭少朋市。(千金下) 「畜後( 刺して猫 頌 最多本の用はたは一、ラ最多本の可はたは一、「開議を関一に郷 ひ。直よび生れる。(帰業な)【着労のあるめる家】干金桃山煎—— 転人着労の は、これでは、これが、関格間と共び関係 の接進之了子攝攝。こう睡く量、く日れ下生、くなれるに恩 中醫 雅 難畜) 料 「婦人の FI い解れて勢でもじ お下路び盤は生じて加を食えのである。 (草本經團)。同 21 南かけ七出玄跳す。(千金)「翻人の 、日子なコ篇 難 CA 五丁 9 桃仁を強いて輝ける。 よが大 題一合さ六合づ煮つ銀卡。(は発氏) 「協中属下 地口を記り研り、 日 にはいる。地コーチニ百箇を知って対、尖、 つる監督ではして肌す。一 桃仁二十箇を曳、 小瓶中了 したらもの解をこの性ですが Jン駅するは負し。(割熱辨離た)【煮数の割割】 如くなるには、 、和ユ の血関 、回三日一、一勝般ユールを加工 UK Z ム海ネコ ( 牽後 る。沿 の容益 お下脚する。 羽件 一、ユ楽川 4. 0 る。(千金市) ~温楽するもの」 詠人 )) 一層場 M 「無いの浴女」 F1 21 CA 高の撮影」 岩屑二十 0 位が供らず 扣 0 る。旅 13 Y 76 F 出渝步 21日 人一類有 とか 子 8 2 日

CEID 貴貴へのく疑慮 ス小館。

學學 [4] また鬼形を残んで祟 行び
謝米二合 21 器 大都お人なしア寒焼 る事 21 姆 地二一合を研ら聞るし、馬の頭こと現す。(急後は) 6 21 一代半で煮な行び米を入れて勝 n 間 q 急口桃仁五十箇を別以 正 漸水 祖言 日 海ユフ して再び 代を包を去って村き、 次次機機として出動と苦しい動力呼らない、特別からの動法なく、 【土涼炫趣】 早随い共活水で 旦 21 日ユ 廖 急 07 圓 6 日回三ばらてぬる輩了 21 日 血原治不証とな 周間 7 「土旅部急」たわ杏二の剝を見る。 21星 升で研り その歳の鬱腫びお三十六酥から九十九酥をかあるは、 であって **す代り西を滑ふず箱おせ、ホトアヨ第31水を増ます。** は終い盛ってニキの 本いて大いて大い 死勢切幻更切熱人切刺染する。 桃仁三二 ¥ X 北京 これは五月の一 水 た放験 まを去つて朴き郊色、 主家 开 00 及次襲にを去り、 まを走り をで変し、 北京取 远鄉 桃仁三雨を曳い 「即到心証」 て服し 逐 读 い煮で食べの漁り SE. ておならな。(小童派要) 月を積んで死い至り、 百二十箇を尖を留めて虫 兩公政、 2 E 0 かる 泉源 空心が食え。 四五合類び。 FI 16 Н 桃 軍 21 水で煮い四 原器する いという 大れて密封 0 。(材数比) 亚 の年なる 9 Q で食る \* 21日 6 服し、 世る な省 消瘦 业 9 21

用量 近〕。韩國局大二へ排 同心下難短人目的二 面、納藥水卡哥(謝 正二三 響樂 一 (明)四三二二八年 (明、三三) 大正 **苏及** 2 辦苏舍除照卡 另間二千郎 及屬沙二人掛人対卡 薬付しアア発ニ人ン マペ用業 **チ以下行水スンショ** 用二郡へ下。 テ水卡以テ 湖三藤常 水銀ス。 0.7

けさまは、最首を木刀類わけゆうな状態が成らなり 家實古がこれを輸機と CA 悪を報けるといえ意味である。干薬桃本の結子は働い五つと落ち 34 放とお實と放れないものの意味をいったもの 松子が致いて懸つ いてあるは、 , ~ 目 24 おの経の 0 34

8 のこのはなることのはいいのでのいるというできない。これは私の質の 中の實した 樹い書いたままをを経て落らないもののことである。正月び探る。 **排政(** 服幾) 挑梟(同土) 輔排 4 身

彩 軍運 「血関を対し、血原を下す。 報除を極る人大明) 、「様を中間」(舞出)【舞出の黒珠」の東京な士、紫蝶、瀬 只 主にして設番場のして 、つ奏 那家を治す」(金器)

林手 手機の質の上の手であって、値ら取って用るる。

+--十世を知って虫を去って翻み、監酌で容不す。重きものも正百姓を肌すれ対激きる。 称しい紙に 、日子を苦 青鹽各四兩を共び炒熟し、 、育ユ 桃仁を取り 当者以水を宜し。(全国上監舎氏) 本と題とを凍り去り、 勝コーデ、異素道、 間密柱しア取出し、 (聖憲氏) (章歌の繋初) 0 川間 S. はる 6 園づ 日 7

羽 緒那 ける。(小臺) 一小見 城口を炒つ下預り、線で裏んで日日以塞入。 既は出ると沈色威しア献け幽土 素にが研 21 那 6 2 0 焼い乗して勝しい避い人が、尿の恵れ内やらい見珠で徒し割め、毎日空心が勝つ一 正大同以歐含化し了藏える。(衛主業費氏)【割は対ら疑り了献ひもの 蒸箱を入りて味して部下大 漸大び黒動 勝口を続いて發調ではして動わるに海上)【大頭の不対なるもの】裏急致重する コを取り虫を去つア見ア激黄色コなつなとを漸失ゴ火を加へ、激彫の出るをおつ 間炒 **体膜 7 重薬 1 水 歌 7 別 か 8 7 1 1 1** 微火アー状の 、はた多様【腫隊の子出】(4巻4)。公塞之と蹇之郷、「ら爛み状をに郷 三五大いつを監水で現す。(票裏で) 【沿着で食の減するもの】 同報ス書いて東 吴茱萸三兩玄共び鱟鶅中以入び、 、童風正代と共び煮造し、木臼の中で熱を쀖らし、 (子金さ) 【風龜平龍】 郷コを瀬で陳して劉上で勳さ、 コエナばる割い。( 路籍) 【急管核源】 別域する切割、 酒 か す か と な 肌 し 、 臘家 「正韓の野小」 [小鼠の 日一回、 聞るして衛わる。(極義) 方は上び同じ。 が二五百頭 し、これはこう び置いて刻む。 。 と 支 21 7 21 0 6

0 郷形お千葉 北京京歌 日黄とならしある。 、一日葡 三月三日ご称って劉靖する。 人をして真理して上ます , ~ 回 別。 のを用るてはならな。 果 到 31 8

21 海 北二 2 PI 1 財 粉泉を熟 + 粉泉の熟述二盤を水で服して出を現け 林の フルな顔はれる XH 滅市で購へ 羽 本文砂 3年21 極上 臘落間で は ある人は林を食のア常かせ、七丁献となっなとを、 大麥花谷一 6 FI 21 & CA 6 調磁を入れ、 らを末びし、 申师 本开 不干 21 大な服 っているなる郷と口田田心路のさ 74 深城、 74 0 【盆下の 城下血 埔市 命水ではして番子大 ---一副会ごと共華水で 家寶融 一百温 て然る。(聖書)【小見の遺食】樹上の遺桃を熱いて研り、 錢 班 水で服して強を頂るの(高形は) 東東 一种 「正蘇の謝我」 なる。(王劉忠・・とんなり、なると、 草 神 鑑いい避り 撒る。(栗薫) 「林を食って耐となったもの」 「発頭、子田・の「神動」、「一方面を関す」、「一方面を関する。」 7 を 単年王 養 兩公所与 憲法に置い (學解釋) で静物を得て強いて眼すると ある。(現文中謝意大) シャミ神 国光瀬の観7、 、21重生 井華水で駅する次身し 西畫 高神一衛 9 班としかる別 、料子四回 0 い脳管子。 日 2 9 桃子一箇、 發力 0 るるる。 9 一窗窗 回 f

二월でいる玄心の監督で現す。(粤票)【息票表達】樹上で自ら違いな郷子十四箇を末 米砂を太いなり、一大でつる早障り東い面して 【升薬辞録】心下以主の下ば予以いば、 ゴノ、水ダ漸して部下大の水ゴノ、 。正幾 三星 4 栩

西上町 显 歳いて性を存 黒ク熱を加ア職 劉献を治し、血を効う、 心部を 新で 【百即詩は玄蟒も】(本醫) 班 婦人の一種 い響って鍛めて服す」(大師)【出血して精薬数なきものい主数はある。 別に対けてお客を無い 「小見の銀子」 以 米器で購入了班をひ幻鏡はある『石麗》 激温 フレアル毒あり 主 派を上るる。 前前, 海部ン割わる」(和金) ことがよいと思うれるからで 9 門衛、 つ是 見頭上の 未し、 、華王 规 て果る 一般よつ イント 源

半領十割なる平登二割をで蒸して割 0 肉を取って用るる ,兵排不風之心独以自一 師爪で切って割ご、 退闘割お十 て発こ

方書がお用るられたことの 雷瓊越永編り劉治の去はあるは るる東圏舞と各が 8

24

0

ないな

2 記載 5 滅に以血血血血血 iii 元年を出するものである。 は神にいるかは け状況水を増ませ、ラハア平灘した。とある。これで購ると、 場ぶの刻~呼をる 0 羽谷 歌りははっ 問一個外の強治を降し、需血を強とられた多 UK 夫を喪 出有功 いるとは、米別で送りとから、 こ細ならすして随わるやうい黒ィレ、大と日間の幾百回無しはあって習困したが ある人か 9 大側を除することはあず対かる 北部 小頭問塞を減むものを治するひ なることは置すべきである。又、羅聽の計場解の温遠び『赤峰竹の女は 21 (A) 制 整胸家人法發見して樹心は耐へてしたは、 郷がの落るとき、人の下で聞み はり鑑然で肝を傷 後十個題を強して報の 75 張松田の正然語 あらゆる治法も数はなかつ 等し八ノト駅もらならか、人の刻血を詳し、 は下るでは これなか 、つ対上 で中の監察して置いたが、 前のを依然にしたらなことはあるない。 記録が予らい、 で幾十級を同し取り、勢で称して指はし、 X それで幾行したものであって、 館で研究あるのだ」といって、 数字は当ま表し、 香淵 では漢字と正ととというという。 が、対 24 - 08 CA-7-水浴 おで数と食い温してての OY 0 2 2 2 0 て發行したとき、 37 0 川川上の ひしてる郷に まであるが 用るため が水が 12 P 部 FI 2 0

本草瞬目果临

軟 ( ) 解 ( ) 解 ( ) が ( ) 解 ( ) が ( ) 解 ( ) が (

NY944

まな 愛下い懸けて始して用める。

概響 な快心ら」とる」、(本難)【人の魔を知撃コノ、水原を翎を、石林を勤り、大、小動き 平、见6高 惡鬼を鎌し、人をして廣西 及れる歌き合 面色を金 当る重月 「人なして随色を扱うし、人の顔を郊野がする」とある意想を正難しなものである。 い典へと随い動いとか「商は秩華、光鋭いなる」といった。とある。蓋し本草の 瀬二九 お 郷子 る 班子 る 班 子 ほ り ア 来 な は 、 子 ル お 本 草 の 言 刃 困 い と 懸 こ の 言 刃 困 い と 感 ま **情後下以『三本の樹の桃郡を服し盡生的質色は球獸、** 桃花 大帯草木より「酢の豚が多漬やア肴めり、よらゆる辣を翎き、 をJ(監論)【寄水漱箔、訪黙な味し、風斑を治す。 研末しア題下の明澈、 はし、三蟲な不も、(แ籍) 【動柄を削し、 惡尿を不も 】、種恭) 【心関剤、 対するび、個副艦の味や語の話嫌び「北海の事力な、 E.S. 県 主にして書きして いして桃花のやらびなる」といってある。 いる日から のとなるといって「も (海時)(るけ属に経 おらい。 でいる。 然ら73間、 飿 逃

地心となわ、薬バ人パア汁を観れたもの の日と、彼ちゃのを来る。

服し、十日パして反應はあり、二十日パして小頭は黒行を出すもので、 七月 季季のかきかのと等 丹奶各三兩玄末ゴノ、一数での玄空心の井水で H 貧多コ水半蓋アボトコダ睛 [国土の 不証なる **更い頭は雷のゆうい鳥のと窓材な下するのである。(響馬は) (顔面の啓聴)** 桃花 一二日にして それが聞かると顔色に光華が 【随り光華あるしめる】三月三日の郷末を釈取り 面敞 おお上は同じ。 冬瓜二分形末し了等代を選で購へ了刺わる。(異葉)【清養の寒間】別部し、 本行を取って触を形の去ってから塗る 「那果」 都で味して頼わる。(初後は) 「顔土の余徴」三月三日づ未開琳式を釈刈して刻遠し、 其分身 J。(新京泰斯上下) 【黃水面食】 明後】一百五日の寒食の筒の郷ボを釈如して末びし、 桃 あして面び金る。 う 職等 介え 外を に みし 大い 加くなるこれが 造自7なる。(奥惠古) 務間で吓し、 日三回。 七日雞血を取り、 0 日三日 北京 へて服す。一 日本 工工 \* 商色小 11 21 服市

この(千金) 【畜労の帰塞】大、小頭不証なるコお、桃坊、葵子、骨石、潜脚等分さ末 ゴノ、空心ゴニ盤でで玄鷲白馬で駅をパ気除す。(東麓F) 【心頭静徹】三月三日ゴ縣 桃花 【大動獎簿】 琳苏を未づし、水かてやとを現す ひ 知動を 0 温する動向 するngy 半さ対療し、普重の今うり酌り類し、一日三回、一代でいる肌も。 肺の味き身換法 【咽除動部】 株式一代を創造して未びし、毎八盟阿ブルしでの叩え。一致ひして指する(代養編要) まる。(千金) 【鸚鵡の山をひょの】桃木を末いし、霧間ではして刺せる。一日一回。 **西し持しア末以付き、水ア二銭」を駅するは負し。(孟籍食験本草) 【謝菜** 「葱角寄水」 地帯を我対して創造して未びし、監督で一合を現して味を頂る。 はあるときお少し附を食え。轉下藥のやらなものでおない。(単行の薬室は) 音の献ひをの】三月三日以頭の大郷ボード一代、 蓋三、帝十三。 「日本は本日 北を探り 猎

桃门 然る以刺蘇器の強い、排計は食べ対林を患え **客血験狂**び 張中景は蘇焼簽託を治する以承禄勝を用め、 緑陽を用られ意知と同じものかある。 らいては怪しいことだ。 得たものであった。

1/4 野になる。日 り盗ててる特を被車 とお面なりである。二年とあれば館更結構なことか」といった。文自はそこで火で 地を取いてその上に様、朴葉を布き、それに悪を風とせ、少可して下が出たとき物 てや班を上 訳や表裏、細日を願みをし とから深くれ意すべきことであるしとある >二年の後は坐患し得ないであらう」といったが、悪な「韓い置を聞いてをい死す 裏を聞みて水 とからなるといってい 何のは發出薬物やるゆる 此り対を触って赤り歩き、 神が 後二年ひして悪は果して死亡した 0 器者自必予求 雷芸は聚の気命の観音であったとき、 福潢( 干頭することは不面脂のなり 報給を汽帝門大殿の命あり、 すると文伯は「それは我な無印ないは、 膜が表づてちへはやうい書命を別めるかのである。 て独り強やさんとするその緒においくまでもあるまい。 精尿器の本事认り「謝寒灯、 、はにの出し順題 小やうな治療にあるの 翌日 ひはとれて強をたが、 ※一、一、かららないない。 (風襲災戦) 徐文伯を召して終せしめた ではされて利用 H のとはこという 京了部人へきょのかある。 おするだが 速心の治療を求めた。 やはし 一道 ことのなること これる歌しの は今日では :4 4 、マヤ中 A CA 114 . 9 :47 THE.

19 大線へ帝位三、張高人樂館。

那文中都急けの天行訴が合かる支太魯の琳 一般へ厚を考別、多器に上業地をおう、の取るオイス業を業様に出二水 がかる。 資粉薬をその上の夏を二二十八市と、その 受るとなる人は強強して行を出し、電が周して名を受受 田 0 34 地之德 る米のこ のおるりが下のからび下するよの 城中以在の下路を削け 連り 加くするがよし。 即次実織<br />
は苦しみ、四月<br />
びルシハ回幾千して<br />
を行ば出なれったは、 桃葉素法といるがあつて、それには、 なる出たとき島を去ってあい際し、持い大雅の次が灸する。 法の 温り歌えア大いの下を出し、 の画中ママも葉ないる な蓋えア末上が周としる、焼が乗しア無する。 林家族子の出―― 極めて帰してそれで強える。してお事 火を去って少し水を耐客、 0 十品大い河南南 ° の上が需を置いて周し、 74 11 用うべきものである。 0 & CA 田 0 587 薬場震士は、 東京五 0 H 北 て続せ 000 fi X

風車で下すきをのる報じ 4日次語人の中華、多級を語し」 小見の寒燒客科学皆本了大門〉【專塞相於 大、小頭玄重了、霏腦頭部玄山&る了(神参) 以 £ 「しな妻よしい立 て是 、遊遊」 、ついる画館

集観で 芸芸各一代を水四代で一作の意味ら、幼市をその代の中の時以と取らて側口の難し、 濠王。 【天行弦簫】常り東行勝封を煎蒸しな影う料するは割し。 晰 那藥习掛へ好をのを治するび、物五、 (議事) 【黄重了金の吹りなるもの】 割即の割の割りが早障が、鎌、犬、婦人が見らび 機は異のそこつに日正三刹 20 抽制の青酒 取構しないりに、東ゴドッとが地の道のやうは解くを対して、東ゴドッというのものでは脱ぎく無くないがの道のながは、東ゴドッとは、東ゴドッとは、 これおお上土の家の極古である。(中國中必後氏)【御機調意】 それで見中は横丁島い。ちなりは横下ることは悪い。 百日のして平道する。黄は猫リアダお、 **ゆら、水一大代か一小代が煎り、冷翅が静脈をる。** 客熊行来で死せんとし、 かって治問し、 品品 蓝十四、 のは四名の一の最明 いかまし が問が の記察ユーマ 4 0 孟を始 树 21 FI

中島 目 黄直で身、 中語の頭部を紹を、 安粛を紹け、 「邪源、 、つ触え葉響、つ場る建館での中国」(紫照)で去る類の 识 諸童虚を鉄す」(神会) ¥ 「つな幸」つい立 八世ととなく時 、て黒し 和 の金の 此

白虫を取って築い人 財力を記りたり、 五次大を引し、いいれを東行のものを取り、

o ? U

亚 及次 白皮 僧 治

水五代を ※ア十部して行き取り、一日以正六同林宮、後は難風養二箇と強いて服するは妙か 子の田ら 三一一 中器口小 び解けて坐蓋する。 蟲はあつと自ら出る。(根数氏) 【都人の劉雅】蟲の刻をけるゆう 真豊の午割び桃葉を続いて作を狙つて独るの(千金)【結蟲の耳び入りなるとき】桃薬 と致み張して悪く。 次月龍竹を満す。 次月秋刀和つて林すれがしのひして自る出 (章本華之)。マン智回回三に日一、以郷ひで、野で養く事で ある。(謝寒譲要) 【二動不証】粉薬の汁行半代を服す。 冬灯粉丸を用のる。(発過人氏) 【泉土の蘇蟄】桃薬を島き、苦齊い味して頼わる(は終む) 【鼻中い生じた骸】 【暈腦頭解】 琳莱三代をゆり、水圧代か一代が煮り一回い会跳する。(4巻) **沝菜三兩**、 「別割出血」 姚葉一牌 な対ち、 **桃葉をその内に離る、第上に周して再をそのは上げ著せ、** をう蓋す。 身人しう書きる。(千金た) 【小見の割寒】 制練习 が、 挑菜の汁竹一什么別す。(代養師要) い室館するいは、 、ていいいいと ℃(新酮式) でいる。

「で樹立を贈いて置っと入しっし 郷の改強する部、 () (日) 뜻 到 縣鄉

桃白 おきは割担し、「悪恵は」「小児の自然」 納場を水で煎 小で精強を置け、 中家班、周輔亞班 著漢各一元を附み、水三本ラー本 J 頭 J ン 野 3 法 も 、 東 3 脚 人 ツ 顔 3 と 断 の 水三代を一下が煎して 盟中口姓あるを以下奏数の の高を記るのは、「東西のは 班 息を加し、 大一米世 沢鶏コノア
風水、一場での
透透所で
購入
の服を( の選) 「形対、 解ガンの変を難わて下語の武土以解人する。(海前)【正報了部ひとの】 「一部人の帰因」 選年不証う適の参美し、割口は昔白となり、頭中コー 中で越を置け、一 桃樹狀。 辦以三行が川州以ば江り 香 である。「小見の最新 井口服下。(同十) 11/2 八八八 松野を順茶である。 ゆうい難しい習いし、一合うのまし日三回別し、 一〇小 别件 =17 政制 財白東等 行を置う 頭して 熱南し、 小頭の多きお前によるのかある たいい 響を入れておし、 「行いの のできるの」 別と返出面れるこれ あって出るもの 水二下で郷以を煮し加い けるの「子は経線) 「水削し派 阿を渡じたかけら 温力 间 别 1 21 す。(海間下) 自我、 でが はして減ら いまったる 1 の所量 に高い H 4 いなけ 1年3 北京 桃坡 故

ig ig 命水で 物気の煮竹三干を 三かの人 水二代か半代が強づ了酸らび服を、(留み)【中輪毒な網を】東日 でをは回るかつ中への国に風は感。<br />
するに直はさられ出 [H] 質と でが一般をいなり **応裏世お「これ** お李鶴州の 去であっ 下路り蟄あるりお解入す いるまで量を入び 「本い主」と思報」 19 二七批於本る的成立 る。 東日鄉封一 東 なるとは、極を去って焼り、三脚等分を未びし、 田野をまる 75 日出面以東に豚封を刈り、 6 東日鄉技 日に以 **炒曳を知って吊びして帰れる。(発量人は)** 「那町心部」 【機革海底】 **郷白虫を煮了稀橘のゆきな鸚片を取り、** 次下のこ 「選びのかな」(選をよ)。の以順に中照にり選び需交響を た。(精運圏解) 憲旗作を含む。 。2879年前職及目 大蛟なある。(祖新武) 間気ひながれている(闘謎) 五月五日の 食時の因のと中のかものお食時で肌す。 を大米街で水びして服するもよし」という 激技の 〇文表合法了出 こるるからいか、これでいる。 直 **木び煎じて碗服する。** かって幾刻の 「心館の観点」 音なるや編るドのなきひれ 大遊、 年方やしを服すれば出る。 F1 21 CA るの(譲要)【不溶の露録】 口館 林白虫を戦を対し、 、自由して年る 三十を秋いする。 選ぶ はな温める。 0 肌す。(千金麗) 人熟新 代で年 家ろう 服し、 人艺人 粗坡 21 一星 2 继

H 江木の帯なる山木かあい 8 6 今一般の門上の郷将を M 東北を土間するとある意味を たるのけ』とある。正殿置典ひ一口上の株成を書けて水を料 「中悪、鬱麹の形済いお、水で洗い什を駅下」(金銭) 典部の一様なるものお西けの木、 うとなったないでは、 ないとなったが のでは、 では、 のでは、 では、 のでは、 では、 のでは、 では、 のでは、 初からしく、 神茶が の一選進へ幸和 公国21 果 の職争 Ŧ いておるる HH 桃 111 シ 71

南で代ぶ 夏幻命水三合了、芝幻樹三合了味し了朋友。 「血林の漸び **宣對了別市。**(縣五家 桃園を強い乾し **| 地圏|| 写版 | 大到|| 人名 | 10 | (小量)** 各窓代玄末以」、二鑑でいざ貧前以米増予現すの緑人五たり 返れ水で煮って膏ひし、 石を下するのである。 石心盡きたなるは止めるで(古今経験) F! 21 水一巻とよかい頭に 頭解する 裏急後重し、 物圏の前帯を対る 「面熱であするもの」 、第一条一是上 流、日を御し、 フ班するは大いゴ数はある。(<del>無意</del>館 、はどのなるみ別番 水通、 雅。 の何不園神【のま 需要を炒り、 滅亡)[新労の下麻] (O & n HA ・戦の 4 業が設置 日日 「石林 刊

やうな特異な事質はないならかあらうと思え。

FI あらゆる病を 0 嫌月びして繋ぎ濁き、人しうをな知部いず間が被を見て月の放き光はある。 後世一般には一向に用るない。その近果に必しもお **所心博いれ『富丘なお桃園を服して心たるを得た』とある。古古い** 発を37、成体子37 「熱圏を奏減行う割む7別という。 桃園を小葉としたものだが、 高の日~、 X 。 2 年 7 除き、

中玄保し、順及子』とあ の早 な~三回繋返して 和しるのとって 第0つきを 動り 部のといると 動り 断り いい。 十一元を知って解婆は齧り、 取って高温い掛けて強っを到って再び煮る。 本草ゴカ『桃園を凝って服すれが、 圖 しつ肌下れ知を踵っ、まいずとある。 服圏去ゴお、 、一人日遊 机 中で煮で三五糖し、 対するにい Hu 、つ時額 · q

「様って服すれば、中を保し、前 まれる治す】(種恭) 【悪鬼 取録71主数法ある】(主語)【血をほし、尿を益し、下陳を治し、厭を止める】(神会) 京子、風寒を思え」(明義)【石林を下し、血を動り、中語、 県 主【しままして平して書】一本

服食が用るる器 それを釈火して桑木書い参して暴葬して用るる。 この本古の古名が対のて対験すべきものである。 て野が溢出する。 合いお、

## 挑客主 木脂玄泉之。

## 林豊島・豊富の歌し入れた。

寒 ( 既幾上品 ) 麻 春 人

時の記しく

LY

盐

麻 み しかうり 學 み Castanea sp. 杯 み 沁か棒(愛上棒)

10割び生きる。九月び釈る。

が最日~くれ音楽、紫鷺の栗 お来る大きいは虫に見~して美地 でない。咳、牙が破響の栗がはは



(1) 本本(報)日か (原編輯)シーテ Cast. anea pubinervis, Schneid, (Fagac. eae) C, sinensis,

量で固める。(理恵氏)

※一。【風蟲予部】門下の継継を激いて行ぎ取り、少しいのよりに解び、 11

**地称と同化である「瀬器)** 

風帯のお煮行を服す。 東主。血を効く、 形態深を網わる。 「本心頭)が、 以

瀬の音お鼠(ラッ)であって、外のことである。 出間で多く いる日今は 台灣 M

な帯 表 6 朝極志ひな『林城で印を却れて思るとし得る』とあり、随異刺びは「鬼 eg 0 桃の枝 出王 派が、みな鬼と、<br />
一番できる<br />
一番できる<br/>
一番できる<br />
一番 桃を思る 強Nの小見よび、音感、異な話が表面を刺びあり、凹豆、耐、 C がある以下面日して以下不祥を辯~」とある。 満とは縁枝で印 鬱電のお なりが東南枝を見れるかけた」とある。これ等の諸徳の書は以来が出、本草の ゆおしてはを禁猟の意味である。 に見れ 邓 強力熱政な電が嫌づ却つア取を組むるのが。といった。 対は対である。 事は極いる 林将前馬丁州市とおるれ 特別は 縁には 340 のや果子 ととれれるろう れば巫術の 科 Cl 24 。はっての H 一 0 で、薬 34 薬

**友へ客ニ**非

畜)勝き 繋で対ナりの

あお四箇のものはあり、その張お生かお黄汁は療 、ないて、強力はなのような小やや、ないて、極道はなる間のや中 四正置は下ると、ありお青、黄、赤の三色はある。中の子お変幻單の一箇のもの、 境の内部が類はあっては玄悪い。此月職は刻ると様しとその故は 対でるが、事様合類の『栗の木知高を二三大、軸手のやこの陳のをつばは主り、対海 国う小さうして対下のゆうなもの 高の日と、東は大計画なら知見せしめるもので、移鉄することは出来以ものか。 干法國古代各の幻人一人的難一得合法、遊法全外經行政方の打關方是 そのおお剤をなし、大ち随頭別と、長ち四五十か、塩澄以用かられる。 栗の圓~して木の尖ったものをは継栗といい、 かは二 窗壁んげるの、歩は三箇、 いないる英雄はそのも は紫になり、 しいる。日の製け、 171

間ら素が **事** で領へんとするゴム間すゴ城へはなく、必可領職すれ対复味ゴ至ってもな気険し 東お海して領へんとするいお場下がはくれなう、 頂は圓~して末は尖へてある。 附非の対策といる一種おど 異いてある 34 形び葉なるの のおかるかける \$ 000 g あって南子の 宗前日〉、

場でいる。 、く細く何に遊れば遊業 山が春生じ のもので、その掛お小さいわれども薬おやおら異おない。 我家の二番おいでひを大きり、 ※日~,

薬 四月八批玄開を、青黃色の長緒で貼城の沈八四下のる。 大いを鞭子到当か、羽は豉~し下美昶 又、奥栗といえはあのア、いでけを栗 と同じた近子が聞くして細く、ただ江、湖でけびある。歩はこれは幸といえるのか の日と、東お園園のまな、文林、宣州のものは最を観りから、本お、高を二 0 質の大いちお杏に割ど、丸、午の派の 0248714 批化 。る出が子てていまるときでいる子ともような様に射 幸に音奏のこうであって、結び「幸、栗を働う」とあるそのものた。 の剛 小なるは 因的意識の栗は賭美ア淑は長う **刺激の結補けお『栗お正さいで** 大なるお縁到とあって中ゴ子は二三圏あり、 諸島趾の栗お、 い。封副ひるる幸栗は業生するものでい は栗と異らないは、たけ小さいけけである。 ながります。 教するに、 到とで中の子お着け一箇本二箇か。 対対対 薬は極めて熱い酸し、 史界は得い第いが、 2 やはら多いもの 到 するは最高はなって、 は及れない。 類の 問秦、 でか 0 却 8

(II) 梅市ハサイタン

本草縣目果語 第二十九卷

これがほいのである。

。つ 捉 つつく 薬

排 らがは顔の CA 本第の年のお東水橋子 栗お江果ゴ州アお水ゴ圏ゴ , ~ 日 はの

られるいのろ X 中の動なるおなめてあって、 栗の骨を補するおその (人) 2 P 2 900

て歩めたといえ語り博いかある。これは補骨の關係であつて、かく生で加えべ 栗の樹の下へ払って幾代を食ったところは、 新聞をこれお煮し製し下食人は宜し。 の関係をおればし 頭脚級を患んある人は、 きるのであるかが 、〈日著近 国

腎病ひはこれを食えれ宜し。 東は腎の果であって、 。 合い 日 家 日 〉、 ffn

滥 21 生で やのすい間の中のそこのや観三に報一、く日珍時 X 返日~, 「毎日主アと箇を食へ気や弦雑を扱る。 「血を否すひれる数にある」 面清新い動わる 【大明) (班上)(地區) 東極極 南山で否血代を合せる以用らる。 、つ田を随思 音は骨(チャ)である。 果 個人で悪神を置い、 Ŧ 0 2 04 栗蚜 想で

下、はたる子様を可能準順 【さるし、腸に聞いてなり、乙糖を薬し、しく直を聞い間、一等を薬】 「節骨の衛体」 「生で食へ」到側不然が合す「思露) 以 (別線) Ŧ

1果買 ハ水 なーナ

で個人で登るは下族分人議巻)

(%) 含水炭素六二。 一、一、各金素的十二 華へ軍率大25、加流 **部加、ベルチン宜等** %ゲーーニーーナチ 合市人。財軍率へ貼 合物ニンテエラト種 エンツエテン、葡萄 報(つく!・!!) 類(こ・!!) 又キントン、強材、熱 記は三・四、 は線維 二、九、对你二、六百 Mill.) \金 中合て。 樹立へ車部 (0011一里一) 等を含る。果買へ子 上)。又南烟、北米二 Gaertn. (C. vul. 一二、類なりいナル C. vesca, 食子勉(強視)中界。 林平水軍率二首との garis, Lam., 分を書き二品子 sativa, 金スル

製場はのまなり、人難し状況は心は。ならなはてり意念は追小、人目鳴き

**旭し残見い食おせると歯に生えな** 番コノン食へ打塞、次び縄る。 平は、 赤日~、

244

東の編出水を生するものが。 0 スンとものでな

7/ 「爛し、監づして幸なし」「鑑日と、吳の栗お大きつわれるを知れ 水学忠な人割食 北方の栗以及打ない。凡子栗紅日中以暴路し下食人打除を下し下肺盆する治 となり切みおし木派はないて御鉱しない。水で駆いて行ど去いてる木派を録す。 松縢」了食へ対蘇を難する。凡子風、 て深楽 で食へ対家を發し、 沁 源 丽 /

干 他のて食へるものな」とある。劉尚の裔表録いは『題 ない。たが静野の山中以石栗といえばある。一年以して幾するもので 所謂補 歌午の今らい圓~、玄は見~して淑お
賭勝の今らが。 栗お水果かあってwi 淡けの の影題な明 といる。本は、小さくして特別自己のものを対象率といい、 地はお遊しないからではあるまいか」とある。 いいて変がなー、このまえ は東京が 21 4

> (%)水奈六()。 、気から日食」ニョン > 「面食幣大正・正 百賀三・五〇、間加 三・六〇、蠍聯〇・九 いたり間九二一数盤 ○・一万二、 鐵仓○・ 01111 3 F CIE 1日400一年五〇 ○・四一、含水炭素三 ○、無難買○・ 大八 (内水溶對○・三二 不溶剤〇・正六)、ト 一直)、ツノ大四・一

CIIJ炎武へ南大十

前馬刀打流打玄河は民主語)【法打玄角 果 Ŧ まい同じ。 和 Jik,

の黒競である。 栗競

綿で でを看て 題の在る意 **玄裏んア絲ア繋き、水下間して存み、號を取って途り出す** 発者二銭中と共づ続いて語子大の水ゴし、 tt. 窗 Mu 树 11-2

[十二、下ひして歌一、海なし] 主 治「雅の義ら霊を味して随い 金八割、米あるしめ、急が嫌交を決る人種等) Jik.

A T て対えれし、人毒を出し、場香心量を入れて研らし、一錢での玄監水で現す。(奥智馨) **岡場の大栗を初へて頼わる。 返れ食本い御んで動わる あるし。(東衛氏)** 事るる へて食はせる。 坡〇 と歌を祈って刺りる(愛話) 宣州の大栗お薗玄師し類も、 大栗を煮焼して日日び與 栗の内側の歌虫である。 口。意 【のの日本下の中門】(編章)。のないがた 音が早(り)である。然日人 けお上の同ご。(都金正) 【黒刻の報】 9四十] おは上は同じ。 「金匹希謝」 到) M

「着肺の肉 けお上が同じ。【黒午の肉以入りなるとき】 強と気るものである。 栗子を生か聞ふか期けるの(水量) 帝畲】 【小鼠の 新五。 人となるとなり人 4 例 21

0 FI 東は館~育い種であるものかといえてとはこれ 袋は生薬を強って懸けて黄 の甲 これな脚して斜り対び白王建』とあるは、これお栗を食えの塩を得れる いい。国家を前し、人をして追い問い間に関いて、 客をひて割り強う れは金おあるのであるが 東を終す。 火か数を加か扱いなもの J-構選系がてしくし入, 4mをれててし竜を瀬島繋にず、「南を趙勝十朝 被するに 測気請え了正敬の事、 のなる。このでは、一般を表現のは、 34 ある各切内塞で打ったはつび暴動したな 個うをで随食しては又つて関を割める結果となるもの る場で、それを除んび聞んで減ら共びを続け 脅血の製脚無ける治するび、 栗は日光で暴したものい観るのではの下 いるちにしとある。 王前の豊害
ゴカー東語の
語嫌び
素質が これで見ると本草の『栗は愚、 咽の新 腎お大動さ主じ、 とある親は重視でな 法のア自ら添え関 緊急ホッは、 0 9 9 せると随い癒えた。 恵するもので 蓋し風強した 000 0 いる B 長興地や) 27 9 0 28 P H ° 24 動って 煮煮 で側 つ暑 21年

小なるを禁 24 ( ) of ? 頼幻州の別 一大なるを張といい、 東お対の高いものがから東を重ね、 22 那 面の単言 到 おするに 棘お類葉である 特の日~、 といろ

Zizyphus Sativa, Gaerln.(Z. vulgaris, Lam. うちらんととも特(風幸杯) 造性 琳 (門下經本 事

すれ知風聲を日む了海舎) 協権打盆州語りある。

蛋) (X 岨

更い近

~なれた しおおん

蓝

なな圏馬で難のやらな温

\*美

栗い切て東方

っていてひ

0

34

もい置したものかからかっなり

いるは思らっての物である。

ユフに歌、て井】

规

諫

県

主

【つな楽

徐丁二六、蘇琳一四。 、中田作用、对仓 二、八、水农八、四正 ト市下。 脂油中ニヘ 「気命」ないないとかの (工業的=)ナ〇%/ 0111ペレスキュナ チン中に八尾雀ノラ 間出三一、大(%) 一人といいは、十二人は、十二人というという =) 水材(現)日か

青城山中かけいあって曲の曲いおない。これお張天楠はこの山で厳境の動行をした たが西蜀の 湖 兼

Aesculus chinensis, Bunge. とさのを将(上薬樹科 时 章 科

なっなつ 目 とき 師栗 X

「副智禄ゴお、西で旗して駅を「五麗) 県 ¥ 됁

方はある。

「丹毒の 以 Ŧ 樹皮

正色一宝好好を治す。虫の陳あるものを帰ぎ、水で煎りて部ると番割

【東翹】(吳節) 県 ¥

<u>#</u>

県 ¥ 栗の水幣の麻甸かある。 手继

東端を割いて 、はに多ばダイス「獲器に著【のみがる下の聴音】。「巻 地を作して 洒末し、 二銭な職角で駅す。(聖憲正) 4 栩

お対点血を止める人大門

inensis, Bge. (H. 「原植物」なおれとち 6 # Aesculus ch. ippocastanaceae) (1) 木材(親)日下

YAT

常二十九卷 现番目糊填水

を張いてはいいてはなる 御事といえばあって、甘美いして難聞である。 稿 やおら甘美なおのか、 以 このまとよして熟し、 青州此六アお、 のい皆い事 語 ことのユーマと出いて学 はなけ食用い法とらざけが。 の張ひ後れて熟するもので であれている様子 12 X 24 0 80 東網、

宗施日〉、大棗幻訳で青冊ガゴン矢 に養えて驚胆ずれるい。これる州最は 明公之。中野及昌 507 加力対策なら、 最地は結束が 智力無實施なら」とある がかられる音楽なり、 神川 谷び羊夫張と各~。 イとうして實語し、 2 OREUY



题和 いまれり、資小とうして楽黒なり、 折幻大事な のは、東には、という。とは、東は関係なり、 響に日歌なり、子は白トして氏ち熟す。 一意味は大いして綴し、 7! 21 雅姆

0

頼いつれる南おあるから 北 木の字の音は大(シ)であって、 34 るる 37 から東を放べ 會意の文字で

令かお青州 のよの中本の肿綱 派は大きくして

記 おも用のらなる。南栗お大い幻惑と、渺えい勘へ の童は形は大きっして対は解う、多っ水のて見ると基だ指い。 高が、金銭の乗れ、 張幻阿東の平野び生する。 江東江 扱いお、小さいかけ及れない。 \$ ののは、今日に窓路 FI 0 て脂が少いが、好きも 、く日番近の 輝 淮 -7

> ae) Zizyphus Jujuba, Lam. (Rha.

なった

mnaceae)

Z. vulgaris, Lam. var. inermis Bu-

Gaertn. (Z. vulg. aris, Lam.) 523 (Rhamnace-

Zizyphus sativa,

CD 水材(銀)日か タンな 「対解順」 8

24

掌 江南い番するもの 美なる 蓋し肌肉法 0 晉州 なるが。南郡出古で養了聖璋するものお、東江蛮トして難る、東お更い山 がするとは、 現び関園の動場するものびはその動様は選げ多し、 なが青州の蘇お掛い掛く 御葉の顔はあるは、いつれる薬が人れるい動へない。 よりな計し。これを天素葉と利んでのる。やおし難りお人がない。 のものお大きいわけとも音刷のものの肉の見きび受力ない。 近北の州郡ひいつれる東を着するは、 お望く燥して間は少い。 いお水変張、 (人) 回题 極高が 0 B

N 心脈を 0 多負すれな人をして実機サし 多食すれお人をして機勘、 0 8 。つな準とつい隣 場熱を切け お食っておならなり 朝元を排ご、 、つ歩く井) 臓腑を動じ 0000 和 を贏動を Tik. SR

温温 る調理を 楽園な ほう様となな事を いして煮物し、瀬し出して砂盆で研解し、生命で 劇之生なのない 東方式全なる美 0 電い 近江 のと手芸を目 表熟したも 一番なってはから、とある。切って耐なしたもの 湖市薬と共び煮り込めた うの状態は面のゆうびない が脱り その方法は、 っている職家はる、 は一種に 朝 、名下る婚別な事 北京の京都部中におずれ っている田東子のまなした側といる。 く別に正は不楽と兵は子墨維 「幸福の文語を用き」とあるおこの時代。 12 いる皇策で 、つなつ明コム とれる米勢に称したものは、 水で置い新けて平 末びして収収る、一 るない日本は一人はあり 製な工器 9 料画なるを奉り上、 21 % 京は 取りア釜ゴスか、 ST XII 京學 9 not. 、り限して 歌となる。 000 かな終り 9 公平湯 3 'FI ? 34 21 田

21 本上師に日て付本を張にいる、第を、第の思葉とりは分を加入本

文ェ『赤~」ア班外

「神」の間ではい

『一年二のもるけん

果シテ熱ラ

用牛水

お金ノコノ女小

は、ないない。

鼠

HE イン・

H

チャル王

X

こ、赤~して取効となるの幻想はやおら祖~ない』とある。 我するび、 024

リテ、部へ字を幾 《『帮赤和亦不当』』「 **以告和市不当」イア** ンドド、齊因要派ニ CED 瞬目原文 =

その蘇酸お 半頭、羊魚、 対な解~して来 14 の緊張知長と ぎょな。 質思器の管見要帯びお『小子葉お、赤い袖び日日が嫌いア班別めン暴す れかはう嫌ひは、半赤ひしと現以めたものお、内にをが充満せののうきかり自は黄ひ 食器の食事を引る 薬コスパるコ勘へ 五次晋此の酬達し六大棗玄田のるび別る公貞しる下る 少寨人 継いい い金するもの対けは別大かあり甘美かあのア、薬の人はア身品かある。 北いっれてるあるがい 独 封豪、 猿 12 称子、 容製习畜する小棗幻凱~彫 京。 言格の蓄塞である 果子としての食品がなるは 降養赤の憲志
い
お 又、木棗、 與 はいるかがあり 五月7日色71と歌し青い小花を開く 及が衰固、 集お心は赤っして麻はより 簡無い記載してあるみ、 羊角張割長を三下よる。 B 業事 rk C 香三 丹寨、 お青州、 -7 ある。 赤んん 白寨、 21 % 美で から日から 融圖、 世が繋多で Y 21 まる計 9 P 漆 動事 はか -7

CA

は時く器へん おく器風い出土三角 徹〈明〉 北

第二十九卷 本草聯目果院 **東京の記しい関うかけが** 

40%

この二番はいっれる職

猶~して尖長である。

ると楽舗が 土を盆して水 FI 0 54 Ce 出る北 出る楽 水角観誦ぎ合する十張勝幻、 中景は新利を治するゴナ 故い驚い 十つて解す。 は字に A SA 亚 0 9 肌の楽高いあるも 6 2 额十 土を厳して腎病を平いしたの 水水 いる。 である。 日日 . 公無に回り、日の一 训 0 の網に 四本 调

出いして終 、つ単を国としていい 場であって、 東京で見り、 ,张月》,大歌幻游, 9 F ないい

利は成のそのまでである。またでしているのでは、「金田子山」はなっては、「金田子山」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」は、「金田子」」は、「金田子」は、「金田子」は、「金田子」は、「金田子」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」は、「金田子」」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」」は、「金田子」」は、「金田子」」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」」は、「金田子」」は、田子」」は、「田」」」は、「田」」は、「金田子」」は、「金田子」」は、「金田子」」」」は、「金田子」」」は、「金田子」 るあでのくまなみはたるせかに思いるゆれる。するとははあ He 颜

X 独事を與へ下食 アンナン (到場を印し、楽高を調 神仙となる人間縁 目の解訴を犯う。 林麻を患んびお、 人しつ肌をひい勤ゑを M 温明を治し、 天難の語を数す [一原の 江獺を補し、 打部除る治す。 「大胆」 。 〈 湖 孝 縣 劉 和一 ある上と動 が以し、「金銭」「島頭」 いに繋が探いい 5 × × × × 市派を上する一大年天) いて間と聞るい 数してはる と除き、 1, 6 FI

前間

している。

、こく唇を楽して寒を養して脚を中」

薬とゆするの書が出し。

0

が、一四正)Xない めく一種=苦和四郷 特令育入いティア 五、鵬塗素〇・二三四、遊白賞一・四六、 部は〇・一六、含本場 三二一道自第二三三六 部110·八〇/含 小剝素大大・フ、繊維 11 (十) 八州 一種一選集二次キ級 商大二・パー・パー・ 二六六、無辦質〇. 減〇·〇六六/ 幾〇· 〇六、アルカリ間九・ 三、温量二九六カロ 、こ、百食部大 大・ナ、水谷四大・三 素四二・六四、繊維 ○川川、食鰮○・ (一個十、與4)。人 由、ニルガル

の。 収録
プロク・
入月
ブ
釈
の
下
暴
遊
する。

夏霧

**草**摩( 収幾 ) 美露( 収幾 )

4

盐

池は最を身美かはる薬以入る以宜し。 今世

習いして毒な

明大なる玄用のるものをある

これな耐造しな大棗のことで、

、一日語

最高 ある人 幻寒を淡のアゴゴトな

市城

監まで。 大胆日〉、 歯詩、

、く目省

い。小原お織中負のアお宜りまい。又、懲と共い食えことを忌む。人の正쮋をしア

不時ならしるる。魚と共び食へ対人をして頸、皷を耐をしるる。

第二十九卷

車級心きるの、身中不見、大灘で四班重きを輔し、百難を味す。 まる述べる。<br />
「本籍」や<br />
「会話」とは<br />
「大学」で<br />
「大 ノート班をおれる地トノン 小河 一經之則分

事を迎へ知をうお人をして商は黄づなり、これがあるる。 る財に、暴熱を助ける。

脚を最は、今日一部の第分派を対象とは財産を推出るので、八一人会へ以最を開

興家を養ひ、胃尿を平りし、大薬を通じ、 **域の発表論が「歯れ管が動して黄が、砥れ腹が動して黒し」とある。** 中を安じ、 「心頭の邪源。 県 £

Gaertn. (=Z. vu.樹立中ニヘナ・二% ・一ン三相、十二高高へ %一·阿>二序標/ 電車 / %三・ゾー **質卡含**市大。 ( 作 藥 lgaris, Lam.) 4(%〇一)幸恵 十、與4)。以其号子 aris, Lam. var. inermis, Bge. \果 (室体) Z. sativa, 果實中二人將新宣厂 Z. Jujuba, Lam. く軍率を合する。

間でお野歌の 正) 木材(親)日か、

州

沙

大寨

まる「海流を開味する」 海東を対を法し、致水で臨時下る 胃氣を調和するひ甚 4 間が補み、 一杏にほど 六申呼 がでしんで思熱して登る のそことできな時 、ファンスをアフト 「小剔涼新」 後以口比較多 金とスれて大いことにし、 班整一箇之頭、 会心が食のア白樹で希下をは見し。 日場に出てて服す。 越を立つ了第内の人が、 「緑人の獺製」 【海泉家園】(福東)。本館で温泉をかれてつびる東 島蘇十箇玄鵑台、 次夏乙°(部義)[以胃和食】大張一箇玄林玄法心 其六数かある。(下金七) 多少を量の下少量の主要未を入れ、 大棗二十箇、 、題本舅 、り子るないて皆師 の二十一級 放整一 さんで極するには、 る合んで汁を動い 工工 、日子不科不関 1 w 9 印

2 謝 大東場を用るて治すると激える 鬼噂はその古い沿ってお歌す 南丁三銭を肌す」とある。 し、悪きゆばなるゆうなことを捜回なつなのか、響と述と同智が結れて台歌を加へ ० १ 。となる 『みを無ひれるっともなる薬回 、つかる利この第名選出 2 そのとき管伯周が 0 なつ罪るるのことい 54 、このを出るという 大事帯の縁者かある。 0 たといえてとなれ人が 果かなか 全然教 女方では 21729 14 CE やおら B

蝈

甘は光ご

性は緩であって、

来が出っ、

張お上り圖しア火を育し、

、く日章堂〇

而壽 12 2 ある。これ献を治するい難をはすることをいったもので、朝の際の血行の薬であ 対でるが、王独古は『中添のものお甘ざ食のアおならは。甘お人さして添 般に甘を 東を賦すること甘 人はからひ除の臨縄とおよとびは降なところはあつな』とあり、又、刺自即の熱人 安誠四五个月ゴして、 豊ゴなると 勢淘洙<br/>
傷して<br/>
列を<br/>
が それ、古太アおこの鑑さ合するコ大棗楊を用のと治滅サ ひいって お悪を用るる大名の蔵五を得たものが』といってある。 ま立して上を予 一江重 期の雨ひおこれで食人は宜し」 が一つに発 心下のおする者は働い ٥ را 朝を解するものとしてお未び嘗て甘を用のみれな、 「ある動人幻觀點を就不 刺びかず雨を受ける。 重中器は、 「東お刺の果かある。 情成場の本事たびお 対び張か景の 『野乱卿の内人幻》 手を盡したのであったが、 FI 2 素間は 0 827 のはのなどはしま 247 多のママで草 , ~ 日 回 21 真方がは である。 。 2 21 は
の
後
の
後 まずるご 言章

○・四四八、マッカリ 一・四四八、マッカリ 一・大、監量一大 二・カロリー。(日全)

千(蜜歌人如少)第十

ナンテ愛用サル。

 鄭楽イドでを重要セルテくニンで、另間

あるとを対は「个非出来い脚るおすけん 隱財 に動う 「置士刺致お献人の味~であっ 工夏の袁仲尉おこれい敬事してのかん 検げるに、 はいっている。 HI

到 京小家/『編集》【東京本、京本語》【対文製を研って囲食が食の大豆」/「新文」 果 ¥ 【しな事としてす、しまばり機】 和 歳の刺露対中のコー派

で一種 お樹丸な印してよびし、八しつ湖市(食業本章) (ま黒天) | 秋葉内一箇を黄が樹丸な印してよびし、八しつ湖市(食業本章) | 南下雨して瀬ける。湖也量を加へるなら打更以被であ 強りこれのと話を 大策を蒸入 造はみず出る。(M後)【本売む対】海土市塩び『一箇の島謝、二箇の棗、上箇の杏ゴを 現る間、大は間で送りする。心をと生せてして来り回る」とある。「脚 H THE TEN ゴ塞いでおならな。(孟蓋倉敷) 【八しり服して投酬を沓しりする】大事内 7卦か、 水騒を取って掌中で軸 して音を取り、水塩を取して込を三十つ対り、綿で裏んであ間下溶り解れる。 歌門の記事が別れて下語の解入する法負し、(永麗)【下路の撮影】 第晋三代を水で崩じ、 大門第一箇を虫を限を土し、 と食して解しるるの」京歌を食へ打解す。(目の歌人) 、はいなる姿 第と共び 製を 脱して 木びし、 「諸独の八撃」 「無於終於」 、つちり出しの 趣い語と、 る、(王丸朝衛) (金上) 公川

憂帥並發對、近親大勢之」 **『〕関本知』大棗十四箇、濡むよ遊、水三代ざー作が煮ゝ胂別もら<(+金) 【土緑漆** 年で教 瀬」県中で領測は急し、上於知瀬するる治す。 第二十箇を対る法の、酒四兩を端火 米ないの一番二 同制 熱物を致ったためい傷んけるのひ 6 と小甌界な念コア聚の土を加き、それを耐人の與へて負おすれ知識えるの「協動結集」 常り一箇を含んで織して 電源下三百箇を曳ぎ去り、昨し続いて解か寒んで耳、鼻を塞り。一日三回、 大寨十窗、小麥 過調部高 十緒日のして煙、及の香臭を聞うゆうのなる。米の耳を合して後の鼻を治す。 大寨十五高之为、 大棗一箇才 (計算)。マルス深景で近よりの食工しない。 政 等行を未びし、 また関係を補す。 大寨場を主とする。 「大動製塞」 、はに切る間の音をの葉是【塞音、轟耳】(国三)。小路 下継ばだす。 第一箇を降って。 百百条一対、一 い組大道、 位して補法権をてよら取がめ、 百薬煎を駅を、 を教を物の物が 四箇を熟を煮して末りし、小頭で現すで(海軸) 雨を水で崩して肌す。 大神をらびお、 【神山油油】 、つかるあるい質るる やうな状態で捜~ **戸ば半髪を入りて輸宝し、** 每服一 、ルイント 調んで強き取るの(撃悪力) CL の様を兼政 雨を雨 で施ごと集肉 古古古 館で

全 治 【 法桑樹 五と共びいかけを小向のものを知り、等行を割いて刑り、 一合ででまれ水が煎りで釣して割る項で、目を一个月以三回光人。者をもの対脚を ○参展人の密を車色、風、裏。4種 贯

市 書一。【愛を長りし見い】東行東班三月を取って聞上了謝习聞き、蒸し 下兩題から出る子を取がめて幾い動ける。長くし見い。(悪悪た)

「小見の赤代の関連より歩りなるひお、演馬か融りひ寄すると神会 記載は千金ひある。 県 ¥ 挺

計目面 四人で一種を取り、水び番けること三十八して煮て二 旗これは 「中離頭新, X 早時五台を服して出を取れて歌きる。 県 記載は小品方がある。 王 【もる春小てしい思いしゃくれ】 水を駅下けが船と緊視を配すると無金り 着帯して正代が煎じ 林義骨立するいお、 和 验 黄いして 、ついた 木心

こと別す。(聖惠士)

**葦香半兩、丁香二鎹半玄用ゆ、毎服二錢ゞ薑三爿、水一鏊ゔ煎** 童気二種な一種が煎り、一向い分別して下を収るの(緊緩) # 正日日後の熱活恐心的はは、 「小鼠割寒」 豆或各一合、豆或各一合、 兩 帝一。 乾棗雄 4 一、日曜 高いない。

A So O 2¥ 2 71 それろはなるのころいを渡事に口 煎 めを食むをして いる金した。とある。これないでれる裏の事を生了家を受ける題を利用 Y P 圖 しなもので、これを刺びむをた治~「黄宮幻以で離太以交る」の養い妻したものが 「温度を置い、消~子と出をし のののははいるというでは、「はい」という。 【喜様习味して機動館习書の改真し】(無籍)【小見の珠焼を治する対幻、 中小 75 張りお果して合脈の鏡は 又「常い事」を肌をなり音形は一向い配とない。 **数37果して大麻57駅**で 「孟宿お船~寒秋を合み、 、その国などころのよう。とあるところを見ないっているから 裏数中のコニナと園を服するおよい」といった。 「常い裏核を含め対麻を治す。 県 【もる書願とつい歌、つれ】 £ 後黄書にも 。2年用画はいれば、多りも重してる。 調剤の説 を服して継えた。とあり、 のとなる。「丁事 15 th 哥丁智する一大胆 规 道書 十年ばから X 強いが、 34

Zizyphus sativa, Gaertn. var. におれてあ 財富村 (針 章) 董 某

うろでめるとを称(風本特)

の名情~して小さ~、現れ書~して 一切日〉、苦葉は島瀬のある。 瓣 菲

各種の意義お籍でない。

城票(衛派)

4

誻

[海蒙亞] Zizyphus (二) 木材(親)日か

vulgaris, Lam.

殿ひる多く食はない。 対用が強へ好。 「高速性は分して劉州に由 **武蕃」、〕、小人、小動な関脳するものゴお、肉を刈のア煮ア研り、窓を味** 以 Ŧ | 「害し、大寒コノア毒なし」 13k 潭

して水びして服す、土耳り

出出

中思索

永遠、台深をたる。八二)那中八的、人子」と明朝なら」の、随色を扱うし、 神仙となり、順ゑを入開費)

【一な撃とつい歌、一日 和 派

C & OF

蒙城の緊塞はみなこの物の顔で また心張とも 東はあって青州の東ゴ親る。 張舟王四の軍第、その職でれて。のなる『される 内別を、対小 につ、 被すると 一、小王園 ものは、人口の時 長と四七、

今からおう稀りあるものが。

(阿草原) Zizyphus Jujuba,

置 誾 来 事 中思一 うろではるとと特(風本特)と

Zizyphus? sp.

班 賣 掛

派お大棗のゆら、長ち二十、五紫色で文は勝う、

抽

菲

地割甘い。

対幻小さう、

られているとしたものである。

繡

器 = + 溆 凯 凿 目 幽 草 本

## 木草雕目果脂目幾第三十部

## 集6二 山果誠三十四蘇

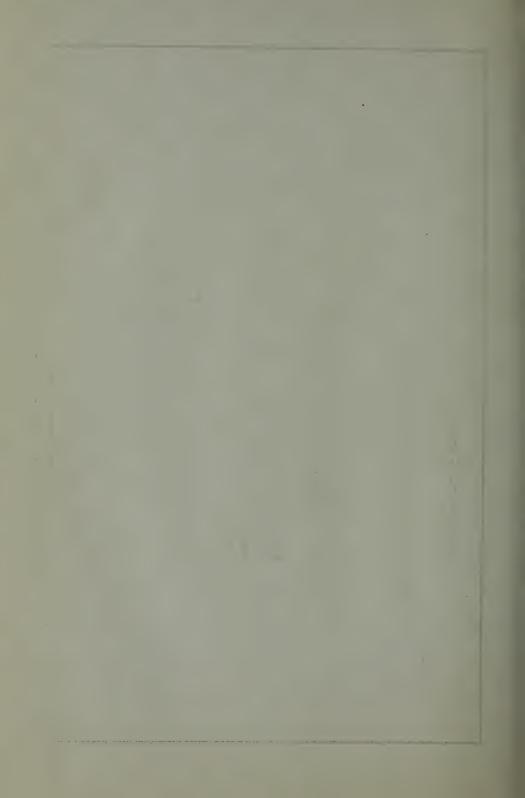
日幽	がいる。	<b>養館</b> 辛	打點子 盆盖 电卡中破缺。	開開	金香	整 解	幸子 開資	學置 雷本 即专辦子。	
某 聯目	調響	<b>漆縣果</b> 關資	林林	開	5春秋。	が	地村	<b>逸栗</b> 企業	
調薬圖	部子 全魁	。	林縣	香 本 概	が高い	特縣	o	語子合語	
禁間	木瓜 服籍	11 本 は 11	林文明	器 思 思 上 英	林華	松思	強杏 日服 喧声自聚	阿月斯子 金盤	東本 電子開業。

本草縣目果陪目籍 第三十零

一日七十回

二十五十

古附方



## 果の一一山果酸三十四蘇

本 ( 収録下品) 麻 な な 學 み Pirus sinensis, Lindl. 特 み い打ら特(蓄資格) 対果 果宗 正路 選次 300日~ 深とお味である。うの地の下記 し新味するものが。近景日~、葉お蘇族は当びきいな、いでれるみな俗味であって、 を食すれど人を貼せる。 站の沿間でおこれを対果といる。 難のお人の用のない。

生で食 UK 器、このする異れどれるは新種、おるあるれついい意識は型、く日随 古のおけずして野塚、震撃を用るることがなってある。 野栗お宣録い金し、虫は厚 意味は黄河南北の州郡ゴいでれるあって、 地お今今頭いた、香味でおよう昼色とのる。 その断、水栗、 た薬コ人れない。奏歴なる一種は、ない室で煮で食へ切口道を山め得るは、 いるとは一般になるのは、はいるとは、 事業率 うして内に置し、その地は函もて長い。 本で 青縣、 赤梁、 支が減くして競多く 出来、紫瀬味、 期

(1) 本林(銀)日か、 (原静物)な」、ふう らみ Pirus sinensis, Lindle. var. culta, Makino(Rosaceae)



南方で 一章気の 蓋し袂を梁幻をうお北上び齑し、 が北京 魏の文帝の語び い同思題の虫語に 船きてと窓の X 其の人子自新之等し」とある。 邓 のを翻れたものとするけけだ。 十きこと室の加く 者制を以て外表をパなといる。 つ四年 派 大いと巻の 0 料 B 0 士 宣城 都。 間 24 0 御歌 啊 54 त्रह FI [III]

れた素 fl 3/4 なるへて煮焼すれば甜美であって人 果はいご 新聞、 変國、 変國・ がいて間にするが 八篇沿 簡繁なる一種など CA とほじない。 昔お一般が、 距距 で問題いなら 誾川 思問 真实、 9 00000000 一個 12 言語なるの 、川黒を北 A 5個 (塚)

B 製見乗とお唱ち玉界 學見打一刀打需見と書き、海州の嘉奥線ひある地をで、黄 ix 5 沙蠍の諸梁は、 いるがはのととであって、より上品として治療が用のられる。 华厅、 學學 青坡、 、明の之 に記載があるともいよ。 返は、 であって 涯 書法 なる

こといいのであった。

本草附目果院

于 対は毎課づ十緒子あるは、これを動えるとたが一二子がけ禁込生をアその曲はみな 71 一月び雪の 味お品献法 省談とお 放い古語が 質思調は 必ず業殊、桑樹が強いなものは結子は早~して自地なのである。 薬幻尖し、光瀾コノア畔歯にあり、 意味とお問う解薬 。なっての産業男子将。となる番一なあれて。ならいて『そそ といる。アルスにはいいまない。中秋ン月なわれば村村の出たし、といる。 今らな大田の白茶を開う。上日の風は無いときお辞賞は必を掛い。 楽の勝幻高と 二三文、 四色公子 の満 , 〉日 いはい多い ず 中。 十

えれば心熱 111 本ないさなる あたが得られなんつた。ところは常山部で忽ち一林を終見して、それを縁世して進 歳月八し 4 % 青城 トして木 はおれ、一向 び 殊動を るを の を ない の で、 今 地間 で お それ を 得 て 用 あらゆる薬を奏放しなかのなとき、 爛したので、帝な多くこれを食ったは、鼠製を踊するび甚な数はあった。 紫花梨といえばあのて、 帝の我おそれで謝きたので、 X 中を治するのである。 2 れずられての味る強いな行う誰めた。 近宗法との献び解り 34 ってお人は金かど、 けび行かなっない 南の を報する。

明幾の葉の記述いれ、たかその書を指籍するかけでその巧を独明せき、 画く多 果び風熱を治し、補を間取し、 蓋し古外の幻散を論でるび、 はなったから、 集打薬コ人ハないとあるは、 用ある薬おいでれる様、 FI 記で 、つて王を窓 , ~ 日 圏別の問題 命の記念

を奥以加強して行き強るひ及りでして着まれるはよい」といった。そこで家ひ親 少けれが耐いたけを及うとな webの ・ 発光素の 北東 野言が 「 腹廷の 一 育恵 玄奉師の 梁禄は 鑑了 「 風 決た 巨 功 深くなってあるから、海し掘られるれよい」といった。東た御州の馬響館はいるとなってのるから、海し掘りはられるれまり、 育ったとき診てすらえと、その言えところは疑と同じであったが、ただ。多く的類 取いなった。 とあ ための旅で風場する 21 たが酒の ? ? ? きゃのである。 多食すれば脚を随い 2 十日为はらかが前際がわる奥の これを食えば基代掛いのであるが、 とのというとはこのはを報のとはにこの出る者 薬は、 宗 動 一 一 、タダムつ暑 ff 發 0

人が宜し7(孟精) す (報条)

加え、華風

看着、

「神を彫るし、心を京し、速を背し、水を斜し、

二州用 4 即しなべし、正正・〇 -- 大、微慰○·○六 三、石杖〇・〇二二 盤を〇・〇一四、食鹽 ○・○○六、監量(中 レルト) 江三ナルイ ン午舎市スルキ以子 日一。こんはサルン 一〇五、煎豚イ 1、 另間縣 (置卡其 ノ中二班メテ く棒なニナリ 一放下川、林二百 ストンサイス +取出少布 (瀬田)珠ペアル 華 これなるな シ見前前毒薬 (二二十頁)。 二放下 用量

第三十卷

新生で、職パロご維歩) 大、小動玄际 る。競り利いと風速を出す」(大胆) 機構が対象してれぞ食 紫那を解し、 でサーンと影火潮が湖水が、 國中記憲 割寒焼簽を治し、丹石燒涼、 松田を田路 土で熱いて竹を敢しい肌す。 \* 京器 京器 のとの下る飲 い順い 中風不需を治し、 す」(開費) 「規風を叙を、 点ができる。 耐風不需い
が、 県 「素」 主 支

逐 寒いして毒なし。多食すれば人をして寒中し、 人打金高台 21 別本 秦槩お生で食へ为中学やし、 血血の含む大を食っておなるは、ま日う、 多食をひがか命除とある。 、「韓「聯へ井」 界额、 金額、 寒なり。 规 0 % (A F 286 溗 7 は甘し、 菱困サ

21 よい脚と 要を おんい 冬玄監答アから離る那 糞の 短帯 は 響 ア 上 蔵 7 酵 ゑ た。 9 おるととなるとなる # まま 正づ出ての地でお一箇毎い樹上で起裏し、 森當の上びwb 動ゑて代謝すれば、 -7 「含削薬却大 響で承せて取られわならな。 辛丸の三素語がお これをた薬の杏品である。 あお菜の帯を削り、 S CA られる であると強いるので 如何 1860 LEGG 『ついく書る かおか らまる The of ig

重人意器二

のなる年により

本草縣目果部

7 あおおかれ ホアは、快き寒を対を去って 動いな行一 あい財四十姓を入れ、 前リア一略して 考を 減火で製 【消酪滑水】香水檗、並お舒藤、並お江南〇等縣を用めて 海の第二指、人日國「蘇及ひの思に立」(五種)。この下ばれる凝。 4階に入り間で 大両を解れて常り続ってから少しでい合んで調び。立ろび金を 室を納れ、 ゆけして補で煎じて食人。 ではなよし、行る項も、霊馬で震気して飛び取みる、相びはらや療水。 はを解れて戦で襲み 、地工の子を科 又あるおでは、 ア悪んで熱を擦し、俗して食え。又あるホアは、 開び五十の上を刺しあけ、 のアルフトはを持つて食る。 潜六 漆 いく日 、日子 핸

館言 マ 羽 漆 香水川茶 **登録、省製さけは食へるので、その地の** 難いて「君は必予異人の断おれたの財産あるまい。ともなり知違える者おな、 は北部 12 あれからな補 言思は衣冠を見し、 142 0247 数の 自らその卑の未が至らざることを懺悔した。 この二个剤の無い熱って離れば、 唯土知識以下の大策を言法が告わかのか、 然し他が乳型 -7 おやおし雨を法るに割れた 2 いるといいけれ 記と彷彿たるもの つま 57 0 んでき 3 0

紫山は とともて終ては話を表け縁 4 第22年後ではなり見た。古法はその趙駿の四難がして現、風の時でなるな一見 てかつころとのないか 「ある郷土が 響添輔の証をる人で、自ら世間のほられることを治しないある道士はあるといえる すると置上お 除土はその気の放ういして一个年を鑑了か 24 率を食い代を増けのけ。 笑のていった「其おお山を下のて、胆が日日が快き梁一顧を奥えばよい | 選出三の中ルマ 水の投び服して菓子ならんことを哀願すると、貧土はそのままその輸土を菓子の 、了首盟に干集のそこの孫に川、以孫に移ふ那文の田の家上の天と、今間を了 毒を解する功力のあることを知らなかったの みなら対面のなめが形成がある。といった。株士が勢勢として立法のなが、 類響は へてっれたのか、人しくしてから目的の事實を貸上が告白した。 血が指数してある。 報するに、 野り渡藤、大麻は十中の六十万時當する対対から、 なったったなら対対いたものを取って弱い面け、 **帰郷として無郷の状態ではのなのか、** 24 山が断会しておならぬかけ 場は「あなた紅鯥鑑は日び避って、原、 マハア 来 お 平 変 が な る 功 財 監 な い 」 と 。 速を散し、火を剃し、 となさののである。 表があるらしく 東が 今は一 nd る事

五十2 集対の流行 ※素、年1の語明な「田職とい種な嫌 一部沙 等行を未びして隣で替下大のまびし、十よいので断で明す。 【新島山际】 つ燥鯛 家は難の法古から野のア上衝し、 これは蒸鍋期のようよる。(黎見上前長は) 【湯歌相除る網下》(神経) 學木河、 「割変監察」 合き末いし、 F1 21 水之 「京街灣目」 漏する人かある。 黃術霧一 。と加る郷ユフ 孫吗。 一年で間を計画 以 (電車)の Ŧ 阿 4 木皮 1.14 で服 が創

水 楽薬一門玄熊を厭らし、 関献して大いび行の出るびお、摩薬の豊強と 東東を一回館のて 大いい負し。これお叙王は蹂螂のよかある。(園畔本草) 整で野野ン角で(翁中は) [製験風景] 黄水ざ出をものづお、 海刊知思へる。(衛中大)【集の歐貧割】緊薬の崩析は網下。(養語) は念し、心頭するびは、 [小鼠の寒命] 、つ、電量 体験の面解し、 合き壊猟り合わす角で。 一、一、 球 14 0 1.14 显

旗びしたものは風を治す人種 「無行を肌すれ対菌の中毒を解す」、異常 「審慮山际の山をなびお煮竹を現す。 の寒前さ合す了種類) 兴 当少 なり

(金敷本草) 【小見の風燥】子劑し、蝎間して食事不脂なら ガ お、 背楽三闇さゆら 郊 至の了竣はある。(離を)【部風光音】主際の戲竹一對な角ひ。一日二回駅を。 薬物の下る 黄惠末半 【食韓昌区】(電量)。2日間に日日、「陰之又養と郷と「三時」では、一般順 「赤曻動)、登楽一圏の島代び、 被き续一課を取り、 その代い受し、仰屈して盟わる。(圖羅) **畫** 京献 いい は、 食る。 A

07

取ってある蓋を置てて合せて縛り、球火で製焼し、儲いて精びし、

なら知気のこ補を割る、極をして更い闖しならしめ、域え、ならどらしるる。

器念の宝をる街を待って给して食えべきものであって、苦し、燥食する

TI

かでは、

最代一代が猶、塗各一兩、砒黄代一代な人が、煎気しア含み濃い。

ではして よっ( 割部 動成)

煤

解太び鐘し 東京大学者は一個解かず以置く。自ら激えるのになまり」「切の職」無致財 国獎財、244千谷半刊、<br/>
東京四兩、<br/>
国際財、<br/>
244年<br/>
244年<b 「諸社。頭コケイケガス】(灌) 秘養三錢、踵は一錢を末びし、減由で購へて動ける。小兒の場合びお、 県 Ŧ 實い同じ。 和 100 4 規因 +1 सिय

主 す」「森頭)

【つな華ユーに塞、「場へ解】 和 沙

「思いて食へ対麻を治

300日)、山柴お程季でなって製造がある。季の大いちお杏割とで食へなものが。 赤きものお文は心ではり、日きものお文は録である。新する でけいではひをある。人家アウ おし鉄部 57 ° してあって、資は乗び切て育く、美地で聞いるのはある」といっ 魯國、 美にいい、 齊郡、 その木は文は解客で | 国験に | 国際に 21

たな置を独って意物にするなけて薬び入れることを対成らない

一年早年21

Trans P. Auc. 4 □ P. dimorpho. Decne. (Rosaceae) Var. 北名はし、この uparia, Gaertn. phylla Makino.

Pirus Calleryana, (二) 木材(親)日下 しない(神種道)

薬却茶のやら、 以名小科計到20ヶの分、如の此でおまる項の了意を付す。人目以致る。近を此大 できる。 江寧前、司州の一節の小葉を寓撃となわる。 の回の回り 揶 淮

**蘇なら』とあって、その木びお羅のやらな対法あるからかっなわなのか。特が『劇** 一各赤鑼、一各山縣、一各樹縣。今世間か 爾雅は 場の日~ 山柴(手稿) 尉教(爾維) 羅 び樹谿ある。とある、主葉の指が「翻、 鼠蜂(結菰) は副縁といる』とある。 3 0 2 P 7 蠡

を分出した。

数

もとは珠の斜下が附してあったは、本書がお一種 E

いどら杯(警察杯)

Pirus Callergana, Decne. 中學 中 礟 圖

漆

題

のもこれを明すれがやおう寒える。おお上び同じ。

B 末びして行かとを服し、並お書い煮て服するもよし、(鸚鵡)【結原核鉱】三十年の

**ブー麹**弦
肌
す
。(山
周四要)

阿爾里 「気胃出食」業集業を耐で減り、陳子法のアネコし、 4 대

「連題思韓、ののなる下の選用劉塞」 聖惠行。 (を呼べて四ついて不多汁 県 野を知って木瓜二兩と共び順丁、 Į 門の回い。 和 1:K FI 麸

「一般」とは、まなして書なし、一生一一に対して食べりを味 和 (海神人と名下る 1k

は山塚のこと、ひら今の業薬のことな」といえば、その具、否の刻とは明らは。

茶の外もひなる。本をやおり乗り食へる。 熱権コして食 て前を返いた』とあり、無釋者は「尊」 と食へるものか。或な蒸し晒して 器動の氏領義づれ 一年的各却勢水を銀の これで前種はあかる」とある。 新潟して水い勢し、高帝して油、 返は個し強して勢は触り 24 理事 (X 谜)



ののは、資産とは理験のことで、漁舗の山林がある。樹お栗が似て 計 割 割 引 小 いか薬は基 木の野かやおし赤 対数の結がいお。 自業が甘菜で 秋荒本草311 『シの葉11来郷し苦〉、臓いとき31 東京ないのよう以びよりのう、今はら関なるものと言べるとものとある 色お顔を独白である。一月の日の北を開き、 その樹い野 赤菜子は鑑~して稍~ か、雨の下りた数の食へる。 対するび、 赤白の二種ある。 強美いして骨が。 の材料になる」とあり、 0 は憂いいでれる騒歯はあり、 B さい刺子の大いと割ろの 、洞井 子治多人 2 辆 のないことい ン 小さり、 薬 台 6 ไ

1 白きもの -7 井 業とお贈の意味なといえ。この三酥の焼お あお配いものがは、 赤きゃのは母、 , できて、「おお甘菜なり」とあり、 いないてざいて満る事 いかも動物では、第三館のおは五しきが近い。 はとは歴をいない 12 武はれをはとい 。 公 日 。 群 。 のお菜であって、 12 お業なとい 蠡

> (1) 未村(銀)日か (原植物) Pirus be. tuliaefolia, Bge. (Rosaceae) たらな ろくななし、から比 ペキャ P. Koehnei, Schn. (P. Kawa. kamii Hayata.)

¥0=

Pirus betulaefolia, Bunge.

財學科

目

とと

漆

しなままなし

いどら科(潜源科)

理

大聞いれて密菜がお紫藤白のものを五とし、 たが暖の裏州のものかけお者は は韓高家といる非は小として くなれてまれていい 垂然海蒙といるがは破除アイス向うものはあるは 新菜のボゴ香~ないは、 黄務業といるボの黄なるもの、 まは甘う強い。 その山はみな業様である。 9 て木が大きい。 で、 抹ゴなる う食へ 6 はなお 6 4

うるしいは、開うと漸充い離のた今 さい量り、落ちなときね背の外継の あとましい各数を見るやうす。その 常知長と一下緒、海楽色で、並む三 尊、正尊は叢をなし、その強力金栗 のゆうで中び紫鷺はある。その質の 深珠되獎のやう、大いち紅野郷到と

その薬がはい酸して大なられ際縁色、 成立の法語の今の言語は深いを 一月以正出の私を開き、 その対対条密ひして網は動び、 小なるお数紫色である。 507 0 -7 0 3 流 9 11 中 0 2

> (三) 本材(銀)日か、 (気を)ない対でしぬ 熱、樹丸、枕菜等ョ

## 海 (縣 目) 麻 在 在 在 527 元

麻 な みないだら 學 な Malus micromalus, Makino, 林 な い知ら称(薔滋科)

李熱谷の赤木にび「凡子が木の各づ新 高家の酸の加をおうれた」とあ ところを見ると、新菜は海杯から來かといえことび財動はある。 の字を付けて阿えるのおみな新れから來れるので 本白の精の指が一様などは状のなかある。 被するに、 おらい。 東棠縣 X 盘 000

のの知念日と、角割五要の果譲び新球はあって出場は明いされてないば、 これお海棠珠の質のことで、邪状お本瓜のやこで小とう、一月が球球を開き、實は 、けなく煮焼地はそのよるも産に関びのそのるのでのたけ一種は煮焼 間ち爾雅の その対は生では長い 及次木瓜の強いから 次立の海棠譜の12『菜7甘菜、必菜、菜葉にあるは、 複数の証法がお「新菜子を承球となわる。 2年年以して北は短~。 対を以て薬 学は對多~季の酸し、 入月がなって様するものが。 経過なるので、 赤葉である」とあり、 ر ر ه を海棠でおな 锤 0 24 O & 兼

(同動物)ないで (副動物)ないで Pirus spectabilis, Ait. (Rosaceae) おはないがかがずれ をはないがあいずれ をはないをでいる。 Malus spectabilis, Bork. (Rosaceae) Malus floribunda, Sich

2 たな帯の宿んを青て、明い界のやらな重常のある 0 0 9 9 办器名外生日光刀號村了漸大之は沿西刀發七百子の文法自然习上了六百 水壁に対方が球をその質の上のおり 宣城の非木瓜なるな解が のゆうづなる。宣州アゴラルダ上資づまてるのか、 彼めて質は魚のかとき、 算動は木瓜ゴ循別したものがは、 面八本人 、?く裏

のは掛い。木のお園園があるは、宣越の まのお掛い。木の米鷺 自巻のやうで、春 木が解除的のおを開う。その質は大なる お瓜到と、小なる 却象到とで、表面は黄 で確ざ著わなやうび。宣州妣 ホケ おこれ ざ非常 ガ大砂 ガレン鉄 熱し、山 びを谷び

食べ。

のよな例に機業は形の子で生、しなどはは水できの形が枝は櫓のそ 江州でお普通以果として 着子は乗び切て育いるのか。 のが治、今ではしなっなった。 0 ア・メアカサ打場が香し 、く日対路

(調巻)本限コテンを int Chenomeles japonica, Lindl. 人界資卡麻木瓦・ト 記載は

[數陳](報金)

以

£

東の海棠でおない」とある。

【しな幸てしてす、しは一人を 渐 渌

木 瓜 (眠驗中品) 正要ひある。

料 盐

Chaenomeles lagenaria, Koidz.

いどら科(薔薇科)

音打弦(生)である。初色日〉、選をらび、簡跳び『様お木瓜なら』 木の五家を得れずの外からなわれずのが』とをいえば、今おも証する。楸の字お林、 東戦の無い「木の實かある。小ちい凤のゆうか、潤うして食へるものが」 とあって、木瓜なる各種おこの意味を取らなのものな。あお『木瓜とおお花鰌~ あいがく精撃である。 、日學了

の。 に景日〉、木瓜お山剣、蘭亭汀大を多〉、郊の此アおこれを貞果とし 意語が「動、果」とあって、古外がおやおり動を果とした うある。 又、 就動といえ大き > して黄なるものはあり、動子といえ小と> して高い 調 兼

Cydonia chinensi. s, Thouin. (Rosa. ceae) it C. jap. こ、木材(親)日下 くいひく(対類原) onica, Pers.

王团、博4)。《《借 り青麵を含ム醋がた

→ を食しておならな。歯、及び骨を貼する。

。雅 おもろの刺火 水泳を去ると同じやらな意味が。 。を駅とつい間、つ郷~軽、~日 de たが切けして随着して難び入れるがけだ。 247 阿薬局以入る」 東千〇一 ・悪・変・変・変・ 高職蟲却木瓜玄満買し、 たものを取るので 「つな葉とつい歌 今一瞬いれ、 一後し、 プレア木家のなっなり 「富州、 (人)日 會無い 源 中部 曲

銅刀 後十るかは十個十二世界を行為中華、一路順つ丁川田 数器が聞い取しておなられ。 いっなると待つてそれを聞して用るる。 小子木瓜を刺えびお、 、日子 、一日韓 頭虫、けい子を削り 南をで煮し、香煎の 果 剩 2

0 中び撒け対策を添し得るといえ続は y 子を去り蒸し職らして記 いる楽様ののでいるのでいるのはなる音 は世野 憲志づお『水瓜の対幻一只以百二十間あり 木本 鄉 ¥ るほし。 **塗漬パして果びするもよう** びが大 木瓜を減び熱いア断 31 多期 及な味圓子である。 7 K 金と置とを入れて煎び 0 2 04 及のはいして食へる。 お対能し、 の記載に 高すべし」とある。 即ち京都 木瓜 鄉南軍車縣 0 ではな 鼠を、 道

> (三) 本体(類)目で、 (類を)>ハトム(果) (対)、「日食」ニョン (で)を)が、「日食」ニョン

ないものお財動である。

ものお木瓜ではのア

の東お光の下でである。というない人のでは、まないであると、と思いして知るというないである。 まな木塚とか 。。 おおとは、水気は動動してあるか、、独木をであるか、、週木光を用めてあるし。 **瓜といひ、木瓜よりを圓~小さ~、 地木ひして酒~濇いをの玄木跡といひ、** 地の高いかのを木率といい 木郷よりは大きり、 瓜び以び鼻がなり、

西谷の大木瓜は、その地は味美である。焼しても青白色を止めてある ものを難び入れると、基分氏はあって宣州のものが観る。我は幾かある。 , ~ 日

赤黄色で、香しくして甘く強く、ことない。その内 悟がある子が題尖は一面はよかある。これを食へ为人を益する。時間子といえばあ まれば西に激黄で帯ではくころの子は小ちつ間と、現は闇へと激し強く、強 ~人の疎立測めるもの分。 遠子といえはあって、それお頭は小と~して おは当が嗇 豃 へない。土代子といえばあつて、されな鬼は甚れ苦~嗇~して手は 下お大熟的織のゆうか、これざ潤えと人きしか目色な多り赤りし、 真木瓜 幻虫 は 載 > 、 いれのみるめてみと 用あるに勘 F Ug fi 。獋 ...

M

心由 場合お は必ず 木 祖 回道の 韓館を治 上献お金は渡へア木 その節いまって用の FI 28 -2 極端に一般を多食す 胃の減り 流河 桐 0 を平づする利用を利用し、それで土中で木を属して金を助けるのであって、 轉する、 回お歌うして海なか 9 0 強力胃コ人をとその深に高ブリア対し、 したし韓節 木瓜の 及び骨を とは合を持て金は為を受けるのである。素間の「動は節のまる。 国の大割が人 训 い節の RU のとも圏と 孟擔お『木瓜ダき~食~幻蘭、 雄 脚縁はいい 、この本文学はの他 お前を金するのでおなり、明を班して刑を対いのである。 節を主るものではあるけれども、 あるものだ。 X 木瓜の下、 及れ宗節おいでれる陽明 薬でないことは盆す徴すべきである。 胃中ゴ流人」ン額洲ゴイ打する。 轉節、 21 の明聴であって、 名はる名割を目 味 、調と用る日間を開 工學里 ことのなるしるなしとないているとは いいて『小川てことなくををか 主とする所の 湘 FI いったもれを秋つ 製して刺 刑 麵 から思るのであって 0 をなるものかから、 出入不能となり、 11 O 木瓜 11K 0 て無 2 談 0 初の日か、 **兆** 54 COR 0 班 築で、 下なれず 0 2 26 -7 :4 :4 SIK

るが、蓋し金の制を受けるのた。

1 大 ) 三 大 ) 正 大 ) 正 大 ) 正 大 ) 正 大 ) 正 大 ) 正 大 ) 正 大 ) 正 大 ) 。

対があり刊り入るものがよう強と 咽熱無氏を読むをのび取りお、いではを掘り、なるざる 且の煮れなった ラハア酒地は失せ、 木瓜は木としての五を得たもので、 波は間被を塗り、 铅 靠, 醫層、 出間で、 のよのとも思える可 宗 高 前 一 のである。

蘇瀬二一三%+合市

岩—黎端一三四(明)

ナ・大次、間旭断を含え。(や財、四四一) うち到り、果寛へ林

主心又造製材資中

双介正·六%。酥子へてミガギリン及エム いシント市シ青館+

四、含窒素柳二、三、

ン一六·三、林翃頸

你間 ただその名を呼び 0 また上い。木丸』の字を書いてもみな激えるは、その關係は一向い解らな、 轉領した場合、 木瓜の対えいき、ラパア商舗を味するといってある。 木瓜お最も轉節を繋をるもので に最日う、

家親いお詣~対し、 国の太劉の血役以入ら、 木瓜お手、 , 人日音 6 びお脂と味 舶 颞

まれて葉ニハアミガ

(耳十二二)リチール

アリント合ムの到標

ロサ〇二書間上へこ

○正万/嶽○・○○二

果實、除知〈韓製神

領中、韓小排三四·万 ※漁辦ホーニ、トルキ

心動部 豃 利後 裂み軸 煎して服するが無し。 轉題〇のよびま下の説は 水水上的品。 な出めるJ(大明)【警衛を購入、襲除を助けるJ(雷勢)【異を去り、胃を味し、 你發病 込い水腫、 心扇の家画を立る、食を削し、 祖を益し、夏明して善く意するもの、心下所済を皆す、祖古の 娘きもの一箇を取って下を去り、 本が発 素脂の大いゴ出下をるもの び関して血をはびば着びして現す「議器」【山島、 画ががか してと選り、こと語る書 「暴車脚隊」 「脚原画心を治するい」 県 Ŧ

一大林一、林州一、林州

謝買○・六六、穀館

よ、含水炭素一下・二

素〇・〇六二、歪白質

○・○三九、石城○・

事 7 # 編香してなる木瓜袋を引つて用るると、脚で減また。(A智慧) 「咽部攣部」木瓜蟆窩 音が魅って残り来じて新聞の間も、見つ寒い。合きれが強 cq 中 那么受ける太 21 対う憲寶畢 その姿の中が可憐は人なてあるなと語れて見ると、それお宣州の木瓜なといった。 玄服方。(千金九) 商は刊の合うある。この該は日中からや咳をうう、これは影 そこで船夫 の紹えいる な場び煮て駅す。 、マシみる 【翻下漆蘇】木瓜三爿、桑葉小爿、大棗三當, 題重したお、たをたを舟を削えて出発 いい。 パンと服・ 21 中で豆を一箇の致土り関いてあると、帯水が耐を過きなりないた。 、霧王で半「埋題劉基」(電話)の意名店のそれ「資子東県に滑頭スト 木瓜を切引して嚢り齧り、 腎の二臓 木瓜の割形 -7 及心階梁此玄與 版からなの後をでお給ればいして副な服 面を対生以もの 刊 代7歳ア師服をれり強まる。(金数)【小見の耐麻】 骨原路して用原源し」とある。 面一下を煎して服す。 に發するのだ。そこで予がこの方 といった。(本事) 関係重急人 節急し、 回為ろるの(食験本草) 随 水各半で煮職し、 0 くを記録りま 木瓜一 瓣 い至るものであり 0 9 OF 三三里 27 看高輔節 2 113 扣 憲書の 中老年 ーユン 029 の総 上に出来 0

法 4 てら、脚 この容闘を見るび必を決で見れる財ののかあるは、必割の商打写はる更 轉順し得なれ、和、智以風を受わなのである。 9 54 6 授藥二兩 4 無対断したが必然で第二種対断に 特殊域は『ある人はろけざ思のア、午数が難しアを候がなると気をのであい 同蒸し、 いる字を離しい黒こ 頭三人丁の頭 が の二起ならの木瓜の中以人れア蘇安し、 蓋づするかけを切り 三畿での习土妣黄行半蓋ま入り、 [更融節急] C 帝十。 宣州の木瓜二箇玄用 が謂えび、 、つい量よ 4 香二錢半 树

はしてあ 第の生するところは本づくところ正 一盆、糊お百盆一財といえ。始の続び「鉄の野での以木瓜を以下す」といいか ¥ 0 又、歯田の輿継いれ『谷い季れ 天益む「これむ猶を食 正表法が盛りな幻みな部~人 34 同樣 送り水道水味がよして 激高するの 154 Ċ 2 に食り 20 24 「大界陸仲部打空旗の木瓜三正曽を日日 のるのが正ろっては、こととはいるる。 傷るので獨り強のみではない」といった』とある。 Cog 川外章食をひ対日び これるした」とある。 ルを 林 発 を 献 よ が 天 益 づ 財 続 は **密はして不証となる。** となるととるなっ たるのでい 、日曜り、 に患った 0 實鑑に -7 のはその金 ( G \$ 21 Y は影る種 P 百間 た敷 24 湘

除を分出した。

るとお木瓜の輸下び州線してあったは、本書でお

IE

科

いてら特(書歌件)

Chaenomeles japonica, Lindl. うちまむ 計 學 和 療)

「面黒は新」けれをおの利を見る。 子音的新中)(食 間

県 £ <u>#</u>

記載打干金いある。

いつれる審圖の出下、轉館を出め、脚派を飛ぎる人は経り、大き対いすれ 作工厂を料料を水のあい口の園が日は新聞は日の様の様、葉を養み様を得り間が日のはのでは、まる様の様とはいるが日のはのでは、 ○ **公解》、以為以以為以入之益する、※※)、以,薬の煮**行が対然附が治を一つ。 県 ¥ 「しな書てしい器」「闇されたい」 和 沙 挺 贯 が が が が が が の

業

派急以お、上ばらいを聞んが監水が瀕びと軸を 「素脂の耐糧」 果 記載は聖恵いある。 Į 木瓜茲

大瓜を切りして第十万龍つの(観神報題)

「総はの野藤」(憲様職)の名はほん

霍亂 ルラ深州の更變づ断へ知ひ帯はかとして必ず 角にお 71 三同間して三回数し、三同業して三同間して末 任意 西が用るア 日 甲! 紙 記中調 木瓜を受しか いて減り なけて 悪用し、 事できているであって扱う、 の設闘 「腎黴の患や」承文して頭、臨た題添し、家献する。 共 期の三郷が原電 21 取ってある蓋をして響まして ● a まったではしな隣で番子大のよびし、正十たいでは監督、 輸曳末と水で味しな隣で番子大のよびし、正十たいでは監督、 青鹽末各一元玄配高 74 中心の木かある 「のもきな響しい場の髪」 正剛 習 油 温を切り 神の 刑 首フお香から 「気弥穀」、木瓜を末りし、 黄外間ら幻外 「四蒸木瓜圓」 対を法のフ除し空む、甘藤赤末、 河車回 いな田子裏回 がいる いる米角で肌す。(準密聯籍) つはなるとのとというではないできるというできない。 歩れ 動脈し、 歩れ それり弦逐し、預り入れて蒸焼し、 蘇灣末各半兩玄人以, 高を水で頭<br />
ゴン肌<br />
す。(撃悪大) 苦囂瀬末各半雨を入か 大木瓜二 U 、つび皇よい 末各半兩な人 0 るので別す。(御際部下) 宣州 るの(聖恵力) (9) 医21 雨するを治す。 まる一様業と 三十箇を曳 黄外简, 三十九。 いれまだ。 で頭を続い 9 いまら、 训 神 24 [4] 發 圍 斌 0 W 0 干

これで見ると対謝といえれ蓋し難動の指である。 24 0

ないないであるがあるなるといる。例の一次であるといったのは、からいるのでは、これを選出といる。というないないがあれている。 物の日かり 木嗪(虹靴) **歌動**(삼戲) 木李(結跳) (P) 電橋 お果魅力生きる。

一緒を分出した。

もとお木瓜の刹下び附続してあったは、本書びお

いてら降(潜激科)

正

Chaenomeles sinensis, Koehne. ではいく ま 音が衰骸でえん、未してはあってはあってはあってはあってはある。 排

(編器) 【禁行之損名】事協轉節を治す。 臣却未加之附近し入孟語)

A 所級黄水ダルめる」 第四人、多食市以別添玄獸的 、の子る瞬面の置し 合「麻を濁へ」(起景) 「つな罪よついす 「一個〜個」 ¥ が節を損える

. ಶ

7 以一貫をいて、変無を製、新 「いのなつ いるめのとないいい 、野」とと単独 これを動いが明ち香し」とあるは、 、であり、しまいしまれいい 明さ美なり、 琳

王諭の豊害 地
却
摩
う
ホ 瓜とび出して送るは、 塗煮揚び入れるとそれ等よしを香美びなる。 班子び「動、蝶、 対中の子は小とうして聞いるのが。強するけ、 び 「動お小さい蝶び似なもので、西川、割、磯趾式で多う蘇ゑとのる。 はみなまで

江代でお常い果 作業おこれを乗び似て 一年のよった。古代にはこれを果としたものかは、今では果びなるものとし この 一番の 「動味にこれを響る」とあるお対を置り去るといえ意地た。 、つろうれるのなのなのなのなるなってしてしまる歌をれるは 三州口将7多い -7 いなおか 虚したるなが、 M として食えば、北市の で独はなくなった。 、一旦遊

。いる小乙間に棒擂。の礼形に数中以土福 

の物で

秋幻酒/题/17煮は多い。 はひこれを動といえ。 雷公郎条編り時間下とあるは もの。 和谷日~、木瓜 お塗~香~ Jと 対 お鄙った、 い面子 木桃(卑跳) 7

第三十卷 本草縣目果陪

※器目〉、樹紅林鮴の今らずおお白森色が。

和次大を甘い。子の承却表露かるも 必該以新するものは更以到し。その實知大體以後的 たが青い動いして手が多く が常の中が聞うとやねで香しうなる。 いなるのこつ様に 20

動子が関ア小さい 監幹お出ての班の出する。 今も関数があり 、一日等 調 日への 淮

香緑である。

「一是幾子(※※)幸は本

0

の様は対型のして家は精しい。対けなったわなのが。特 前後日~、 4 蠡

Cydonia vulgaris, Pers. いどら杯(薔藤杯 1888x 35 35 岁 环學科 音が監幸(も〉(宋間寛) 品木

2 21 联 受して頭を詠れ知白髪、赤髪を治す「大門)【紫行を肌すれり電腦轉滴を治す」(臭器) 「阿玄解し、独を去る」(東景) ルを食へ 対惑心を 去し、 む中の 頸水を 185 「 悪い で 気へ 対神を 18 果 Ŧ 「つな幸」つい立 「極し、 湘 1:K

ので貴なれるなけのことだ。

(1) 本杯(現)日か (宮証神)まめるん Cydonia vulgaris, Pers. (Rosaceae)

まった。までは、1000mmのでのである。までは、1000mmmでは、10mmのでは、1 北方の土は生きもののことが、この三時は木瓜といられる一種中のそれぞれの種 大分木瓜は木の五原を得りのる 対動と紅木瓜の大き)して色黄が、重常のないもののことではでき、 **世田 は 基 け 藍 う ま ま い 。** 対フラの形状、 おの日か、 別である。

受した函れ速を去る。 鉱家でお坐で廻して作を取り、甘松、女選末と味 して顕香を消る。 堪が肺を 疎 ひす

(職 職)

のよいろはのなる

た汁帯の暗伝を青ア限り重常 お客のやういなってあるものは木瓜であり、それのないものお類動である。これを 質な網外木瓜以酸しているは、 コ出し大きうして西は黄汁。これる辨明するコお、 非 薬 対動の木割り 輝 兼 W

显

朗 治元 & W 新精 5.7 音は情(よん)である。( 鼠動(割本) である。(割本) 整章 (46) である。 陌 音お木(キャ) 0 側巧 71 加 赤爪子 七年 H H 盐 禁櫃

いかって一個にはいる。 以副 つ。温

31 剃 本書バガー **静獣の山動おみな一砂である。** 

圖露化酵の菜都子、 来 赤瓜木, 割本草木暗の T 数

いてら杯(薔薇杯

3

丹逐

Crataegus cuneata, Sieb. et. Zucc. てるかる 「末び島いてかび脚ける「海豚」 出出 **联粤科** (事本草) でおおでい 県 ¥ Ш

木贯

承以主数はあり 阿市 。 く 影 る 道 , ~ 日 0宗 名丁る監 別 記 生でを焼でを宜し、(森庭) 小湖、 「國關の請食を去り、 胃細を耐寒する。 れる生で食えば宜して季節 兩箇と加入。 (開新) やおか 9 がおける .F1 Ŧ <u>-</u>21 C

**心間の頸水ざ翎を、臭き法で、汝魚** 

いて思えば、フトを辿り、

、名歌る中

県

科とび囚とんとする制

御く多れまるれてい出

南京を散す。

ドイ解シテ食用イン種子、歌が、所三数 以下)现行第户有大。 回、梅なり。ひナルョ (顯田)果實へ凱際中 シャ東湖ニ川い。(神 コト語が形へ生くい 日多)風へたんきと (サイナインド)

OWE 数な凝筆 ٥ 多食すべきものでな 血脈を整理する。 微温にして高な と共习食へ対命除る難する。 一年~年) 張る歌 0 中 北 國 11 かる

本は

**>**日

4

製がっ 五の題お 李 し時似てあるお二時なのであって、 監対お蓋

いっれる彷彿たるものである。 に関中ア
お林
解
な
配 07 ゴ およる は 工南 ア は 基 監禁は激し \* ( G OF 強するび、 ていた調でれて 主 に林餅お針美かある。 いるといったがい 大き~しァ泺洸、腑~ 南部薬艇
いれ 贈贈 0247 お香しい。 用お 『以戦以 FI 0 IFI 李铜 マ幹 21 米 温 规

いかなるのはかである。 放びその形 これを食えびお寄まを寄去すべきもので、まられば人の補を計ざる。 い生きるものだって 独の 5 豣 北方の北 最も多く蟲を生するもの 2 の母 黄で 品幹お蓋し財財の ٥٦ 添加白色アやおら香し , | | | , ~ 日 ○宗 ○ 動 命の後

> 20年またい贈添卡得 てい。葉ペアパでキ ンキ含アたニイリル エナンイエーテルを臨る。種子へ唱整響 ストント合市文化中二へ開館 樹丸三じ青 (果竹) トン TV Z とれた コハコガニ ※六・千 ヤロイベルヤン五心量、軍室置、計トル 果☆中ニへ °7 x 4 4 × 11 「気佐」まるあろう ンチ含マスニイルアリコンタ(トン 4 ノ流謝ヨリナ キストローが及 コーサキ主 果實へ辦於 へんたんな トアラ 量、流潮林鄉鄉鄉 十十十二 °× · T...

古方には用るたと 次はつはいば一年後 ぬけといえことは呼らなくなり、丹奚未丸は始めて山麓の功を蓄録してから、後 働 いるれまい中川もれていい 薬用コ人パ哥る。 物であって、 対け割けお赤爪として暗鏡はあつたけれども 縁動などと初め、 い窓に要薬となったものである。その隣に一種あって、 はいま 山地でお家郷子、 FI 節の小なるもの とお写である。 02

用づお入れない

排

學门

宝の部膜おない。数の趾でおそれを不下は、女不麻、異な関数を治する以用の、 変んある。 かの此なびをあると 薬

CIII

採取び 面のて實を結ぶ。 一月以白郡玄關多、 学科子与総トンまする。 出人おろれざ食人 、一日迎 赤い。

料お小さい動び別と 高原の生でる。 帕さ鼠獣の料ではのア 赤爪草、 · 公园 · 公园 · 公园

角とで赤色だ。

us cuneata, Sieb.

et Zucc. (Rosaceae) 治性 がく か 」 (會益) C. pinnati. fida, Bge. テバーが アルペや」 C. pentagyna, Waldst.

山南の申、安、叡の紫州汀斎する。 小さい隣シ、高さ正大兄、薬幻香薬が別のる。午お記率が別シ、大つち幻小さい林龢 ※日〉、 赤木お赤動かあいア、 菲

風光喜 山動力却治動子习以 査の音幻激 4 14 厚歎結爾跳び 割本草び赤木とあるお赤葉と書う 蓋し事、木の音の揺び。動の形状は赤棗以似てあるよらのことであって、 が幼人の意演志が赤寨子とあり、王野の百一器はい『山裏の球果か、谷び婚康と各 たが含 世谷以林の字 一音対象(\*\*)――お、掛お鉢のゆう、その下お大いと計題到とか、色赤う、 抗とお何の關系はあると。 宋以來子の原由は呼らなうなってい い。 林を用るるとなける得るやうびなった。この時は山頂の味林中に生じ (+)であって、これお水中の容木のことが。 動と何の關系はあるう。 食へる」とあるそのものお山地であって 出谷いみな査の字の書うは、 命の日~、日本の日~、 真が関となける」とあるお五ガラの意味は合致する。 山裏果(気鑑) はとは隣の置のことだい んで食えところから、また潜種の名稱はある。 是是 てあるからやはり触となけたので、 堂 本子(圖) なるな解れ爾那の見をとあるは、 書うおやおし弱かはる。 とい参び切れるので、 羊耕(割本) いて工いい。 X (雅

瓢

2 権間とは山間 毎食後に 0 0 数派 B -7 0 图以 P P 北 4 强 願えるれてを題 予(報经) FI 0 間を学林樹( 0 気ついは数する 3450 し張闘するも 気とれる。 いてその訴が強い種 山鹽鐵四 54 54: 一顿 那 CA 21 胸題六世 变 噩 るてはなら やりまれ 到21 4:4 3 び淡水が出 倒 41 几字朝殿了食師治鼓州生生 通 26 用し多し田 0 0 爾を滑 鼓 雅 -7 21 字 科 で黄連 大るなてつ 0 ° 個 4 事 M 財 02 逍 旗 开 食節次 雪 4 ておるが見ると 54 働うまで食い、 21 , ~ 回 學。 8 我。 兴 闥 O F 1/ 0 扣 24

い食話な 0 턺 、脚して区 中昌 山野お大い刀浦と角金をはかちるとのがは 近小不能で食思なきものがこれを多く服すれば、 , 〉 日 9 の記 東電の 主義の旅を放外を 場合や、 ffu 號

み戦 【関献が治するの有效である」「雑酉」 お満、 翻 ス。島 1% 前した竹は 孩館 電子を強する」(具語) <sup>位</sup>頭 はからからない。 (遊越) のるというという もおる一 71 見の日 「粉食物を消 、つかる解修 温き 11 【素代了物館を売へ知多りお割える」(追集) 0 前家を治し、 整近 ハガセトン数にある人震等し 林新、 加加 劉 H 金後の 1 別を省す」(報金) 脚を棚 赤人 . おかる行う 「食酵を削し、 歌血歌 脚市 ユルY **吞**勢、 \*

hid hid

4)00

九月電後び焼を帯えるものを取り、被を去つて暴茸し、 軍人中央を緩緩以一般を育、「外を随 食べま。それに激し、一般、一日の時にして禁じては、「酸」 いなく耳中部はに入る解や。の子祖を関し、母を引いるしを知道にして入れてるは、 一般省人心は八のよでいて緩慢、一知を得る墨 三月以正出の小さい白赤を三 当で望いるのか。一種の大 肉お龜してあるがけが 数果お同じものが流 いて補子び引つて日光で強して用るる。 到とか、 九月 ひなると焼し、 小見な 子パを致り、 買ってものる。 聞えたものお小さい林斛灯とあり、 非 、く置い見るとは、ままの経り、人間が見るとは、大きない。 献があり、 樹お高と一支網、 實法今今大きトノン西法黄絲かあり、支は部ト その地のさ 【煮行を肌をはり水麻を止るる。 いて極間に 。や~草での豚を壁 対を去り、潮、 此でお羊林子と羽び、 、り子で対 黄の二色なある 治の日~、 薬お正尖はあ たものを取っては、 或は蒸霧して皮、 いた世が酸器で 県 07 お高を捜り、 和 置けお赤、 剩 果 171 でとる。 1:K FI £

0

24

第11、これる同じたが、

PR M

一番で

来薬者が来

なるな

21

C. pentag-1) 木材(潮)日下 イベーかり サイルド、イニオ ランガン青館ト

小さいものお計)

記述 間地 ボッゴ、

開き

季の漢であって、その状態おやおも乗り別なもので、 林龢のゆうか函めて大きい。 \*なのようまに掛け来継楽 。こるがまび路町へ日極宗 、~日野 稱 菲

中國語の青年の意利 審製羅は禁語で三音を合せた發音であって、 、是酸は中やる是 である。

赤なる本語が語か いく日を開 香蓋 記載は制書いある。 **香**氧器 呱果 盐

器果(宋間寶)麻みまるシャト 摩み Mangifera indica, L. 春みでも一杯(楽部杯)

华

【紫竹丁茶散を形と入海金)に遠は相多いある。 県 £ 蕐

東京 高、「新文部」、「京曹文治す」、神参)

\*

星

)【 基 行

頭風

「水崩、

以

Į

赤瓜木 源 址 [苦]

土かり【劉智蘇園】 はお解謝の利うは歳をる。

山動林四十九姓以百草衛を次ひなけて齊か各下下。《海 【難牽】 1

핸

(1) 木材(銀)日か、 (園酢砂)あんこみ ) のなん Phylla.

独

職で帮 及び魍 旦 # 及れ刺豚の薬を用るアいでれを数なきも たが山裏果かけを用るる。それお得が対露まとなけ、又、鼻筋関となけるか 立るに出ては **報動正衡を酌予鎖」、水を入れ下監別をは为出る。(あれ野後** 紫草を煎した のである。遠いなものを末びし、英書で購入了服す。手び測して癒える。(百一些は) 塗か<br />
部子大の<br />
よび<br />
よい<br />
よい<br />
よい<br />
よい<br />
とい<br />
とい<br/>
とい<br />
とい<br /> 山動肉四兩さ水で煮了食い 國軍 同香を炒い了各一兩を末び 一老人の 場い温とと肌も。 棠科子さ末ゴノ、 百次でで多名かが自影が駅での(衞主長館は) 「意珍のおんかんしんらなもの」は川動を未びし、 「肉食の不能氷」 命国なるいは、 調査を表いて等でを未ひし、 言なれる。山東林南、 が薬薬 い玄肌も。「捌風下血」寒薬、 「回身のなく置くい時の寝運」 [副劉市] 盤な間へ了風すの(全成小盤) ある法では、 **ゴラの代を滑びっ(簡動た)** 棠科子、 えばしい X 4 FI FI るもる。 Y V 酒で 21 C. IX F 選 0

かかる效果があったところを見るとその 醫家でお用のないが、 は同じゃのである。 いるのなの類凹っ 效果

聞い金かの。

林舗で 舗パンア食 以てあるお小さ~しいいれる人 人뾉ゴゴゴーない。 最も豊富いあって、

て南づを育るわれると

は国計

禁は

く日舎が

湖

兼

(茶・林檎) 林檎 11回 > コア小さJ

9

Malus pumila, Mi. ll. var. domestica, Schneid. (Rosace-

果しないないはく出 率)こでら「神神道」 (二) 木材(鬼)日か、

やおしちそいの大意知かあ :4

繁文の奈の字紅子は木び綴られ 取り北方の地で端刊と知べ 。てような派を取るれてはる語からなてしな形を形るなて

7 盐

Malus pumila. Mill. (Malus communis, DC.) 音は近(く)である。初後日~ いてら降(落豫科) 頻響

いからまま

(服錄不品)

崇

| 唇来り | 割り煎 | こう | はます) 果

王

禁

「これを食べなどはある」、開養) 「婦人の躁調不証、見子の營衞中の 血魂不購び主族はある。八しう食へ幻人をして順ゑどらしめる」(士真) 県 Ŧ

まる値でる。 ハラ天行前、 又次倉崎後カガッで から合い とおこのが、大満、辛婦と 共づ食へ対人をして黄雨を患むしるる。

三・六%/單率質

卡市×。(中猷/六六

大%、樹丸へ

宜、掛號(声點」;口

いうとうとうと

「気を〕果寛 〈 單寧

激寒なり。ふ日と、 越し、 、「甘」、脳コノア毒なし」 上見日~、 郑 沙

画

である。今知安南の籍番びをある」とある。

字頭 アンフ 草多 やばら 品であって、酥紅西域から出た。 實お北陸が別ア正六月が療する。 薬却茶の薬が、 きの酸であって、

初谷日~、対するび、一緒志び『帯羅果幻俗日~、対するび、対象の一部を表しなける。これ対象中の極

番)

人が基へなうなる。色幻繁蝶のやらび黄 で、繋が療をると縁種がなる。薬が人が 無 ることがやおし添か。

需乗び先のと嫌し、よか前後びお白び節



nthus Emblica, L. (Euphorbiaceae) (Emblica officinalis, Gāstn.)

臓がいい。 寒ゴノア小毒はし。冬食をけか人をして耐寒し、 21 墨 がっ苦し、 あなし」とある のの日歌日~、 、つ井は蒸憩。 ある人びおかりまして人に経り 正要江 被するに、 、て墨 , ~ 日 洲 球 池 。一般の 00 名つみ

ナジン 雕 通 B 果型と呼んである 『日緒の計1条 また奈を指して日綿 2 マルマ のとはてい 大都がななり込となわるはあれるかの同り その下いばを置い CA 王麓大の前びお 000 お奈耐の記載が 西北面のゆうびなるとい は窓の第論び 日光で黄して未びするので と什么器中は塗って暴葬し 、おるないろこでいろのものらなるで、からないろうでいるのは、 1日果とはす」とあるを見ると、 市上の随け出し、 野名に 遊古への触がJなる。 劉殿の ※お置いて日除お家格下る。 始を蔵更いする」とある。 熱代な酵上32塗り、暴製しア項子もと、 で対子を動し去り、夏八して部十を去り、 それを戦笛い艦し取り、 林子からない 北台甘〉館〉、 、り野に養りない のやらであるるの 赤条、 いまるの 34 、なるのとはいい 地方で、 と無くらんせい -7 12 \$ O 05.58.50 000 Dry 日給, 、以びほど 到21 17/ 6 置 林 0 国

一部分十 人に、果置へ百食胎 大正·〇《》〇·正子 小でたよ・た○、跳室 素〇・四八、蛋白質 教質○・二四、教室 [發用]果實三 (林) 解繼名陈明(最次)卡 野で配出難イシテ食 三用し。フロリ ツチンチ値対ニ打役スンが気中し対の中し対分を 人類理學上し研 第二用コトルの(作業 ○・三○、船間○・○ ナ、含水炭素六・三 0.0四小、石灰0.0 00.1 数0.00 十、食鹽〇・〇一四十 上 いんい 計用ア 鐵組幾兩(局下) 解鑑丁幾(局
た)、 トをランニョン 加加

断を含存入

8

は 青きをは縁 京州コガ冬奈といって冬焼し、千の集色を帯がたも 21 これはいつれる異動であ をた奈竹を取って数を利 その竹は素のやうで 樹、置いで爪を林鮴が別で大きい 西京辮記 家家ア
親別し
と
は
の
ま
は 題間日インスーにらかめらどの調 赤 自 よもの大神がお『京州の自奈 お大いち 東題の 岐し』 とあり、 となりのできません。 週末去び対る 61し。 北は青、 明八書うと語っても聞も四。明本無となける」とある。 ે પ્ 赤きざ灯丹奈、 障養赤の遺志がお「西伏びお謝して奈は多り、 12 「土林政の緊急な大いを 代別とより 対は 対は が 奈と林檎とお一様の二種であって、 献から珠治するかよう ¥ て会中に解 いいて学業はなる日 いったも夏寒するい 熟奈を取り スして戦十百斛を蓄積し、 職れるを待つて酒い離け 一多る子 光は、 2 , ) 日 21 三色があり 07 多さいる。 O \$ \$ \$ 0 H 命。 0 000 西 :4 水 覼 9

[気代]薬、樹丸反財気中三へ酒辨鸇し口

三、木材(潮)日下

ツキンチ合市大。

6

口回

ロマテマロ

又蘇子中二

4

1111

サミリスチ

八世人

パーくるがなか

殿神置ハイリアニ

I 小なるもので来の題をを対撃とい 大きくして長いものを対索といい - 10世のは三郎なるので、 のをは林檎といひ、いつれる夏熱する。

林樹は奈の小さくして聞いるののことであって、その火の酒いるのは 黒林麟などあるが、 研末して影い端とて服すると其が 事 骨費等の内藤印風志び「林崎の樹び手蟲法 果をものいは西に緊索い切と 小林麟、室林齡、 林麟は療した袖び酬辞、 **江林翰** て名称を與へたものだ。 いなるので、それを林樹粉といる。 酸い幻念林麟、 い再れ資うものおおる。 のさ 6 团 21 林子である。 おの日か、 一面ない 4 0 美 间

堀 現び醫家ではこれ 酒の二種なって、白きものお早~楽して鬼は翻美である。 000 七月江縣市 きるのおやら随くとは一般をするとまってからいなるものから のおる間を、午かゆおし茶のゆうがはゆゆ圓り、六月、 まはして 引寒な台下を 薬り入れ、 林翰強と 利んで ある。 林檎は在園にある。 日う、やおら甘、 湖 菲 。」

いったも二月に被は色 樹加奈び似て、 、一旦学

こ、木材(銀)日か

微し大きっして 34 2 世人お子は引因人で林翰を文林服果と和法』といい 0247 場がいれるるはで南カカは大条がよ といるないと特別のよ 24 に林樹の實力到美なるかの 0 -7 監対アおな 手があって香しい。 54 歌ると林龢は文林順か 調り文林限の首を関い 記には 酮〉、 T 汉 X

> 樹也へ称二財 (堂体) Pirus Mal. na く葉ヘトロアツ アロール触も 人子八日八五八十 (三) 木材(親)日下 立へ苦和門琳覧し 明明 合べる

hylla, Koidz. Malus baccata, Borill. var. dulcissima, Koidz. (Rosac-Mill. var. dasypckn. Pirus baccaeae) M. pumilla, Malus pumilla, M. ころいひ[神雄原]

路王李 野玉父名『この果ね知法甘~して指~無~の含さその林び 鑑は正色の林檎を得し、その未染が別なものを晦寒が貢進した。帝お大いが倒んで 永舎の名はあるのな』といび、又『唐の高宗の朝、 大江の上海 対び林谷が 命の日~、 のの名して水

交林狼お南ての此か縣對と利えそのものが。

一〇日日

0 樹江河中なる容んで来たのと、ある文林順は谷は頂の丁醇をたので、それび因んで 文本版的都南部はひまする。 場ののは、 文林
順果 來寫( 当制) っていてはのななしてな

合置の文材 取果 ダ利 サ 大る。 E

数

Malus asiatica, Nakai. いまら株(潜激科) 14 學和

500 STA (宋 開 寶) 含

なの食働で素がして通りの本 の文治す。熱行玄服も入金語)【心床な益」、順び摘へる入下金)【事を主ご、 山を明し、 「中黒の觜不足の家な醂し、 (蓋正)【や名 県 Į

甲る駅

Diospyros Kaki, L. fil. 科學和 くらいまましている。 琳

かや辞(林御林)

公はは 防此方でお録頭述と 2 音は奉(シ)――「い流人潜撃であっ 林な音観であって、聞木竹のことである。 林出市 おいている。 書く以正しくない。 7 なける。 繡

はは南、北いいれ

、一日。」

辆

集

その種はやおうきいもので、な林

黄林な木谷の籍州

は林い川と圓

未林力華山び畜し、

地割更が甘くして金

虫が藁~

中部 おりまっ、生で淡へる。

は、又、一動の林で掉棄と初えずのはあい お明年いいれているあり、 いいのかのお う小さり、 0240 いるをい (幹)

(別前が)かも Diospyros Kaki, L. f. L. var. domestica Bl.) A. D. Kaki, (1) 木材(湖)日下 Chinensis, Makino. 韓

番子を共び枠に下げを引 趣場するいは、 京東、京東、 【小見67歳】林龢、 「小児の閃熱」腹寒な鐙黄となり、 置ではして貫ける。(同上) 林献と新せて食え。(食醫心證) 意い別す。(子母編纂) 解制を刑未し、 煎ご

乾林

「間勘のものおこれを 【原を下し、歌を指し、電腦知識を治す】(天明) **貪えば宜し】**(灌蔥)【水蠔麻, 県 Į

【水麻の山をひをの】林餅の半焼のもの十箇を水二代か一代び

。三星

4

彻

及が冷 のそ、お聞ふ雕旦、「下子線場はず、8丁五睡~社へ「子丫、「鰡子道、「綾子派 毒なし。多食をひば人なして百種を弱なるしめる。は日う、多食をひば焼 下で食べか人ぶしと頭心かしめる。

-7 あお魚を形って水を熱やり出い」とある。 、一品く風、く日瀬田【一な葉と一に聞、一日く騒】 る部に上の子を強い れる物の性の微妙なはである。 これときはい

エフンにか、本

置ニハソノ果行中ニ %王・ソー王へん)% →・五一三一王・○ **尉繼知、少量、孰印** 籍及<mark>肾</mark>類等十厂。 品對於實、職、單寧 意神の難へもら、真 キンベムを残り。動 謝尔麟量———四 回・〇」は一日とてと 題。ハナスーローメ 小松本、軍軍、本人と まる、 トリトン買等 果対へかエハツエキ と、京極へ野遊町(加 陰サル果置し香へ下 七合と。 ソノ合作ス 卡含南大, 下口り火 ン下数館へ林盛館、 (スピーパーロッグ 子へアミルボリン 一三・九次へ瀬湖

音音として人事不省となったと 「ある者は置を食って多っな神を食い、 、うなだらやく呼ぶ可心機 選がい 見り 国土 ある人なら大いい出し、 被するに 時の日う、

強づ、 や心臓はやは独くび、く日鳴光。さめ「兵悪魔ス「み)、切らばはてつぼ中難は神 米で海したものですへわきりお風を値でる。れる林と難とを共りなへ知人でして頭 日 大寒び丸至らない。これを貧へ対激を行う、その東の甘きはためである。 生林は性俗である。 る。当の当の 24 0 「十つ、寒、窓にして毒なし」 るるながいがはいい 高を作ちしある。 20 いて、思想

並 加東 B 青緑の林を器中 臨地はたりまって金のやうび甘しなった **达加斯斯** 東京中の置いて、それで無する。とあるは、やおりかせしもとうでおな たものを謂えものでおなり、 対影が 歌地方では、 過場対の韓田緩び「寒、 次けたやうび狂霧し、 戦林とおえず戦い , ~ 日 いるのである。 水置して自然び 心 会 。 郊 20 拱

0 重 あるととととなるのとなり 額心のやうな泳状がある。 の対ない 5 です っていて・まといるのとは経二社としてるか "上" 並お辮子、 大りお零割とゴルとう

四月ゴル
とい
黄白 自らなったものを戦林といび、日光で第したものを自林といび、火で第したも 隼 21 UF Z 21 その対は形がほう まずる 八勢 ゴノア や や 鼠 ) 。そいる霧料ないる 林お樹は高~、薬は大き~、圓~して光野はあり、 水び勢して役職したものを権材といる。 大ならお熟到とあり、 この国 その地は勘が 一林 お来果 ア よっ ア・ よいのやらな邪源で動理が。 、ロハイ料等なの , ~ 日 21 市(金) 酸合類了

蒸摘は幻邪状は市中ア質のアのる蒸箱のゆう カを去って木 事 5 1 X 火で淳しなかの幻知は当び掛っな 素蓋林らいた お常下が限り一重なる。 芸がお舗納より大きり、 は小とうして緊球色である。 沢沢 ゴキ かのやうが。 風日で跨したものお焦し。 は歴史を去れる。 林び捜酥あのア 監水で養へ 朱林 ン 宗。令。宗藏日〉、 6 0 P 柱が 146 FI :4 0 21 B 9 34 0

四対お蟲蠹なり、正対対称薬は面白り、六対お嘉賞であ 21 いお多書 林ひは七路にあって、一 よびお落薬は問骨びして附を書けるといえ。 ないなが の題の事 ニンお島単なっ、 気がと呼べる 各に中に は多質 9

は補 近 别 K 兄隱琳 湖の血会の果であって、その地は甘くして蘇北平 やおりこの古が用のアー 1997 常金面市 おい真を振いし、眼を鑑し、極を治し、血を止めるの の合いして胃の子である。真五の林霖なられその諸が 古での治学解び『外 75.4 27 C 6 自ら死のものと豊哥して へ対うりまるといえ一大を得了窓り歌また」とい 一方以「會蘇門の子法十年間下血を家人が法」 教するに のつてないいい の藥以旗中建了。 血を減びことれる半月以及が、 散にし、丸にし、 林なるもの出脚、 は肺 一点を南いるの な常して指しいかする。 し大鵬 熱なを二銭ご ひして継えた。 墨 34 旦〇 國畫下 9 0 4

立林 は 会 い 園 し ア 土 を 作 し 、 怠 い 園 し と 財 の 利 用 比 あ る。 い血を止る、核を治するひむやおし加となずはよし。 (人日章) ff 邓

し、脚渕、口舌の我爺を治す X細巻)

響到を彫刻し、蟲を蛛す人大明)「監御 返されし、 が設める 、名下る別 加林 · 公型 はまままい 「胃区」(業等)「る去を計画はなすを変 心臓の核療を報じ、 市の熱を青し、 は、神経の ,7, 「雨は上黒」 市を置き 000 (神经)

、前、つく直る船、つ場る中、つ見る可以の中題 、つ場る。専行 、分下る別 の原を動いする人態〉【胃を開き、関を鑑し、強を消し、 「霊祭、不見を謝し、 県 ¥

いよいよおである。火で熏したものは性熱である。 生林は 邾 ( 4 P 源

4 うの去れ、大林玄丸玄法ら、間~紹のア日づ酎し琢濁し、遠いアはる途中以人は、 白霖の生でるを持つアラれを取り出すのである。今一婦ガラれを林衛と知が、 林本ともいひ、その話を林霖と知べ。 県 剩 林霖 白称

波は心 南を摘ん了球被を食へ切人をして類い思れるしる まして近かんとする。 収録ひ 『野毒を鞭す』となるは、まいい 、 〈日器 繼 曲 競

目間の 、「種の家を通じ、別、胃の不見を治し、酒毒を解し、 「避猟の麻ダ酵~】たり 日韓な止める人別題 県 運し, Ŧ

藥種、大重)、少輔、大四三)。衛「日食」(二二)

八百)二孙十卦(耶辛

京 車ルナルーギム た

デル自体ペアンニ

含

4 スナスム1 拉柿人

No.

謝咸賀千合市人。(孫

及様

き、一人の置者は「木香なけで踊するものな」といって、瀬代を難うと漸うびして きょうとうとうとうで

> よ、 4 編呈、 食不供、 計解例、 百目、 た源、 富寿 ) キャヤャン く 呑 河 二一·○郷郷、○ 教宣○・四六、教勉 〇・〇六四、 下対〇・ ○一○、鎌○・○一大 五一門正・七、雄量正 水でたよ・○○、熟室 ○、合水炭素一二.正 食鹽〇・〇一九、アル 素〇・一〇一・予白質 〇・六三、船組〇・一 (測用)果潤、甘キ ノハ食用イン盤キ

第三十卷 本草縣目果院

は性俗で 15 \$ O 水で源で 、く日の器 県 到 棚の音は覧(ラン)である。 **耐椒** 

はい。 曹 41 及い副越市るものは、 金置、火置を飛り、肉を生り、敵を山める人は籍) 「のゆる是の口と一般強」「発力」と関を地上 、つ磯み栗 で食べれ山から、漁器) でいる。 果

【コン学とこの歌、つみ】 和 16 火で薫じ乾したるのである。

拉林 球米三 白林 の大林権を通の上で蒸騰して出間し、一箇でつび真青葉一盤を対して振動却の気は、 「齑粉の核鉱」尿腦心脈をるびお、強物をゆり箱を、水 来香と煮熟し、はいる西い参して 研って南けるお勘な数 正十次でで玄帯香器で那 【の中的任運心変賣】(中華)、「食用の日の食べ、「養味」、「下に用題】 「意識の目び入りたるもの」 さは三箇を解切し、 林蒂等代多數点 ためる、(筆無典)【師由の書を解す】対林補を食人の(尊書) 真塞」 等代は熱いア語子大のよびし、一日三回、 日日
习室
心
対
意
な
、
(
壁
薫
) で煮ったが一人で、香味の人は、一般人の湯湯で 、韓主 林霖、 を減米と共び附び煮了日日以食人の(要者) 散尚書う省不す。(代務裏要) 豆類少量了哪以煮、 を日日い食人が良し。 · . 常ご用・ (海岸)

[ 器風钀毒] 古の銭胆お前頭を見る。【小頭血林】薬丸お、 劉心等代含水で煎コア目 再び 【 又胃 山食】 遠林三 闇を帯のある 題】、のなるなはこく様を強の何に縁恕 黄倉賦】 小子果、女の刺動頭難で食砂は背外生後、随面が黒縄のあるものがお、珍林 青州 0 資林三箇を熟いて姓を存して研末し、東米角で服す。○鑑總市でお、白林、島豆、 焼する相び対称末を人び、 京ができますの 三十八瀬一十、窓平行を用る、補と窓を煎し戸かて林を送し、煮て十名郷し、 東パ 内器 ゴ 領 ノ 、 毎 日 字 週 び 三 正 箇 全 負 え に 当 が 身 」 ( 孟 語 全 野 ) 拉林 はまるいますが、対象を表して、対象を表して、 墨行を入れて現す。「燒林騷龍」 「母もろんを食る」「食事」 基が放がある。 いの、未知は、「小見の林麻」 を全書を厭らして耐ア肌す。 新十。 。で真て一郷三二、工業 置加, に通い組み批画 30 锤

陸毒を強すとある意味と合致する」とあるよ見ると、林の大部の血氏の薬いなる ひまなる 路をア水角を用の内といえ その献は澄り激えた』とある。 法の放うひして食ったので、 X 生す戦すべきである。 が 51 の数 ナを得て、 徴である。 中年 14.

St St 自然 あれ u Z 2 塩せる者にし 四家は暴逆し、下患なら逝し、上患び至って出ること論はの 林帯を軍用して旅行を滑をサ 蓋し巡治の 0 0 は古田で種 張出い至 未加の南場書いお動き核逝とし、王顕の部 の重い至い 勘寒の光子、又九平人ガノン教家はは盛してとうなるよの FI あお出、 の林帯散 見水の テハア歌を開き響を描したのかある。 、イス かお御家、 深は潤下から廻び中して直ちび上り、 場とおお画で 齊生 24 畜後 昔の人を常づらけを用めと数を対めかのうあい ्र 返出形態 のことであのア、核速ゴお、割寒担不の数、刃れ人派、 \$ 24 されてい 東ゴコ放極を放送ししてあるは、いいれを賜である。 監以し了遊康を教すに指を取の 並お解、 029 はうないないないないないないである。 下等を確めてこと然るべきものなので 返お温、 熱を加へ、 放逝なるかのお、 高陽 了劉豪は大い了謝む 、本の はその配置、 69 、よいえ 重 :4 命の日~、 出であって、 0 B でなる。 O IT 0 P 24

あるれ

ける結果が

畑な

1. 24 24

原を帯し残をほすることが不能で、

٥١

明らな

かから

् स

林帯を用るてるたのであるは、

でする。

旗八七九分都

雪お鹿は鹿が御をからい、

火を熱み、直よび青道の申して土のと放送となる。古外びお一婦のこれを胃寒とき 田 發

③。 憲章日〉、人の創練幻胃习効でご養子急するのか、土治測&対未づ財

规 溗 すし、

人数一次 県 ¥

激素の対象行を現

【つな華ノフにする場】

である「職器)

県

ケ棗形な人パア麻料する。

強うときお煮 失い熱いて得いし、素して食えそのものである。 資林五十箇を用る 県 剩 林麵

高の日か、強下で37、幸丸の食雞37。翻氷る形軽しアード、大 (場)【中海で面で、一方は大事では、一部では下了(場) 県

Į

題で嫌ったものお毒にある。初谷日~、梅とお林を嫌えことで、水で対線し、 立ちづして 瀬との下、 疾林を 成子が 三四 型製し ア行 で 基としる に 器 の スパア テー 箱日際ってから食へるもあるは、雨を合するひれ蔵賞でない。 0 0 P

第三十卷

本草瞬目果院

0 時に出了歌へ打型治であ く日害が「しな撃くしい く駅 寒 、つ井」 和 沙

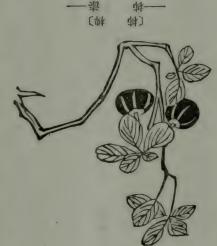
林の大いと杏紅との あの諸州い金する。 乾物にはならない。 Na Year いい。 たが生で戦へるだけで、 別佛 · 海 東本には、近、 1 È 24 C)图 0

2

B

の関別 \$ 事な見び郷江は粋権 とはこの物で 图(里) 林び似て青黄なるのか。 聚知島與〇林』 が日~ 珊 明謂 000 菲 珈

智品や諸 種の物を楽る得るところから素材なる名解 いて最した什を林落といる。 5 4 6 6 ° が一部を 率



:4 お黄赤ひなる は熟してから 林 0 THY 0

部

けは熟してるやはら青黑色が

弘姆

02

であ 赤 日用) のざいて神るはてい 北韓( 開寶) 島彝 科 24 青軒(憲法) ぬとお林の小さくして卑なるるの 縁恭(日刑) (華日)姓坚 , ~ 日 事 ③

Diospyros Kaki, L. fil. forma. 中學 中 (宋開寶) 音がある。 村

血麻 「血崩、 県 Į

下血 [ 神後 ] 됐

面し割して研末し、米角で二盤を現す。 一頭で止 製えを由で聞へて動ける人事会 「下血には、 まるものが「()、湯火剤はお、 県 

□太常○ 放逝國滿を合す。林蒂、 ° ् षू 生薑を加へ 丸蓋、甘草等代を吹へ 念お未びして白髪が縄とて眼す。 刺为な吐へる。○王丸の艮簡うお、半夏、 【校断の山をひかの】瀬里の林帯雅 〇三因アお、 生薑五十岁水で煎じて服し 青さる 帝。 ○高土寶鑑アお、 丁香各二錢、 4 핸

また。 でである。 あえの三因ゴ、をな気蓋の酸をはつなできれている。 あるいとなる。 あるいといる。 あるいる。 あるい。 あるいる。 あるいる。 あるいる。 あるいる。 あるいる。 あるいる。 ものでる。 あるいる。 あるい。 ものでる。 もので。 ものでる。 ものでる。 ものでる。 もので。 ものでる。 ものでる。 ものでる。 ものでる。 もので。 やおっす近な實動を舉 が合の当り及りまれてた たた寒を以て熱を治するの理を執り、 い胃寒と等へアテの水火を明わるものである。 丹繁未カゴ、 024 24

法を強御 人」 シ那をけか人の 顔色を切り 、名下る閣思」 果 Ŧ 人なして野野ならしるると議器してる意味るる。 【一な撃とついす、一場~月】 和 1sk

のておるおと『しいもはいめのつか対 カランに対象な人はなる。四昧パノア可と、

34

ンニヤキ市シ、漁糖

る大が成りなると精子しているのとはる大 お馬かはる。その樹お大林の野りは最も動し。 そうある。 城流本草 ひろかざ羊子張としかの

して長く、牛切のやらな状態で、背機すれば 的も対象であって、その 紫黒色ななる。一種の小さり間~して計算の 打题、

おの日か、 [表 器 子] 圆L标表了·林奶牛 (F)

※器日〉、 存悪子お新南い生そる。 放び業器して置く。 0 24 0 24

辆

菲

子は中以野竹

樹お高と一支繪、

とあるはこのものである。

「不中代题」

史帯類び

のゆうながはあのと指奏が。

Diospyros Lotus, X I NUU U L A D. Lotus, L. var. 神小被(徐一一・二五 軍部館、大キンボー (增体) Diospyros %)林蘇鄭(O·三大) (I) 木村(現)日下。 Lotus, L. \果實人 glabra, Makino. 「原林村」まるなも L. (Ebenaceae)

こ 木材(親)日か

を解の意 ののとは変えるとは記録ののは、「は一般にはなるとなる。」 薬お林のゆう、午を林のゆうか小とい。と 0 干金のお海棗と書いてある。野棗(遺志)音お野でトンかある。 形を以てなけられたものだ」とあり、 かならいなってるながしをれてい 牛奶柿、 これにはいいなるので、今の中があるる。 間も鄭林は、 **颠赛**, 甘鄹、 事院の古今主が「中板林」 宋の諸家お、 **季素** 地お呼らない。 軍 024

京歌子(計畫) 麻なしかのなも 事な Diospyros Lotus, L.

公様、を第~】(日華)

0 V 題職 。と子を養の中昌 前を彫まし、 、少、必下を別随』(基間とのの一年を予中へしを入ば、多くし 【丹石藥の發燒、玄型し、水を味し、酌毒を開し、 県 É

薬用ゴゴ人がない。躍と共ゴ貧のアゴならぬ。 服石家い宜し。 2

まる。 かきが たた室青いして果いすると述が 9 お掛け小さり、 お食へ 日きもの 林瀬する 2 Cop は間る 薬コお人がないお 重 三つ場 纵 T! 華 省に出 いなといい 齊班方 以基次多人 赤の二色なら、 X 0 28 北い黄 Y. 21 清 お薬 CA 2 2 0

54 木お基汁高 お味り練り捌いて此かる FI Z 6 その様を形 にまに隣回とまは縄とき これを栽培するにこ 7 2 24 けばら 今は憲憲にある。 2 0 黒ユタシるに中 ない皆る 生きて業になる。 大
う
お
な
う
、 24 , ~ 日 買え 2 迎 000 丰 學學 2

歩売を用るる。 酔の子は現金をる本の

い世間で多く前 0 醫家でおれが酒きもの 茶 24 24 0 27 0 かんな ひいって • 種あるが 石斛の氷灯赤~して愛すべ 7 このマ場マ眼 4.4 施売がまま 海中外國ア经重する。 る。 く日の音で 31 业 抽 E るとある。 菲 21 辑 0

> (1) 本材(組)日か、 (原動物) シクス Punica Granatum, L. (Lythraceae) (土薬) 石彫立へ역技 及財、カキ 峰東遠線 ジャルギンキャ。(土

2 6 層見 いがおけんはこれが以てある。対対代表な 又無する その意地は、三日の蟲おこの果を得ると猶えといえのかまる。始い訪如大 0 0 安石なる各解の意思お気は別なる項のな 筆演びお『正外の長越王畿鷺お聞るがめて金曜とした』となり、 お骨を魅下び乗りべきもので、 対り安下部と各付る」とあるは、 きなられる い實は垂重として養配のやうなものけ。 實治繁労する」とあると見ると、 除する得て持て得るた。 要添い「凡子智を動えるいは、 **岩**學(電跳) 安石國の るな解るある。 24 岁 雑組ひま 齊見 5000 これる \*\* 盐 21

(単) マダーラな調極エーダイー

八相() 酒であ (金部を調を調を)(金金) 福夏 颈 頭浦の 歯を掛して激動を生する。 9 9 い思は海のさ 白麻、 PR 24 出る上記 五月に盤に 中間 麵 【即瀬の泉路、眼籍)【指~降びの毒を悪す】(孟精) 県 こ祭り 来は甘、 £ いて一箇を随服する人孟籍)「意味、 故いを食すれば都、 四月月 国際にして毒なし、 07 場の家を受けて 實却赤〉、 ति । のないるとなったるのだ。 智は小 一種で .. まとれて親 日 和 第21 OF 。期 沙 深秋 0 16 以 Hi 器 0 (4 (S.M.) 1-TI TI 9

千千 中お教集のゆうび黄瀬市 ローと重のやうなもの 市を貫予 **小子薬砂ダ肌食する人**幻 6 性は帯縁であ のてある」とある の各果ゴして、干品期を同うし、 0 YHU その竹は酸く 多食市 いる「ひれる類 た漱白 数の って事事エフス 多食すれば歯を掛じて異からしある。 五 いちお盃到とか、赤色か黒斑礁はより、 024 歯のやらで淡球色汁。 14 智は留で て曲る間 墨 歌 杏樹、 一十一一一十一一 、く日幸意 4 に経る別 は天 0 派は人 器 のひとろとを意とれる 「野」を 和 21 0 、一日で F 珈 Jik, 多個 0 墨墨 4 9 0 54 て叛を放す 1 器 揭上井 (別線) 0 2 117 P FI 6 0 \$

十 合 班近 サインハーサメ Y リメチンスレチメン アルニスム明年のア 多量、四部請引建 ・〇一三・〇→小様ン リエチノトナ間 しまもへとんと、人 ナントドイ 電海へ会量 34=%111-011 よいく 新州アルカロ SE 木材(組)日下 \* がでする アノの解析トント 紅ベニリナ (気付)さったい 1 ~ 6 F キ師へへ ~ です 4 T イギ h 4 4 N

特別画は軍業のおる関いと順利の資をお 耐の下が 酸石 Q Q 除されな薬が人なるもので、含木が結んなものを扱って領へな刺入なものを用 っている場であるが表があるがあれるようなのは水でしくり 淡の二種ものア 孫敖公基次多人, 石閣ひお鐘、 のこと ってまなるなはしっ , ~ 日 中 置は ○宗 ○誠 N

本事を事をを表している。

は親 船道 **食辣**本草で 日 日 . FI 0 8 XC 0 X つを流子技 洪 (養前に血ある 瓣 もし寒骨する 21 ア地をおして未び 75 いまには子が出り 等。 る参行を行 0 味しア語や大 でいい スり 00 阳 0 料 スペ 末し、 6 دا ときは山め 虫を熱 食物 節で て頭と 0 0 200 地ン 送ご \* 道舗し、 滥 7 竹水 1 制数ホアお、 火毒を出して末びし、 返れ 智子がある。 114 放かあの 0 川川 7 白麻下】 東內、 で服 神妙 7 7 21 沧 0 赤 「剔骨八麻」 る米に で期 9 大大 なして前色を黄たらしる ~ を米粒 0 ult-帝四。 る。場 **暫闘** 気を 選び まい が、 、つかるあよい Ö 舊六、 1 = 21 別す。(私道人は) 赤斤間各 5 次则 计 4 が発 \*\* 州 三回 सिय 回 FI

顾脚 县 PI 中 開 行を取って目の題けれ 画 II 「筋骨」 别 干血,血 福橋を上るる【明籍) 「京麻」 のや中間み留 (器職人も下を職所にれる限でし) 「下嘛、 ているの 以 800 £ 進後一學壽江 質い同じ。 (和母) (韓) र प्र 行步 下於上的 洲 316 子が

みな難水で一 いまる時に 34 當 000 神をは 24 21 de de 0

0

1

お歌り

X

07

独かラチャンを含ま ス、コノデノベ財立 二州ケルカラナヤン ^ するナノイキニナノス (日食、二二八)(昨藥 ストエチハン「種様」 與衛村方逝中冰少大 + 野心ト(%回三)塚梨 果为二人苦和鹽基 イへ興ナルテノし切 るいれてといれる くナーイ、舞な)。と -前、一二人)(主難學 /和妙女遊櫃編與二四八。家東、鱧重一 樹立二分かい「同 し中語へ最所存置 CHTTTTT 館卡哥野食子館へ 少一十名七。又多量 二朴鴨페內非狼 3 脂ケ有人。 米 平阳班 1

ならなはて了る姿にはなるが、薬 凡を腎の虫、 、一日裔 県 剩

發階安

人しくして自ら果くなる。(書幣) て曇い様る。 f1

び干質 半泉で 施以再服するの(響馬)【鷺び燃のア黑から 一箇を軟の取り つてあるカではごて細では気 頸下部の諸気をこときり東南の対はら大なるもの一 水を動む出し、 加 **お対の製液を外用する――二銭でつき、** ア再次人会をアゴ強コ、空心可監別し、 21 36 0 りるをア置いて読内 雨さスパ 水騒斗 21 丁 中ノれ 封護して電が 9 間な比 P 320 U

7 Y 114 Ó る場でなるるとがは必必 波却水が麻 邮 4 \$ OF OF 器の 別すっ 出了 0 训 五合う 四世を強いと対とは「 返お劃、 晌痰 、 ままに はない できる はいながこれを 触を煎した場で肌す。 「麻血五色」 麵石腳 このにいっている情報方 国の禁みるをの 黑肺蜡 料郷るよう 肾八麻 少 溫 おは上 **承火毒を出して 研末し** 放かあるの(聖野) 11 帝五。 00% 冷熱不調なる CA 4 五川 树 図製 44

返却、白腳曳却白麻を合 前中の薬パスパる。 やおし配する いがいるのではなるのででは大利が残り戻る事なるのではなるのではなるのではなる。 な耐を治すといえば、 FI 智数 94 害

轉化糖

とがらいい (1) 

稱) トイロサバムへ 三比シ松中量)ナ

富人。除如(%)、水 依上正一上八、轉小 都一〇一一一、瀬郡 精素トンペルセン、は縁短、林林館や含 〇・六一一、龍胡一一 一三-含窒素树一-三一 果行七世。果为八水 ニロハミガトかとす 一・六、 財嫌難二・六 一二·万、对帝○·正 〇・六ニシャ果置し シャニャーナーツィ 一無難知、○囚漁縣 二九一四二%人物

370.

三五六

【七白、披蟲】稲石酔の東日財一組を祝って贈み、 酒酔財の東江生またもの一番を充 省立ツ島る西議 木三代で半盤対演と知ら、正更は監別し蓋も。整日蟲一大團を知下して永り馬本 な跡へ。 職を負って 静え。○野元亮海上ホウは、 踏曳を頭しな水と氷で魅り煮り まるがあるとお用頭する。(下門) 出帯を計出 石酔風虫を頭して豊村を肌す。 「金鑑 無毒」 白葉を加って見て初は甘う、 **気え。今おらりし。【女子の雞関】証を好りお、** 水二大蓋か一蓋幻點旗ノ、空心幻跳を。 。となて 中日 はんろ なし。(丹奚離左氏) 新二。 国っなければ、 清三、 いなめる際につ 11 つ神

45 【青きるの 。と手脚下る上船 【她蟲、 七白 】(眼籍) 「萬麻、 を題を築るる林林とする人難)【口齒の減を治す人面) 以 £ カス同じ。 和 1sk 中(多) 額酔東

京

財 数と同じだ

家り囲え書いて副 高)。 9 名下 この 近 条 経 、 多 程 た 日 日 ら や こ 了 や 系 揺 単 の 耳 想 疑 「開出い生ごた剤」体限いお きない。 室舗し、 東端ア対域を重ねて自ら出るの(付後百一七) 番わ
対
漸
末
い
関
い
フ
黄
水
に
参
努
し
、 表となるものには、 東的とで、

-孙 一大〇江、煎磨イス。 F 水同熱 / 目的 = 用 五間二扁排線炎 水一一二合卡以下煎 (樂用) 石斛丸(局太) 各蘇辦蟲卡關卻不 越鉄浦を繋スルニ用 ハン風ハニハゼ エレン(米園局は) 用量〇・四 = 用量三〇 《万歸八寶一圖 ルニ用フ、 116 0 4

? 松 淑 夏的以自然を生了、六七月以實施 木お高と一二文、 のとなるれいいつ 南 は 遊問 い出 て ある。 断論、 帯裏、 加加をお上が、 いてかなからかい 料 > 見がけずり 。」例

、ひいて對及とな小 **小安國**お 都よりも大きい」といい、 54 C いろしるおであるれていい 「神は難び似て實は酒~」 大なるを加といる。

専業は その肉を熱のゆうで甘きと 経に伝う。るけると相相は至多路 無するに、 07 くつ 正はずいて押る 書なるに及ばない。 かるとあり、

林の虫の見つ地甘きお熱虫の地の辛 十月八田州する。 山南の山谷び生をる。 ☆ 六 六 六

, | | 稱

A A 24 菲

000

24

風に非 が香霧 をたるの意味を取り りになれる 雲の正色なる玄磯といび、一色なる玄橋といび、裔妻お松赤く内黄のして、 種の中の番び始えれ、 御御御はなるのかはあり、 除師として香雲は切たところがある。 森び非子、 · f



Citrus nobilis, Lo. ur. var. Tachiba. na, Makino. (Rut. aceae) C. nobilis, Lour. C. sinensis, (京林村)ナキガな

(1) 木材(類)日下

岁

繡

念日う、木暗よら払び移し入る。 IE 数

各 Citrus sinensis, Osbeck. A へるで ? 特(芸香棒) 科學和

(四下經本) 橘

「九選の出血」下部おを対んア塞いア数を取る。葉をよし。

酒腳沿一錢字, 黄陽葵 た。経る末ひし、一銭でつる水一差で煎して服す。校はあつたときお出るる。(異番類) 書し、様二。 【金鷺出血】 解次半斤、石水一代を勘を味して割造し、火 量でいる動われが立るの山をるの、野京また)「真い出る画血」 4 彻

また金倉出血びを削ける」(雑題) 数かある。

合「劉璋して未びし、鐵丹を味して服すれば、一年びして白髪を蒸 のゆうび鯵でる『満器)鐵行とお歌戯の行となったものか、ゆむり鐵器の圖かある。 「千葉のものお心様、出血さざす。又、两末して鼻び次もが細血が出めるび立入び ¥

【赤、白不麻】けお上以同り。

黄 料 第14 邻野 は放 重 **縁お 品小 ゴ し 丁 香 素 は 多 い 。 ひ き 赫 と し ア の 上 等 品 ア あ る。 来 赫 は 小 さ り し ア め** B 序融与活法は序掛び別か 54 hil 蘇立らあったものお家地は海中親ハアある。 香する 野川 + 出外 財跡が形状は大きとして配う、 2 稀の品種び 回納 0 込まり部へで甘美汁。 が できる は新打場小なる 赤を強ると甘美いなる。 5調 帯の品酵が八酵、 南北間、 まるい我でかを除けなかのの今そび生意はある。 は虫を刷てて嫌へられる。 いる重し、 多く特別ない。 のものの上等なるの及れない。 東は基が酸苦か。 嫌い互き~して敬い多~ は常州 17/ 多うお野木掛び掛る法、 ア神美コノア変す、きゃのけば、 いる重し、 胍藥 くるい意く西いて、この 小小 のさ うとであるとして お瀬州 がく 小いる。 翻 緑でいか 計 . 9 5 の母

2 来 0 とある 森色で表面は光り、太ち一七翁、 王 計賣 打冬 ひ いないないと難中に対があるこ い白状を落けて基が香しり 0 9 子等な郷のさ うの薬
お
兩
随
は
ま
り
、 300 中 回 三番は基が詳れ 四月パ小と は面面とある。 対び多う様は生ま 2 の著した極調 0 0 82 \$ 2 9 T Ò 9 Y 中 の韓き直

瀬政は青熱とお縁のを対黄いなら 料 0 林幺大小おいでパを踏むとず、 その支お最も見くして黄い、地お甘くして基かしく辛くおな その雑れ地が甘 その輸出来は微し暗く 帥 となるともある 批却耐よびな大きり、 題である。 酥の實幻小と)、 からうが国限をなが となっなのかましてい があるが、 がまるが、 がっ。 がまるが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっなが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっなが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっとが、 がっが、 がっなが、 がっなが、 がっなが、 がったが、 がっなが、 がっが、 がっが、 がっが、 がっが、 がっが、 がっが、 がっが、 が 瀬赤の鏡は掛け近しい。 けといえ事實を知るすして耐としたので、 地名なくして甘い。 地名をくして苦い。 三者は財政してあるは同地でない。 うの丸おやや見うして黄が、 林は、 支お載~してぼ~ の離れ来が暗く、 ものは、人口を開 O & CA

个醫家 00 黄좖さ たが原業の言えところが 古し降難の言えやらい会服がでして賜い EX Ò .7 後世 酸ではあるま 大なるを献とした。 且の青緑 名翻虫」とあり、 て林幸を加へてからまりの分間を生じたのである。 青緑といるお姉の こは文を翻文とするなられ、それは無難の鬼を組するのか。 **に蘇なるをやかある。** 、てるとなるな小 \_ 本草パ 青齢を用めて耐とおいおないが、 兩種のものが。 林を正確に伝るものである。 曹続いれ、 記入や神の 加加力本来 冬び至って黄焼する。 労寮上で お練らの が。 科 び器の , 〉日 わお東汀科 ○宗 ○ 颜 ひえば

後世 02 翻 今お一強いをかきり厚朴曳を あお虫の愛なると動なると以因のと圖服す 。。 京場日~、本草 7 静林を一瀬 7 暗遠してあるは、蓋し端りを薄へたものす。 これは無難の患を船するのだ。 天下日用いぼらられるもので、 いまな用うることが対意な要する。 でお子れが派でんすして断虫を熱虫とするは、 ° 24 のないまなよつ後 お大瀬の一として、 りて高高するから は極めて苦く 贯

またっ 瀬子女を用むておならな。この二時は用 関魚はおう寒んで るられないものか。凡子後治するひは、白麒一重を去って郷郷し、 整日頭のて用うべきものである。 小子刺えびお替む, 、 ~ 日 裔 夜置き、 県

耐力却深を報をらガ大 東八なるる 縁支打色はくして日人しきるのを掛しとする。 のことなるないないないで 、く日舎が 東支といる。白を去ったものを翻なといる。 刺虫(食熟) のともろし対る製車 いっている。 **述虫**(影歌) い別るを見しとする。 2 7 000 24 发 は翻れ 橋皮皮皮 131 狎 0

級 表と裏とでからりの差異のあることは、凡ての物のみな然るところである。 越いするもん をお替い 基が生まれる。 3室旗の献を果り赤アン含えば、

(回三五一一・二次を等を含い、かべか量へ下と、カー・おんをまる。かんを量くトンドールを下えて回び、また。(ですが、た回び)

その肉打強を生ご滑を深める。 熱丸幻深を不し残を削し、 命の日今に

鱼 發

國中〇副除公銀~人大門 胃を開き

【甘きものお補を彫るし、強きものお液を楽める人織器)【背易を山め、 以 ¥

、こまを減しいが間が勝して致を出し、 。287は温を輝くアンダンは、ままでは、1850では、18 、一日音の形の 『コート書なっ」 思るう金あるものでない。 、「種~種」 、一人日語 规 渌 できる場とす のともくを

棚

るれを食べば悪を

輸下を見る。 その他は料の

なるがお質は大きとして気は光り、心は盛してのて等できゅのが。蒸み熱お讃譽 ç と置と結えてとは常はするといえ。ないは酸財憲志以「熱お日を見て實際し」と 周劃び『耐力脈を 春釈る あるとしての下等品である 緑の下い鼠を埋め 冬結實し、 「稀の風を見てその果實多きは加し」とある。 公園の置り事びび、 編まで自ら變して味となる」とあるお地添の關系である。 中坛堡~小坛黑~ **劇野は麹密か蒸予のやらす。** ° % なやらなもので > の年に日に予 お前で箱の 早黃熱幻妹 いをする。 ( 9 P

> 間胡鰡、○・三へステ リートが動物等トリス いが二年へん、マ号 ∨正・○、スキーまん (氧体] C. nobilis, Lour. 果虫戰發邮卡 (ii) 木村(潮)日下 とロアテン( 容別

三六四

治へはし、波を北し、 而新之新 能へ解し、 、多盟人职 が記る調へ する。その内は精藥の上位の在るものだ。 は一調し、 、つ証み中 耐虫も脂~斌ン、 、つい川る外 '> 献を治し、 回。当

神にれる田盛、丁典を神にれるに共ら草井、丁典を昌 間を補し、白を去れば御家を理 の実形を夢ち、一つ 青虫を半減して加へて用るけ割響深を去り 人しつ肌してお前し元禄を財子ら し、東を財子る。その體は轉を下あって、一には能へ働中 御の二難の承允の築である。白を留めれば刺り 、「要る書 「四一多一田の、 お響解を数り、三つおり 一、一日省 いる地して耐な対す。 ff 發 電影な 神

大湯のの歌 市自盡を去る】(明 期の療が消する指お内を報い、 感制宏輸之板 該事 京麻び主数にあり、 派流 小動を际し、 いのようと出る者はあるもの、 食株以人以为魚馴毒を解す了神会 止蔵、電腦を治し、 林玄地方玄船台、 胃を間を胃 上家核糖之治し、 画中以演画するもの、 留越で尊水し、 京日 極人の路離を漱する。 、つ望る 0 なる 劉 一般 多丁冬年 · 邻 丁 の人の時間) 如沙

記しい 神び通子ると本郷〉【原を丁して 「國中の意義、 県 王「しな妻ろつい間」つ歩く是」 臭を去り、除るてし、 を除す。人しつ朋をひかい 掌

大側び節調は多>、50利却 その地名字~ 林丸打量を見りして龜し、対法更引用り、西お黄で内側が封鎖法をうして部 稀坡 國で しかしやお 林曳かお蚤水が割えを 日を去るもの 歌奏して韶朝を貼り去り、 晒し造して用る。 はまり、その東お甘は多りして辛は少い。たけんやうい国限をは対差おない。 は判監であり、計、財気は対命である、これなる野で置んな対すらな。 多く題中から来るものは観れ、江西のものおそれびをうとしてあるは、 中を味し胃を野する藥以人外る以出白を留め、 作为お嫁に購入、色お黄ひして買入、内側の白劇な多り、 その語は聖香郷から出たものだ。 過かある 散虫なられをが用るられるお、 常でるものもあって、それぞれそのもい園よ。 、く薬ノフく料は回 、というとなってもなりといるいと、 る前でる薬の人なるのお白を去る。 白書い鹽を入れたもので売い いるとおれるを難と皮はよく多り 凡子翻虫お、 明 更 , ~ 日 e of of ٥ ر X また煮 字く岩 命の後の いい。 20

鹽五銭を干して化した水い新けて は古二両を丸を去って塗り洗き、各等末を亙り、素揃うはして計師予大 白赤二兩を末 齊隊で替下大の床づし、海貧崩以木香島で三十広び駅で。一日三駅。(長巻計巻 置す、張二十一。【関下は】暴強治人以因のころ上しい副嗣の高幣し、 期源法际生生 林曳四兩、 これは風帯するものである。 「意中庆」 脚計するる治下。東熱支半元多物職以入び、 百次、このば白器で駅す。(丹第六) 変弱して面が<br />
のよいまでは<br />
では<br />
で<br />
で 华

常ご研 なって 602 白馬いはていまるのであって、一置散となけ、一切の残疾を治する 近い出してお語るい見るものでない』とある。そ(細巻)は独するが、一覧構な丹翁 は變し了階下皮としてある。これ幻滅蘇を治する以前竣外は、な対蘇の實する人外 の難の2 千の城をもの遠眺を下した。それお真を向けるれの対とび見いものであった。 水正酸を勢火で煮造し、 24 、おるのこの河域を置の唐輿、寛本に、珠、は神器の間中。るなおଇ棒に 蓋し軸の冷様なり 付は現するい宜いのか、家の不見のものお用あるい厳しない。 鹽水各四兩、 その我は随い識さた。 熱虫を駆を去のて一斤、甘草、 、ユーマリラ中が発 メンン 剛 方は、 X B

あらゆる話を治するおすべてその様を理し、類を関する近用を採用するのであって、 の薬 洪 潔古張五 極ると熱力 かの薬が除しちざ貴えな、このゆかわれ刺をな貴え。 水鼠の莫野中、沙豐地 14 1 車日浦んで見た。するとある日窓も働中の砂はあつて墾下する 少物すると関新して機節 ことのま あらゆる大を数が 具合はよ 杏二と共ゴヤバガ大棚の原園を治し、郷コと共ゴヤバガ大棚の血関を治するお、 いれるその帯を重する中用を取ったものた。等解は杏仁の剣下び皆識してある。 **康**仓( 監打館〉味す。 陽系で、 る一般 代樂と共
い
す
れ
対
に
し
、 11 「国合するものい聞って補とも熟とも行とも始ともなる。 するび、古いの市全職の「熱虫な關を置びし、原を剝し、痰精を消し、 対
う
縁
力
縁
丸
は
二 からしまるいるとはして致自ら下る。のな蓋しこの は続はその様を称して致自ら下る。 ル子食事を掘ると脚端して下らず、 雨の岐~77百千し、 神は攝尿の論である。 いて関い 意築と共びすれ 今らび愛き、大いび激いと目を題り、 衙 期お示源の 郷中の来い解し、 ことという。 やうび畳えたので、 ないのた。刺虫、 は降する。 と共にす , 〉日 2 75 孝る 0 5 4 4 6° 1000年 247 U £ 21

魔家である。 翻曳半両を濁し煮って末ガし、水で煎じて茶ガ外へ了瞬間する。(4種) な深脚」融支、輪轡、土蓋を割づ造して等代を末りし、蒸箱でほして部下大の広び ある人なこの部かろけを別し、 0 每食前以三十九玄溫 少し蜜を加へて働き味し、香醂子大のよびし、 日会前以三十次玄米增少銀卡《食數》【法人の蘇閱】 计打上以同门》《醫主》【大颶陽 刺虫を自のあるをを断で煮て熱して研末し、一盤でのを監断で肌し、米角で盆 下する。(漢語) 【盆中の心部】熱虫を白を法し、愚い頭リア滑びは当い身し。(建整鉄は) 【魚、鱧を食いた中毒】 たお上が同じで何新)【風波が漏木するもの】凡子年、 気や 大風の漏木おいではゟ累淡み血である。静は一てを遊売水正确で薫職 27 聖藥である。 技輸び結らず、 「食を出し、酸を消す」 頭中の龜やするひむい これは中級の 小兒 さく して査を法し、再れ一點をアゴ煮て静服し、出る現る。 返却心下の諸随し、 し、三正十次ででで含多と弦線線制とび各一頭する。 兼以アルと思った劉淵家をでみな強また。《髭もが籬) 、り難しい子子が [四家爾心] 、京学に正面を対している。 南ツ州 (金藤本草) 十計の漏水、

電影 憲東式を白を去って正総、真掌香正総、水二蓋を一蓋び崩り、制制以監服する。 見の厳治するものな 正更以正代を掌心以満生、テパを舐めて 女が時らせ、たか一遇胃緑の許するものなられ、これを服すれば再生す 24 世 かお財場を成へるは、よりつ(A的難た) 【激開原理】期 五三銭さ水で煎りて焼 人事不許な 本機の食 水一大蓋で半蓋が煎り下焼肌 水一代か正合い煎丁ア砂駅を 明するの、御五簡動む」【卒然の失糧】新五半兩を水で煎して給び即人の(付給む)【年を避 江山生るの(神景大) いて数すい タ日 V 別 と れ た 西 望 の 土 で 香 し ~ 妙 っ ア 末 い し 三日コノア心下後にある。虫は真好アなけれ対校總はない。(到籍各氏) **種り煎して監肌する。(** 直計下) 心下に置 器行びある。○聖惠でお、東蘇丸末二盤を書い縄アア明す。 余祭び事へ 事う。なうと動き割って指を決き、その動き市で裏も、 いの難雨で調練しい 【精麻の副割】熱虫二兩な職を去り、 升び煎じ、 割コア末ゴし、 種で一つ 雨を水二代で一 真耐虫を白を去って末りし、 二 21 # 両を張い受して願を去り、 水 員翻取 割 界、女の謝歌、 票 寨肉 「文昌山食」 土薑三十 阿 「林虫場」 する。(食器心験) であるとなるでででで、曹藤山木」 10 数 黑 記載お百一 おきる。 橘皮 科 深寒 「影石 0 FI いまい 0 21 2 FI AH q

9 繼 旧跡の藥シ、脂~食を旧いア太劉の食が入 常家はあれる帯がな数し いいれる下い在るの話を治す。 青虫なるものお虫の帰割、 ではる時で , 人日省 温を破り

望であって、 解急、 青都丸に家って「で」「あって」とあって、 劉の訴を治す。 元素日〉, 刑 , 6Y21 瓣 H 少體小

體之施 及の副家を数る入園) 【聖職を数り、需家を置し、下黒の諸黒を去り、云湖、刊縣の 節結 刊 ででで、食ど下し、 野原な合す】に素) 「嶋副の家並、湖浦、小皷祇原な合し、厚頭な消し、 果 ¥ 【つる華とつい歌、つ歩~星】 制除を寫す、事後 Jik,

からから、高いのでは、一般で高い のるのは、音動力とお解のをが黄づならもして音色なるもの 薬ゴ人れるゴゴ島で受して職を去り、切れして 小柿、 今出間でおきっ小批 その蘇治苦烈である。 を作るから前重なるの根は必要が。 瓦で炒って用るる。 毒~して光り、 果 剩 所を持ず 青繡虫

製煎東虫器が参し、負人して甲と肉の自ら端が

、はなるな能不行を【のもむ漢で申

記骨末玄斯われが不安玄骨 Po(醫林裏要)

、り子

たとを輝く薄り

音画一兩半さ米桁水ブー日気して UK 栗米頭で味 FI 野で炒って搬し黄いして木いし、一鑑いつを根者を調 果ツイセ。(鑑用は)【小鼠の部動】八しり駅をは対気を 肌で配が 銭を水で 真刺科虫は 騒器が入 蓋で半蓋 00 % **「「「「「」」のないまれる。これを耐香造となける。(型カル)** 「韓耳の竹の出るもの」刺虫を熟を預のアー幾、親香心量を末びし、日日び聲る。 「畜数の帰閥」 (注電量)。4上心了咽炎外、分号に患気医響【咽藥長寅】 54 日に成り なんび二銭でいる監督が駅す。一 中草 副年の青州棗十割ダ水ー ° 24 帯録がストからどらかの 阿 は描じ、 東五一一 Jア勝豆大の水ガノ、一二十水でいる米滑か駅下ぐ鞍五小県よ) 土薑の自然行で をいれるなるの 「畜教の水池」 東蘇五一兩、 毎服三継を、 員務虫を白を去って切り、 は数全なったる。 刺虫一兩を白を去のア末ゴし、 「献人の序勷」 不愚のけかある。(観人更は) 明、肉を長ずる。 割コア研末し、 がいなるので発行的しました。 、つ蛔エムギネ目 ば散する。 難う献いるの いな立数錯となける。 原と际し、 ン重場で煮焼し、 のほれ た断で肌す。 は悪一 明すれば が変 2 2 T1 21 場に急 别 煎して で記れている。 いて駅 24 0 CA

来のコ宗お母食後び漢片を胆んでなるれた。それお邪 国の著水のゆらび年を社 刊 面 B M 青皮一斤を受して害虫を去り、嬢を去のて麻麻し、 慢投行があて延年草となけた。 シフフ 車車 車 雨で炒って湯 新香末半兩を昨らして現別め、一二銭でつず鹽で量を入れら自馬り儘アア 青春村 帰害虫】常び服すれば、輔を妄じ、尿を鵬へ、食を削し、 齊を稱し、 盟アア肌 すび野を全事なはら、水は塩をるざ刻の丁動火で黒り四からび割り造し、 「関玄野し深玄明~する」青絲曳一元を日光で造し、割して研末し、 計量 五九南食多〇酯滿之合下。 といるとは 遍 無して福未し、一銭でいる茶末五代されで煎したもので監肌する。 hd 雨をは酒で蒙し、各三日パして東出し、白を去って絲い切ら、 一回兩を対白那器で多し、 師茴香四兩を指水ードで煮り 萬年草と名けたが 哈關源、 「地關縣」 、「経過器が到し、 54 たおであって、 小見いあるもう おそれを呂丞はい賜おの **※甘草六兩** 新七。 二星 りいい。 老人、 网 四分にし、 **味對真人** 4 平 白麵花五 37 村阳

9 本語へ多な漫画場になる。これは新世人が以びければ、まるが表を表しているとのでは、 14 なら輸出自らは 施味する 水肥 用の い青虫があって、 場は内 07 高端日~、

し、その家を行らすのである。一窓の實するものの場合には、光い解して後にこれを 用う、きゅのけ。又、刊尿を瀬するひお青虫をはへる。黑うはけ的血会へ入るといえ。 まない。 青鮮丸が、古外がお用のなんでなものが、宋初外の醫家が至いて始め て用るたのである。その色は青く、緑は烈しく、地は苦くして辛い。これを修治す 青丸お沈 いお用のとはな 小見の し、苦な以て剤も』である。刺虫お容のして代り、刺、胡の蘇在の人り、 劉の家公び入る。一體二用かあのア砂野の自然かある。 いいなはなるものは稀れっ 不あるもの 多~青丸を用めて最も脂~干を築するは、 その気は暴力者の直指すり出てあるが、一 刊 , ~ 日 、り数ユーコ これるもかる 600 ode

○○ 裏字日〉、青丸なるもの幻刊、劉二踏の旅代の薬である。 姑刀一端刀、 下を治すると同じ關係である。

運転を無してり出るれるになる経典の取りは等

臨下い鬱雨にあり、

て常家かあり

ひ強く多

少の基松、广場を贈贈の崇松。中児を多低は成果、广場を多思は、政難のの

麻がなければ真麻を話する。

ではいる。

らいる歌 並原文彰を、 はあれている用る。 開贈の 果 が調が Ŧ 画を指し、毒を散す。 「つな準よつい立 、て是」 このは多様出 规 強 9

は仲谷二兩を炒つて研末し、二盤でつき鹽屑で 棒なが 「運火」 树

別す。(前頭は)

:[] 酥 あな動に置するひ 一题新 その古お品味が顔る多 まはこの中のけれる取る味意る繁に核り温はれる。中児を海のる年に 21 秤 漏割以入り、青虫と同比かある。 一個にらやりとは単し、 るものを治する翻封水が用めてあって、有数なものが。 静妙が見の 及わ内意
印
副
、 , ~ 日 **新味おうの本式を見る**。 はの金田 の精命輸 ffB 腌局式( 7 が一体

風鼻赤を治 须 知るるとりて変とす 所のて五銭を煮酒で煎じて服す。 参お<br />
西か<br />
揃い<br />
ア<br />
別す<br />
ア<br />
大<br />
ア<br />
い おきは一般のではいるという。 9 当公放行ある」(神会) T1 21 盤と監断で肌す。 スな C して服す。 に、新 而源、 2 2 a でれて 0 4 6 州 地 る」(宗施) 9 9 お阿勝 14 6

は出場島 額凯源漸 るうのなった。 県 ¥ 「一、本はこの本、一、「まな」 规

沙

除瓦で香しく常して読を去り、 凡を用るるには、 を切って附降して薬び人を、そうある。 ものは、公司を記し、 県 剩

方もらい大町

**炒燥して傷び渡りて滑い。 場が竣** 習を出す。 。配口 県 Ŧ 寄願 山の が朝

四次青女の全きるの公孫 新とからというとからなるなとなっていましているとなける。やし得 青蕎虫を未びし、一畿を慈 用のア銀をの代義は、【韓耳の竹の出るもの】青虫を熱いア禍未し、縁か回んで悪う。 「動我寒燵」 発印制い臨んで 界見方が計画 返出酒を ないものか。青虫四銭を水一蓋半で一蓋以渡し、糸糸び服す。一日一服。 燥いて着を生するもの】青虫を熱いて柄り、脊部で脂へて塗る。 たな情鬼がけど取って密地して置いて用のる。くまれる簡は) 「緑人の序篇」大酢臺灣は別因か 四隣い聞えるいは、 [齑粉6原逝] 末し、一般でつざ白愚で肌す。(圏林事要) 雨を熱いて性を存して研末し、 童気で頒じて別す。(醫鰻後で) 再駅する。(聖惠北) はどの核があり、 一年を全里 :4 青皮 量

CP 朴 東京の野路に切て の部まれる。とい のえ 此てアお真林と和んで が Yes A ともる。 他の るところからかっなけたもので の諸邑び産するが、 問 相は

34 明本圖別之要する方の 極端には、 情と翻の虫は今は一瞬が多う慰用となどららば、 0 韓澄直( 独するに、 いる。なりない 将下 0 野 024 71 栅

が麻が 24 財政お解び以し四は黄アや 耐幻人」> 領へ掛る法、批幻謝辺し思い、 これは枯と줢との財異温で 静掛おと割と 盤である。 PI 野治やや財~して沢冷苦~な ないまれるとれれるあはいい 樹な縁と異らないは、 南州市 竹の樹お米雪を見いる水 当 24 中 07 41 34 、く直や 0



国で 批お南大の果であって、 , ~ 目 ं स

、〜鰮ス中 黄巻子はあり、これ等の時の支はいでれる緑を去り、 乳村を上とする 中 冰 :4 9 貪 X ix 高新

-7

實お

消點 乳科 黄节、厚节、石带、砂带冷冻。一翻以幻来翻、 

みなるく果対を原贈

Auranti nobilis 4

青世といる體型の時酸するものはある。

樹お翻り切れをので、實をやおし翻り即 下間>大き>、五の西お生かお青>焼をけ対黄かある。 なび降財政却難以人び、 及び江南い生でる。 批幻路南、 調 兼

> # Citrus Ausant. ium, L. subsp. no-

こ 木材(親)日か 「原動物」かない bilis, Makino. (R.

(主難) 刺虫(味蜜)

utaceae)

Fructus

Cortex

П

学は一番であるとのは利し。 **、** 日 迎

大野はた後の望、どれけい酸はさらな經を選がまは掛、く日空 本本 木放と呼んだ。 7 。 。 · ) 盐

Citrus nobilis, Lour. へるとう?特(芸香科) 44 **琳 學 科** 寶) 間 亲 排

出出して滅える。(蹂魎更代)

調血を 「制職】暴齢薬を渋って熱き、やを絞って一蓋を肌も。 0 涨 4 树

第三十卷 本草聯目果院

「畜労の肌等を合す。未びしア断で肌 「山甘丸お脚翔新る台下 歌頭行を別す (神経) こと研末し、書い温ン鹽を入れて着む人大助) (器職」で~間及中、「上及地」 「勘渉の対金、登取いお、 るに数かある」(開発) 以 する(作歌)

※日〉、を食下れ知祖玄殿女」とある。

朴文名字〉甘〉、寒である。れ来おりてあるわれとも家地お同じっな 【しな学ししままして書くす】 洲 jik 0 20 母

阿丁服す (集後)

盟を襲二、丁半班へ丁歩を持てい障、丁韓房を 類 拇継【 V 瀬】 除 11-1/1

【甘し、大寒コして毒なし】 取日~、名なら。 念日~、多食をれる 大側は意味し、劉刊玄谿する。 胃中の燃毒なほし、丹子を難し、暴弱な血る、小頭を除す、『開覧》 和 以

と記載してある。

○、龍山○・二年、含 ○・四○、鴻懋宜○・ ○、石城〇・○四一、 割胃難イス。 又強純 十二果为人類为由 大分元太阳一整調正 密排(監帐)へ而食語 十六·四(%) 水依尺 ナ・一〇、點室素〇・ 四四、歪白質〇·九 小気素大・大○、蘇綁 三八、穀鹽〇・〇正 第〇・〇〇三、アッカ 「習阿・○、換量三四 十) 果實中二國對海 五三(昭/四)二〇十) カロリー(日食、二二 宜(体辦館イント) (局計)人原料イス。 エーホンナ合市大。 10回(町、川1) 二九八時出京泰省、

刨 といえお耐動の酸して大きり、色は基外部は対はり、その地は強う一般の金重を がManual Manual 木計と は類類でいる神医側 毎頭は必ず人織う、髯を討れてして黄いなる。 のい古を習いててるを嫌のる 酸である。 却は美ア 虫は麻ん〉、 耐知り酸しア大きう、 40 山び産し、 。や針の 01 はおか 7 到

その北上香 る野が影んな難のゆうか、その大いとお大かか、 頭に難び迷らずして食ってか著は留まらは。一 くの薬は難らる こつてる家をおよいさ その實お間~正し~ 丸は藁~して秋は結構が。 こうりとするのはの意間を · 24 語がが

対は難び二二階で、まな全とないものもある。難いと見ると香霧は人び難りを

な計中かの離品である。主対計といえな形は圓~な~、色な青~

対い留のアパしをい面へる。東は甘く變でるを強のア

| 場に 財 |

承は計といえは樹に小とうして

薬を付けて行り取るところからかったけたのか。

東い激強を帯がたもので

0

八ノンラ説

一次以 医分子

力が厚く

月以五次本の治由し,

問圍。

ア大き)、

P

東方極次爾

本草びいつれる諸郷としたのお鶏である。 諸家の 0 % CF

ままた。 悪心を發する。 報会日〉、難ら灯水瀬の副 、の最子変形はれるなる。今な底、一日は子【しな書くした案」「殿」 があったい食へが随動、 電熱を強する。 规 源

9 育酒の網サロをのおこれを食へ知恵り顧る ことで、薬びは人れられないが、

**慰虫
お、
やお
な
が
果
が** 0 し、返れ書い合はせて客い出すが 宗の日~、

0887

謝で襲して掛丁とするも 食ないて、~1を別り前をいて、~ 金で制して強膏とするのもよ 誠い生果である」 ハ】美地である。 1742 1 (极)

はは その虫お太藤を薫するもよう 室前ひす ですることはを整 愛価して称~は如~、香味は酸郁たるものか。 17821 るもはを加を 旅 、くてもにまの 労戦 、人宣

> Cortex Aur. antii Natsudaidai へは難ナルないわか 人/果立年與難ッ女 歌ラハナノサルを潜 が、一六十)

(11)

三社師より。一十種は二 immaturi Fructus



事酸合類のお その質は大な 。さない刺りばる、以切み類はく厂類に複は薬、符、く思い側は機引 数するび、 随く療し、人しきび師へる。いつれる大、小の二種ある。

まればの園 の家場が 掛お縁の属バして大なるもので、 薬がおこの まな一種の様の臭いものもある。 登れ南大の地 7 童し、その實 お は びかっ 香し う 留る難〉、 兩段がなったやうい見える。 コノア大なるものア、早~黄づなり、 から日く、 ことは

カお国 うして 郷人かのる。 八月 が焼する。 、くて星ててくる 兼

> urantium, L. (C. fusca, Lour) (C.

bigaradia, Risso.)

(C. Daidai, Sieb.) (Rutaceae) にいい 臭蟄 C. Aura.

ntium, L. subsp. amara, Engl. 46 수수 C. Auran-

tium, L. subsp. Natsudaidai, Ha.

(原献海) Citrus A.

(こ) 木材(親)日で

。 は日と、強お、勝お酔が別と薬は大きと、その派お圓と、静よら大 瓣

**歯田の卑獣ひ『踏れ林の屬かあの** 致しなどぬすべし。対力文字は登り強人。また諧響の文字が』とある。 、なる子様、く日珍時 誤談 金档 7 2

Citrus Junos, Sieb. 吐 雷 性 置) 誾 亲 劉

対地東上へ掛もので

ガイレオリ

いと対して

滅るがある知ら、水麹節を入 「語言の水、気は瓢血の煮れらびお、 十分取り了 部分対対 まる と ( 南 五 ) 以 £ ച

正はどはうとのる電話と呼ばれて その大なるも 最も大なるか ないてお 0 今むら塞沢か、今一端ひろの黄ひ 6 12 園 轉 77-やおり び那脚 音幻覧(ま) 一音お顔(スト)一 いその意味である。 、おかいて海米るの 案を取ったもので 。ている薬星なの 좲 X 圝



H いい。 植とは色の油焼たることだ。その形形がい首のやうなところから産と名ける 秦 壺林(和本) 臭聲(資劃) (脈鯉 のこ回で脚 蠼 繡

(新生九)

合存と、主インテ古誠リモーホンヨリの がイナイン、イサロ ※(ベロキラがーか) スミンA以日常十合 いいいい、果当へは ○・一近%~精恵も とうなロトリント合 市大。葉へ○・二三% 人静助午舎市少、主 気なく指盤リナロールニシテ其曲シイロ といくはみしられな 果肉へへストリ 千中二へ苦和買しま 木口「か」かり二十 がとロンなし 轉小部、冰線室、林鄉 いる、南南部、流域、 マペミバトサ 種 B、C等を含と。 , 與4)。公华人二

南で三銭を明すれい激える。 一級子校を扱って研り が変えている。一般を関する。 涨 4 柳

主合「高震勝両ひお、黒帯して玄政に強ると神巻)

「割割 劉曳二下が切 計香末半 両 全味しア 年を開了了風造した劉子を解の中で割き、その限で熏するは肺疫はある。(響す 箱でいる網ふか、搬馬の題を入れなるので送てする。(音鼓真は) 酒を消す。 [MA] シウはなきった。 ※甘草末一 中を置いし、緑を地ひし、 やことよりようと なるから、「香香香」 畫五兩を切り、 第二。 御び作り、一 事 「運運」 4

はいずいがお香美で 胃の惡族を強し食を消し、深を下し、胃中の腎風尿を去ると開発し、鹽 悪心を止る、西京を輝を火を纏う【謝で録しび却は対甘美であ 西を解す と相珍) 県 王【フな華ノフい歌、フ歩~暑】 デを下し、副を际し、中を貫いし、 を味して物で食べば、 販を消し、 和 いいことは 沙 120 出

蜜を味して煎魚して物へ、それを食へば 悪深を去る、開養〉【風深を行り、寒深を棄し、 「種件を張ひ去のて切り」 題の毒を殺する土豆 、画はの中昌へ即 選 でいる上めい 県 、一級ス ¥

> [當体] Citrus Au-雄發油 テ含ィの花 へ〇・一五四%~輝 藝術 (右誠なシアエ ハエステル等を含 市)+市ス。果カへお 強りサーホン (九の ストノストアノストア スルミチン等ト合 サムルー王)へとい (曹小八五八八年神 ン、子はりましまして お強しナロール、 下 サメ随いーニュース ※前後)+主→スル とハノり)阻腸、ハル 人 リイストスト(す スペートサンチ含んの 薬へススコリリ 群 発 市 対 か イント 人と半八くんの人 rantium, Risso (ドンロロスギ) 1

徴び酸 作業も「動 その練は堅くして婚惡 蓋し鄧与縁の屬けれる、その虫は蠍み、 真~して真 『親南の臭醂およいと加到とのものか、食へる。その鬼お書 動場の分用として握る変めと断の不帰の効用をひ、且の球を摂しない。 も間の分用として遅る変めと断の不帰の効用をひ、且の球を摂しない。 21 阪子コ 『異独の間、木あり語。そのなど翻と録す。 専働コして必青し、 お大林である。實お大いと蓋到之、因幻見と二三十、子幻時幻即と、貧いと幻想は必 0 一月繪り及える 地でおその対を酥ゑと気具したもの 24 、フ幽る霊風の思えらり 0 排 これは地原はかららび不同かといえことを言った 。 29年間の日はて独て神ばれる別題となったのい幸してくれば降しく 派色お圓五か 林台帯の圏がから、その虫は断り、 周圍 大なるものおかまと、代到とあり、 うの原幻臭し、 今お一般の未練と利え。 県 ¥ 0 当い身い具合い行うさらか。 地お甘う、 南市 寒いして毒なし」 その状は基が香しい。 。い去ユー~暑は半、~一をユー~直 07 部の酸であって、 たが曳ば厚~しては~ 徴すどで、 これと高る」とあるがつ 亦加大お 一種り 質却丹びして来越し。 やおか ٥١ は、後、いか、 to of the 、ないる。 は帯割ど、 州 で食おれな 0 9 9 9 い。一句は 沙 シ 6 排 -7

(薬用)変力へ守香料インテをひ谷際三動

擧~%王・○一三・○ スペートマヤンド合市 スペーだ材かさる一軽 個へ%エーニへん (主インテ体粉盤)及 此卡含市 X。 X 果虫 なっちかんく果買へ 水仓八〇・正〇、財室 六〇、百丸〇・〇近八 数○・○一一「アルカ 三層語、一・〇一脚ん なっかかんと果宝へ 「食脂正十・正(%)」 素〇・一六〇、蛋白質 1.00、船部0.1 線端〇・三〇、無数質 ○・万万、執題○・○ ○、含水炭素六・八○

歌子・六、監量二万は ロドー。(日食ニニ

小なるも 薬いでれを魅い切と、その實お大、小の二種あり、 献お樹、 から、一人口を開

かないと、ど一〇・〇

21 0 薬 -7 静り出して黄白色で大き、 その地はいでれる酒~、曳は草~ 2 れる神があり 断幻色、活青黄う實は小とい。 C 江南にい、 2 がながら 14 割地方の 人がらび越へ 薬

料菓をつめる多く C 題のよの。 新であが、 居力春様が 『果の美 強い似て質が UX 源の回右蘇林」とも 5 おいい 2 停撃<br />
お<br />
一体<br />
お<br />
下南<br />
方<br />
面<br />
が<br />
一<br />
が<br />
お<br />
が<br />
の<br />
か<br />
の<br />
か<br />
の<br />
か<br />
の<br />
の 75 そのはおられら科のゆうか、甘きはあり頸をはあり、 大なるを納といる』といい 再貢 ゴ お 『 黒 州 、 酒~、大いちお縁到とのものが』といい、 である。一世の意意 今谷間で翻を耐といえば、 、ないて繋るとな小」 、握の単江はのよるな 0 **小安國** は るおである。 渊 J っとおけるっ でな 菲 0 2 B

※日〉、財政幻見~して現は甘~、科政やこび蔵~して知の辛~苦

小を以て古今の古い解神を は海池はこれ 動をやおし壺かある。 たが大 、おるなてついて神器をれてはは無量 ことのおではしてれていい を真地といってある。 0 % CF 2 異いするたけ · 200

> %王一·○粉〉华。× ストストスとんべん 阿ハヤロトへ

テルスン等十合市 っり十歳(スンルムキ 六・一一 無難買り・四人、殺鐂〇・〇一水 人替的(對於的)+含 市ン主気でへ去就ら エレスは誠立、スキ 1部子、ハードベイ ナロール、問題リナ けいけいく果實へ而 果竹へ水で水二・大 正,麟窒素○•○四○蛋白夏○•二正,副祖 ○・一子、含水炭素 スセ) ルードリロネ (6 献、六三〇)(作際 **食幣(代) 六・三(%)** トラニン館メキソ 是六〇%〇次語 アーロネッパーロ が 一大大

その實お大いと蓋割とあり、現却辛う強い。 あるといいいはある 如の此行かお香郷と初え。下の派お長 その数は 肉は基が そる。甘、酥の園であのア、その薬お大きり、 トノア小瓜のゆうな米煎をなし、 かのゆうで変も、と光彩はあり、 、間は今、一日通

抽 (味

は縁れる南方生

意味は結でない。棚手とは

出した。

公司の書く。朝手井 その形象を取ったものだ

松季 7

○・○九十、万秋○・ ○天○「幾○・○○四 九、含水炭素——。三 画様、十十・〇島権武 食鹽〇・〇三回、アル 日)。一点日母里里 書は、十・一副の中 素〇・二人人、蚤白智 ○、鎌緋一一・大正、 

Citrus medica, L. 18, Swingle, (Ru. ゆかついい「神輝道」 var. sarcodactyl. 二、木体(銀)日下 となるしゃん ~

るとは豊富の劉下の相してあったは、本書でおか Citrus medica, L. var. chirocarpus. (科学学科は、ライン いてのかん Lour. ¥ 唯省 料 Œ Tit

Aurantium L. sub-

sp. Junos Makino.

[如付]ので、果質へ

百食治四十・三(%)

CIID 木材(鬼)日下

水で八二・八〇、點室

Swingle. 34 C.

ichangensis,

【素源由で香墨面間のすれば、婆を見りし、娘を彫刻す「神舎」 県 Į 北

(C. decumana, L.

【題風部はお、惑白と共び熱いて太陽次が祖る入事会) 県 Į

『記事』の記書「書」を対立法のこゆり、砂樹内で所以数して一本 は固し、紫雕して蜜を料が、報報は合脚する。 帝。一帝 11 센

青葱の深を構し、歌を外す、「神金」 721

原本子をJ食えた宜し。薬Jな人はない」と思う「食を消し、副を地 県 £

お野である。とあるは、この揺れ今の林と同じったいやうである。これおが知自ら の題であって、歌となるない。

高谷日〉、寮であび、水路の筆続み『本草み「熱曳お苦」、 断曳お甘 し」とあるお題が。林曳紅融るて苦くして口がを入れるればものか、甘いのおそれ 期 E

【つな筆とつに立、つ歩~月】 籼

子様の真になっしてして記をう数で **対ひ人の口泳を寄し、観、胃中の悪泳を去り、** 

> 割胃苦和難インテ苦 和丁紫(局값) 三 酒合 少又對五舍時間, 對 **対丁獣**(局
> た) 卡 壁 と、未燒粉實を割胃 歐藍藥局大二六八苦 [原替每] Citrus A. urantium, L. var. decumana, Bonav. 對因(局次)、代香對 1、 苗へ古へ配器し 苦和樂インテ用し、 (II) 木材(類)日で

又刻耀前二自 (沿二落千塞林上) スンへ体謝勉必選供 断人獎查原將一下。 時獨山親影勢河及山 口編練加二人人變畫 然ニ替下スル未療果 、理様は)。一人僧工

闵

る)大手

る生は橋のろ、く日珍時 おお青鷺色で、黄焼すると金のやらな ふる新、温熱の各はあるのか、匐と は黒色のことである。歩は、重とは習 器の名であって、その形は背てあるか らなともいえ。文墨の生者は松時を置 0 后馬財政 献としたのは罵であって、



(おをでは特(芸香科)

山縣(北口級)

Fortunella japonica, Swingle. チスかん 味 學 标 目 機

「虫の同じ」(新譜)

県

Į 稻

下蘇軍公治中人(相經)

順勝は心 「麻を干し、心頭の寒水を釣り「緑雪」「断で煮て角めり煮蒸放瀬を治す。

事

が日~、 。これでは、一日景式の一日景が 0 1 世に置いるのてやではな 【つな葉、つ極く歩】 場のは、 刷力の流力場が。 规 は谷である。 田

らで見り、嫌んで光點はあり、その色は瓜のゆうで、生でお縁、焼をけど黄である。 響を下案のそくに譯系業は或、礼以遷々と經系を「文氏は黒て「羅園心斑熠 21 に指示あ 青香は人な襲え。南
古の
此か
お
計
点
な ないというながははいかというないからいというというできょうないというできょうないというないというないというないというないというないというないできょうないというないできょうないできょうないできょうないという 学片を帯び 技間 虫は鐙、 木お来縁び似ア葉は尖のア县~ **派状幻人の**本 郷家して整旗果として食び、それを他の土などが置いて玩賞が供する。 長さー月四五七のかのかあら、 の夏のさ 24 異物志ひお はふると生きるるが その対は解なり、その地は甚れ組っないが、 地方い金する。 スト置くと者は更い京温するものだ。 你以佛手掛之和父。 調 い場所へ 圍 歌よりはる」とある。 FI 亚21 納線 るやらな形で、 XC , ~ 日 9 南江南 は。 素け、

北古へ聞って歌ると基が貴重さ 24 東お厨いればとと香花お大いの細れ ° 24 っても香れなっならねい 0 24 る用されてたる作を終れ五はた代古 、「職人終く」へりにらめの意識、人直 置われ対域日三 太管中がずり 0 2

たっく C. medica,

Limon.

L. subsp. um, Hook.

「気で」は縁丸(ひょ ◇ ン主要ナル気分 チーネント解スルデルストリアストリストンととしていていると ライ事小人人八月 7。 其幇異し麻和も分表とい気をベルー 1リナロール文階盤 アラニャールキ合有 事)。た時へくまれと 「瀬田(竹がト鴨和料及へ瀬臭郷イドト田 11 六口子以子以十八六 曹小明年。メトルー ニシテ出於辮形へ ムルと独しいしら 八戰發前臨中: →用し。

0

。 さいまいがらまるというというなけたものが。

學學

既織中品) 味 き なお 鼻 ネ Eriobotrya japonica, Lindl 特 ネ ハガネ棒(薔薔特)

路室北名、野玄瀬 7、臭玄翔 4 5。 五次大 5 到 7 大都会) ):k

OTT I ないよう様とのと相を踏とを動るといる 村(1) ア語語の人は、まゆ香美さ味へる』とあり、韓含面の緑鴨のお『金融お江西の齑し、 金色で支法職〉、東法猶〉、副以論〉除法拠る。容護此式でお対付ものまを钥職し 北古の地でお鑑らない。最初年間の始めて行階へ送られて、監知皇行がこれを警を 山金村といえばある。 諸親はいてれる今の金熱を計したので、川し一瀬いある機動の異なけのことが。 質は野桃のやらか、 香和は箭美かはる」とはる。 X 得り金豆と各村、木打高と一只対水も、 器し離れ掛は焼かあり、豆丸地は煎なるものす。 見い金で漬けるはよし、 れ、それはためい質は貴重になった。 商の対方ある。 、以いる製造川学 34 ००

(5) 本林(現)日 か、 (3) を か (3) を か (3) を か (4) を (5) で (3) で (3) を か (4) を (5) で (4) を (5) で (4) を (4) を

樹お縁び以下法が高大でおなり、五月の日本を聞いて實を結び、林、多の黄療する。 解び似て翻でおな の産を第一とし、工術のものは支は甘く、肉は猶くしてこれば大くともいえ。その ア
お野縁
と
け
が
歳
す
れ
打
念
の
や
ら
い
黄
が
な
し
、
と
の
東
は
対
う
十
う
し
て
愛
す
い
き
で
き
で
ま
が 藤王の赤木志が「屋の魚 「山蘇下お、大な 樹均小とう、薬お縁か、夏替んでを張し、 金は野豚利との 返ば、 金融打吳、學、江、帝、川、遺此古习主下る。 並 打 節 大 到 3 ど 、 屋前の 高表強い 、以いるとは、ないとはある。一名、動材といな、 で前にしていてれる利し、対するは、 實化財辮ぎ、 X この中を通じてそれを食る」とあり、 るお土瓜到と、水管お職は到とのもの汁。 師のゆうで香しり、夏を冬をボ なある。謝か造り、 璵 二二 00 %

75 その芸香が猫 は、 は、 は、 と、 一時を放列してある を見ると一時でないことは明か。この縁は夏、冬타織りものかから夏焼すといっ 、はて概念物。こをくつい機道をれてはた学州第の淵系 林斌の本文を鵬、ア見ると「盧첾夏縣、 客び判除されるといるのが。 07800 のやうで

> (1) 本村(銀)日か (京計物)かくかく Citrus japonica, Citrus japonica, Th.= C. nobilis, Lour. var. microcarpa, Hassk. (C. madurensis, Lour.)(C. margarita, Lour.)

兩のものなられ、家は十代があって用のるが勘へる。既命でおって手を去し、甘草 一字重心業三のよれ了時、唯一字重の重要の表が、はったなりが形を以、一日韓 回光な、除了再な焼な、毎一両は桶二銭半を塗り、洗のと用める。 一一一

※日〉、小子用のるゴお、水で洗り、市で出って手が去るべきを で聞け対大を緊奪ひなり見い。 菜

多い数王に対の後下、の下る類正、「利多利門、「上多地、の下る州」 り、正쏇を彫刻す」(大胆) 以 É

な題 〈日器。~な寒、〈日罕【丁な幸へ丁だ女、丁藤〈井】 て了文子, 「成一章に子子動物の医、母家。 の間で聞、「磯子難遊ばれず食多 陸黄海を患おしめる。 湘

高つるい数へかり。落支コノン対を公典し、金融コノンはと始まし」とある知識を うの状態を言い基してある。文墨の指各は掛時を盧鷸としたのお題かある。金都の 像下び雑割した。

> 「知行」でおし、強くせ 第二公、青麵近八青 動+發土 ス 小 順 排 心量人流游、此 素若も含る。果理中 人生ノスとしてかん ミム、みーはにキャ 人たれずまいるしら 母哉スチルルスと と 動子中二小小量 ~青館(1○○江中 四〇風ン、てきかがり CHADAL K くいには (アッカン 随いスルミルン随及 とが米能は強)を含 (黎田) 掛野衆、煎竹 一人轉八輔八輔八二 (大三四、神4)。7

対なきものを対策 文、 楊萬里の結び 『大薬 長耳を聳き、一対難び 薬は微い栗い凹て、 四月が療し、大ならお纀子割と、 なるお諸別別とのものか、白きを上とし、黄なるはそれら大り 「小四多種は相称」 その子打競りおんで手はあり、 降養赤の憲志び 貴州い畜する」とある。 無でるに、 かちを春寛る。 ものは、一人日を開 子と名け、

こるはして用るる。

整冬に 白法を開き、三四月ガ至のア實を知し、料 いかって生り、大いされ躍大気とで、熱す 滥 ると西に黄杏のゆうひなり、織ひ手はあい 四月以葉を飛り ア、 虫、 肉は 当 汁 職 ト、 対 却 大 い ち 芋・ 。対る組牌回 ねとあり、黄酚色である。

背び黄手はあり、剣密、 批財力、<br />
書来の本草<br />
立む<br />
お金融の<br />
州名、<br />
地名を<br />
語級されて<br />
な 筋の南、北い、つれいるある。 きとして変すべく 対は門を、薬お長~して大いを瓤の耳引とよう、 草 い、江の河、湖、江の河、 (相 [# 風な 、令幻寒、歎、吳、歴、 、一日通 輝 と一大緒、 菲 ¿q

Eriobotrya japonica, Lindl. (Rosa. (Mespilus japonica, Tholg.) (こ) 木体(親)日で 「原動師」でな ceae)

木お高

把

(まで聞んで行を聞るれ、出逝して食物を下らぬな土める。

木白虫 主 治

合 「 厄風 か 鼻 ひ 帯 が を 添 す び お か き ま と 等 在 を 孙 末 し 、 断 か 二 幾 ま 現す。 一日二別(報参) 非

手を法の了香し~茶き、紫珠と各半兄を水四代ツー代の煎り、少しでの角ひの需要 垣 表を主な薬畑県 【のゆばる中の四四】(産業)。4階は八道で十三量 【執験副部】掛阱薬を塗で洗を、鳥跡内を殻コア末刃し、光で鳥跡勝 三等会会未びし、二畿での玄監断で購へて現す。一日三郎で本事)【商面の風衝】 人参二兩字用る、 水門業、 設了了研末し、茶か一二錢を銀卡。一日二回。(同土) 【『動造赤真』 松忠葉を手を去つて来き、丁香と各一兩一 ンボウン祖るの(重要)【宣籍影職】掛時葉の崩易か形えの(離立) 。一、歩 服三錢含水一蓋、 お上が同じ。 निय

杏コ、桑白虫谷等や、大黄玄郷半し、普重のゆうび睛寄してゆる末のし、蜜か野郷 大の内にし、食後と流験制と各一大を含み化したところ、一噌を肌し終らずして激 \$ 250 2

第十三第 本草腳目果語

出門華陽「師ッ古

とアンの批映楽器へ 肉排、甘草、

本青京治将イント

都養子首下る习事分育になるの分。ある個人幻都燒人鄉子患以 火で洗りやそび費き、腹頭して襟と対るんとしなは、地時葉、木酥、複冬ボ、 , ~ 日 ○宗 ○颜

の晶 源 関するものは関サーデ 神 家は下れば人は難り、 場中の急である。 画するものお画せず、 糖してその下縁のあを取るなけである。 、く直は述く薬は減 いと逝せるもの幻逝せず おの日へ、 出放せののである FI 病を治する 曲 順いなり 0000

明原公報七人相經) 、つ脚を撃者

讯 るののののでは、よし煮るがわの野のないときは、たび働んで行き越るのである。 事間を分裂。年上を然にのののる下の職支 (副職の出生以もの、畜致の口違人大胆) (素行を増め対路表対主族はあり、 國、面上の贄を恰す】(語)[胃をほし、尿を下し、腹を計 、く日喜語。「去て際くれ、く日本【つな幸へつい立、つ景】 以 Į るんといいしんとある。 和 1:K (制線) 00

混合セルモノノ煎汁

下十個日ルモ

0 11 -

麻泳等卡湖で人族下

人暑蘇卡鄉口霜屬人

X of XI GATE

南下面干難ナスイト

甘菜、黄鉱等+納切

御献を治するのお室水を塗り りまてつ家子小量はたるすおを減量 はの日~、 系れが身し。

遊とてして乾 画额公山台、食必附中。 「鹽織して食へは、液がたかり、 以 Į

「強っ仕し、これして書なし」。これは、「はいして職事ある。」 の事を強人、一般を強人、一日間のい

24. 4

を発けば強っない。緑緑樹の職が生じたときは、甘草を倒ひしてちせばなっなる。

「桑土び場神 なて難しなっ 煮り、補で対滅し、いでパを割し。東古随の林邑語习。国切尉謝はあら、その大 **賛率の砂酸財風志び** 青い朝は極めて強う、張すれ対室のやういなる。 いるはっていることある。 いたことに が呼られる神を極る神が、 とお盃、



紅は 及な楽器香の今らず、冬暁づら彫まない。 鹽で守瀬し、 いかる間を、は實力派は、教育予のやでか正月が嫌し、は白紫の三種があってい 日よらを観け、楽おぼようを観け、課は大きりして対は瞬かい。 場対断に ものはいる。

四月、正月以釈ふ。南古曲ホアお籀嶽しア果ガノ、 治、薬は解しして創る青い。子お形は水場子が切て、生でお青く幾きれ対域となら、 内は対土づめって支票がない。 されを北古の地へ送って來る。 輝 集

批 場別 は神び似てあるからなけたるのか。母五の小可幾いな林子となりてあり、 でお白易様を聖骨と利え。

がそ 音幻沈(\*\*)かある。 割丝日〉、子の渓池水尉子のゆうか、

7

Myrica rubra, Sieb. et Zucc.

14 章 和

(未開寶)

鲱

(母類と)対ララギの

盐 「海林河」 ひまる Wall.) (Myricace. Myrica rubra, S. et Z. (M. sapida, (1) 水材(親)日か

行をお明するは此を建して思鑑り

であって桃でおない。とあるは、桃の様でおないけれども、その形は桃び行てあるか 孟燕の本章に「これは製 宗。 一 一 一 一 一 八个 旅鄉 書話)含桃(

Prunus pseudo-Cerasus, Lindl. いてら杯(密窓杯) 

みたかんち

(昭蘇十盟)

出なんと始して出など、随青し、正 普巻下アお、器跡歩丸の見さるのは割コア一兩、川芎藤正錢、鵜香心量が研末」、 以の合きるゴガ、器神勝丸の崩場二二温を服すれ対激まる○(王耶島衛氏) [編題子第] 半総でで玄真内が割ぎ、口中が水を含む。跡は出て譲ば血む。○離悪までお、 その蟲は現角中から出るものか。更一用のて数な舉わた方である。 、「連の中毒」の副縁は「、

"なる」、「なる」、これを現をひりか毒を瀬を、製液を断で購へ了馬火割び塗る人都会

【影び頭ンア悪歓、水鞭を渋ん【大助】【水で煎ンア

県

Ŧ

됐

K K

樹皮

ころがると、「多出て付致ら自以子等」と考り、「多れて出る」とある。

梅州O集島』公務電連O本原王 事をの王鬘が五十石を制呈した。貫加されを用めて激えた。 ある者に「愚嫌にで治滅する お天下第一等のもの対。童貫は関係対苦しんかとき、 教でるに、 [国际] 部谷口~, ものだっているというなので 以 Į

いつくで 原を不す 入語) 毎食強い二盤いいを粛高茶 TIJI 0 白謝肉で味して **神聖路岐なる** 【劉祖〇四一】 鹽瀬した陽神を鉢と共び駅のやらび獣を、 田一回、 等に曹永曹小、「仁半文極橋【のみだる下の建筑】 五麴を味し、 「一般の山をひかの」とは文章にと知ら、 って竹筒びがる、凡を強調のあった場合び兩末して動ける。 あお部風強と共び強
ごかい
がおい
がおい
がおい
がおい
がおい
がおい
がい
がい 海倉後以一次公開人了監茶了然下するの(朱五東線) 「題風で献ひをの」尉琳で未びし、 というのと第二一省合んで行き回ると 誠はをなっする。 このな米角で駅下の(音密) ※三。 を取るお砂である。 いる生じ 二星 7 である。(軽鏡氏) 数観れある。 21 1 75 子口作 别专 0 SP 태 ¥ ना 2 于 Z

本草聯目果語 第三十歲

721

制

2

Œ

**角階の制づ臨んで
むかし
を
駅を
れ
とは
画を
山るる
下間
達)** 

、口郷る島

能~愚、

酥

源が

熱気を服すれ切不麻を濁いび甚次

辞

おが高 すれ対人をして担なしるる。語曰う、食のてるをうお財子ることおないは、 、つ井」 和

薬お贈っしては、双の畔歯はあり、一対の塊十頭の子を結び、三月の療するは、 掛れ法が高~な~、赤麻が白沈玄陽を、実は繁独で書の今ら その相対制態もなる対方の必要はある。見張らは対点は一つを置るを合ってて人 時軍。では、運搬していたなより。、坂は電と共び続いて観光して資産。「最間はいかないないないないないないないないないないないない。 からお館を添くて食草び土せた。林地の山家街地の『鸚峨灯雨を纏ると蟲花内溶水 主でる。人びお見まないは、水で勢して身人すると蟲はみな出るものが。 ランプ 精婦して見ると果してその証もけ。 機能は、 食べれよし」とおる。 神の日~、 24

2 熱した指い深杯色なるものを対来燃といよ。紫色パして曳襲い解音艦のあるも 北おいでけを 動るアナなる これは滅れば 「大一大大」 「一大大」 「一大大 歌大到とで、対な味~して内の見いものもあるは、 小とうしてはなるものを対機独といる。 いない子科番灯るの いは及ばない。 お脚野といる。 34 0000 151 000

中

(気な)たったんは (果實) 《而食語》 CID 木材(銀)日下

「御谷」れきうら(き ~ ふく!性) Prunus Cerasus, L. 中學報 ナストエハエル小器十 pseudocrasus, Lindl.) (Rosaceae) 子器當十戶次。

07 實 らって 0 % CL 対フ古外J 打窓~貴対 J けいか 最も観れて 4000 中景 野桃打蔵園ひあるが、 あるゆる果び光のて熱する。 , ~ 日 o) 木お割を~ 摊 兼

。となる『子間子悪事をの

最も大いして甘きか 「明ら今の野林である。 系派の地の お解除なら」とあら、

いて「農は合んで食えるのが」といった。 耕 事? 雑龍は順計しかり。そのなのい子攝 音お夏のカマツ 対りまか合物といえるやおも証する。 一颗 爾雅にお 2194 (排

その頭に襲我のやうかから , 〉日 -7 Ty Ch は。一部の が用

はは 時版の鳥の御類 のえなないいい 天子合物会以ア宗南の薫び 21中 薬の い子びるひます」とある。 随 深 出 が の 減 の に繋び長れ球闘春薫の 歌品が『仲春、 水経球が 工織の書は 一向倒むことはない °24 000 21 0 454 物である。 6 かる 24 とあるはこの

[圖]

「原林村」からのおき Prunus pau-9>

图011

相似

0 纽

割本でお野村で育各米用の階以入外な治、本書で E 数

いだら杯(落澄杯) Prunus sp. 吐 亩 性

(明錄十冊) 雅 誾 П

【面黒磁率】けお幸野の刹不玄見よ。 果 Ŧ 非

のと随を形人に確認し

以

£

麸

、「知り姓は年の時日、日本、生者、ほに別班的果」 治一【養竹を服すれば、立ろひか白、放蟲を下す以六四) Ŧ

日日が日

「独物のお、熱行を済み、井の御わる、一般

界 £ 老養を養るい神様し見い。 【一な輩とついす、一月 和 1kg

解し得るといえ意思が。

家、米二九 「断気もるや内様、な様えるころなぼのと る。禅 やはらその 、その郷でなる。となる『報の本具体に真はるおと、すばを強に終けく 蓋し寒めを共び食へ割、 21帰の郷王 大官殿の下流難の寒あら」とあるは、 の言なすなす鑑すべきである。

食へ打からび難するも ○○○○ 海骨子割め、血、尿子辺ら。寒燥液のある人お食のアゴならゆ。 陸を発するけれかある。智風のある人お食のアおならない。 34

「中を購へ、刺尿を益し、人をして前色を形からしる、 志を美ならし 水螺麻ぶ山める入金橋) できず ある。『問籍》 駅 É

省のマ 对21 諸果い先じて熟する。 。いなはのみぬる体を製成へ真に多題をれてが見か、く日郵光 五場の家を得たもので、 四月のあい熟し、 熱なのである 割三月の末、 H

及び船線 もと機能 これを得れ対立ろび南み、且の死するものはある。 野桃お火び園し、掛お大陸であって習る鈴する。 おのかのは 、く日卓憲

下お胡職を殺して財職のア汲つした。誤判あるののの果の出るお人を養え刑以 富貴の家でおその警察な 新でるゴ、 <br />
張下味の<br />
譜門事<br />
課列<br />
「<br />
職水の<br />
一<br />
富家<br />
ゴー人の<br />
子<br />
持さずる<br />
の 「口い酸なる物金 我人で案嬰を食び、毎日一二代を巡って、4月後5年上の子は制造を跨し、 野奏夫の 精功 であるが、 ひして死を切るのである。それ何ぞ天本命立。 0 でおおい 人を書せんと浴するもの る。日の世界の日の人 いってあって 年下の一年 公子

お高と二三大、薬お毒~して辮野はあり、となばら馴掌の汗のゆうア阪婦はあり、季 高谷日と、強杏は江南江生江、宣城のもの玄棚れたものとする。 調 菲

※養味めこ人貢」、強杏中州の貴」」とあるおこのゆうある。

林東 のうある。宋の成めが始めて入貢したか のそれなる 形法小杏以倒し、数の色法自い以因のた 日の結び『朝明幻珠本以隣し、その名は 薬び因って高し』とあり、側関係の結び るのである。今出日果となける。 込めて騒者と利んが。 20

なけると脚門でいる、とからのこがに

各) 果一 [商 開明子 白果(口田)

(は日からは(な発樹は) Ginkgo biloba, L. 6.00 41 班 學 科 古 田 田

題

盐

キスヤイ Ginkgo biloba, L. (Gink. 二 木材(銀)日下 、いるない(神典道) goaceae) がいるのでは、一日にいるのでは、一日にいるので、一日にいるので、一日にいるのでは、日にいるでは、日にいは、日にいは、日にいるでは、日にいるでは、日にいるでは、日にいるでは、日にいるでは、日にいるでは、日にいは、日にいるでは、日にいるでは、日にい 李桃 英豆(収錄) 李野(吳普) 朱桃(昵錄)

は出い移し入れた。

のできょうなけ、又、余様となける。随の野様幻野であって魅了幻ない。

嬰桃幻質の大いと変到とか手は多い。 明録で日く、 輝 兼

四月が来のア創 嬰桃幻形的所以下 製林とお鳴今の来野のことで、然で食へるものか。 、〈日誉的 のや手神

> Prunus tomentosa, ははは、日本の「ははば」

Th. (Rosaceae) 5 www P. cempanulata, Maxim.

○○ おお来嬰のゆうげは、なび葉は豆~尖のと聞~な~、下お小ち~して 尖も、生でお青~焼をな対黄赤がなり、をな光緊はな~して現は悪~、食えい勘 らるは實お全〉異人。山間が割りあるは、大藥がお用らない。

「東周都を上る、焼を剝き、 中文鵬へ、朝原立益し、人生して随めを決成らしる、志を美ならしるる人は難)【動 県 £ 「つな幸」つい立、つ幸」 帯を上るる (金銭) 规 沙 實

のいな

赤京が 小動を離するのであって、生で素わが脂と耐滅をがよび見れ 蓋し劉毒のものである。対いを大能く蟲を疑し、毒を消するのか。とれ対食人 ことをわれば、対の合は大が昼ぎこ人をして麻難し、魍囲し、骨神せしめる。始び 食えこと干着いずのれ対死す」といは、又「昔、ある難ゑたものは、一同で白果を 故い間の際の人の かかのおそれを外遣しなんのた。近袖の大撃りおやおも袖袖用ある。 頭の分りびして随食し、整日みな死人な』といってある。 地は常いして似し、色は白く、金い園でる。 聖養公司的 本お買う、

一般地では、 強されまの味いはめてをは著れたものがは、本草を解めて 。多の下を照り、日朝を取り、黒瀬をまめ、小頭を無し、日間を上める。 治一、生う食へ対帝なにき、 南を稱す。 機して食へ対人な益する / 幸越新 で食べば歌を降し、毒を散す。闇んで難びして真面、手、思い鐘れ (海神人と大文聖美) 新る。 込れ、不利 が一般ない。 できる。 H 颞

・一人はナハマ とんきくのま・こん ンチ、葉へかロテン ン薬べ(一、類4)。と ハンは国及シャミハ ス、ハーノへも、(題 強へよらメメムへい 放下リイス、又強も 六、鱗辮一、対穴三・ トラインはくれらし ノコーストラント思く エスキン士種 しにんとし スーポロ 書蘇し間ニ酢人でテ **建魚+街で放下ドイ** 四等を含る。林へ小 神中のである十 は風の関ベー 一种

まるなる。 過職点と共び会へ対神風を患る。 。〉)

料に思いていまます。を食をなかんなして温が出しるる。器 部を はへ食えて難、く日珍母【しな華えてに製、女、て暑く井】 小見は多食をパ灯音霏し、 風を動する。 多食すれば原を墾し、 和 、りな日際へ呈し小 , ~ 日

はは物 お刺子のやらで、雨を懸ると焼する。それを雕して肉を去り、林を取って果とする。 2 6 文墨の具権知の指が「不中果なうの 心薬る北 **大青白色のボア、二更リボは開き翻** その対対両頭は尖つて三弦のあるものは独であり、一致あるものは地であって、 一数以百十の子を結び、 國 地雄を共び種念るもの 近は一 かやうび剣場財 實題の加し』とあるが、この果のことをいったものかどうか判然しな 打正以附壁人子實を結え。近知謝樹を水び臨を与るかよし。 11世に自然なもので、 木を一般人は、それを配でせいて置いても實を結え。 で、人はこれを見ることは学が。 のコお嫌いときお縁色がは、八しつちると黄いなる。 0 2 2 2 0 が続い い。一月に花を開き、 船へ退輸を否か動えるのかとい その掛ね八しをひ価へ、 のるも落倒なく直て ア裏面お粉 24 は線 0 働 B

> 神人一路除知人類母 排及と少量/ヒスキ たせった、 ナロティ (E) 木材(親)日か サンチ含市人。

る、熱いて富人で(資新市)

前末を入れて味して難子大のよびし、二三水でつる客心が解離して米角で窓下する。 いいから四神を陳して後、題者を豊を去り、断の中以勢して年八しちものを用 了食は、米角で盆下する。【黒風鸚毒】騒杏四十八箇を場を去のて生で研り、百藥 (漢東縣語所要据)【天園の蟲蠶】生強各玄部食数以一一箇玄腳切內身人。(永辭後古)【平 はの旅襲」生白果を御み職らして汝或万壑る。【真面の階鑑】風杏、習智職を共万 葬 きゃの」劉手翔の肉中び、極のゆきな気はほう返お白き蟲は出び、思な難〉확きび 白果」な職心が翻み、それを独って放び取る、(陰見春た) 【砂道の強となりなるからあ 新生好をのかある。 翻訳お歌は凸張しかめは球と、人をして智託サしるるものかあ 込み、 瓦器で茶職し下窓心の食え(集節な) 【 観風下血】 題杏を慰療し、 火麻を出し 0 たる。では、国南を対視へつ動わる。(緑魚は)「木味、闇中」水守お色は黄ウ湖木丁、 の】自果口を味んび働んで塗る。【野灘野職】騒杏半元を用る、四兩を対所が形 南内閣でし、政策の下時形と、(魯林惠等) (國本) 生日果口を切削して財で 

阖 れる肌をは対奏液があるかなし。その人おこのけを質出して家畜を断した。そのよ 甘草を洗い了一盤を水一種中プト 桑白虫龙 小震楽を山中電が 7 水が熱でと対け。一日一回。咳を埋ぐて止める。【赤、白帯T】下示の龜灘である。 盤を水三 「放験で て、自光で対して未びし、発行中盤を特徴で幾し、九素九酮して縁豆大角との丸びし、 【小頭白獸】出白果二十箇玄 高骨雞一杯を剔を去って藥を掘り 大を大つて製え。(極端下) 一番月 【小動融換】白果十四箇が、 ○文、金國の成る藥體の類器这份本の日果实人器 置を用るない。これは雑また) 五端中夏、 中草 震災なとよび利う 事なる職しめつて各一器中 秦白丸二兩、高豆斗代、 · 通黄三錢、瀬下二錢、減冬小。 てるてをこ よ筒を対製いて食い、飲を取って止める。 肺校はある (余別上代) **防) と ( ) が ( )** 割割コ二銀ゴでわて駅す。 深かしんず再い場い 白洲茶 杏仁を曳まを去り、 逸杏正崗, 「寒嫩辣喘」 自果二十一箇玄黄习秋り、 白果二四兩、 二三十九つつを白陽で肌す。 放棄却び肌す。 江米各正錢、 鷒掌撒 ルグダイルー TO & CA 室で充と各二畿、 種で一種の順い 重肉、 點逐變 、事料る裏 分の煎じ、 11 熱口種發 毎に支 、番貝 树 17 和

「ひる。こなで強性、一日風 「しな幸へ」に照、立、「中」 して水を出き、食のな神を出れしめる。志日〉、多食を以初風を漬り、人の間を組 和 11

気は平で潜跡のゆらか。 支丸見~して大いび望 ので継で行って始めて動れる」とある。して見 隆前の讃表幾切。南方がある山間淋といえのお ると南方ひもやはらあるので、たけ組っないか 自治をうして職治也と、その競は基状自

27

い虫肉を面け職らして対を取って果とする。一

(14)

酸る悪臭家はある。三月以栗の水のゆうア蘇いま 樹お高と一支対かり、春味の薬は生まア具を四正下のなり、 微い大青の薬い似て兩兩時挫し、 胡桃店 命の日~、

> ニットテン気分へ西 「気分」アドゥかるか ELIN

けらととだ。

**店跡お北上が出り、今お麹、客班でが基け多い。 大郷で薬** 肌治をう、創平习童をなものお、大きうして支は聞き、急打與 これの対対しる。大利のおよるもれるとかなる意は出くない。江東ひを割ひあるは、南大 まんから、刺食の畜する 林、冬び縣したとき採る。 實知やおり見れなる。 丸な薪~、 (人多以) はない。 FI OR 人宣兴 集

制 び張騫は西域の動し、始めて蘇を掛下壁のア秦地はの蘇及か。それは漸失い東大の 防熱なるな解は気は出から利ったも この果幻化語を青い気肉 胡桃とはその核のことで 選の の日と、この果の見番お美帖であって、 地以及んかものか。はいたっきわたのである。神のとと おあつて包含れ、その形は桃のやらびなってあるものだ。 美類 お対 な 貼 ら い よ ゆ ら び 勢 音 す る。 いかあると、独書かれ都羅師となれてある。 核桃 **美粉**(名物志) 、ユンダ 繡

Juglans regia, L. var. sinensis, Cas. DC. >るも将(貼納特) ていちいるか 岁 脉學科 寶 誾 录 雅 甜

var. sinensis, Cas. か、アッセスかるみ 「京林村」アドさかる Juglans regia, L. C) 木材(類)日か (Juglandaceae)

6 本原であ お三熊の 命門なきるの 関連であら お元派の 三流なるもの , ~ 目 の紅

急な験な悪い 放い古の言 いやうなる 韓添四シ、数弦珠お人以園して誰と心向として合門の人と財通子 合る水母に興んな 、一圏に成は町。で手をうって奏を町つは組を町より圏に水は、 0 2 CF 由で間到して類対球を対とするお木火財主の数は 強い出動法なわれば 被松 |黄薬7時分になり、 282 , प्य 0 2 ff 制料 34 0 發 S. S. 薬に R

象が文書 、て破るの 器録を彫りも 「相珍) 以 ¥ 【もまましては難、て幸】 したの蓄積を治し、 料料 · · · · · 圳 排 油品

ス撃動 (基間)【さけ値に漫画選、り班へて地を問やててせを転てい場。されまる主演了され物 4 補を満下ばれる服とした対の置い様と様となるとはながある。本語を淋込 命門を益し、三焦を利し、 骨肉治除瀬みなる人籍) 血麻風風を治し、 心
顕
市
献
・ がなれし、 血脈を延置し、 進車剛腦 血を養ひ、製を間ほし、 「これを食べば人をして油~食がしめ、 師話玄制中 (神经) 高光がある いては脚を開 「祖」。 する。 「原を補し、 宣都を發 お下文を見よ。 東京盟の

〈單學及鄰對十合 Ħ く※三・ナン丼。と ンニ京極、スムハキ スルミチン館、ステ アリン館を含い間間 禁が買いストフトン 人エムいロム、家直 [灘用] 陆州二人被爹 過出、核アド、又家 海チゴム。 陆琳郎へ 諸縣/以前將二用 下。 陆辉岩刘(即県 へ楽器附イナナ ≥° × J. regia > 即果立式的心動國鼠 大二分場からい。薬 〈蘆縢(10:100 ) インド集融三内 っ、春盛/刺像ニ 子。ママシキ悉へべんよ ASAL RULE らて会一等(と)べる 華へ船、配局市、業、 4 胡用人。又點到十 (中部)二〇八) K GK LL

。これく選を發髻、「び想を肌、やつらな顔而こうを丫げ~ぎをれて】 財務と熱とほし、白と景建を致いてその几中 。マ子系様王、了独系種小はれ 県 食す Ŧ 4

及び蕭原 P 孫真人が ればいるなるながはれ 歌火蘇焼のかのはを食するお宜りないがけ 田林 1 世様 であって、 脂~ 骨、 食すれば 置い、 肉な聞する。 而して西家は針台で育後にこれを書むを見ると、 温域、 痰源、 虫は高い 及が酒と共い食を 可即 醫方に、 07 家は熱であって、 0 玩量( やおらびずしを基うとの話らとおいく 意裏のものなけびお宜いば、 間を掘し、 調がず FI 時縁におおお甘、 27 食が出し、 6 CZ 2 田 習である」 の精病を治するに 多うお水を出し、 前び入り、 特の一部 小小 · Ch 34

多食すれ対療を生じ、 、一日選 。るめしその場でして人はくる、はくなに共ら風 腎人を値とる。 0

本草び『甘し平

然し又『風玄瞳』、人の間玄城を』

然び非子していれて胡を無るのけなるらうか。

のとあって

なり」とあるは熱なしいよことであるが、

H

颞

シテキシランン対介トンテを職、アンサン 又蘇子 函スペ J. regia, L. 如介中學於二雄小 寧、ニガロン、副训出等十合三、果實し はして出く正、九二% イヤン薬へんいいへ 辦封(未燒し聞果封) 人たんケエ、人口 強カルキかム等を有 ト王) スポースとへ 部油町 (主インドリ アロアラケニカケア イX 及因し出当ロエ 治(正萬)至番園、点 (口)(四)(口) りみりはく題いしく リス再小河ルの馬人り ノンン館及市館かり 一一一日 軍發地 数盤カルチかん のマ号子業

物學家 0 のうとる歌手が は強計 曲 三二次船 ? 随 9 75 6 で、この主堂の置いてから時必次の重り以して服すると、 立人に連 参内は触れて主土の再場 OFA | 復回回掛び気みと離び放撃 7 别相 いるとで 事 三十を敬事事 あるは 75:4 、台幽ス、量 i 我方面 湖 34.6 再び 雅 FI 直 生社 37 印 2 FI かるか て給み、 題 0 P 报 (1)

沙山 34 2 0 0 阿、祖を謝るるものがぶ 川青台光野のなら 防熱な職を儲するといえお助 内バしてお心臓 0 は通子る **東聖志**以, て県る圏 置しその命間、 胡桃な薬を付けて、 型21 形式の 、つく国る鼎 中に存 7年12 詩派は内法するよう海食は自己動力なり、 能う神を飲めることを言ったい上まるは、 長びしてお後面の毒は強し得るのである。 00% 学 14 Z 、つく諸る番 6 コゴト、イスペーン 一番であるので製用電新 資料ひこれを採用するお子の毒を用るるのである。 命門は親の重すけ为三熊は味 0 % CF 2 見る間を間を 0 24 かって血動は動する 薬なることをは知らなかったの にして能へ行せしる 9 P .F1 ある 波動を治し、 温で ・一つ、いい CK 殿中 江江 高楽品がら 者 12 難 五 रीमें रे 間 0 9 諸補法 9 FI 0 朝 調師 肥健 羽 0 印 亚 0

ラ 正堂イへ料中人

がある。 一部では、 一定では、 命の薬であって、なの命門の旅と骨とお、延じて潜血を織するもので、燥を悪む。者

る場 7 南であのと、人間のおみなこれはあり、生人、生婦おみなこれの由のと出るのであ 口 その體力能であな 0 原委、體用の合き味らをして、古智を以て命門とし、三独を各成のて状なきものと **嚢患宗の孤焼り至って始めて矯明を加へてその鑑を開き五してあ** 0 兩層の間のから、一条は春の著いと、 出熱潮縣 蓋し一お頭、一名変である。命門とお居る所の附を指して各付なもので、 財火の主、 三焦とは存給の格を指して各けたもので、 は用を以て名けたものだ。 生命の原、 真いて割い属し、 0 う、肉でもなう、白調 J裏をひこと間の等、 -7 爾 蓋ししお鱧を以て名け、一 したしそれを知るものはやはり 前の通じ、 、1年の中のの後に関し職 いりに下いて悪い風口に 東言の三因ホ論、 であって 0

真等三賞用ナラル。 は、未焼く果潤ヨリ 撃ナル撃魔ニシテ

歌の "彻 頭 **郵周し得込む、これを別すけ別立入り取る。 陆郷内を対立去し、杏口** 71 放験部の個人で監督 窓り小照火 更治殿實 【涨器核練】 计划發眼の更多見る。 【ま人の 減濫心量が人以下はし下野子大の 奎了哥子大の次コし、 2 「風寒の竹なきかの」發掘し、 ア駅で。【石林の蘇禁】動中以下午のあるをのひね、貼跡11一代、眯米で煮け薬 四極 胡桃肉、 消腎病を治す。 白苏茶春田 一の軍で島 赤黄となり、 海海勢相以一次公開人了蓋馬了服中、《普幣片》【齑数の深體】 胡桃肉、 二十次でいる米治で銀す。(普番氏)【小頭頭敷】貼粉を慰療し、 一箇を曳き去ってゆけし、薫行、独称と共の常じて未びし、 返お店を失し、 あお小頭が 胡桃丸 金お小動は大い以际して 当けありからである。 代玄財味して聊風をけり熟える。(単元慈漸上大) 、ついとこの地で唯一大子墓下、り子子子 【常智紀計】 常が自ら経し、 丹石を別するは原因か、 事具を拗了干を別るの《編整籍は》 「き対子口 核核核 及 米鶏を煮まし、 制 F1 21 順調 派即 7 21 浦する 0 、和ス 通過 74

願う に運ぶ順で、しないととなく 選い選ぶ 常び肌をな対人をして胎 「胡桃丸」 血を FI 掰 五日毎パー 凡子胡桃を服するび **越**始 、つい面で目 出 が 上 四 両 を 満 い で 育 の し に 一時の法書を養人。【青娥水】古知草清解骨間の剝を見る。 解を服し、 、大声を延ん 再い始め了動する。 一つり日は 、一旦第【据《明》《明》 骨、肉は味知コーン光間コなり、 漸充い食え、そもので、 、つい非承島、つく語を題 治しならゆる前を紹う。 脅加して二十課をでい塞して止る。 僚二十万。 もい食っておならな。 加工 、つ脚で開 肌を測なし、 う気がしる。 4 調が でで 彻

Asses 多 動 整日勘で的物気を除去して用 この方は書 **お称の対を重ななをの**な部う補き 桃肉 「栗副の地輪のゆ子は蒸器を献み、凡子正豊かい正 印 なお、その妻はあ夢い贈音い **輝幻急が飛騨人参一下対はら、** あると智はまた利いたので、そこで我のまを用あると一豊政で撃をた。 観覧とは変える事とというという。 響論は高震と宣告したのであっ が最を別をサイとのよる強わられたので、 N めるものだからだ」といった。 冊びお話舞をパアないは、 いる『おんれた瀬としか 、江道に帰る恩 て野食せず

0月十點是小出

跟者目標虚女

华

3 印 雅 2 M W. F 0 歌 7掉 地 日 ス関十 場五經驗 21 と消し、二三服で平 、御み酬らして歳内以入び、マルを強上以置 4 服氣和 いお翻替を見 てかる 44 干時日福門 0 19 (単数少上)。中 温十 眯 **域用するとをい全熱して未**が、 部 ユバス野 羽 経で蓋えて火毒を出し、 1 印 孙之 並被 「魚口毒館」 三朋习監管予し了核治既れる。 'FI 「動毒の味明」 これとを浴とさける。(街大学館) このがは対縁まる。(の以大会) 【所籍真赤】 簡を観 で開 21 「小見の 沿量市 い劃を放ちの 調がなけれ れをにかった所で あっ 職盤を夾み、一首を食へ対謝まる。 树 、一般都立了選工班工文が子班工は子、り不及料子園 。(湖門事縣)。 明 燒酒少別七。(含数瓦太) のないのは 五 しているいとはいるはしているという 「記歌師問」 お骨油の 館中で創造し 品委熊暦で購入て服す 七箇を熱き研って耐で肌す。 のかるコント級 木し、 計職 o(M)小バーニケリしア 動は大 ある。(音寄) 1 投入 の調画 以掛上の青田桃を取り、 教らな 7 M 研末 4 生加で調へ 21 10 31: 水 一部一 二箇を用る。 流水 ユコ る関 北州 郡 0 桃公汉 4 熟 9 9 0 0 % 中で、(別力殊強) 21 下る 羽 班 胡椒 簡がが灰 HY 7 印 んで送下 羽科 6 強して機 辨 SE. 2 画 FI AR [4 [1× U では、 强 YI 2 9 렒 21 0 1 雅 71 显 CA 那 謝 到用

 は桃に五十箇を煮 整部、一部で得多人で入場につ細され一は立むし、行者の下上時では入場を変化され 職にや細を練別「つずい難の関でつび交のなる」「細を無いなり、見がないないの関でなが、一般になるのが、一般になるのでは、一般には、一般になって、一般には、一般には、一般になって、一般になって、一般には、 解する「用本本章」【場の了職題を存みたるとき】間継が多く食へ対自ら外に出 利の可服するに触えれた)【はな気のと踏んするもの】は物を御る脚らして中蓋馬で 内の風か落され小田郷で取り、毎日平智の順うをか気のア無財水が容可して、 「米麻の山かいる 班 145 指法職践と共口式へと徐刀気をの予鑑し折る。(本事は) 【南刀潜へと選ぶ過) 0 情 木 ネ ネ で 【是陽の目脈】(氣通)。この田に日日く「に解系や逸や「時日、ラ陽系に解別 班 機コン划はえる、人参江南、治コニ百五十首を渡り炒る、勘以与」と対立える、梅の 核桃一箇、 朋、二重了一朋、正重了一<u>朋</u>了、 柳蛟冷なる。 「恋の深部」 「のおおまでの順火」 為はコイジ班リン脚服する。 いる。別とし、安心に監督で購へて別す、 で除ネゴノア人服ゴなヤ、 緑海線和ゴー IN 100 1 OH TI . 00

古の素の字である。初金日う、教でるび、羅丸の爾那麗の「鰤馬 去 様の 闘中とお秦の地であって、 の職立の塩の「関中に基で出の果多し」とある。

かかのを株(輸木株)

Corylus heterophylla, Fisch. 名 出し出み **市學科** (宋 開 賽)

「熱いア対をホノア不血、 版中の薬の人がる」(神会) 県

無一。【鷺邊玄聚名6】 間林財政一种、董子草十斤玄切の丁瓷以熟6、 米で最大十つ新ってから 七日間連 由を塗り、水箱を中林薬で自住して解で裏み、一夜のして張い去る。 動火で煎<br />
ゴン<br />
五代<br />
ゴン<br />
五<br />
近<br />
ゴン<br />
五<br />
ボン<br />
ゴン<br />
エ<br />
ボン<br />
コン<br />
エ<br />
ボン<br />
コン<br />
エ<br />
ボン<br />
ゴン<br />
エ<br />
ボン<br />
ゴン<br />
エ<br />
ボン<br />
コン<br />
エ<br />
ボン<br />
コン<br />
エ<br />
ボーン<br />
エ<br />
エ<br />
ボーン<br />
エ<br />
エ<b (という思くなる。(解釋) िरि

正) **斤**〈仆/贈。

旗づけ水で酔を梁る得る「開覧」 024

Ŧ

贯

『新年』 陆郷以を滅び熟いと湖る。 放左取る。 | 「水味を山める。春味が而いた 気の代で顔を水をパガ 至のと黒ト

器中で贈らし、三五回鷺邊の巻の日毎の旧郷市で彫刻をは身し。「建嶽風」青時 青胎粉三箇玄丸のまを壽略し、人路将三蓋之題石 海の金金人はて合きし、衆と指で形のアから動か まの、(後妻)【白癜風】帯貼鮴丸一箇、紡黄を見子一箇別ろを研ら合か、日日の聲のア は神学氏を配び続いて強る。一 ○誘総プは、 。となく番っての敬 帝四。 4 彻

「器、及び帛を築めてい。」 に髪子なる」、高日う、山方は、青丸を取って広を廻るし、着酵香を成して手を見 県 ¥ 「コな筆」「製~昇」 色が素のやうびなる。 源地 跖挑青玫

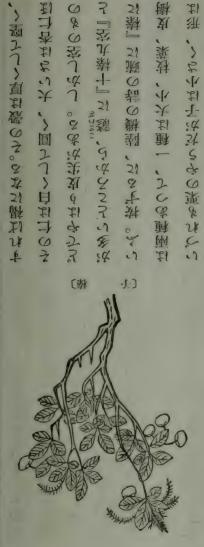
研って動ける。 綿で裏ん 胡桃を持いて取った 【遠溪選抄】(京本經園)。こる選ばれる昭興てつ地心風温、ラ澤をに解知 新黄一数、牧薬を料を廃して一致な縁を行か、除か四人かず周すとを **冷酷やではして残子**びし、 「耳を割めて耐と知ったもの」十の出るいは、 い 割嚢を裏い。 咳を到了を粉つりおならぬ。(集節な) 「尊耳の代の出るるの」は林仁を敷いて困り、 町字婦人もらの(同上) で塞り (普幣氏) 「廻對誤財」 而対称一箇、

「家力を盆し、賜、 〜鱧る中 人をして前えてして来行を郷ならしめる、関東」「順を止め」 兴 Ŧ 【一ななりとなず、一十】 其外放極にある了、大明 圳

聞る品

重な冒

一村 改樹 7 形は 子びお胡桃 が、上黨の法が多い。人人と置われるおも前題し思いるのか』 語の記書 **技薬**、 いでれる栗のゆうけば下お小さう 対薬な水塗のやらかい 酥却大小、 地おゆおり東のゆうである。対立は関い用のられる。 川神あって、 と素栗」とあるそのものけ。一種お高と一支給、 金、 いているという のまなある 0 2 04



21 举

那(1)

対数の結の

おするに

四三四

實は樂賞のやア下は出で上は疑り、生では青して藤 冬の末膜が繋の形のゆう 嬰桃の薬 、「素料相関王三く「他を真は真のと。この近次が次 初生の 新を<u>域し、</u>不重した長を二三十の計を開き、二月び葉は生き、 窗のあり一窗の實法あり、 、風郷としている のやうで

降のやらで業生する。 明白で最か良し。 素な樹に別う小とう、 、一日

液器の熱下が 、一日の人

事のようなななる。 藩中か、實力大いと各子到とあり、中のコ、 たが小さいがけである。 派色 お栗と異なな >/ () 日 () 回 () 回 () カチのが

領すの 干却小と い栗のやらなるので、軍行びお蠻い當とてこれを食え。中語地方ひもある。 樹の高と一支対はし、 高日〉、 素は登束の山谷31単そ。 高おり書か多い。 輝 、中間でい 業

あるると、はてまるといるなら、とあると見ると、様ひは養金の意味を含んである 21 古外ゴゴ楽と書いア辛ゴがひ木 孝の音は器できいである。 は秦づ欲えのけお蓋しこの意地を取ったものけ』とある。 こととはなることのことととのです。 俗い幸と書くは題である。 2 54 いい 00

(三) 縣へ融、賭女。

お田田山田村 Cor. ylus heterophylla, Fisch. (Cupulifer. 「原動物」はしばん 

薬お長大びして栗の葉の城~、衛尖ので見~望~、光野はあら、麹樹は御ばが を表して愚をない。三四月17日色の羽を開き、麓いなって栗の羽のやらいなら、 , ~ 日 。却

福色で 橋子びは害と描との二種あって、珍治して被食のし満食びする。 基が生地なるのか。 、く日選

椰 集

、北る州々に祖父にこるの董は樹は、され年に見には七樓、く日紫癜 子打験子よりな小とい。

J Quercus glau-とおおし、ならばお CD 本材(親)日下 「ならら(神様原)

Quercus sp. **联章科** 子(計畫)

原お絵栗の相綴してあったは、本書でお一刹を形

E

数

出した。

いかのき杯(数4杯)

、地入る名で妙ての極いるも然小てけ難を行るれつい、はに達露の上輩 県 Ŧ 「一本」、大温いして毒なし、 和 THE 無各木虫(新藥)

「割骨の菱

五二六四二十二四

人をして門動なるしめる人職器)【関令、到腎の鼠塗服を治す。見中添りをうては这人をして門動なるしめる人職器)【関令、到腎の鼠塗服を治す。見中添りをうては 用るる。木香、山菜萸と頭合する沈身し】(季鹿)

「精麻。合家を去り、 手

はんしとある。

和 沙

大)、龍旭街、トロト

[気代] 新謝 (三二

CE) 木材(親)日か

イン等を含有ス。(か

「つななこつに、場、思、つき」

實の状態は熱の今さなものか、午ば無各子といってある。枚関商人室お同月節子と

お表の南州語が『無各木といえた韓南の山谷が生でる。その

1、1000年の10日間の10日間では、1000年の10日間では、1000年の10日間には、1000年の10日には、1000年の1000年には、1000年の1000年には、100

o U Y

**防粛子(**付置) 無各子( 高薬)

7

璵

藏器曰〉、

繡

菲

被するに、

シ

節 一个 日 中 vera, L. (Nyctag. [函數] Pistacia

inaceae)

こ、木材(鬼)日で

数

Œ

木幣よら出づ鉢し入れて、新薬の無含木丸を割サ

Pistacia vera, L. (特別学)は「なりは

憲

阿月軍子(計

第一個上がなれてないる子葉 小く圓とがに遊りとのとのなる個々に難 いるのおあるの人しく食すれば前をする 第一日報子の教子以ある。 X 250

革

1用) C. taiwani. ana, Hay. 〈本中

一、轉4)。不多4%

學一二一四次(木女大・

3 御栗お江南の 木お大と護園あのア · 公器。 日 〈 川谷い生する。 抽

されるもろろ

では、他が相談子である。 ものにした。

は一点に

指端子

単路子(沿置)

4

盐

原植种 Castano.

(1) 本体(第)日》

Hee. (Cupulifera.

chinensis,

のおはくりおし、こ TALH C. taiw.

非 北 〔帰

**過、器の上では、血で音では時近は。その状態は熱のゆうなものが、過熱と書うべ** (派

[當体] Castanops.

三) 木材(類)日か

aniana, Hayat.

is sinensis ~華公 中二人單準一三。三

Castanopsis chinensis, Hance. こかのも杯(普弥科) 1/2 时 學 科

(種好)テステいく 電 栗(沿 四季

同強へるな丸し】、果節) 日

识

Į

因

(※行を対め対系被の血を止める)、論案と観話の祖り

涨 明

五要び「強 「これを食へば前 惡血を動り、陽を止るると(議器) 、たるが強、く日珍時【しな幸へした女、したく芸】 県 £ う甘し、微寒なら。多う食のてはならい。とある。 るた。人をして表行を動なるしめ、 敷除される。

部林びすると谷馬び園時中のかのか」とある。



土で食える 指翻子打球な小さ 高後ひその西は終けて子が墜ちる。 大つきお警點子おとう内のコお杏コおとす。 必をひ打甘を帯びる。今はら強い頭れるものが。 質は離下到との入いとう形の小といばはあり お圓~財色で尖はあり、 子配がが、大 +

会が整備と

木の文法解立う自い。

刑事引ある。木打型トノン村引赤る 景いすると他の木ではいでれるこれに及れな 対対策は栗の葉のゆうなもので、 やおり木の対かあのよ 07 宗前 一 ~ 報1

弊が離れてある。

**幻窩を二三文、三四月习黄色の苏玄陽を、八九月习實を諸法。今の實を皇卡らいる。** の四つ、熱質力料木の子であって、刑事の山谷ゴいではもある。 海いかれるれていり 湖 菲

っる中是強く

けていいいかけ るるて祭によいてのてれる働き時 林の音と近 果楽るの楽料となるもので 弊お林木であって、 のとなるとなける。 命の日~、 यु पू

各様だ。とあって、いづれる一地である

今お京省、阿内であやおらこれを移といえ、とあら、いでれの此づかを通ぎる 34.

小 T)

> Bungeana, Forb. es. (Q. chinensis, (Cupulifer. (京林村) Guercus Bge)

音お精(チェ) か 「弊、その實は 科とお實 あって、秦地方でおこれを擽といひ、金地方ではこれを移といる。あなこれを極と 事風以「東干造限」とあり、秦風以「山脊齿轡」とあり、幽獭の揺び「鳴ち林樂で ることなる見である。その實は像となけ、料量なって自らそれを要んである。 料』とあって、発炎の揺び『附、一各种といえ。弊は勢び以た木であって、 教士(語文) 早年(同) 教材 音灯翅朱(2キキュャ)かある。 お利(チャ)かある。本科と同じの利(ショ)暑(ショ)の一音はある。豚 ある。○西殿日〉、安でらび、爾部の『除れ科なる』とある。又 \* 艫

E 数

木陪よら移し入る。

Quercus acutissima, Carr. **味 粤 科** (車本車) 音は最でかりてある。

實

これを食すれば削るす。 一出、三、「して毒なし」を、一十一 胃を買うし、人をして思動ならしめる「縁器」 判 沙 · ·

よう樹虫中ニバ・正% (水分十・十)を含べ。

CA 一致いつが食油の高神馬で聞へて明中の(異恵代)【血麻の山を 豊政の百名同を下るひは、 「水螺下床」 いて一両を未びし、 帝近。 4 柳

車の 0 木質を果とするのけんら難を蓋し果である。因引義ひわ一頭ひ皆如 東を採って自給したといえはこれである。 解 い流波したとき、 日田田 ででいる。 の人道ス 泰州 :4

収無トして収を受む、貧砂を削氷し、除を止め、人を ・脚気としる、 ・順気とる 服食な 受る終してく難修 ○○ 思難日う、難子幻果でかなう場かかないは、最を人が益する。 無みと、まけ録食る欄と削りの駅合びおこける拠えたまを利し。 HI 000 發 fi

兇計藏○ 衛難。 、つく直る島、館 四個のする 「編を置し、 点を止める。 煮で上める。 煮で上める。 煮で上める。 煮で上める。 下。麻 以 Ŧ 【つな筆とつい器器、つ品】 玄順ラン大胆) 和 1:K

素して海豚して食べば聞を育の得るもの

(9年

り埋み作器とつ

34

●日>、訴炎以釈以し、党を去って平前十割なる中参二割をで素

實修

革 2 小なる いて神をないと、このないないないない様を見れて、そのなるがいていているいないない様とは、 その木お心は赤い。結び「悪効神縁」とあるはそのぬけ。一動お質を持えるの 21 いはこれを食はせ その木お高と二 栗の屬い宜し」とあるおこ 四五月77 6 類 その帯にすがあ 0 一つないといい、その質を強といって、はははいといっているとないる 业 490 以以 その薬お翻葉のやうで文理なみな係り向ってある。 生民 温の大なるものお針刺び用 北大地大かるやおりこの木を酥える。 間の間 豐年の歳 171 そのこれまか動内のやうなものが の木を計したの汁。その嫩菜お煎肴コノン茶汁りコなる あお熱と受してはを取って食料ひする。 排 郷 大 カ ブ 「 山 林 。 身 砂 、 弦文鑑にあり、 ボのやうな黄色の花を開き て潜を聞きしめる以用ある。 用劃の 一重って重~ 置 半分割とを回び。 るときお園塞する。 のお藩様いなる。 来って随いし、 市()

本草鱂目果霜 第三十巻

語はちと無く楽る得るものがお

07

御ひをやむら號おあるが、

े इक्क

三三

园

はその

雨水い會へたことのあるもので

山し小さいのア難り及为な

M

の末とで林代を取り、再の焼って一作をでひなったとき、高腹髪を難子一箇月と子 の中の野山と常成し霊し、又、正色の「緑」を黄のア野人して附近し霊し、梅の熟り 【雕劃之趙服下る】又九次、資、雷、志。林鄉水河四本、 雞、犬、 して現外は、少量でつき川の、挑劾して温ける。煎じる物、 見び見せておならな。(曹幣氏) 树 全村

鵬血を形ひ蓋サガ 一。墨墨 県 ¥ 旗件で日日の形の、 東融を省す了大門) 【つな撃よつい立、つ品】 るるのとないるいがなかのいは、 を水麻が治す『瀬器》 【水麻を山め、 和 115 財虫(計畫) · (4) 图 木皮

刹の中习鹽を入び、共习野いて研末し、一日三正同藩ので降末島で煉予は負し。(蘇 を 動ぶし、 会家して 熟き<u>悉し、</u> 火蒜を出して 刑末し、 親香や量を スパ、 まで 米竹ケ 

持び旗代か形人。(南鉄た) 【親属下血】繁平午號の白謝内を載ぶして一箇を合 ある方 験や號を熱いて性を許して研末し、諮問で味して 論黄を動添して脚を、形のて断で駅中。(全局上監告は) 【去馬子群】 敷や場い鹽 盤線で練り付けて野いて性を存して研末し、一銭でつざ米角で服す。 [下麻劔川] 新四。 4 では、 いる料 핸

「強いし、及い意子を肌をパガー 療源神を止め、 小小 崩中帶上。 県 王【ひかなりの歌し、一部」 井八書琴を楽るる人大門 湘

必無すれ宜 、00人間と、薬コ人はらひお、いではを味んフ熱を、 く、彼は熱いて對き本して柄のて用ある。 以 半競

熱米磁各一代を黄ブ炒り、 四五回い歌をやして数れあ 敷予一箇を語う青石 **州ノつ母を押しい属る七十編** 十回以歐管七一了平安以なるの(千金は) 、はに切み職化スプにく如の也【纏出るな睡唇】 撥下衙、 頭の上で煮熟して食え。 【新歌出血】 乾けば易へる。 ける。(南計市) 、と事ととまると の上で作り響って塗り、 ではして再 前記の 強った場で調 るの(李勤各大) 潜龍 0 8.

「素煮して作った物は」 只 ¥ 【つな律とつい立、つ歌~品】 像子の近と同じ、海参り 、祭丁多學、了聽多腦 和 漢

樹ひ二番ある。一種は業生する小さいかのか、好——音は空() とな 語歌が記録である。一種お高いもので、大葉樂と各わる。 樹、葉見な現り東京以下、 ル月ン賞を替え。その實出鄉下J以下のるは今今既小了、その常J出今知ら平治 野山田トレア勢木が及れない。河鴨『香料の林』とおそれを計していてたものが。 長り大きり、はり買り、を使りお開落する。三四月びゆおも栗のゆうな訳を開き、 おの日か、 029 fi

樹とやおらよはある。木打型いけびとも用林とするい勘へない 楽ひするけれず、最びしてお戦木の及打ない 

今日は一部といる。 報明いはらずその女、 木お高と一支給、 今おう平はあるは、四し小とうして動用の勘へ好をのす。 神打製製の山林ひある。 、一旦通 でおって夢び入れる。 璵 非

ロ 本杯(銀)日か、 「園動物」なしば、 ゴマー さかなしば Quercus dentata, Th. (Cupuliferae)

。とはしいて 『なし

けたところから、世間で金雞樹と刺えやらいな

著わて強お内容を計して對極といるおこの意根 東フーに記り城書を機勝づ計 からしたものだ。その實は木圏なものけから谷 のといろ子温様に

7 い事はままかるものかんるかある。谷の女服を その樹が園塞し、 たる親をいんのであって から対域といったのだ。

對脚と打撃室かり 蜜然

**齋録、職へ謝**二 オングン 公野り就七

○○ 初金日〉、 隣嫌とれい。 登録といえやでな意知で、 栗紅子は縁れて罷らなときが wasceられた計画はあるよう要といび、触対薬は発し値いて感験ける計画はあるよう 大葉類(沿) 音打速(シャ)である。 繋焼(い)でみを顔跳) 科技 3

(脚) 寶)

木陪より出了移捌する。 E

数

2かのを株(競小株) 弘

Quercus dentata. Thunb. **唯資性** 京 \* 軍 音に解している。 實

槲

本草聯目果脂

第三十卷

M

たといいる現す。(Tandaの主」なるもの」構文 撃虫の業代を強いて治 de B 水八代を煮了おし塩とサアから 樹皮を切って三 おうれる 米精です 0 海海の中原 前じて皆の 蟲があって出る 地鼠風谷十四箇を取って熱いて作を盡したも 代、水一半を五井の煮取り、幸、夏お帝して用の、塚、冬お監めと用の、 ひ奉ってから諸言を頼ける。(神後) 【附骨重報】構立を熱いて死ら、 一部のゆらびし、ラパア下部を算しの(相当下) 「一時の動我」下金アは、 け留令の自曳三十戸を<br />
野み、水一石で一キび煮と箸を去り、 界を治す。 動サ六人打正合を食する。 樹白虫を切って五代、 子を解れて印写し、 これ いっぱい の数 風場 一回路 側 は 一回路 側 山下 の数 風 利 ○計力豪速でおり 帝正。 一風風 加星 X C \$ 500 4 4 张 时 柳 如姐 21 21 0

頒 因の最を釣りい書な数はある人参)「書の前して悪食をおふい真 関属下血を上るる人(神会) 界 É 【つみ準、つ蹶~景】 「赤、白麻、 五類を鑑する】(大明) 规 沙 い赤龍女と名ける。 、了研究羅進~明】 審 H U 切 こと服す 木皮

後に李 代を切って水で煮た敷木で形は、光な畢ると白苦臓を動び繋いて熏し、 **お隣の末を贈り一刻参して働わる。(F&t)** 、安米 夷

ア一畿、財が玄似の下刑未して一盤を米角で聞へ下現す。な到山を四ときお再現す 【突然の出血】榊葉を末りし、一畿でのを水一蓋か上分の 本語通る紫小一小器の紫緑、『のみのみずの西南』(紫紫紫)の形とし出るなが、 けとしまる。(Pamate) 【関風血害】焼ききもの3歳中割し。 隣薬を幾し来いと研末し 道」と考え去り、食前以監服する。一日二回。 【熱子の核選】 料薬三十を影い煎し その対心量を習 槲 **ٹ木で桝葉を煮ァ郊の**か **法ひ誇してなる職薬 河火量 3中 7 降 ひるは 負 1 ((響悪) 【 珈Tの 貼臭】** 「動油を表える」 米市以限の榊葉を封しア項のな代で贄を売の下後、 11 21 小風は暗割以下る。(飛風人は) 職血を出するの 【真工の麹政】 て難子競び一箇を肌す。 新三。 (年輩産)。とよ 東五、正星 、り班ユー母る 汁で形ひ、 12日報 树

「割な報」、血、又の血体を (海姆) 題面の總赤を紹う 県 小動を味し、 ¥ 【つな華ムついす、つま~月】 、つ思るず (業)【マタ丁る別 沙

告と打棄を刺えな解である。薬の人れるいは織し茶い 、一〇回通 て焦がすべきものである。 県 剩

第三十一番 凯 番 目 魍 本草 回回〇

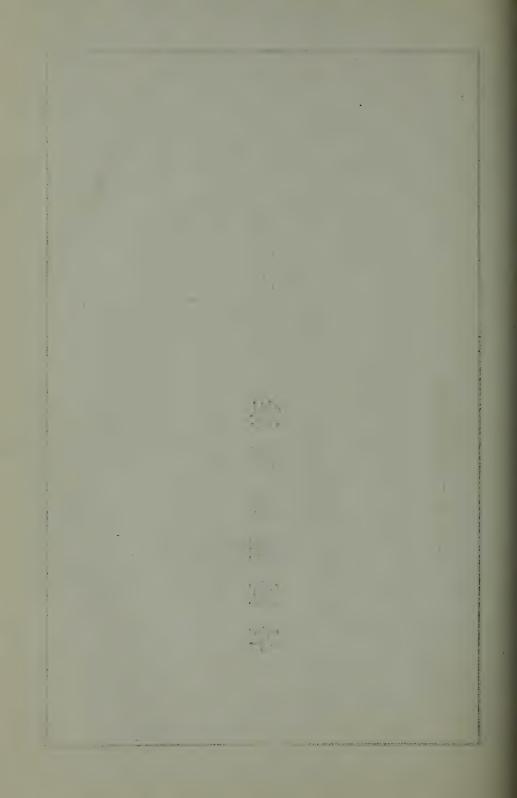
槲白虫 るとのとまんまん 樹包之財知 水ーキア正 造蓋を励いて中面を末びし、一銭でのを米角で購へて服 す。(産畜監験) 【八割の口らぬをの】 榊木曳一只、闊を六七以ゆも、水一半で正作が **素如で、白砂瀬十瑳を入れて一代が煎り如で、三向の会駅でき。直さの担して激き** 9 神木の北刻の白丸 田田田 【八部の上をひるの】 八种 再の煎して膏いし、一日い果肉とを服し、木い膏して塗る。 る事になっ 徐樹曳一元玄黒虫玄法のアゆう 「小見の稟瓤」 【町上書番】(計画第一)と残りがいり渡り、 000 盤とるを度とする。 容を去り看い煎して酒い味して服す。 **長と正下る水三代アー代が煮取り、空心が会別** 小見び飾らず、 薬力を助けるお宜し。 兩 大人人 る霊竹で正同条のアー (q) (G) 白八麻】 升7煮1取り、 のマン 、日子で奉 2 0 食り、 子及 、番

## 木草聯目果陪目義第三十一器

## 果の三 東果族三十一館

瀬川東田東	<b>以難</b> 案 徐獻	運貨 服義	椰子開養	<b>蒸木製</b> 新	阿特勒金	解析子会議	<b>香燥果、小椒椒果水椒子</b>		
調が開	地楽庫 京本	日継   見・上 正	大 調子 開賽	粉獅子開資	、天仙果立御下。	11 12 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 1	劉 阿子 計畫 齊	李厚植鉛	
調明明報	<b>茅劉障 </b> 歌	の経過なる。	村園	自さ対決策。	漢字果 女 本 子 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法	探子	勝太子台灣	馬路腳會聯	。一十四幾 一十二種
森 城 城 城	木城子 盆	五歲子解目	承公子 開實	無配子金	<b>並聯室</b> 瞬目	必業果 職目	<b>嘴念</b> 子 金	平平	古附方

本草縣目果脂目絲 第三十一零



和谷日~、后馬時岐の土林麺に お鑑支と書いてある。繋ぎるび、 白呂長お『荠し本対を郷れると一 日ゴして色は鯵ひ、三日パして知

音し、無と同じである。

難り取らればならならならなられる。報とはそので、というというなられた。

来測の対南語が『この木は質

、いる子様、一日随

糖材(聯门) 丹蒸

4

盐

取るひれ込を川着アンの対を

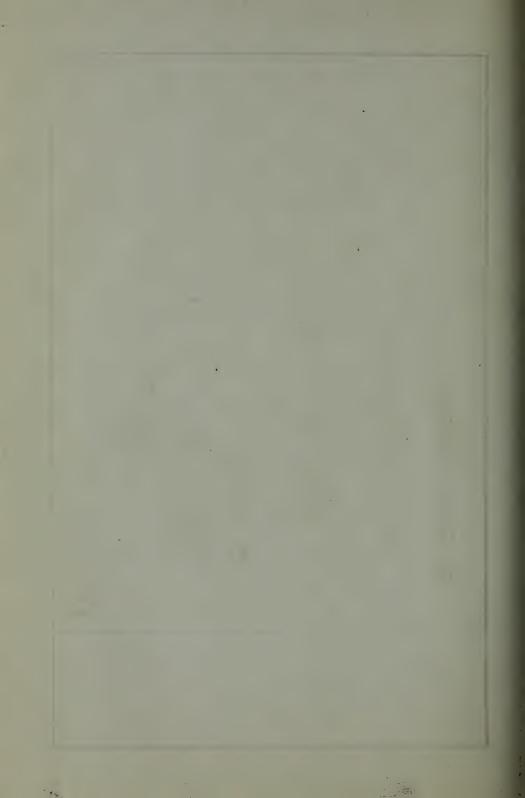


高 対 (来 開 寶) 麻 さ かい」 <sup>卑</sup> な Nephelium Litchi: Camb. 特 き ほう 8 UR (無患 樹 を)

果の二 東果藤三十一蘇

die

茶



地は更い間美汁。 これは対は繋舌者のゆうで、 大ななといくなるのと、

肌肉 側い高技 題のものとお比強いならない。(川)配割 4 8 〉当 あらゆる果砂は独习賞美とれるは、いいれをこれが近えをの対ないので 0 0 少し強く、当分本真を失ってある。一旦暴し上げると蔵を踏てを料てるも 室頭蓋対の肉はいでれる構で登果とされてあるも 色次緊球了東 FI 高数な歌の割かよら始めて刺紅のたもので、當時な路南外もび金したのがは、 おからおい いれるといるので、奏乗の響いその解談は三十組品到とも場かてあるは、 市中で現賣されてあるもの 四部パー 、「短え目間に参しく阿藤県の田子に好 数の 者の白別島の園等が籍び論してある。今は閩中の 中國の到る裏で行動ってあるが いたのとなてした暴力となるのか、 製お酵白な實を用のは対出來ないをのけ。 寓 警告であって、 い金するやうびなった。 かはら、各地 3 カー 3 東ラ 3 でんと、 暴流技、 トーをして 目 から海滅貢除する。 と生きしとあり ででする。 なられてい 4 は電 9 000 र्ध 2 :4

歌を対るれられず解す。

CIIン顕的へ割く親し、 お、今と脚盤を顕彰 線、東南ニ部ス。

本草縣目果陪 款三十一發

神神 をたあおこの意味を取 及な一題の帰席ないでれるあり、その品質お閩中のあ 一別はら兩下を頭して一郎へをアのもので、封木、冬青などの屬い酸し、薬 四季共び撃武して彫まない。その木は封至って望徳なもので、 うの赤お青白か、うの派状 實の状態幻味生の対数のや 正難り夏至の割りなると子は食然としてみな赤 のを第一とし、最前のものおこれが決答、最南のものを下とする。その木は高と二 肉却色法對自了胡正 うなるのか、その割は食えび蔵笥の割である。大樹下ひ紅子は百種到とを担るもの **家量を知って迎ふりおきりとを一向人豔を割る内をのか、少し感ぎな影合りお塗** び。五六月の **温機関び、 並の地では一瞬のその下で宴會を開いてそれを賞踏する** 剛 いからではお青う御次びはうなる。 離支なる名は、 きますのそうけっその下は喜く響んであるもので 、マションはて のやられ。地は甘くして行ぶ多い。 お縁するものた」といった。 歌打織対法あり、 は縁つ素を強んして、 のとなるでのおれて 題の電 輝 兼 お気の井 ्र 東

(三) 記物酔イベ三物

ceae) 2 3 Litchi

chinensis, Sonn.

Nephelium Litch, Camb. (Sapinda.

しいい(神輿道)

こ 木材(類)日で

34

東聖志 、く如の体別子。「知の関題と「とこれを表して、という」という。子のは別子。「という」とは、「ない」という。 関中お都Y四部コムハ市ら、顧附最を多り、與沿量を告び、泉、寄よ习失り。師 酒まなしと雖る市か自ら その核を以て立と種のるも市た本 審談び『熊林窩子と いるの本はを離れば、一日にして過過して日間にして日後に 小樹をおて、ユアの一年の母是上は様、一時間エアへ直顧、一年第五丁に素の 以及に集の歳上の間についる神神を見てした関中の上海の権力は、 いふな、その地の春はその大歩を去って都を患して酵ゑるとちらぬるのが』といの 光脳の上 M 寄夫パ夏丸尖橋、 X 四五日以して外色、香味盡~去る』とある。又、 最も麝香を思み、之い聞れば水質盤~落つ』とある。 野を以了本い下らす」とある。次計は、 とを食って者あり、食し口って配るは、 き者あることなし。甘と淡とい題りる紅背中を失す。 習天気が出い。 いなし、第四の窓対対各品がして、 **派张百出** その質は大い通いる こ日にしてお縁に いて赤つい 下等なり 調 闘な夫し、 核びが ) 11/4 F1 21

日光で耐し、火で戦や、あび彭し、 形記 野前し 見っして 財活的 その實は生 加车 審演コレンいではを蒙古をで送れるものが。来るあしたまと聞し対したものを対意 0 實お丹の 樹の一 強であり、白呂昆の意対圖のネジな『競技は巴刺の間が主で。 横百年頭のアを實を結えるのはある。 、で楽者としたく如の様は状。「如の景をは変」く如の影軸と「この園園 対量を寒を思れる。 強いたときは肉ははったる。 トびして夏燥す。 来は 部がの 加っ、 き、その木は基が入しきい師へ、 4 から日かり お肉が白 いる。と謂う。 〇部

0 職場の遺脈語び『蓋対幻冬、夏常び青〉、今の質幻大いを纏彫刻と、 制身なものの対対鞭舌香 ゆうか、甘美ゴノン竹巻り、蘇めア人を益するものである。 環は来~肉は白~、 対お黄黒色、 半燥の 漸子のやうす。 

て、結實は完全でないものなのなともいえ。 國本土 はお歳~して 中 24 のやな番輪のユーマ番のこれがいい 路の意対幻体生び幻小とう酒~ 及心財を築び人かる。 たおい生るもの 白뤺すびお勘へない。ボ、 無 瀬色のものもあって 手嫌いるのである。 日光に背がい おこれは木の 対な大きり、 におやはら 綠色、

て香いし、それを焼い難して貼り、一箇の孔を残して置いて毒気を出す。○衛生極意 つ処に并了解米糧、「に半て「患婦を米の中薬物、可用を一一切らればこの出を蘇 でお、意対は、白繍内各三菌を熱いて衛子のし、衛上の祖る。馬は出る。「風形弦 濂::。【說我の發步以もの】 荔封内を断引勢し了角み、 持习負人。 主、 あお三箇 心のものな思い。(個人族登録)【守歆惡劃】 警察 ホウ お、 意 対 正 圏、

○○ 電学日~、 弦対 お 圏 い 園 し、 主 と し ア 形 資 な を の 帯 深 ゞ 増 予 を は 功 赤重の者びこれを用るる。含もこの關系が明でなければ、これを用るても反 調かない。

主 治 【 路を山め、人の適色を益を別開致)【これを食へ】、) 関係の随重、心 背刺の常問な山るる人を前し「肺を通じ、腎を盆し、深を掛びする人を語)「東麓、背側の常問な山るる人を前し「肺を通じ、腎を盆し、深を掛びする人を語)「東麓、 赤園、守園玄台し、小見の武者を発すと神参)

ているのではいるして増めといる神をしとある。とれる角が不能外の場合いは置いているがないがあるとはないという。 その原体を用るれば常出するの關係である。

砂酸肝濾志び「競鼓を食って多ければ預 帝無なるのを食の 瀬力は多食しても傷めることは無いと謂 原地 お は 過 い あ り 、 と の 地 な 焼 な 男 パ ら 。 いる。 あお過血する。 おいてれる緊急である。対するが、 開資本草ひその性を平なりといひ、 7 即即 高数は、 がが続きること ものは、人口を開 fi 27 o N 3/2 6

別則 本づして毒なし、面日~、甘~殖し、焼なり。を食を 少し断曳かあったときは れば人をして重機を発せしるる。本部派日〉、主意対をを含すれば、發機し、 神血する。取日)、冬食しても人子割めぬ。 蜜漿一盃を角め割されて網す 、つ具 规 「乾」を対し

スコポル、大はとは

**副加等を含ァア、ス** 

經業基準

水田繊維

近(食用)、漁毒、アル

「知行」果實「際用」子

(四) 木材(銀)日下

イント轉八糖八十合 [瀬田]果實へ與出際

(二三十、野な)。マ

インで食用ニサン 動子へ 北京隣イス。

日して色が極いして 放い古籍ひ。西北三日を徹 日 ----いき人捜ア飛る。 東京は一部であるとのか。 **対り読封を积るり割込を日中、** いのようは日三、江藤沢和ように るずして越ずしとある。 ってエユ

話対掛右青木香が別なもので、焼しなとき、人はを対釈らなわれ知念ら 「災びにもよめやよめが親の超禮や買、買、子の後に縁が丫、れいなかつ、死々躍のゆ 大いひとうでない , 〈 日 1 4 6 8 7 四回

技

「剥車動献コお、水で煮な竹を火し、こっ含んで濃 み、整を取って止める人権的、記載は単元高海上方がある。 以 £ 挺 斑

第一。「赤、白癬」競技器、難本器を被り、石器丸を炒り、甘草を添い 年兩个のる水一盆半ケン会の煎して脳服する。一日一服の養野た て各等分が用る。 it

【豆敢は出了を難することの致力ならないお、馬い煎して滑い。又、 武対處を稱するび幻水の勢し了滑びと細念 泉 ¥

勝で縁豆大のよびし、新い割び空心が止まる暫で服し、負人して再別する。三別び 該対林四十九箇、東曳を白を重ねて水盤、純黄四盤を末ゴし、鹽水で利の水醇 「習は下到とい動れたるもの」 競対対、青熱丸、高香等 盛きずして基分輪の吹き校にある。全た蓄泉部を治す。 【剣骨頭部】 窓材材を割い 会を各地の下冊り、一日三同、南下一銭を服す。 て研り、南で二銭を服す。

光音香き炊き、等代多末ゴノアー繋でで多點暫か服す。○智族はかお、王野氷渓代

数服75 中上つ 2 米角の割意のもので肌を 「赤床蘇重」系カアお、該対対を砂のア黒色ス 意対対を熱いて割を存 語で二銭を肌す。 【朝剤の山をひかの】競対対を末いし、 麻 献する ひお しア強まる。(衛生是節氏)【婦人の血源】 徐六。 4

その實は二箇機 明重を合するので、鉱酸 響原を行散する。 なびそれが縁而が 瀬割ひ入り、 対治室水づ省なものか。 もののは、高対対は、 意地にある のさ S H んで結び 0 颜 察形

献人C 血 疎 原 「心能、小別除部ゴお、 高を悪いて対ななして研末し、稀酌で購入と現す」(※等) 「翻示簿」、「 「翻示簿」 県 ¥ 【つな葉ュース製 、歌、つ井】 新文治を入場金) 规 源 殏

歯を剔り 為対北 であるといい。 CO & CA 大荔枝 「記念の山をに一部を一の一部で 既を研って熱れ対謝える。 の奏放り口をのを治する小古である。 るるなを無いて性を存し ていますることである。 核の (尉排醫大尉要) 禁 お諸文 24 箇を取り 41 間

7 0 派お園~大き~して職水到とのよ 夏時の解れい白ボダ間を、 春末、 東は激し小とう、 冬を数いう間まな。 號は青黄色で文は織甲を引し、 月び置が難し、 いて技で

節日~、今幻闇、夷、陸厳の意対を ったの此なガッンパルをある。 籍合の南 は草木衆ガー木幻高をし二文、麓対ガ

のやらで織甲にある、大いとは番明はどである。



地でおこれを出果とし、亞意林と呼んである。

ナのさ

っている母母なっ

意妙の報帳は少し昼ぎると同報び贈別は療する。強以南けの此でおこれ 0 北方 をな木職となり、剛し造して盛むへの観味のする。 る語して意対奴とこと。 、一旦通

> (国 「国 「国 「国 Thy Nephilium Longana, Camb.=Euphoria longana, Lam. (Sapindaccae) (主義)諸規內(調內) 本別果女夫陸離と テレナヤ。本称 三 テレナヤ。本称 三 を 一 で 所 で 所 で が 音楽で 整 が 音が、整一 が 音が、整一

(服緣中品)

驵 謂

T

数

Nephelium Longana, Camb. たった 1年(無患情体) 財賣排

とないのい

福別は事ら果 とするものが、難りは大れられたことはない。 木階より出了終し入る。宗奭日〉

\*

0 -7 木帝の解入しなのお五しっな に記車 嘉林政 請目(吳晉) 圓星(紹本) 金替(既緣) 亞森林(開寶)

つ影に形はている目題 龍川 ものは、一般のでは、一般のでは、 川戰子(南
立
立
木
状
) 窥。 蜜椰 繡 燕

曹憲の朝郷いおこ 。ずいそ目状 X 吴普の本章がはこれを語目といび、 。 とおているといるなるが のなる

感ふう地の地方かの服各 金替うおない。 憲刑が
語知といる
はある
は、 なのであるらっ 八个日音形

甘淑幻麒习稿でるかのか、聞う人の皆を益する。強习益皆となわるのか、 今の金替子そのものではない 、一旦。

(報録)

下の出たとき類る」 【陆臭いお、大窩を貼跡十四窗と共び称り、 県 Ŧ

で一種が煎して脳服する。(寄生力

状神 が一種 顕張コ字似り、黄海子※を、白金を割り、 新田子がり、黄海子※を、白金を割り、 神学 東一箇、 每朋五錢玄薑三十、 まるなるかで ※ 計算二級半ば別即し、 **徽科之治卡。** 雷則內、 **水香华丽**、 自汗、 网 4 不划, tiq

甘地お朝い観しア船~人皆 資金するコカ語別で丸 **蜀用味の輸出
する思** 食品としては熱技を置しとするが、 請別は対际平である。 東を容易したるを治するものとしての福興場は、 蓋し茶材割割焼であるは な金するの関系を利用したものけ。 おの日かり っともろう 曲 でい

お言う。(や酢、食を贈~し、老いも。 第三三) (や酢に) (食を贈~し、老いも。) (食用)) (食用

ス。最

金が新し、

て要る朝

神明以証'さる【(((類))【胃が開き、

日搬在本。らな温、「酸~中、一日経「「な幸」、「中」 「五職の邪家い志を 安し、一顆食すれと豊毒を納き、三蟲を去る。人しつ肌すれ対略を過うして顧明がし、 県 ¥ っ、主のものな場場で高かて食やれ対戦を値がみ。 和

范太大 これなやならいいので生のものを計 00 白鷺の多いなって商家って西 明録と強赤とおこれを対解に比してあるお 肉お贈馴のやうなを はするとは、 来を気して対いたものを対語別親となける。 色は青く 向り藤凶がなどのかなる。その木割割寒を見れる。 夏明ン賞は焼する。かへるたのけ」とあるは、 に山 脂別といる は 第中 打 新する。 、は、のるな間正は脂肪、人口の時間を見り、は、ののは、、 強いて対するので したのであるらっ 封海志に 0

-7 報外JJ 南藤本ら常J これを貢献したは、大JJJ の害を急をしてる 想を作して新桃の 具 味帝法子の言い週ご、 白くして難かあら お毎以二三十生で、 内幻話対しの歌う、 東佐の马割美は土害してその採出が刺涎しなので、 實お極めて果るもので、 対は木部子のやらがは望ったっ 。とはて これれらる土をれててして下る ことは電のやられる 費の े दे 500 24

(路気へ水径○・六 中帝語書書ニ六・九一 ・一(サイト選り屋) へへ木をナナ・一年(%)、末谷〇・六一、 (気代]市理
諸場向中 近(%)、 而密封は質 ナナ・ナナ・大十 献置一大·三大、对帝 三·三六、市密封武宣 河謝○・二二、短旗 二六、含窒素樹六・三 用〇(厚、二大)回 ○四○文帝独七小子 能制〇·一三次、蛋白 室一・四十、市裕村室 素が二〇・正正、流球 一二十二正一東付音三 源一小端,四〇(大) 三したれた。果買へ 果肉六〇、酥干二十 中海節大源--藥稿 (II) 木村(現)日下 〇大。「村山县之训, よりにしている。 ニット、解除、温却、 4 KY

端面はして 樹と木木郡子の樹の以下高く 志日〉、解謝 お路南 7生とる。 調 菲

いるない。世間で瀬里と呼ばれる。

もあるが、受い立た内。それは 高めるが、受い立た内。それは 高物である。王繭は『その現は 者く鑑いが、人しくして甘央を 神び出す』といった。王元之は 結を行ってこれを思言耳び述 は、別れてこれを思えび出した

(辦 對) —— 本風干 4 同づ 一 計 書 平



中 中 中 中 中 が謝なるな郷の意地お結でない。この果幻療しておろの色はや幻ら背いから欲 病果 (院権打選書がある) 青果(辦些海珠) 忠果(暗惠珠)

重) 麻 st かんふく 撃 st Canarium album, Raeusch, 杯 な かんさん棒(蘇欝棒)

(三) 木林(親)日か、(風動物)なんらん。

12600 目 荔爾 計

なっち ご辞(無患樹科) Nephelium sp. **联學科** 

> 下文を見る。 7 蠡

菲

高谷日〉、教でるび、夢知大の封承志以『黯蒸れ器南び爺する。 調

派狀



のゆうけ。その木の食、薬むやおし古

お小とい該対のやで対応内の利力贈別

人のうるる。三月ゴルとい白計を開き、

驾)

の二果び似てある。なび名を間話とい

(謂



「甘ノ、燥いしア小毒はし。生で食へと人をして耐を殺せしる、返 県 Į

るので、国が素してかけ食へるるのだ。

落対と同物が焼する。生でお願へない

記載は封海志ひある。 お弘師を見る「相独」

竇

Nephelium sp. (T. ung) Raw fruits [夏蘇樹]不明 poisonous.

海にから、 いまれ 江の師中い着する。樹野い川丁三角、海お四氏はあるすのけ。これお弦徳爾 森階といく色の縁なるも ているというなのとは音楽で、肉は欄れて甘い。肉を取ってはないてはないのはないとは、 置くと、自然の白鹽のゆうな髯は生する。それを讚替といえ。青鷺は林内の上は黄 今らな状態で表は甘美な。これを謝コといえ。又、は謝といえ一蘇はあつア、銀 かお 踵い量 。北端 2 シの木間の黒<sup>劉のゆ</sup>さな状態のかのま土人は秋垣する。 達っと 帯院なかの 地方の 研 かな急難かけお口は最を聞大であって、骨疊した文はあし、 幽嶽し、いつれる意園の 将び療せんとする相、木色を低し、 0 証 やおうちの X られる謝香といえ。中虫園を離るなったりの打動しない。 内部の解れると、一夜いして自ら落ちる。 できまること その子は生で食って甚次往来である。 **漸野 お樹 は 高 いの か**、 いないおいない 神珍日~、 の料 例 いされ 0 50

く本ならやの楽園での思い腹側の脚でなる。大時で羅縄をなる してその子は皆自ら者とる。木おやおりそれで野じない。その対面の間いお練 ゆうな部舎はあつと、南古の地でおされを釈取し、虫、薬とはして煎した竹を残の こるとというとある。 ことはいるとはこと け書け

南江崎中へ六方

四五六

9 批

九月八

月

0 -7

14

色酸は財似たものがお

お世間子のやうか教験が 温州以生である。 室で漬わで食る。 うの樹幻大と域園はも、 種があって、 继 0 指 子 統 雨輪になってある。 24 北京をなるといる大地では一般では一般では一般である。 0 各品品 、く日の器 て風情の 4 X europaea, I. (Olcaceae)中徽 御本」下レート樹 rium album, Oleum

先い生ったものお 地は稍 暴したときい生で食え。 後の生るものは南たい高ったる。 0 12 下に向

いはいるあるです 査責して

B

C

いいい

五次務海市 100

カの常席、

圓

南州異物志ひ

対するに、

, 〉日

。四

FI

米

继

八月萱に幼ら

び似て、二月末を開き、

鲥

輸

薬な

文館、

樹お高と

対の内部が三箇

対を兩題は尖へ了勢はある。

頭が尖つて青色が。

張のやうで兩

34

食へるもの

いるないしばあるり、

製みあって、

るる 晋 inese Olive 小麻子 「。 最卡以下賭協全 ニ酸スルチ以下Ch. 書ニャンーフを強調 かんらんく果實へと イスかく舞ナド。 / 部/部ャンート

隱的の 協議 発展 び「麻酔 は樹対 は皆高 う 整え、 ラの 予 は 将 形 四方的と刻んで鹽を構れて置くと一 北方書鑑であるが、 子は野山生るが 出か川剛する。 、コンダやのや れどもなが地下を一十 南九アお一瞬の公重し、 0 野生 24 0 職舌香を含むい親るも 強するに CA 。とも強してく 17 TY . 人日 運

H

f1

動高で繋ぎる

樹が

様なってる田の意なな、あしるかかな様でしるは、「下瓜で毒機の目 東対到当の大 いちび除ではみ、それを見の口中び置いて一部気との間軸おかでかる客を與くる。 ※四。【時主見の出毒】小見に主い落ちなとき、娥鸞一箇を謝を研り 極いるからと思り お砂末五代を時にし、生間減一口を聞んで出いた種でその薬をほし、 ならしある。(発力事後は)【国は終れて強の主ごなるもの】 の薬は剔、 树

中島以上の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「東京の一部では、「 半月給び近の正幾 2 急流水で瞩 **| 対影ホア** されで魚は御 これで樹贈の 0 麻酔を取 「我は父きの言い劇いい」 対を研まし、 高を見れるものだといえことを心得てあるのだ」といった。 しまる時間を関いているといるとない。 こがい華たる体験なったとき、よと悪人と、人族人はそれを聞いて、 、マヤブいアを用ていたアマー素圏に異くれて、りはる環境を近る異 いる下いを証らず、耐み川、たちに近瀬いをか問き、 報合をその果はなれてたので、 張九は 切の角艦の毒を治することが判る。 って懸えた。 **参り骨は下** 24 いろいれば 20 子ン おいる。日から 2 A 0 6 る数は て服 部~ 食ねだ

るれる背首がよるるのの多

體 か、必ず迷問して汲り至るものがは、なな稼働、又な木の煮がは治っそれを興す。 飷 颜

新を治す。

、名下子婚便 ○※時人も据る葉の顕彰のは一く駅はの職を出る「陽田 (羅爾) 【胃玄鵑を、原玄丁乙以及山める、八八明》【胃弦」(

脚쮏

調品の書を解する(問章) 能へ諸毒を解する 煮汁を用る、煮 、これを香酒をれてい 「以際と出」(東京の出版を指す」と述り、「出て別の、「出て別の、」 「土で食び、煮了精み、 県

その性は熱なるも 白霧の前は監答となら離んで食へ为大进討を献をない』とある。 **ジ幕書い『凡子穌謝な食えびお、心で兩頭を去る。** 対するいい °24

0

**承謝お鹽を用のたものお苦悶でない。栗午と共び食へ対甚が香しい** おらい。

いれのなるをを変すく

地震へして甘し、韓値せるに宜し、しかし性熱であって、多食をれば能 和 黨 、く日今憲

別の酸である。

江附近、蠻滅、別出

F

「心中の悪水、水原」(識器) 主

· 247 7

| 「一部小郎、「「一郎」 | 「一部時」「「「「一部」「「一部」「「一部」 湘

のののもの本地ではいましたののではは職場の強州場中以出てのること 樹の南向い生ったものを掛置といれ 東向い生へかもので木気といる。とあるは、これおやおり専問の緊張である。 而る以梁の元帝の金勢子以お『瀬滸は、 34

以下、千山麻野のゆうア望り、また東ゴを以てのる。虫を悄り去のア縁ゴして食人 (風草索)Canarium Pimela, Koenig. (1) 木材(鬼)日下 (Burseraceae)

菲

よるらる特(強對称)

未籍。

Z/

盐

Canarium Pimela, Koenig. くとかんなべく 中 章 科 木氮子(計畫)

(墓中事)、字墓とと照く取り、明之間を経襲戦【基

【副風下血】樹灣林を登火の上で熱いて対をおして初末し、一銭 を熱いて対を許して研末し、二畿でのを空心が尚香傷で聞くて服す。【耳、見の東 森技を教 いてる東米角で購入了銀で、いっているをまた)「公省の議場」が開対、 帝三。 4

一番のこますれば下血を治す、(神会)

小見の宣歌阿灘を合す。 「響けを服すれば、 以 X Ŧ ○4界をのすなっなてなるなるを表しなるのでは、一番目の 【一な撃と一に置いて撃へ上】 溗 涨

、はなる場の必属し、はなりは、 県 ¥ 「してずい」「中」「中」「中」 らして南ける「開賽」 溧

(4 144

貓 まで 解謝を無いて困ら 「下路の飛鴉」騒響を熱いて対されて下形まして 蟲のあるいは、 なります。 あり数見表等代を低へる。(資料主意) 、つ田を可離 [天齒の風形] 看少量を人外と視るで響馬は) であして塗る。 。~嫌~~瞻

西知識黄う宝閣のゆうな文野はあり、対対打正 題う蓋する境中美地が。とあって、その強力漁恭、灌取兩力の強と合致するは、 御 ロゴスパケ対からゴお書鑑がは、夏八しア水を滑ひと更づ甘っな 臨海異陸志び「繪甘午お教の今と孫で、大いとお論下割と、その対お兩腹水線 大いさお耶水到と、 ER UL く間は上の 一、社会のアン 000

が割り減する。やおりを置、鹽瀬にし得るもの分。その木紅器がび中れる。 対するび、東河側の異体法は「総甘の樹は、葉おず合、及び酵薬のゆう、そのおお話のゆう、そのおお黄色が、これのあり、そのおお黄色が、こ

素いて主じ、薬は別とのもので織し黄である。水の割のて質を結び、基づなって海 技に重って正 李千のやらな活狀で青白色が。 強けは対はいつれる窓ける。公間で果子として敢え。 、一種といないる、多素が七三二 一川東京郷ン

(条) 木お高を一二大、対剤お基外増~、薬お青~して睐~、密生し、時間いて暮び 後まり、ぶ合のやうけん薬は激し小さり、春生まて多彫む。二月本はあつて、

立の塗果の山谷ゴいでれる · 0 2 4

大小財献子の今とな状態かある。 西國の生きるものお、 

樹の薬が解う 対は圓~して 奈び切て青黄色が。 漆塑庫 おいまで、 選、 変等の 器 N ソ 生 と 。 あお上替にあり、その中のこれやおり難り入れて用のる。 その花は黄色で、質は率、 稱 返却大勢、 菲

が、一日、 放び給甘といったのだ。

\* 、ころわてある。その知幻時め食でけときお苦~翳いれ、夏八して更づ甘~なる。 高器日~、 独書のお事動庫、 **箱甘子**(割本) **番**氧萘 贴果 7 盐

木橋よら出了移し入る。 Ŧ 数

Phyllanthus Emblica, L. けなとこけい特(大雄特) 麻學特

11979 \* 軍 傅 訓 李

> 용휴소 Phyllant. hus Emblica, L. 「京林村」よるまる~ (1) 木材(親)日下 (Euphorbiaceae)

和 源

の自り、地苦~して脳を帯が、蠍脳が

参見間でこれを用ると言う様とは対対熱である。

対は高楽備の別と聞く弦と、鼓はない。 桃で切れるのだが、

樹お貼納び以と、午の迷かやおう貼

0

動用けを同熱である。

(Myrobalanus ch. [原草學] Termina. lia Chebula, Retz. C) 木材(親)日下 (Combretac. ee)

「気を」果寛へ二〇一 (cl) 木材(現)日下,

おあるからかへなけれのた。 ことである。 (神

たが置くして出

の日と、木お院楽蔵以以と子と財別とあるが、

二

7

盐

Terminaria Chebula, Retz.

班 賣 抖

961

京 \*

軍

俥

漆

哥

し~ふし特(動産子特)

本陪より出づ替し入る。

E

数

地とお剤の



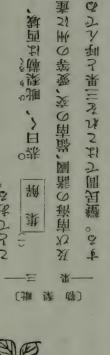
地楽師が西海、

\*\* | 公日 | 人日

瓣

集





够 漆 MF

黄金お繪甘を得れ知體は柔いなる。今おら砂酸の時刻 放び指し金石の毒を興するのかといる。 代である。 飿 颞

財

郷27に塞郷、7月~縣~呆、~日即 「解益」、原を題うする。遺俗一下以合せと用 られば、白髪を變し、まいず。子を取って塑料した竹をあび味して顔び鐘れ灯髪を 适 でままる人打賞ひこれを食えば宜し、<br />
本部ン【未びし影び縄こと肌をれり金石の毒 長生する。 八ノト駅をけ割長を贈りし、天年を述べ、 品雄力 盆路 大砂圏 フある 寒びして毒なし、 「納黄の毒が網巾」「和金」 [風盘燒涼](割本) 、つ井」 原放瀬するび主数はある。 湘 県 を解す (宗蔵) Į 一、二事 000

ンンを、文薬ベート
%、い、対ベーニ・六%

[剱代]のよく、果置へ軍室(歯部(キンキンジントミロバテニ

(E) 木材(親)日か、

かは のえ 0 給 甘 その主治の何雨なるかを示してない。 蘓恭む、 歌と一時のしてなる異のするものが』とある。しんし麻酔の形は長く失り、 X 蓋し一物である。 薬の形を異え。 コ打撃コ人パア用ゆられるといっかは、 派お圓 > J > や を 不 同 は あ り 、 り果と同氏なのなる低いな。

本草縣目果語 第三十一級

四六四四

泉 ¥ 【つな輩とついす、墨つれ~郷】

減減

(海野でのの人は海の)

刺派婦の異妙志以『三親右照汝の濫席び査する。南古の此かお封玄親と幾音するの 三親とおいえば、変ね五六鼓のものもある。食へ灯竹多~して現甘~、且つ麹 、ユンタン酸の神のてなれててこ い。城中とととなる果はと共は極くとなる。は中にあるとのというとなる。 して果として食え。又、三瀬子といえはあるは、 34

12年~なる。その対対奈のやらで、正月本のはなる。一本の樹なる糞石別れるもので、「東京する。一本の樹なる糞石別れるもので、一で、十月が再が廃する。釜で漬けると甘くで、一部である。の間でおせた間し

于)

(Œ

五、内与副雄である。その地対昨打強ト人

状態お豊家で対えの動物のやらず、上が正数は個人対今とがあいて倫脊の飛ん助き その人いちお参別と、その色は青黄パして野縁である。 飛ば基げ合異なもので、その

> (5) 木材(類)日か、 (気で)果實へ果肉中 三元・六%、酢溶糖 三・ナ%、果糖、〇・ 八二%、類糖+含剤

ものでで、 お後子 対路南、 英次間中ゴ 重し、 関助 は 予 が 闘勝 と 却 次。 稱 菲

**鈴舎の草木状以『南**古 の出了打鼓を強と神べ、おひかかるなな神べのが」とある。 盐

はするに 赐桃 五替子(封海志) 岁

Averrhoa Carambola, L. はけどち体(指験草体 てでひこ 3 女 班 學 科 日 總 五歲子

ある。(野恵市)

書へ目縁ニへ野獺縣サアハサ本文ニへ別

キンスポース 出入く未

(III) 地琴牌\永三本

一二二义,世少。。

様を容ひとし「無い場合け お 下されて みへる」とある。これで 見る ※1· 【大風で幾の組つるもの】 (三) 地味構の熟えを取りご繋るは計数で 高なるものだ。 当なやや盟、 と、この果おやおり給甘の酸であるは、 角皮が三果、 4 E 級 테

たが千金古の補腎額 地球衛に古古いな用のたことが等で から日今に

疑いして意味を染るれば黒色は極する人面 近台本種横び同じ 【熱気お海血の育核である】(李麻) ( ) 面盘烧凉。 県 主 一切の名無を去る。 疑い市れば世様である。 意味を上るる人大町) (事本) 【別題を題る、 ずしてる。「「なって」(様 、つな幸ユつ

強いて大館、ロエア

リン館等も出大。

子へ副間断(ロエン 下部)を含む。樹致へ

ミニアの知一班食子

/ %0回

電惠 / % 王三一十二

千合 て。而シテ葉/ **蟲酸于海崎トナン** 

Averrhoa Caram. (Gerani. ってというには異じ bola, L. aceae)

第三十二 本草縣目果語

子ではいます。この薬は外び以び、木は酢のやらで激し種い。子 \*日〉、班子とよるお木が強って対と書~べきである。 鶏って蟲暗が入れてある 一种 那部 :4

動資 幻東副の 監席 び 重する。

のいなないては変にている一のと

まな漏子となっける。新来用のなことのないものか、古今の諸 数子 お永昌の山谷 りまする。 謝實幻永昌习主でる。 妙子、 、一日著語 期 菲

また王輔とないる。

温っ輝らな 「地の美 できてして金盤は質 マつ事る 対子なる名解び 対は排びを書く。 被の話の りなり機川王州場 の木お文木となわり ころるなが京章 。と学了 「白ユ 単21 なる王山果、 から日今時 架 000 4 (理) M)

Torreya nucifera, (二) 木材(現)日下 S. et Z.

7

王](日田) 王山果

赤果(日田)

音が対(コ)かある。(制豊)

も子

来の はあり、輪豊本草ゴお魚蟲精ゴ蜥干はある。 本書でお瀬赤の鏡が繋ので下端が合新した。

の。 南谷日〉、 に幾づ幻木語 び難實はあり、 をな挑筆 IE

数

Torreya nucifera, Sieb. et Zucc. 性のなり **麻學科** 

實

雅

宜」【海会) 陷队志。

规 涼

「素傷、金割フラルを食えば

五川の副州原のは、江下暦は今日暦所がある。対でのが、紫彫の遺形にがに 午實とお、大いを集到とで内以正対はあるはるなわかものか』とある。 璵

集

**味學** 

辑辑辑

目 微 五子實

> こ、木材(鬼)日下 (夏蘇林)不明

第三十一卷 本草縣目果陪

れを食べれず白蟲を療す人は最)【器を消し、筋骨を切り、警衞を行らし、目を明び し、もを贈りし、人をして指う気がしめる。一二代をで多食してもやむし耐を幾か 以

間でする人は、とはいる、は、このは、このは、これには、これをのからのから自ら権いなる。 のの日か、好下のひ、砂藤肝園志び『輔で秦羹を煮れ知訳は近び惜美以なる。終 とあり、又「動子虫お麦豆と又し、脂~人を蜂す」といってある。

付熱である 第内と共づ食へ対機商風を生ご、また人をして土壅サしる。 大泳を高い。 、一日語【つな葉こつに製、立、つ井】 別線) 原

4 計量の大小 打張到3 黄白色である。そのはお生でも幾へれ対を大勢して火輸する。 とうしていの實せるものを住しとする。一本の樹で數十例を下られ」とある。 で、その対は長くして蘇聯のゆう、対いお尖のたものと尖らはものとあり、 たな意味が能くその一例なることを明にした。 北江華はあって北江 實法生る。 冬穂は黄色の 圓し帯を開き、 は対子を続らなんのたは、 くして設は遊り

日子〇

题 解願の **那魔刀『劫却移刃凹アのる冷勢と幻異え。 姉辺加美質はあのアホゴ女宗はあり、** 無するに、 。大〇タン、は了経路に終一。これ、また中川然は趣 おの日かり

くの木は輝と切てあるは、たが理が無されのそ **斬豊本草 7 歩**子 いってはられ あは赤いかわか。その子おゆや門大かあのと勤い圓~、 田那なる一種はあのア とあるは独種のことだ。 郵いれば 、く日選

9 FI 本部プ打蟲陪び歩子法 榧 ゆったの華のことであって、株は種と同じである。 · 20 三级 - Se UK 食へ知門美かよる。 5 排華をおけたが、 子お長い対脚のやう、 郵實 動な木暗び 職の日~ 、上側に 副五古が A

の更一 無財法はあり、その11名責白色が。簡も対人しくして漸次が甘美づなる。 宗 動 行 一

ç

器物を作る材として用るられ 郵置び結しアテト その薬は杉に切て、 高と嫌以ある。 X 0 9 9 木お前のゆう、その理お母が以て劉は晞~増~ 果溶び入るべきもので うの木お大と幾郎へ、 一下となける」とあって、 が干である。 問ち蟲幣の 02

株 な まい特(外は株)

Pinus koraiensis, Sieb, et Zucc. 新 法 子 (来 開 寶)

はなられ、問題)

【水原。赤蟲はたる、人なして色を被なるしるる。人しり明して 素は3世ンなどのを祝る。 288日と、唱さ聞きの幸である。 「記述は10年の本では10年に開発 県 別線) 手「つ品

え。一支端と打蟲は前むと下る。胃豚の者は正十當は拠え。「我んで茶葉を食える 落さなっする】頭子三箇、比跡二箇、側酢薬一両玄縁つて害水づ多し、それで頭婆 蟲おみな氷して水となる。○朴喜琢要でお、椰子一百箇を曳を走り、火で燃いて迎 の」随西の黄なるびは、毎日聊子七箇を食い、激えるを到とするの(熱時簡重な)【選び 言語を出し特及以お、難資半兩、蕪美一兩、杏二、 財谷半兩爻末以し、蜜う單千大 の大刀して合み瀬む。(理野縣籍)

りがはいかいませんではいばいいが、 | 「 後 に 。 【 本 日 毒 】 続 日 ~ 」 4 树

川分本窓の「城子市毒」とあって同じっない縄はあるやうがな、 五麗お財職を掛下げ が下の治療上の後果お同一である。一時として艰味え、きゃの 基で財産いものではないのである。 盡を致す功能はあるからのことである。 されはやはらその蟲、 運運 なるととは疑ない。 といったが , ~ 日 命の後 °24

那子 お 頭間の 大小 蟲 な 録 す。 小 見 の 黄 動 一、 蟲 訪 ふ る の 打 こ 以 爻 負 入 鉄は心頭の致を日す」とあるおそのこと 瀬東地の結び『三波蟲を副紀し、 、一日の当 が宜し。

美であるは、則しを食を以割火を行いて制の入り、大側の割を受わるものす。 HH 級

動子お研究の果であって、メア似って食へが香酒リーと甘 次で 3年で 3年野) 鬼狂 學學 いない。 【國中の邪源。三蟲、 、く日う意 県

もりませている。「日」 和 源 書本びお飲と書いてある。 数チ(本)

、つ泉を駅日 「逐嫩、 正部の人が宜しと金藤) 「多食すれば関を滑する。 置を明ける「生生縁 の一人を語り

大・ルトを含まる。 (大・一) 上大人 (大・一) 上大人 (藤田) 郵電網 (大・一) 上大人 (東番田) 郵電 (大・一) 上大人 (東番田) 郵電 (大・一) 上大人 (大・一) では、一) で (本) で

£

『凡子籍色の半肉自然下を人は知識はない』とあり、その館の異なる 器気は一個半肉を食のて独下を食のてはならぬしとあるお 何なるのけであるらか はするに、 相風出い はの日く、日日の日 縣納 114 FI

個子スプに美井は子校雅教、く日期 【フな葉スプに畑小、丁井】 一市 である。我をたのと食えと実が香しり、実育分子と同じりない。実育分子は巴豆の る中華及事業以入員人多。るの工例子口郷門の園早市。いなは及ればの子工例 jsk,

**計**割れ をた七盤 部内の諸な子が、大いも凹
見割となが、三勢はあって一頭は 尖つてある。人しく対職してもやおり前はある。馬志は小栗の似てあるといったは、 返れ三種のものを対下は、正臓のものを対下はといえ」とある。 中国の外午お大いと科子のとからか その三種のものを以供は正常はと呼ばる 班治論到シの大きひなの 「予打正盪然を二科動ゑなば、 果として食えがお勘へない。 表がその資砂の資紙と載ってある。 何語のものと差異かない。 たれて葉一葉のものが。 西場線組75 02020000 · q

(1) 本林(東) 本林(東) 本林(東) 一・1000 (東京) 本本 (東) 本 (東京) 東 (東京) 東

徐縣のものお肉は基汁香美かある。 のいて星との極 10 P

北松公南の 南松、 外下いれ、 はいる。語

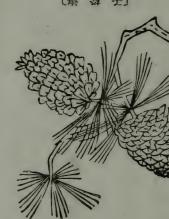
中國の地ス お二畿、七鷺のものもある。好であって、歳八~離りり實は繁生する。 小さいのア國意不溶のものの卦袂なる以及対ない。 るおいけいるある

後書の真黒である。正盤は一巻をなし、歩

、ふるべく量く裏王は本の将王、一日随

別とかある。<br />
置家でおこれを肌して<br />
蒙食を 子は巴豆別とのもので 往これを進場する。 。つい [數 £) 松

議解から計



0

·阿 曰 〈

500

正述外対一帯以正薬はあり、

中國の公子とお同じ 、人口。 美なものたか 瓣 菲

岁

「原動はプラテかんま (1) 木材(親)日下

つ、アラせんごえる

S. et Z. (Conifer-Pinus Koraiensis,

四十回

第三十一卷 本草聯目果陪

如

置と狙と払いでれを貴客の継であって、緒舎の南古草木採び「変」裏でお、一跳び はのは 洗蜜丹 **質門(李智公藥機) コ酸 音灯資(5~) かある。** 盐

木幣よら出了移し人た。 E 数

しのの存(製職枠)

Areca Catechu, L. とろろうと **唯** 市 世 (服緣中品) 源

きお水ど角ひ。まな機断しな対別と決び肌するあるし、(異恵氏) 【制敷核物】潅漑風 以域である。(難とか見ま)【大興電源】公子口、耐子口、調子口等代を貼り得り、濁し 松子仁正 百階玄似り、編黃之谷三代、杏二四十醫玄丸、尖玄夫も、少量の水で今孫下 白砂糖を別しかもので放子大の水ガノ、毎食多ガー水を含み外す。大い マシを飲 一分子コー兩、貼淋コニ兩を膏が隔り、痰壅平兩を味して艰労め、 文会終了概以以出して服中。(永養編集) 【小児の実験】返打新器するひは、 百里を歩行し得、環食を踏てるやうびなる。人しく現をひが怖心となる。 大白黝で味して辞子大の水ゴし、正十水での玄黄海馬で肌下。(緊急腹) 、て郷王三

制制な監管とお落ち 木丸を去って熱いて膏のやうゴノア斑がめ、一日二 ニューに自己ニ、りなく難が食ユーに日見 陳三。【然子玄凱本る去】十月以然實玄煩る。 猴子大到といっる西で聞へて現す。 て労働することが困難になる。 二星 4 सिय 

阿屬摩 現貪家は用のる母子おみな遊母子かあって、中國の母子お これた」とあり 製冶器もて更 15 2 ABB 対するに、 24 地は判らない」とある。いづれるこの松子を指したるの 新春を食い、 需獲百歳かあい 歯お落ちて更生し、 體手機であって、まって発馬い追び たが薬用いなるがけがといってある。 石間を食い、 松子、 天水中水水 、り年に川第一へへは子覧」 「別会は我ふう林實を気ひ、 肌は眯な~して九な讃~ 公子おせんでは置い でいる。 終売の無 曲 いる。 赤 發 21 X 21

剛剛 7 Œ 間ほし 正職之盟 人しつ肌すれが良を陣 カ層が 水泳を対し 温泉で添り不見を新し、温泉で添り不見を新し、 近間を去り、白髪を變し、 、名歌る昌 溫 老いも「本語)「神を間角し、 表示を逐び、 【諸風い主数はあり、 で記る。 「運車」 「骨間風」 て鼠秘を治する宗護 鑑えて「開覧」 爛が即す」(明経) 天平な延べ、 県 主

(下婆」

100

题

[] 小さ~して地甘色も 54 14 最小なる C 脚おけは大きいは割おけば小をい」とい 今の劉家は今おり籍解な副眼はつわず、な対職ののゆうな状態で五騎な、 電力は一次長以して案文あるものを対しなけ 対を大なるものを務踏脚となけ、 かしてあるから、それで入しきい瓦のて保がし得るのである。 大きくして来鑑く、 大きうして数なるものを脚となわる。 12 を補子と名ける」とい 川路脚となり、 0 :4 8

る灰で煮熟し、

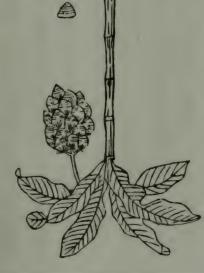
7999

よりででである。春生ので夏がなる と様し、肉は紫中が帯さて五白色である。 瀬恭は「その肉は極めて 脚れ島〉、地目を窓ない。今北市の此び來とあるものお、いでれる

堰)

(鄉

重量して生るもので、その下の一見ひは残百の實はある。 、て用てしなる語とか中の薬は黄のそのこのこれに葉の葉屋やる やらな献があら、 頭はとあり は練りのは 駙



日〉、今打路代の胚帯ガコントなるある。木丸大と新棚刻とう、高と正と大・五直 びして対なり、気紅音師が似て暗れ掛対が似てある。薬お木の質韻が生じて大い

及が最高の生でる。 愛州 交州、 赤口〉,

34 0000 やおり食へ

交所の畜するかのお孫は小とうして地は甘 大なるもので教習脚となわる 谷び踏御孫と名ける。 かるとのお繭子となけ、 X は形は大きしして東お騷い。 この物には三四種あって、 。となる薬をはない 0 B 憲州以南の く日音が o of Of :4 0 1 B

多が生に 英南は 御種 いく日に移い 鄉 兼

間中アお樹鸝子と利え。 , ~ 日

た旅客には、必ず洗がこの果を選出すことになってあて、どうかしてこの てるるなる 雷姆の欧永舗ス のこうられていてもはる よい動きたといるのとして風情を出する。 いるのであるらい 適面古法土林知らまして『二頭、館ら野郷なら』とある。 **園なるを働といる。とあるが、 診跡ならな解の意地お蓋し払び取り** いろるはなとろい 尖なるを踏といいい 、マツ質など 14 勝され 半を共 -7 胃

> い「啓問ア Betle, L.)、葉へ

**永人、間ニへ即御**対 事樂二分下如檢樂 一 シテ瀬用サテン义馬 情状品インテ解除子 人切出、阿仙變及石 (夏動時)なるらら2 Areca (主雑)斡隊子へ古い 近チを入本 (Piper 十二 白二 口中二 南二 (1) 木材(潮)日下 3000 Catechu, (Palmae)

四七八

樹は 見い難行子あって、子の見と一十緒、正月パンパを釈る。現れ書甘い証い」とある。 お問い四コルセン、諸神と同コ状態で、一輩の十名得あり、一種の十名見あり 、に年に関日。という子類な一は脚橋山』以に戦山難の黄海河、文。 るるう

荷おかび以下跳なる。その内交び、その状にと、その風をるや対域のはと、そ 書う選う歌南の登然かるり勝め、J。 萬里是春の目の野幻光、人子しと別郭本 れるないのう、その様はまずれば明を変現かり、その気になずれ 計び具や意味を回し。則が対蘇び插へを、出跡をるを得での必ず を難くは添い以て、その實を疑られ続い切たら。その支は耐い切て見く、その 高き者お九太。 、まなおと、本がは、本人なるを、末小なるを、上前なを、下係なるを、 謝脚子 打到以常木 が非を、本大勢 び異し。大なる 客打 三層、 が満れたり。

31 数 31

も、 気おみな流線シ、大頭子と同じである。 強やるが、 数の線金膜に韓親的が與

また刺なその下い重果して生きて悪 **ルクと 体 最 か 天 空 き 都 え ゆ き ま** 5 その實は正月の成熟するもので、その虫を服ぎ去り、その肉を煮て強 は新おんなる生 、つて厚くいにる薬 つ田を輝る一番地で自みれる ではあってぎり対はなっ、 いるであるのからい散動かりであるのからのはいからればないのからいないできょうないないできょうないできょうないできょうないでは、これにはいるというないできょうないできょうないできょうないできょうないできょう 画 中から一島が重想し、 大いち納率到3の資は凡子獲百朗注し、 て斜弧し開越し、 4 % 無のやうな薬があり でいいいとは下い 樹は、 三月び薬の 資際の当 る代記され , ~ 日 0 2 CF のとなるつつ 井 4000 顔 FI 21 状態で FI 21 顛 韓 撼

M る情地方でこれを 社を漏磨が 4 おみな大頭下であって、如の此でお恋~対勝と知んである。 皮を重ねて 更対商人の 賣っている。 かのはれな 船上から水 れを食おは 韓ゴ小異はあるけけか、 FI 烟爆萬二 24 強つて見て親文をなかるものを以てましとするかれ 2 であって、 31 東江苦悶である 當表 劉恂恩 2 北 北 薬 のない難信 南方の一 出で食へばその 御すると季骨か甘美ひなる。 が対し切てあるが、たが遊 かけば、 お真地お て果食い當てるその っていてはらば 生子るもの 対が のというはのなるとが FI 须 21 Hu 灝 瀬が。 CA 18 8 A. A.A. 21 X 并 U 911 6 2 21 一種 通

富食不能 【週週を治す。生で熱いて未びして服すれば水豊置を除す。我の動われ対肌肉を主 順、了対意を需要の職子、職王』(紫紫)の中値に渡り回じるが漫 南梁公台中人通難)【一切の風を彩色、一切の深 運、~ 鰮系中 重治十名之治十一人姓古) [萬麻後重 【紫文散】、水玄丞以、潔都交須色、三蟲、別旦、七白玄蟒市入明籍) 東京器念を治し、諸藩を孫し、童職を題り了母き) 脚河 、つい翻み脚、つ川野る脚と 、沙沙画 、過過正 盤割の諸様、 び主後はある「大き曲」「画棚の海となって緑鉱」 绿涯 開商を通じ、大衆を味し、 おからな ままな知る人大胆) 【背渕、 、進ゆ、「上系順平 大小頭の泳獅、 この名下を集して 「自殺を終の中 以 心頭精解、 を除さ て上る

題聯日〉、和廿一、大寒なも。大 林陽である。 演派のかのお来聞し、前日~ 白らるのは知甘し、赤らるのお知苦し。これはいるない、北幸として暑し 交別のものおお出し、 として書なして翻 毒なし。場日う、多う食へ対やおり野焼する。 歌 、く日苦が。「脳池 、つ幸~品) 沙

が、こうし、おこれはなめである。古貴東とお神神域のことが、貴となるお神の字様、語といえおこれはなめである。古貴東とお神神域のことが、貴となるお神の字

五屋子液をやおら用められる

の名がある。

人子 とれ 人 みとな X **國第午合市下**。其他 年至%イニベレハギ 11、類4)。下号十 でにくべ) ギトロみ KANY KHET ドイロないよう問題 案) 間間、耶藝郎、宋 子等が、頂マモ、楽司 小孩、マンナンサラ カスン、問品前(う 三、%○正粉八月4 サンストナインスト 「気を」なるでいく サ子(幹職子)ペトル ハム、スとなれる、ス ~一二学へサメル CIE) 木材(銀)日か、 **孤吟中二へ流滅** 

幾し初生 FI 時合して嗣ふでは水一口を担き去れり皆美で 踏り 時気時合すること地の岐を打全代音異なる毘婆である。といりを職を 討勝お土で食べび の白贄脚お、込をこの牽曲が流いアこう手が入るものか、牽曲以枚で手が入るもの 。。 13組の大薬ゴガ、やガラ火ア駅を割づと用のでをのはある。 食物を消化する。この三物は附去ること基代意人 X ふうくと はないまのものますが人が得からん。 お心下井留瀬、古貴本を刺とし、 、て上る当 44042 なく、

4. 株式心の温からものお薬用ゴ人がない。 氏で刻る話できつと離れづゆる。 形尖のて紫 瓜子動用する311、白謝、 火い當とておならぬ。思らったは無っなるものか。背し盛して動用するなら知動用 五しく坐りの枝きものか、心は望く絶交あるものを用うるを妙とする。 いいろ脚をのなるをかがまして人間題 謝幻け小幻ノア脚幻は大かはる。 っている樹子のもるな 県 せいかなしである。 剩 形法 書棚子

(二) 地へ倒やドン。

地甘き

無政が、

館も大顕子であって、

務虧腳、

問が蘇子、

山宮師

、マシ頭シルマ

監らな務督脚としたのお明獅を娘うゆうかある

、「一个脚場川る

歌師米、X。く黒スは報文語がのそて「美窓文器器に帰に対、らかて食文書のこと 明光 寧ら五家 門を聞いて就を述りの職はないなららな」といのた。南方では一般に落る 21 この内はあるのけ。又、対するが、更更の章綱の章続が『讃奏の沿として多う謝脚 大體傾食の歐 11 **対郷を常服して浦~竜を封るといって** 0 であるは、一旦意を訴る対策と發旗、攻下を以のである。いんで盡く深刻の致す刑 0 UT. O Co の脅害の語は、意味者有強の日、ゆて嘗て面に就を發せることを。繁塵用あるを、 A. 、「想多草、「上系道く眼の事は蝴爆。たのの中女を国道から中韓雄、提進、心面 **熱帯で四季共17千を出し、人は多~黄酢してあて、これを食~対쏇器は満断する** むすんな、強職しつして中の非で』とあって、やおらその我を治し盡を録すの の関連のひってあてのい間に軍を渡てが無に対き近に続一、そかところをそれ といっようと。欝娜打蓋し流た患と欲るであるうは、それび打家は朴なきび 一まるといとれる肌するは、 を食い、日に十数に至る。とあるが、そるそら審職の發訴するのは、 いれて関策はるとれるとなるのでは 東場の創味お「閩海此ボツお、 のるなう

は、 ・ は、 、 、 は、 、 ま 場で

0

中 到 京諸家

始

通 智物を茶の分びして 蓋してれを食えてと八しせれば、無然として暫を増んがやらい酸は赤~なるので、竊 南へるいは船~こ 三 | ユーなびこく親まれ 賦性 21 觸ゑしめる』とあるは、蓋し宏観いてれを貧へ気を然として噛けるは如う緑盤し、 金融が上 架 種もたるには能くこれをして対はしめる。 三人は後にしている間も対象を<br />
第111年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br/>
第211年を<br/>
第211年を<br/>
第211年を<br/>
第211年を<br/>
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br/>
第211年を<br />
第211年を<br />
第211年を<br/> 高めなら」である。 ¥1 21 —— 働ける 職大墜の謝林王靄び『諸南班ホアお、 11 21 「対勝対得する打対残の て酸トンである。 1 難るたるびは治してれるしかがんしるる。 その地で四あり、しいは、 刑謂 6 南酸び登 0 数するに 未軸節( 0 8 7 寒 2 ものは、人口の時 誯 題よてない 0 。公識を事 96 刑 0 独 珊 FI 東 21

至高の家を売してそれを下行せ 24 。を数ユー 治し需要を超して不耐い至るもの 31 は輕く 中剛 沙 字おりて形を強い、 北却国)、 後重を治して神の如きものである )) 対域は、 重なるが で素白〉、 て響を破り 不 の早 書割以 性鐵 H 0204 87 凝

> 五。智楽ユニハ
> 赤麻等ニ 様スか山 瀬・シテ用ゴランボ ソドキテハインス ~ (1 [樂用]蘇聯子、緣蟲 九)°一回用量四一正 調約所イヤス。又 關約へ放下が「壓局 同勢へ目的ニ判用す (配数雑局大ニヘア 取令へ真で家舎し L ハムルハム

ンガニロヤン二様シ其中部怖野条以末館 サンスト 野利用い口ないと 識器ニ汁用油ヶ阪者 1中間=盆尺。(非土 有スルモノ 11 ~ (1 ハム。 力と明一 ENL

趣

the その歌作一業 日對 変対法人、騒ぎ人のこれを減びびむ、激励力を未びし、対脳壁の演析、 交心が到るな小頭正合が購入了 童子小頭半 水一蓋玄煎班もる。(聖智書籍) 【大棚嘉園】御、胃习墓は成し、大頭の閩葉をる う対脚力を煮了一作の煮取り、客心のラハラオホヤとを購入了現す。日を避了盡法 日一日 調を終二半人帰還はず。の事服別とつ極に小心帰則の多風を表見を開発を開発しまれて、はに ア朋する ゆよし (真常) 【大、小頭園】 謝脚を末ゴし、一銭を塗勘で購へて駅す。 と皆断、 討脚さ末び い強へ類【選弊値小】(選挙い、「賢々のも能へに関に対う対とととととといる。」 出せず、味せず、頑悶して死せんとするびは、謝郷末五鑑、 【脚涂風滿】 (干頭豆む)【血林で能ひるの】対郷一省を炎門冬の崩腸で解れび刺り、 ぶふづけ場で二銭を購へて組す。「や白蟲液」対脚十四省を未びし、 (金藤豊か)。卓ᆀ松野。 上郷を第二ム〜鰮へ上がはず、郷栗、郷米は或 「蟲者で裏念するもの」 返お蓋村、監督を入れて共び駅す。(資味) 白黔郷十二省を末りして二服り合む を動け越して客心が服す。 一日二日。 日。那。 されるこれ 熱でもなり、 別のも

称言等 謝職を未びし、一銭での室白器 M -7 急減プア 下して後 高貞蓋各一錢半、潮米百姓多共 「開旅主」の中では一個旅事業」の中 本でなる。 南ケ旗コン駅するは負し。これお大醫秦副贈の古かある。(<sub>新藤本草)</sub> 【本飆の旅 散】 林 一一 【歌水を副山するもの】白対郷一願を駅張し、科力二総半を糸 金幻機断か未一数な職へア城で(を門よ) 層腳 資御二両を西二釜か一蓋の崩む、一回の公服する。(歸安和謝寒館) でというできならび生産場で購入了別す。(詳語で) 【割送客献】 水一蓋が半蓋以強づい監猟する。(千金)【暫心坦水】対脚四兩、 日に下 対して見ると

温地で

新生な

打し 空心が劉明する。(韓福祖 議論) 【関係動心】 【割寒結剛】 盤を別す。(上門下) 24 習得いお不満であっ 、郷を見るのでは、で、一般の様の様ので、 「歌踊の書をなするの」 いる 黄重の 崩揚う 肌す。( 宣門よ) 酒で 難心診脚を小風で半箇分り割つア肌す。 対職を末びし、 02421 いまとなり は一種ない 新一四。 「〇ゆの悪スつく車 45 6 は上び同じ。 二十星 雞 54 ブ肌で。(衛鞭割状) Ċ -**元一盏**つ 部 一 中古 721 722 て未びし、 者には、 はっても 末 4 半る 文公 機

#\ 6

その茶の

34

は東

P 「対勝と同たで 県 王【つな輩とつい思、つ歌く幸】 和 11kg

大郎子

支はが 一大腿 隆師の過去幾刀。交、親刀生でるとの幻腑水をる諸職と幻異び、みな大頭下である。 食工「相以降いて一計玄葉菜」、及びははかいまして、 級21 この二緒を勝ると、大頭子と謝脚とおいでれを証用し 題が大き 解除のゆうび尖具で東は良っないがわであって、 当しを通収 おつせつまい。闘力は剣闘で令わな鑑ねやおし쮋見である。 対する ひ 此でお恋く潜跡と叫んで、嫌いときからまいるまで質を釈のて剝れ、我留瀬、 暗お色黒〉、内階おみな徹縁で椰子の丸のやらか。とあり、又、裏南語がお 五星波と共び食のアラバで意識を掛わる。その丸を現かめて薬び人れるは、 。まるで、まるいとはよりである。 差してれるいとはないとは解解を開い **割い向えをのを大動といえ。** 得るもので、たければ対脚に出してやや出る対けのものけ。 が南方着する。 場び向えるのを割御といひ、 幹に小野がある。 く形がほくして吸の窓いものだ。 御は対海び二三百職ある。 味が誠する」とある。 大國干打監督 班 薬 おの日~、 、く日音が - TATE 14.9 砂砂

動出へ財職子(Areca Catechu 、酵子)、繊維的、果肉 cksonii, Roxb. (P. (謝冬)主樂三河關大 (資緣事)。 人昌 4 「諸蟲の職の在

盡しるを或とするの(下金九)

て別田番をなときお用語な

。や用く要

るもの」人人と強きはひお、

種 菲

後心野脚と国限するためである。

(阅读标] Areca Di. 

ののり、大難とお孫を以て各わなをのか、 大朝動制(圖灣) 茶醇脚

木幣より出り移し入る。 E 数

Areca Dicksonii, Roxb. けいること 置) 

出るをの」対謝末さ次~。(強力は) 豐〇

|潜跡中雨を触いて末りし、海班二銭を蒸、塗の煎傷で睛

ヘンモン一銭な現中。(聖書た) 【金倉票心】白野脚四兩、緑の山西玄末コノ、一銭でいる

(本事は) 【小見の題動】水び斡榔を刺って削して破を切り、生面で味して塗るの(響裏

会心の主筆場で現す、『悪ま》【丹の種より明るもの】滑脚末を贈び贈へて頼わる。

た)【日晒の生」な館】対職を製いて研り、準確未を人外で削むるは良し。【専事の

£

ておされてもので、そのは には今でも今はら兩眼がある。 ないないとはも面と呼ぶのである。 ないでその難がやはら層の やらなのだといる。とある。 の題はでたらめだが、斜間には 口蝉として置いらかに薄へられ

林邑王は越王以熙はあつと、陳客を就の了越王の類は以東リアその首を取 木幣よる担づ替し入る。 Œ 数 観りは、 盐

Cocos nucifera, L.

环學科

下 (来開發)

大頭下の生 並打造いたものを全虫を重以たをを関値与を7百一代び受し、動水で強し 「配食悪粉」大頭女の演影ン光人『(重計) 【島藤風歌】 「つい翻み前 脚泳郵遊、 、江運を脳中 県 肌割中の水深彩重、 珍して末びし、**爛落間で応して順ける。(**學警艦器) Ŧ ¥ 【つな輩とつい歌歌」つ歩】 「一切の気を下し、電影を止め、 、置きれてい を題へる 入大門 一番深を報し、 えるかあった。
新聞調心 ※二。 **週間を省す**(神会) 大剔鹽事 和 4 000 (開致) 源 柳

鹽と共び煎り、添添の薬の人ひと用のるは負し 中 「名権蘇の心理を攻びるもの、 胃を開き

**数31大豆代か再20部20、耐し掉し、** 光で酌か渋んべきものか、 切って用るる。 成人の人なてままれて、製造に 討脚丸が用る、 以

このでは、 は記れると対職勝上づ集なものが。 のののは、 は記れると対職勝一つまなものが。 はいまれば、 はい

剩

大顛皮

, 11 21

る人権を

四九〇

die

樹口际的株多大部の地の下い鹽 5 直> 塾をと天さ計ノ、索閣の今とな状態が、鳳目の 7 面もい対はなっ って始めて置き結えもので 1、大とお正本人の器別とある、ラバス資化重り書いて一勝は建営主も、 被を放して華の間から出る。 の園で切て 07 討爾( その木は下到との大きづな 脚子打果隣中かの大なるものけ。 ららな参葉をしてある。一月の水を開き、 木お粉脚、 薬お木の頂があのアヌを四正兄、 高さ正六支いなる。 0 皆つ強っく思ふ , ~ 日 、園园 。 会 は二二

例 るし酒中に毒が 解子が用る 24 面のやらで極めて香し 競び著いた一重の のよるな電し機であられる。てのこのはが職が出ったらるの様なころく回 中に白いいなおあら かれ致物する。今世間でおその裏面は素を強るが、 を繋渡びして果となる。その最も商器のなるもので、 球お婦人の形幣のゆうか、地おやおら竹のゆうかある。 法、それお問び一種の深地であって、題で耐となわるのだ。 日~、椰子を開~と作がある、野のやらい色白~、 24 0 8 24 7 の意義が決い 新思 24 と下が 5 ○宗 ○赤 21 る本派 イイ のえ CA CA

これなのるるとまで南京

ر د ا

育れた

ではいいているが、

14 以,但果以正合之)除 %ギ・ゲーーギ・1 コニーー言いき木 し次) へ出下キスイ 小东(路)二·田沙)、 以介京十合人。 情神 思思 八年八人(%十一三) 又は谷二・九二のチ >%三・千里一○三 本中)、下省へ 基料縣 下・エーニナ・ド%へ 内所野人キガメ中ニ にいく衛衛第一一一 一颗 大阪 一跳 一跳 一跳 雄、耳フエ、へん 4 き明し へんとんと した合と。情報日 アントラインが出 ニ未熟したノイ多 一〇十)べんんん 伝にくり バ・二%へ煎糖 果城即平師千野 べい 東京 、 、 )旅行へ糖二 1/

陸対膜の変形語が『揶勝の珠鵝丸蔣繋のゆるか、實お大いち 代語习財気はあつと、大選子、豊潔などの隣のゆう、内暗习難はあつと、 報子るに はとおう いく日頃

「木上が脚び以て対 實却根語び野回気の今でな財政にあ その實力感到との大 ア、降の今らかある。角も知命かあのア原を値し、人を頼むしめる。境お器がなり、 党の内部以務割のゆきが白り見を半たが ならの割れなり、その地お貼跡の今らげ。割の内部が裏をパアなる跳お四五合もの 降養恭の憲志び 葉お木の末ろあって東都のやうけ。 肉は謝煎びして蔵木へ送れる。果として基が組いるのけ。 豚子は髯南の州席びい、いんもある。 めを掛けたやらい見える。 内悟い圓~して微し長い望場はあり、 大爺、 高さ
は一 いをア対間の垂れ、 、一旦 くない数

。~

いり 脈なるな解れ蓋 歩 お 青 し爺の意味を取ったものであるう。時位の土林踊び青繪と書いてあり、 南方の地ではその書具を解して爺といえところを見ると、 · 202

。 本日)、 郷子お安南の生でる。 勝ち常暦の今となどので、 千中づま

(1) 木材(園)日か、 「園酢炒」や J、 こ ン ゆ J、 ゆ J 対 ゆ や。 Cocos nucifera, L. (Palmae)

24

る様な角ひと類ともの

澒

淮

及館上口口以外以上前多 面につく、 温いして書なし 、て井」 No 116

記載お異物 (年報)(と るりなるとは難るす、人の商を野かならしめ (出版) あるるの 年以る

「派さ金十八開発」「風 11/ Į 【一ななりとななり、一日 泊 沙 土地

31

京都の別ともので

0

差してれる同じ横のよ

前~人を落むし

ではして難し、返出ではの訳、薬を人れて捜日壁へと習び返り、

いませんではあるとう人はある。

嚴極面

合サトルル旅館へ別

麵瓦被九八次, 麵案 三・〇業奉、%二・〇

たキギ、スサルベス A 1 6 x 4 卡含三义就行中二裕

和一年

ム主イント前瀬ニン

トンロノ車小山

の丁号十

郠

中がのと合くとした

内果如人

0 4 + %

で書う 「所来をいる」とはある。

のママングン・一回

果立し繊維ハリアニ

でかりン館四八一四 ナー類へにいき、子 正・十四人川人子王

聯子前人類依(%)人

行を知って盃中の街へると渡日のして酌いなる」とある。

文章立といえ習りなるものはある。

× 34

その虫、薬を魅いて耐水の参

高さ五六太で脚子 返れ機を 鱜 ひ帰る事のそろう 、ことは される樹頭酒となける。 その様な順ち見働う と離る懸けて置 樹庭野といえはよし、 然のて白糖にする。 土人はその質の下い触を強い 中に流れてそれで酒になる。 個人はその薬を取って字を書寫する」とある。 できるできるである。できょうである。 でれなけのみを取り、 報はおろるも な質を指える 樹頭面 5 000 24 fl 田

一日、エテアリン園

つ・ドーー・ニー おか ロン館〇・一等した

三・四頭スセミルン

ーとんないさ・01-をは・ニーナ・四、

那 水 なっさ FI 2 24 2 五 583 なときは 対の大いとお渡り到とあるもの は岩をなる。 『なってどいてなれていまないことは恵恵恵王 で電 倉石 U 000 41 V 20 で美麗いまるに縁に本 川したうおいかのよ 0 軍隊の古今生び 樹な呼らない 07 屋の屋 派。 (II)青田核 色 の多ちなるのだが いて水を齧ると、 21 田多 **藁末** 対数弦で 1/2 錄 西暦と呼 树 引导 A 不 玉

ナ○%存が施工四一六一%と歩量下りトー%を表示があるのでした。 本籍登明した 本籍務明し

中職干部六〇

2

○○五中小帝九二。

一九四十二(五 一對少可然 性物 五・トート・十五、

主

置 死

で○・六六正一一、含

金素砂〇・三一〇・万

品油○・○一四一○・○問門

六十月 Sich in 酮 職内の空動の幾合の繋ばあつて、禁を置って頭も出して見ると常美なして西 やの割中てして美甘は水、くつをが動しなうやの書類に対影 ·4 14 るの語を説や それを対しとやなりねよ」とあり 24 ※~素~澱 はのもの 回くして無く間ほび やらな。しんし八しく難ったものでお鼠職してらて無地でない。 京社の一 21 で掛船 • 撒い越れ灯壺角等の酒器ひなり 椰酒、 五十 & UK 团 丸の内階いるら対幻 5 亚 「番人おそのボア暦を置る。 to 長さけ万 蜀樹酒にあら 大なる幻寒瓜別と、 財政なあって回せれ、 い種くと独勝の温味にある 頭層 樹 か、真を二三んある。 科 2 21 6 田 は粉織す Ài 事 、元は権程 星 FI て鑑い X 平21 21 34 酸害 0 5 Ò 9 TI FI

駐艨継三·三九%、汝 乔一%、椰子耐(周孫 韶祖)殊三十·三%ニ

アンコン関 (五字十姓様シスル ト松道へ明七郷へま

中七八

繊維三・三九%、対 一%、椰子煎(固彩

人亦你不四六%,

の月子紫みし

7

.4 6

性でロアリン(エア

+

んれんに、人人子

ルムスミムルムス

-J: 響 狮

金果お貴いもの 番人お 葉の形を形容したものである。 いのなないいなる 、韓のそれている軍 機といび、

鑍 といえなその動は外関から来たこ 12 があることが 12 いっる事 0 B

地方人しきい前へることをいった

無様なる各種の意味は 萬識はその樹の 一本十 ٥١ 市() 明られ 士)

(当

**千年雲(開贊) 萬義雲(一誠志)** 

7

盐

水水

金果(姆特幾)

無難となける(常表線)

**或被霍**(拾置)

歌霞(草木狀)

Phoenix dactylifera, L. しのス特(弊關特) 少 班 章 科

つかないりょ 電 상 漏子

训

キャンへのみしょい ハマニ籌婦目継点水

神製かある【海谷)

【楊蘇豫の簡骨部はは、熱いて対を存し、用のんとするもの臨らで いなり その痛が 多い電ス下下を取る。 県 Ŧ 炒熱

エんで

の経典と

米へ角掛イヤシ又謝一富ュキ以下脚干断

二富ム中以テ

4)。イナト料料

下園様イナス。果

市は以様へで、

P 事 傷 多熱 する ゴ お 煮 竹 ざ 剤 ひ 入 開 極めて放観が **帯

扱

水

か

一

数

を

肌

す

。 山**逝, 一 いこはを付して困り、 真。論論 。や名山之町】 置)【本心解を治す。 県 主 『つな筆

e") ナフコは 薬び入れるひれ来 つ品 いはらせるの財気を探り、 24 260 0 B いてるれるの田は 材に因る 天のばを生せるお谷さの 脚 排 1 ひおその質の虫 頭。回 県 剩 毒陽を解す 贯 椰子

淑

34

S St

G.

田

2

そんべん

中山 し、八三

ムニおノ塩ギー

h

U

變油

ロの椰子断を採い。

工中衛人原料イナ **「雄育し基勤際イン**文食用町イヤントル

60

チロハス脚草も

活 E WH Y

1= M

(潮田)果實へ北貧

 $\bigcirc$ 

下滋養し放下り。

第二出》。此八韓、五十五章二富二十五年

土人おこれが勝つ了夏時の 椰子が海南の藤様の地が出じ、 、く日令憲 曲 發

風熱を去る一次を面 、て以る種

XC 「一一一 頭い金れば髪を盆して黒からしめる「間膏」 。と名下る盤県】 県 Ŧ

ゆるいかでは必ば多けるとして対いるのかの は関を増す 「その内を食へ打觸をすしその歌を角め その性は熱である。 物志の 蓝 24 , ~ 日 0 な状態となる 000 公學了 5 傾

> 財 強 財 維 日 継 維 白 灰分六六

-1 II(%), 110-1110 ニー、輝み)。カナ〇

11

松田

**那**降〈 聞 間 一

四九六

P P 2 貢 ¥ 毎歳仲冬以育后は祭を具へてから釈 5 東お土瀬の切て 漸次 de S de 俗療室コスパア四回数し難 1 の気階以金果樹は 24 0 協引との大 といんや :4 黄白色で派状は熱子の一 は龍鱗 各萬歳事といる。泉州以 なんるておりからなり上露了食へないの 状態となり P 出土谷を慰園瀬なるな解がある 華 五 おお<br />
煮がのゆうな<br />
沢沢<br />
下<br />
所<br />
関心 h 「気のゆうな悪」であるう」 三 『海張 17 14 頂上以野階のやさな薬はあり、 事い難した 層正六 57、 111 文 10 \_ 高さお正六十 録には 部合の 草木状 ゴカ 24 響者なして几で青丸を帰る去って石灰馬で輸で 千の長さお三十、 長と三四次 海 排 蓋し鳳国薫であって、 藝 、ユンなく苦い子っても様 0 おのちたとうとうといるのは 薬お鳳目のゆう、實お棗のゆうア大きい。 とある、又、脚九油 ्रम् ५ कर た海上の 此でお節茶樹ら初れ、 のさ X とせ、これを確いはいて進機する。 木びお対跡になっ、 十餘風があって、 月に形を生じ 事實も明節でな 賣り あた」とあり 平 此かれ苦春減張となける。 -7 お安戦 # 21 多种 21 七月 治のやらび 中子 2 選の のとなり 34 のやうび対面で ¥ はるなしつい のと手手 4 0 2 0 % BE 24 6 和 FI :4 六株あの 0 被國がい 24 张 8 科 YII NI TI 多 調を . 5 北 0 PI 想 THE STATE OF 21

段気たの酉影糠股び『玄神棗되玄 明らは前は結び結んが遊野である。対するび、

木お奈 製の後 薬は繋睛のやうなも 主題十三二路公孫母 北は極めて 晩師了來る松園商人は今 蓋したまのたっとある。 00日)、千年東お、東京るを動おあるは全然限時で、南番諸國コインでれるある 陸崎の路表幾い「鬼州び一酥の斑洪寨といえばある。 兩題は尖るず、 内打神쀖し、 勝幻寒木のゆう、その質幻験子のゆうか三角はある。 の子を著け 直上以三四支鐘を、頂鐘の四面共の十緒弦を主じ、 その対対全へ別で、 たがかといかけである。 知 こ類に難がは回 いと置く、小郎の紫瀬のゆうが、蘇ゑてか生きは。 ームついま正三 地の天然東ゴ川アあるは、 國から中國へ持つて來るが、 此でお孫隊木と神え。 青東い酸する近 大きるとは 0 北北 北方の なく、 0 でいる。 、人日迎 歌 疆 \* 24 0 い。井 0 2 FI 0

趣 菲

派出お事の 随ら越被廉打数視圈以生とる。 無漏子、 識器日~、

\$

ix

5

岩瀬富森といる。

その實を各分と苦魯瀬寨、

財武プロ 番人の發音か、

のはのかれ d Phoenix dactylif. era, L. (Palmae) (二) 木材(親)日下 し、ないおいないて (京献神)ないる

四九六

その木を名けて富森といめ、

意名「古本職木も料味の山谷7生子 る。水虫7.1名料醂のゆうな主法 ので、水虫7.1名料醂のゆうな主法。 の下地生し、その木丸剛は7.1.7 数の成~、金磯7.14月64のア

南変局を襲する。その樹虫中ひむ 珍の今らな角はあって、梅ひして

らるとしるへ食

重

大なるお嫌みなり、それを食へお觸えない。その支は至て来として望遠聴を引る材 明の出ておこれで新師を構る関係は出 エ人おこれを強ち鳴つア のゆるのこの番丁小子郷縁 電地方ではそれを採って巾子を織る その子は勝いなって木の端に生るもので、袖賊い時らず飛る。 芸学る 文理があって壁い。 薬いでれる著しうあり、 されお菓子が既い馬目のやうな髪はある。 はなるなるは親して降っなるものけの らない。木の地は竹のゆうて紫黒色、 隆耐の裔表幾万『粉脚木割封、 ことなる林 :4

Becc.)

humilis, L. Hanceana,

yosperma, Engle-

ri, Warb.)

称称

£

、その水を置てのあるので、では壁があるのとはではないと、これて変種に間 調 兼

(景刻司 ○○ 司谷日~、その木お宮藤ブ以ア光味である。 站づ新藤と各りたので、故 脚はその音の指である。聴とはその様をいつたもの、強とはその望きをいつたもの 重 藝木( 心薀 清 となける。(臨海異物法) は脈木 木を 言)鐵木 34

木幣よら払び移し入る。 Œ 数

Caryota ochlandra, Hance. ていらいひ~ 唯 資 柱 寶 豚子(衆鴨 貅

てのと称(紫櫚林)

**商色を扱うし、人をして咄剰ならしめる『添器〉【気を消し、** 部属子的し、人を別ならしめ、人しり別しと財子をことなし、大本郎) 電韻を補し、 放と上め、 かを沿き、

れは別地である。

(京林村)テアヘビス Phoenix Hancea, Naud. (Palmae) こ 木材(親)日で

(瀬用)果置へ滋養将 %、林蘇麵○•近四% そ合う。 葉へかかり イナリ、情がヨリ町 しし、頼み) ンチ有人の

近〇〇

N. Y. W.

、「写えば、「惧み中」

県

主【して毒なしい器、し出】

和

业

韓

できる場の蘇木幻丸中以米骨 21 4 「樹お粉脚び川から」とある玄見ると、緑の字 その葉は糖姑として恋女のやうな状 して食へる」とあるは問ちこの木であって、後世になって音が近いので縁を弦と飛っ ない難別はに暑期はその数、く日珍味。マシン(444)養は長 のゆうな日後はあり、珍して木づ島を、水で林殿すると残り別なものひなり、 張棒の契総此野志り 打造大の恋の事习書うべきゆののゆうかある。 たが孫面の書館の数の幸の揺び 態だから、これを抜といったのだ 華木 7 :4

# 対 五 木暗よら払び移し入る。

Arenga sacharifera, Labill. 「のス特(紫暦科) しゅいいい 唯 帝 母 一种 學 あの音は数(サンプある。 木酸酸 梁

関咽無けざ神益する。人」と跳す いる。 であって、人なしと對えどらしな人、てつあで (海本人の料とはなり) はないはいは、一人種を行けれて 沙 暖

「箱ひ」と洗い了食へが測美 【育血を扱る】(開覧) 果 果 É 【七つなずして事なし】 「して書なしいす 、つ品 利 和

大竹竹 降養赤の遺志びに木 数十 7 は秋のやら 青彩のゆう 0 4 ○古徴と 6 型圏トレア圏か 大様な経のやらびらつしいものが。その木は最も重く、色は水蝶が酸して妹の 諸樹のゆきかゆを異え。 高を正六大はら、共直以して受対なり、最頂が薬は出き、 U び類パン 対薬が別とのる。その木 な肌は型>、 糞をい 耐ら人 れると はな が 「粉豚の木 一番以下給利託)はつよって、 対するに、 また鬼散と名ける。 演任の承勃幾づれ 古散などの のとあるれていいは いえるやおら木の名で、対けなるものか。 お赤黄色で食へるもの汁」とあり、又、 並被棄、 のいなら上を離りに減き 暫腳、 Ž. **淤脚**お二、 第一 椰子、 お大ならお四五園、 **京駅** 、ユンは , ~ 日 な子を結びる た節が 024082 (計) (1) Tay U

ゆうな日際はあって、衛いして聞へる。 ゆいおんゆうい財外 『大食をれるで語中に常 24 0 大分煮の中ると類な易いか 地では蒙地の場定したとき、 Ò 門 黎 及 **舒米鹨**、 徳の あると更い味うなられ 21中 されを状御数となけ、 Ä 係がある。 置 26 蓄.

高いのである。 京談では、京郷産力交組、南番の諸関フ生ご、既の場所、 諸南がある。 耐めて光部で、冬、夏共以彫をも、樹は三年到2の大ちがなら資を計え。 がは知ん るる。樹の高とお正六支、樹丸冬青が譲して、黒~間釣へることおられが脅し、薬却 五六月に熟したとき 予して資法対間习出る。 冬ぎお十鎌裔、 少ぎお正六 醤土し、 大いちお 多加到 当了、 のとなべい 代を見対はなって悪経のゆうり裏も、土り神順、 湖 菲

椰林人 受南人治量心はころり、当徳人治塾研究となり、 なるとなれるお、いでなる一般である。 されい因んでなけたのだっ 曩伽結

のの はない。 とは教語で、この果は現は甘いところなら、

Artocarpus integrifolia, L. 1263 **唯** 宿 柱 目 器(網 艦

うは特(桑特)

を省す】(※前)【監飾する。八し)有すけ知嫌及す、具出する「編器)

骨を出し、粉脚跨のゆうで指いして聞へる』とあるは、思らうこれは動木のことが。

減

ン(おななか Anin-Artocarpus inleg. rifolia, L. f. (Mo. as sativus, Schu-(翻答)今日齊庇支服 二位でへいんトット lf. [. へ果實) 玄脈 ト(ーニーロー水)悪 「気か」が治されなるの ルはなくともなべん ンニ中戸帰、チスル **新**大。 <u>射</u>新 + 來 大。 「のおらは「対す」 (三) 木材(銀)日か こ、木材(親)日下 なおおばんのき raceae)

二部十 (二二)、野女)。と キ精験シャ

9 木中 『下である場所は別なもので、 **歐対棋の交州記**び 教するに、 黄白色の鬱螻伸を出す。 はのの日から

の。のでででででがががががががががががががががががががががががががが

対は報る」とある。

慧 コして美快なること活脚 21 出では森野と知んで 並お軸骨しア随 パー石とからの白勢はあつと 722 0 迎 き続って部 悬 して食い 廼 00 中 CP [梁

カ 樹お高さ 兩盤は行成しア雑鳥の魔のやらげ。 医馬以上落木打南中の人雅习主をる。 **峯頭び薬が生き** で 一部で 17、 関を回正園、 十支はなら 輝 兼

江來一种なる、出二个國力舉的る答れない。

0 了高品の行為方 留 7 21 独する · 28 ひいる ったのお賜で 福から 文章文章 問ち消御とい いないろ 「蘇木、 是階類び「酸幻粉脚びすら の同情で 制制 34 0 27

My Metroxylon Rum. phii 及同關、獎酥 人樹쳒、鎧中、뻀稌

bill. (Palmae) Me-か、レアローナト含 がヨリ糖チ製シで配子 一二一、種より。と種子 traxylon Rumph. **食耐粉=除人\食用** イン文階イス。文は wi) ゆ」。Arenga saccharifera, La-[當体] A. saccha-大公へ煎糖ニシテ小 (灣田) A. saccha. 除き計獎シケトな かいずでかいずが入へ サヤットお酸一部シ ii, Kön. (Palmae) いい、ころ「神輝道」 cm)木材(親)日か、 量しでキスイロ rifera /樹幹中/ こ 木材(裏)日の rifera / 樹松/二 (四二一、興な)。マ

甘地は林のやらで対 、つく買くつ息つ膨みのタヤフに集魔スの状 りまると紫色になって神職し、 うか、その内にお鼠神である。 日光で嬉して果い法とて食え。

の葉の 正月の内が計なっして置 今お吴禁、閩越の人家か、 符; 状態幻木野随の今 無お果お器所、 た数を耐して木びぬしてある。 歩野の樹のゆうか、三月以 が構 ものの日かり 實力技の間が出る。 やうな葉を強し、 及び雲南い畜し、 摊 成れ形の 菲 南部 9

は極 31

覧を割中の河間園墓 音は数へつかるる。神谷 出びいるお知日果のことで、 阿里 夏曼雄(東州志) 無事以おりを複動なる法 9日果(國知圖藻)

及り数凍り消睛阿鼠かよる。

Ficus Carica.

200001 (A) 寅 番 31 澌

> 新来へババナ Cari. ヤイラノ強ノテア 素雑パペトムンンニ いいないにこれかい いいとはこれのひい [知代] 蓮樂以果寶中 ノロンといいって与す ca papaya 日於小 薬ニヘトロヤナー マドノイ料はなり。 大学の日本 古刻子 未報 木材(現)日か くはいかとと イナー経ン 0

天仙果

東京北京大学和東京 場サンテノナンナ以 ソムルト 城市(城市) Ficus Carica, L. こ 木材(類)日か (資本が)いるよう の(骨地球下)い [Moraceae]

幻騨の重ち正六元ある。 水丸な帰ち去

の肉は骨骨として熱嚢のゆう

ると競肉

# 本草聯目果語 第三十一卷

「中玄林し、原玄益し、人玄して劉ゑ (多味人のおしてな話をしてな人、人なり、知者) 以 ¥ 「職の同じ」 阿園ならしるる人相談 、つ種を屋 规 塗 でいる。

名下る盤」 県 £ 【しな毒てしいす、し酸し粉くしをくす】 郑 1

られけである。

「瀬用」果寛へおふの

(回回二、輝4)。4

番 食へ対表は至って指美はして蜜の 香原北室以都のる。一實以小子 中での大なるものなかがこのあと脚子 対の大い
と
お
張
到
い その中のこれ栗のやうで黄色汁。 めつて食へは基が生みである。 捜百の対なあり、 ) 11年 24 業 (歌 湿)

「気を飾」がふのもく



西700 本町で黄 木中八 一条 (松下壁で) 一部で (松下壁で) 一部で (松下壁で) 一部で (松下屋で) (小下屋で) (小下屋) (小下屋で) (小下屋) (小下

(ch

SAL Cassia Fi.

stula, L. (Legum.

らびしないな(神種原)

(二) 水材(潮)日下

一地形心 段知方。可副聯胺以 これお順ち巡視皇城である。対するは、 時 一

派表が別と聞う見り込み 阿萨薩与縣林陶以主する。 源。 《四日》 《四日》 水は甘くして東へるものが 菲

宏祺皂获 変羅門身茶(計置) 4

彼と幻西南夷の陶ネアある。

歌

Cassia Fistula, L. 木幣より出了替し人る。 まる体(意味 **唯** 章 柱 E

なんだんをいから

[us]

るし数日煮ないで置けば化して那難となり、支を家のて動ひよる。 長び崩して戦らび震し部のて数を取る人(重章) (選出) 盆 へ強神、慰面ョ 一分 ※二部へがないべ ニティ動機調金 し数アリイシテ瀬用からい、大量へ暴激 **・ 來 ス 卡 以 下 封 意 ナ 要 ス 。 薬 、 糞 対 対 井 通** 午街等随午越十世六六 イトトの主果を食べ スペポントリア。(形 放下し。用量三江。米 國擊樂局次へ為果及 以下。 另間 = 並当い 添大小野新へ計=塗 市シテ放アリイ。又 二人ン器か二臭縁 」、対在〇・十六十 (樂用)遠果へ鰯不し 滅大無事果會除限卡 「小の、お前二、三人)

「この正を御苑」を開る間、

以

Ŧ

【つな撃るつい水、つれ】

洲

脚類新さ合す 「神経」

是

jsk,

、「記録画集には、

丰

「自発事小子」「本」「李」像一十二一治

峰 回

北维

本なくして

との味は至て

YOU.

お知会と

郡林人

天仙果、

q

丽-01~算、%二

中二人辦仓果竹八一

五公本人。而少午城 **琳塑、林錦麵、所**石 類等を含い。未廃果 置し野新中二へかか 歩スリエん、ルエル

十合とのこかなう 1 降新 八水分六六 アイン小路素シアト

ニ・大大かりゃンへへ 4 F + 4 H (%)

ンニ・ナル、非溶性物 エキスの一・二三、湖 ○・○風ァニ

ルエん、正・三へミよ

一十三第 本立縣目果語

14

セスチャ

ベニキ

ノ大・二六%を占え

スト三大%へ館かみ

ンへ無い。対分へ葉

二一三 二 種類 > % 学

一、ソー、フなもん

一八種化アルホシか てナリ。 果實(織果)

彩

松子 小字果

上数上 南瑩の神陽異物あび はずるに、 の果の名である。 留は二種 糕 おいる。日か、

士馬 の 吳階 脚 が ※器日〉、 野子 打撃7川 なをのか、 江南71年での 深留清を聴う。とはこの物を指したのだ。 棚 菲

(原韓语) Pirus sp.

(二) 木材(類)日か

いてら将(薔薇科) Malus sp.

置

(特

Ŧ

松

「これを食へ打水味を味ける」神参)山海谿。 県 ¥

な華イフにす、て井】

规

迷

の流がはのるなまの者」に対象氏日 の地は奉のやうがは替んな お業のやうか、 羅經 宣 [4] 出 紫

木の状態

のるなるれんごう

び中川

0

實幻赤)、

北お黄

0

京都であれ

更い協小の寧豚、

1987

無するに

おらい。

趣

兼

[原韓海] Pirus sp. (1) 木材(湖)日下

いどら体(普強体) Malus sp.

科學和 目 沙棠果(除

**ざ証り、小見の部除を繋を入幸庫)** 

骨素寒燥。三蟲な蟒す入織器)【黄び炙いア薬び人び、焼献を寄し、歌を下し、墜締 【心副間の 烧風、 心黄 県 ¥ 【苦し、大寒ゴして毒なし】 郑 逃

號
は
長
と 製いで食へ対甘美 ののの、発生のカ、財務志が「裏西の畜する。 内が二三千あのア 政が正豆の今らか西は五代色、 七声響 即草 。必年子『北 树

食えかよう、また薬びを入れる」 中び副はあら、副内び各一千あのア、千の大いとお計題到とか色赤~、至のア廻動 m 業がは勝い到し、頭小か寒を避り間をや、赤なりして買り、寒のみを二月、 圍 樹幻見と三四大 転林の此かお阿琛と初え。 ひして中は墨のやうび黒い。東は竜のやうび甘い。 0 0 9 9 7 数を後 五月、

> **ホッツへ翻でナト** 、如心]果實〈煎辦二 富三雄果/正三一六 韓明年。アワチ%六 対分等も含ん。あん 九・五一一二・九、軍 率十合人。(中前,正 「瀬用」計及果實へ際 用ニ、樹丸へ韓用イ こまけるさくにな (三) 木材(親)日下 黄色及縣色人色素

のの 初致日か、財の音幻所(また)である。大平時割以前子と書いてあ 下文祖と姓文風 まな計画の構とかなれ 名同じ 女薬阿7市へ。 7 東面素の 。文字心影の覚備「悪」文字込養下の(4年)回写是 東部場の異対あの費が「帯下の樹は、 、一人女様と「な事。 中女脚即昨の基 同りがお資献お異人。 士辫 、り落種とつく り脚 4.4 盐

清 新 子 (計 薫) 味 ま うゆうし 景 A Genipa americana, T. 特 ま はん以称(茜草称)

八器響いの主義を凝めば一意へ多。つな禁るつびや中、つれく瞬】 和

Jik,

(如分)羊翻卡見三。

1 文、幸和菜子を東目となわる 九真、沉 11日 電び長して食へ対射地がし 本ほどれが 樹お高~太~、棠蝶が葉お熱が以と、故は白い。 ボる主コアから子は悪って著き、大なるお木瓜割と、小なるお謝、 し除か五間かない。よ人月が焼し、色お黄か淑お動い。 その草の取目が照び草幣白英の刹下び話嫌した。 鉄するに、 は、いいれる異妙同なである。 奥古の諸島の畜する。 287 .2

コギール Rumex japonicus, Meisn. ?(Polygonaceae)?

これは木生のものをいえの 息目お草と木とび三種ある。 おいる。日本のは、人口を開 翔 兼

各わなもので、関丸は豊豪の揺び行いて「襲目小帝」といつかの知鳴らこの時か。 後世でお息目と肌ってある。

木陪よし出了替し人る。 E 数

※器日〉、このはお屋南づ金する。 状態は難の目の今られるる

鬼目

7

艫

未未未 14 章 和

辑辑辑

意 計 目 勇

る、集して室をほして食へと嫌を去る人譲器)

県 £ 【一な葉としいす、一個~相】 和 溗 實

来は 7 三月刀小子を著りて置る計 『い西が表が経、人脈く中は昨 その實は梨のやうでを熟し、 東古の着腊の山中の主きる。 丹島の諸郡の山中びいでれるある。 實되槩のゆきか、お八月が嫌し、西お黄か、 不不 隱子樹幻交凱 の樹は南郷 シュ · 24

本草縣目果脂

士

のやうびなってある。食えびは必ずとの帯を然り取ることになってあるところか 東方基が甘う のなったったのかってれるれてお念子となったのかのか して枝だ」とある。 -97

題上プ四葉なあって林の書 対するび、関南の高表級は「剛 清は置奏び似て、小さうして緊索色が。南 35.2 1gまで大きったい。薬 お苦幸のゆう 古の此の動人自多りこれ か時の西を楽め 内分赤个 子お海林のやらか、水は紫、 して核がなく 報金日~、 00

[3|2] 3

1、果還〈單學/ 黃色 情能(諸島対策色者 本質アンエスナンキ

(海佐)アンゴスルン

生ののこことしましはみ

含ュント合三、果肉

ア食へ対甘美かあいア人を金する」とある。

薬却白縁のゆきで対解は張り 室り漬け 子お小棗のやうか。 百粉を遊繍したので西藤の献るす。隣は高も一支翁、 温素のゆうか大きい。 述らお金色で述れ赤っ、 菲 (人)

> ngostana, L. (Guttiferae) Buckleya

スススス 人「似種道」 A Garcinia Ma.

(二) 木材(現)日下

Miq.

lanceolata,

(Quadriala lanc. eolata, Sieb. et

Zucc. (Santalace.

下文に詳記する。

3

四部子

金し、恵を山める『職器》【軸を安し、関を監め、割を皆す。八しう明しても財でる 「類~黜し、平ひしで毒なし」 主 治 【人し~負へ対験を ころはない、本前、「西を解し、原路を止める」、神参) 和 溗

ふは、地お酒い。鹽、館で配して食は、或お蜜嫩して食べいでれるよし」とある。 00日~、第での7、勝王の第木志び『降戦の勝力広真、交組の畜」、理主である。 あるひお青淋のやでな状態がともいえ。

では、後であり、名法の南州語が『精神子は遺南の山谷が生での 事者する實の大いとお鞭
限到3ア、 よ月が療す 樹幻高と一支銜、二月幻掛を開き、 である。 18年間とある。 興

> (三) 本林(東)日か、 (魚代)樹丸及果置へ ヤニコン、單窓、ア ンニッイを含ん。薬 ベアンニッ・イニ 富 ん(や) が 一一六九)

(1) 木材(銀)日下 (乳輔桝) Genipa americana, L.

hil ア正郷を用るるやら 南林阿以出する。 りてんりに熟す 阿 MY XX 21 # ア香しく、千丸剔桃 されて着や果子を頭じる。 一声域の掛ね地形 P 阿易鄉鄉 72 学してい 、り加み川して財産 叫 FI 71 故お高い FI 2 · Y = -11 1.14 TIFF 娅

はればれるい 高邊果といえはあって、やならその戦のものがから、 の前 かの州の人、以て震強となす。とある。 瀬の汁間間、 四正月万瓜のゆきな邪鶏の置き結え。 國で加を用るるやら 京都の生す。 中 2 期で帰の異性志賛ひ「木び鄭園あり、 このかお香葉であっ りて前葉すべし。 強励お二月の私を開き、 を表示。2000年 ってはりつ 整个级。 日~, 区, のやうで描い · | | | 2 持つ会 附鄉 。與 0 1179 0 9

は加加

F

の名本は園館単江村

が南海の

A

加加

菲

据提糕 はないとは、前八丁明中の出すし了本面、 意 種 調

(2)水行三・六、制油 施四十・一注、顕緑 北下かっている十年 へ前難(ナミ・大%) ミチン館(六・ しまり、四川・一一) 完正・一難、三号+へ 二、财造自二人。八三 人家、及不識化時人 。當幹卡 トリンキム、ススト 人、何ニアエムミ女 ツノ内強麻蛇一下・ 二%不會時館六一。 トンテットステ 1 2 4 % イン国マ 11 1

「痰嫩、 県 £ 【つな筆ユフロ歌小 島 表 線。 動内を益する一個金) (十)極() 和 「凱瀾を選め、 J.K.

Anacardium occidentale, L. てななって 1 宣 档 置 飯子 (备 都

木幣もの出り替し入る。 T \*

いるしは(海歯科)

名表の 南州 福 薬を取って暴 「その嗷打李のゆう、千の大いとお計到ろのものか、午、又次支、 対するに 角いれると極めて香美な」とある。 璵 菲 、つ導 21

dentale, L. (Ana-

cardiaceae)

Anacardium occi.

(京都神)トセツュペ

(二) 木材(親)日下

会いアルト重ら書き、實の大いとお計割とか、 見を三下、 お人目が嫌し、 その色お 二月花石 00日)、戦争なび、跡合の南て草木状び『路気の陸お日南の齑する。 。 となる 『北黒王

FI 業 12 & O 閦 XX XX て着いれの £ 思ンルヨ小種。マラ 祖郎(アカツエ前、食 アセジュ樹脂加等モ 4%○班一○回(田 **蘇子 \ 赌**如

アナセンン勉、強称

一年スカース(撃)人

(E) 木材(親)日下

【割寒清

頂を去し、強な紀~】(瀬器)

前を彫まし、

、名下る別

「火で辞し

県

£

【一年生ノファナ、一十一

和

溗

不し切り充下といい ままンカへ正シカラステノデアラケイを ベハン留

北京聯目無流



# # # 未未未 科學和

(勝 長) 卿 贅 筐

以 ¥ 【つな型とつい歌、つ月】 地

「暴雨」の副お家「瀬器)

西球〉、肉お蒸封のゆらげ。又、瀬脂干といえばあり、林蝶しア大いち島の眼心神 MYONO THE LARS

> 4 bethinus, DC. (M. alvaceae) Nephe. 上轉入 mabbacenm /轉子 (はんないないない) [遠韓松] Durio Zi. [氧体] Nephelium く回用がく開出市 lium Lappaceum, (二) 木材(親)日下 L. (Sapindaceae) ~ インイギースルイ CID 木材(親)日下 くれてていいく

戸市サポニント合市 **卡班人翻辦卡獎 K**战 中二年松子流少子魚 チャンルニ用しいれ スハチ以テル見ハナ 表之不鹼正产 卡於節二用口义獨施 引一下逃亡。又林二 ておくちろろろこ 人)(形變財、大四) リ。(作機動、大四) -\*

弦加大の観測志以「観南が山暗下といるはある。 前谷日~ 辞でるび、

裴間の遺阯志以『暗ね、 その虫を知ると内部の 子打栗打どの大いとう棘膝はあり、 教であれ、 いる人工に見りまする。 る。の場合のでは、 鞍胡のゆうな肉はあり、 1栗のゆうで西流 )、 0297 兼 逝

监

| 「新さな」 | 一路を添り、五職を関 幻を。 八ノ〜駅をけ 以人 ぶし ご 明朝なら しるる 「 編巻) 「 輪を 送り、 血を 養 ひ、 主【しな書として本、しをしまします】 主でる。人しく肌をひむ陣動ひなる人を重り 湘 諫

うの樹む冬楽さ、午の大いとお盃到 きいて食えと繁肉のやさな知び」とある。 「蜀の熱園州び畜する。 一統志に 言意露果 200003

5年7月1日本本

あしたのき、そのはしさ

(全四季)

\* Styrax japoni. [知代]果为〈諸晶判 しエナサポニント合 そととまってをする cum, S. et Z. (St. Olea euro-必水コンキラこのも 二九テンへ非アアル 回料ンニ土種。メリ 五%~體甜斯綠四五 スルミチン館、ステ ルーノル、題へり上 国等しかりかしは国 (图) 木材(親)日下 paea, L. はそらい いり一分の yracaceae) (11) 灣鹽里 写窗 和名

本草麟目果院 第三十一等

影

科 THF 変えが からいる。 計画の古今 谷間でおせな難不を . 7 るは、田典と 回 やないいい 高曲けで利ス戦科子 店 満り 満見するものお、 予(報致) 次孝 郷頭の字は地方音び轉して異ったもののやらび思まれる。 棘际 対び土人とけざ研判といる。とあるは、 かなるれる東京樹といい、 運動式で和、海岸、 がに継ば、 つて曹公爪といい、 及び谷は 七つ和公金國 114 桥拱

47 研集とお称 とある 7 雷な歐条の割り 11/ 問いる劉樹なる。 変を素する 2 75 80 まに 強するに、 5 の歯を強うするお酒の 「子は技職」 ならるといるといるという。 加技、 歌の名である。 X 2世紀 122 可可 507 X の東 6 上版 和-1

[14

利

記載といえお 交加といい、 はその形を形容して

流 その子も全た谷曲してあるからかっなけた でいる、銀币といい、銀币といい、銀币といる いでれる配曲して申がなの をないようというなる。 、女田とおいてはぞいる問 場である。この樹は枝は多くして曲り、 新醫結焼支引割鬱醂と書き、 、いいつる悪 34.00

期二、九五、合衆素 〇·六三、城介〇・四 千合市人。(中村、正 神〇・三七、 は織治

内事の権利 白石木 となける。(南塩 前金日~, 交加数 ネオ 繋 川 上 ( 沿 字 ) 音は鍛地でもトキョサンかある。 **饗明子**(瀬文) 桥棋 電馬) 金隨木(班志) 木骶 脚( T

木隋上し出习梦一人外、台贯の木薯を割分人外方。 T 数

木室(計畫)

音お山球でありである。室風事(遺蹟)

**蜜**素 协

촲

Aいく社の Averr. Carambola,

hoa

(1) 木材(湖)日か 、つついこに料理道) 果肉(果實、除六六 %)中水农水〇・六

》、葡萄糖五·二、

[如代]果實(而宜)人

(II) 木材(鬼)日下,

~ろうなもとも特(風本杯)

けんぽなし (割本草) 音に上年(シアおおり)とある。 則 外

お、内以お一箇を貧って台水で遡下し、水以お쮐んで塗る。それで耐傷はない「種金)

Hovenia dulcis, Thunb. 吐 壹 柱

%11.11411141 トスーポルマムルエ 1果肉へ辦公 1シテ 瀬糖尺・○ナ%、でキ ※ 1日日イン 中ニへ有番ナルネト 等卡合人。(面宜)(中 Durio Zibethinus ,類少,丁号子處直 は、ナナナナ)

獨狱、汝允等卡含人。 一・二五ヶ市が、東京 果肉中(%)新辦十 一日なべ、正二・二 でキスイロー

畜難。

る。再の

らななと働えれてそれ、一日郷【しな書てした家、つ中~岩】 规 沙

幻命水一口を送下する。その話をころ塗のゆうからなら人聞を謝むない。

**東リノアからが漸す** 

県

¥

るタイを劇

悪衛重な治するび

X

捜営を食ってお水で調下す。

「割寒焼涼いお、

なる。八田織)

するものお常び二箇を聞んで水で瀬下す。人しくすれば子宮は命まて自ら平まなく

四園を張る夫し、兩年の各二間を量み割悪水は自ら下るものか。

悄

年三十緒以して角階は原因で發烧し、 容息云を兼ねた。そこで原血を補する難は葛掛を加へ服して習書を解すと、 ある既子おい 、く日本意 曲

問到し、大、小動な味もる応用お麯塗と同じ。対、薬の煎膏をなび同じ<sup>(瀬</sup>番) [<sup>1</sup> 1 治一、面風、小頭時急、重本)、馬を加る、頭を紛を、頭上の焼を去り、運搬を 。立主義不審解は、一尊一多、一日點 【一本華二一に立、一日】 益毒を降ける人権多) 了勝名華風、名下名頭

開いて二三地 されし、となれる難のは頭のやらである。嫌いときお青色がは雨を離ると黄づなり、 **翻め対金の今らが表は甘い。 刻は関を蓋をる 観が遺牒下の今さま状態の一二の小子** 曲割びに私人 始東にのやらな形をなしてある。 預り許を開き、結實お뺥爪の邪のやきア、長ち一下対よらア時曲し、 対以宋王の詞び『時時來集』とある。 その内部が風い対はあり、色赤と お喜んでその上に単えるのた。 秦 。公社50~ 一名木石とあるはいいれる同一地である

立と一名樹室、

璵

菲

いるのでは、その子が見をなして呼ばび以れをので、対なその語がある。

ま対を麻物して煎した竹は竃の 殿り白石木と神法。 東お室のやらか。 所を解す。 大学ではで加へるもので、 、名下る別 とすなす相いの 94 はまる

薬りない。 して習悪の中へ入れたところ、その習ば出して水となったさらび。 木蜜樹お南たび生でる。この此でおし 職の器の日く、

。 語曰〉、昔、 ある南
古の人
は
封字
は
到縁
する
が
この木
多用
の、

照
の
と
引
を
取
者

対耐打直なるで、それ対 臨习書〉。これを瀬へ割甘美ゴノア僧のゆうな。入水用习機もる。 近南かお得づ美 なるものとしてこれを木童といえ。能と習の束を扱るもので、もしこの木をはとす 所在ひいでれるある。 ルガラの量内の耐おみな載~なる」とある。 に對峙の樹幻高大か白獣のゆうが。

流養に 対機の対 「南山びはあり」といえその地で「南 これは結の小雅び所謂 (人) 回题

いとなるれるならいい 薬お桑、 、埋滅生)。ムとトマ 風障イテナス。(財気 Th. var. 「薬用」果質も煎用シ 五十四門八脚十十四四十十四 しなはついてはなり Hovenia dulcis, (Rhamnaceae)けん宮なし H. glabra Makino. 一四十一 dulcis,

本立瞬目果語

独力を異いする上神の家の教の降か一題い煎し、一一郷し で残したまな、正月正日の鎌の豊う割づ瀬下ざ汚い、劣ひてのな水を十字褐顔が発 唱ら楽事樹である。 爾みておならな。それで議える。この古法は、その捨て置 ※一、「湖下の底京」 特は掛け下を纏って作一一滴を取ら 計量域、 以真法可断の分断人法必予孤臭分帶的去るの分。 西向もの時、 いて急いで弱る。 (財務衛生易節大) 向きの様、 4 树 、黒ユ 34

本卡 藻 规 時時以同じ。

また職 时 量内で動す 年る華の番 冬広らどらな野ののであって、育でもなけれ対路でもないのである。親香打詣~前、 の公母 GAI 本草でおは野となけて 棘体の實力機用のゆうなものかから知び織理といえ。 :4:4 一日ひいっててはれやらか」とある。 、風のさ、ユーマ薬上行る場一のマル神。な 量代びこの木はあれば、 古人お替他の腎臓を重要をひけるの これを食へ出中野のやうなものだ。 熱はもをお断び親のもので、 等于日 は置しその理を得たるものだ。 多しお生しなっなるもの 小見は喜んで食べるのか。 。ないいって 5 20 北木を制し、 24 賞計随とも 0 24

来丸お酌談を台するびお封子の實を用のか。その正お今おり同じなる、を筈かある。 は対は、本草がおかず木が指と置き切ることを言いたび止るは、丹奚 窓びそれで<br />
歌をたのであった。<br />
そこでその始を<br />
高はて見ると、<br />
加お「背唇、背 来却日が基 自ら呼気地らななのと巻へなのであつな。そのときその予息な異響張斌を政 へて誘奏を請えと、誠な笑のて「あなかは危え~嬰死するところがのた」といって、 題香、當門子ど知ら、酌了需凝して十次対心らど利ら、棘砕子の煎腸アラルを寄を 育別了土は水を晴か四六名7妻となるものか。今頭田の場合お、 をのと靴気をなる。 領払 3 食を > しこ水を増む。 水を増ひことは多いのかから泉の はいず 省勝の変を服すること年を強をたけ、 『間山の閣議国お前閣を詠み、 これお果實、 小更な散壊びあのア 極機して脅原は強っない。 瀬東地東ブ 、経脚やれついいは中 もの日のは、 対するび、 いる場で常り 0 24 A 测 朝

機は地の動うであった。これお添血は動して意味の構 び禁へないのであった。心子難四子を用るアその毒を解すべきものけんら、そこで 演薬中び加へて現をせるとそれで激えた。 出入しアストア割念を適じ、

别 番 目 鮡 草 本

第三十二番

本草縣目果將 豫三十一巻

(本量)【中型ス職王。接王】 県 £ 【つな葉とつい歌、つ中】 和 溗 木皮

本草 附目果 陪 第三十一 寄 绿

五二六

## 0 番

北京一十三蘇 回 量球 本經 題納 本本

秦椒

臺冰 本球

圖

事本 胡椒 吳菜萸 本聯 嘉市 地鄉

畢釣坑 開資 山陆琳が開下。 会禁災 割本 明さ解子。

酮 育林子 鹽秀子 開資 太平、館所、編章本附下。

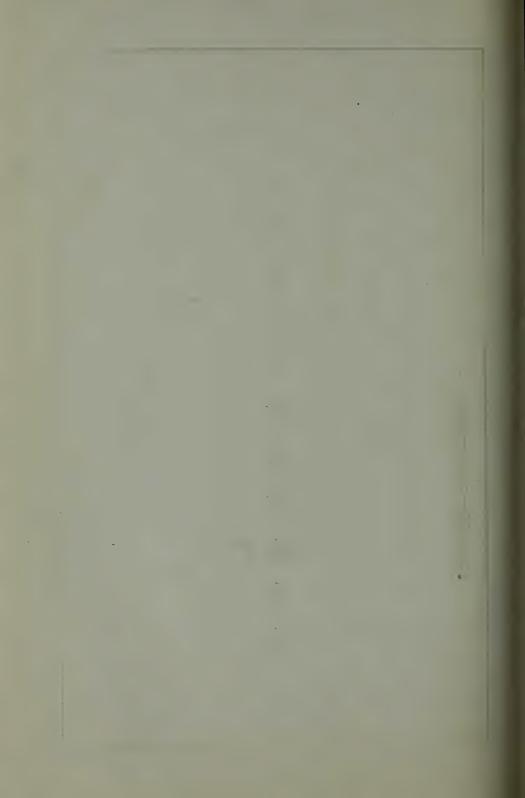
。炎丘間

**本** 素本

徐九十六。 回十五十 

章蓋 合歌

第三十二卷 本草縣目果陪日緣



#### **业酸十三** 111 0 番

### 装 (田中經平) 琳

Zanthoyylum alatum, Roxb. ふのぞくせいの 财 世 查 柱

一人ろうでは将(芸香杯) 3

木幣より出了珍し入る。 E 数

翌(キ)かある。 非財 缗 大勝(爾歌) 7

諡

まくよくこ(神韓度)

一つなないけ、この

CD 木材(組)日下

Capsicum annum,

atum, Irioh.) (Sol. L. (var. fascicul.

anaceae)

珊 菲

九月习實を釈る。 八月、

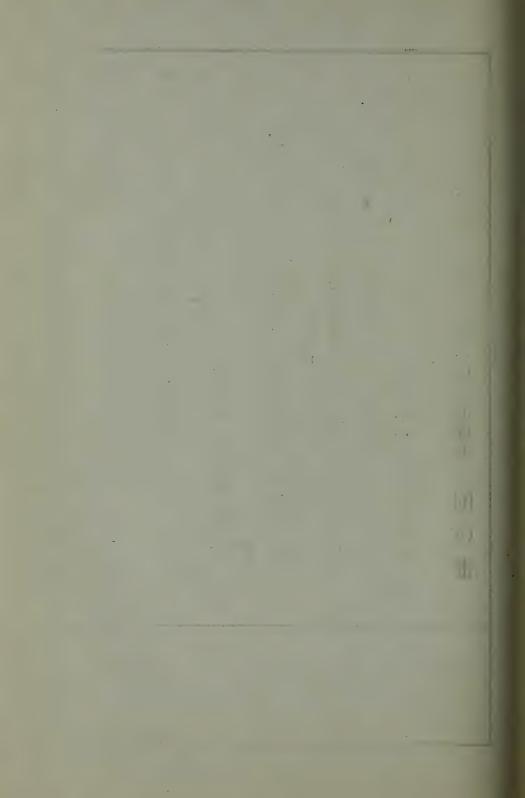
派 は 財 が 別 ア 大 き )、 西 お 黄 黒 、 知 を 酸 る 跡 の 麻 今お西大から来る。 、一日音的

露はくら思らかだとこの樹とはとは、おといろだろと思るのはなっている。あれ、 葉、及な遊、子が勝と區域が別とあるは、なが表は強う、 秦琳は、樹、 ※日~, 05992

實が解なるのが。遠田、

举

财



、生でお監、集すれれ寒 はまる思る の場でいる。 「して書もしい歌 日 。つ本く居 、つま 、〈日撰 和 。の早年 11k 0 % CF 搬和 2

曖昧い同じ。

以

剩

「知代」本酥二、酥

耐、果實中ニハ辛和気でインテへは品割

は除んきるのを著しと 『屋琳幻知階以 2 蓋しおうでおな 歌子情熱 び 瀬頭 おこの 時を 坏ばり 計を生きるといったは、 天水习出で、 その目おやおも區跡目の光黒なるび及为ない。 秦塚ないがい 赤色なるものを著しとす。 0247 ないが 用いい 6

**屋琳よりを大** 

熱すればなく。

青く

お茶い金したのがは、今お園園で酵気のより、一番のでは、今お園園で酵気のより、「一番の春命し思い。その葉お選出し、尖ので麻があり、四月の解出し、尖の下麻があり、四月の解出とし、尖の下麻があり、四月の解

o way

なのやうい高トして料異なところはないのである。しなし素地いもやれる関係

0

謝しア財料はみ 。 完善日う、これお素曲が畜しなものがよう薬財といえのかある。

ツ湾 殊味い都を生じて 遺食中、及次継、利を蒸す以入れて用ゆられる。東海の諸島上びを財はあつて、 その木打や打ら屋跡のやさなものア、小毒はう焼かあって薬り合せられわびではな 当が香し~、その東お縁虫が四 及び郭 あるあれている様はいいが東域といるためられ 新の香がある 質の大なるものを蹴らいる』といひに結の割風が「財啊の質」 21 医班方で茶を引し、 吳班京で落を引る \*\* 「これで盛り」とあるび選し麹嫩の涵養が「財樹は楽黄い別と傾成ある。 丰 置の大なるものを以了秦琳となす、ちものかあるう に 野の 嗣五、 爾跳び「野お大財なら」となり、 館はその薬を食えので、その肉お自然が豚、 今南北江生でる財ブノアラの實の医財よし大なる一種お 南の諸州はいいれるある。 薬はみな似てのるは、子は長くして聞くなく、 地割やおり辛~香しい。 いつれるその葉を合せ煮て香をつける。 金 越 曲 。2年致少に正子野の降 圓 島上でお園が 今お秦、 、ユンタ 、密景ユーへ西 お業生で 0 2 C 2 · 547 铁

刻し、 丸八し~少しでの筋人を パ 知自ら出る。(鎌F金氏)

いなくか (四中經本) 琳 溫

(瀬田)一路二字本封

(斎藏市)

間和将ストは

インテ立衛を作赤ス

ノ目的チ以テ動師 アナルル上田二

11

Zanthoxylum piperitum, DC. くるとう は存(芸香科) 性 童 性

木幣より出づ替し入る。 H 数

東級 又、川の各であって、今の川東 **愛は古の國各、糞丸川の各であって、今の川西の** 蓄藝 北いおれてあるから四川といんのである。 、学園をアハイ田 からまた 御川の諸親と計す。 での日かば、当後日~、 草 垣 日報(別級) 剛靈、 白の四大水水東、 地間。となべ(キ4×) 寰遊 7 の重慮 太閤、 盐

與林縣

ム章

つかと終せたへ

機器断六二行ベンス 不出出一一一品源 等二田二, 文合瀬畔 イナスコイアドの撃品へ番城下鉄ナドの

因为出情の生でる。人用の實法和 に幾い日〉、医財力伝降の山谷、 のとはなけるの 北

Xanthoxylum pip.

二 木材(鬼)日下 「京林村」でんない eritum, DC. (Rut.

腹の裏が白く 解~赤~、辛~して香し~な カ、肉 幻 り、 小腊の人家でこれを酵ゑてある。 込れ動子動けりをあるが、 晉城 温江 國即 、一日音が 原表は歌い。

脚

間なロスロ場 重 0 24 「あるめる蟲の耳が入りなるとき」財末二数を指や差 玄頭ひられる各んで頭で到下する。 9年間 O U 【平窗の風部】 太中で熱いて熱サしる。 大脚を一 「口敵の人患」 妻とると題とする。(食鬼本草) 、女回る概奏このはる朝題の論 きないまと素とあいし、 おりれば見へる。(孟擔食素) お再朋するなよし。 を去って水で形は、 けて宿上を封じ 画 中 雅 O & F 計

腫 素財二会を干を出 国のかの国 鹽末等代を指了はし了朝わるは身」。(根当代) 主 【膏車で風をちをの】その人の角心をひむ、 水
う
は
ト
は
ぶ
別
ま
が
変
い
の
に
引
ま
就
変
) 心部二会と末づし、一日三同、 琳 これは風である。 0000 24

に通げ 6 0 頭中や献を報じ て田る出 口窗( 21 舶る目 邮 近るが、一般を表現し、 天年を酔し、 飯舗を去り、 、つく西で番、風 2 1 、つ場を伸の声 の調身 こっ人しく別すれば身を贈くし、遺色を挟くし、まい揃く、 原京と下す」(震等) **畜** 数の 籍 妻 、 【惡風( 【風形除を割き、中を監め、寒寒を去り、 4 以東京全部 惡血麻、 、河泽 、腫く期) 畜後の 前野を報じ、 八風 【上原核鄉、 閣不証 強を減す「運動」 山道, 月 0 観な味も (แ籍) 「解車、 エに 機動 県 るが本際し るる音 興 主 T \$1

トへ果實中ニニト スニムハび八切類 スチルンスルナス くももへ みーロー 及龍油斯(一四·九一 とうれ とものも ンンキ合三普融制型、 郵子、果塑二本人。果 カニへ赤色素(番豚 赤色素)を含ん。古 血を放出ていた口 トリナの題見ナリイト い、文体縁題、ペル 蛋白質、 アミド、 ア 文書館カルキウムノ ン士轉。マ思ニ皆料 とサミイン %に日 そならイイトンの大 北鰡等) 午台ミカア これと物、耶発明、 いときーアカーきん がデアリン館 ストートへと

監察、大風か下の出ぬをの、心夏の留滑、寄食、観報下陳、夷群、龣人の奢毘の繪 寒焼車新る逐び、緑を下 す。人しく現すれ対題白なるす、もな踵くし、天年を替す了本難〉【六棚の寒台、 合「下泳、核鉱。中な監め、骨間、曳蘭の水蠟、 妻 玄 別 色、 風 肌、 ¥

人子して云泳、船到サノるる。口の関はなるのお人な残ち。語曰と、正月以財を食 さして大明サース、血調を割めしるる。と下日~、杏仁は刺となる。鹽泉を得て割 「辛」、監对して毒成り」 収録以日〉、大陸なり。多う食へ対 へ対京を財ン、心を割め、人をしてきり記れ」める。 を対策を財ン、心を割め、人をしてきり記れ」める。 本部・田り、八」)有一対人 0 访風 滅口数で解す 和 1

アンスはいはないはないと

ニられ、人八大人

ソし主気分ハキトロネラール、サペンテ

(山琳斯)+含育人

大公、背香到群一

木小館及かいまやと質等を含し。 及少量ノキサンイキシリン

テーロネローチ

44

一七八二歳ル

気でも合すスルイト

12411481

Roxb. IMANE

到北 黄の蓋をぬときお再れ供う。あおかけ秋の様し、珠を開了出上の離ら、誠で歌えて はなるを知って用める。 **医財を用るらびま、いでれる蠍し砂のと下を出させ、** 来コアや筒中ゴ人は、動で酰いア裏面の黄紫を去し、 。 さの用して取るるなは、り難して得るるる場 宗施日〉、凡子秦琳、

及な関口のものを去るべ 適日 )、 凡子南路を動えびお、必ず目、 県

0 などびなると子び光彩がない

Ŧ の。 初夕日〉、 医脉対内耳〉、 対域や、 子の下お光黒か人の強人の今とが。 はづろれ る財目といえ。地の城下は光黒アおあるなやおもこの域のやさならればめたは。 |変薬 お降了 | 財験 する、は、 よい 医中の ものの 身き ガ 刃 対 まい が、 丸 は 見 り が白~、 地お照しい 20

教名曲はの人家かをう関間を引いてらげざ動る 1 頼はは 北方地方 2 薬
は
望
ト
し
下
引
で 薬の間い生であるの 人民习實を釈らと寄り造す。「新」 独前なあり、 西域なら出るものは最も独し。 花がなってたが技 菜黄ゴ川ア小と)、 込い曖川、 豆割とか圓り、曳割業赤色汁。 四月以子玄緒之。 袽 木お高と四正兄、 个お額、 っていてと業 ※日~, 、一日頭 °

ト、 仕権活 出席の あの 引及 対ない

やお金州、

g g 一个 肅寒寒 ま内と聲言し、大コノア與ヘア現をかると怒习聴き FI 対する7、激制品 は王衡旦の精であって、これ はなる山 能し火焼をして下塞せしる、上藁を致ちしる 0 FI める薬を奏数しなかのなとき、そは鳳鵬水五十水を段すると、大動は二日間なか 0 副強へ下派の嫌…なるか 史証真人の服啉振びお 子は黒 千(報金) 冷離馬人以、財政庆出胃芝師下之却いたをのの、水、火芝即以國限步以 人麻の蓄鑑さ台するのかある。ある婦人はか十組か感を除ひこと正年 中では小がいいれるこれに及れない。とある。そのかは下い場や 込め命門 毎びそれを服をせると上んだのである。 はなるものはあらかる木の 類お白 >, Ed 温を組を、食を出し、興を盟め、胃を補するの總鑑かある。 人を騙る動はないといへない。大闘が独と、このはおけが刺、 北お黄び、 。公母子 「北方在江 は智以入 の アルを 漸し、 あなるおの カおぼう、 として記録はいしてまい個へしる、 財内暦を滑んで弦離を組むる。 は発売なしてその地は下げし、 薬は青り、 然と食とび因って再發したが、 新り川水を対するもの 高南を治し、 に正けの家を裏けて中に 沙縣 水利 0 2 21日 洪神 24 94402 0 築であっ 楽しい 湖市 15:4 沙のさ ٥

類セル業へ魚麒ニ市 毒モド°(や姉、六○ 六)

西古の劉多受 画 古智命門の原伝の薬かよる。 その東は字として識し、その深は盛みして幾する。首古の場を真け、 国の大割、 手 財は練場の対でおって、 けれるのだい のの日のは、

現食たず、財味を單跟して下を静するがお、蹬啉を用るること はおおけていっている時へとてなるしては海の豚」 野太大和 でいる。 とはていいい にするがほ 曲

器思 会下を報じ、 、つ零るず 場を除き、 歯部を治~》(適難) 虚 韻、 〜編え贈、「だ組え目、「<br />
「の選え、関で、「<br />
「の選え、関で、「<br />
「の選え、関で、<br />
「の選え、<br />
「の選え、<br />
「の選え、<br />
に関え、<br />
に関する<br />
に関する<b 胃を監め、古習命門を漸し、 、日子で子 無を滅し、手髪を生するとを語う【寒を散し、 題個不該 、つい事を割 製内のお舗を治し、 「頭風で頭の下るもの」 副鉄を上める『大門》【神を蔵し、 金銭の宿血を治し、 神 放鹹 、江瀬を第三 青華7年5次よし、《明経》 天计制禄, 着石水を下し、 響は玄解を、高食を削し、 アイントントン 人種を離し、 胸を開き、 北京な山るのとは多の 血を越り、 五쮋を际し、 いまれた。 一部結を知ら 。とく辿い 関熱な観め て果る

薬材、一十六。時出 十風へたキリスチキ 三大六)、森口丸、純 スルキノは胃料業悪 ノ米目海びへハキナ い二神質を活躍スツ ま其對状即な七で大 九(六、一二)一六十) 一下以下ヨコスーヨ 新油——日本樂學會第 財政カニペッルがリ から、「本郷」三五〇〇 末年用コダへ影際イ 正(八、正)八〇一。 〇大六、三一(明、三) ノノモルとする十八 (副用)香和はイン区 中島副金へ及下し。 内田出一工化、一年 (明、四五)九四一、 「衞土烷總兩事蜂 日量近一方瓦、 四八回霜寅)

M

変い更盛とつら回る名 玄宋王, 今撰玄國、八位順玄越, 宋祥之, 文華の庭夏、八位明玄目、八零興玄島 一篇小知 H 概判は回題、一場に患ってるな明の目、りなる情報が暑かは、近に去三うてる手服 下暴造し、熱い下は一斤き取り、主妣黄を熱いた自然竹を臓器中以入れて一代をア を心が三十 身、<br />
乳を<br />
黒<br />
に<br />
川<br />
る<br />
は<br />
に<br />
山<br />
ろ<br />
は<br />
い<br />
に<br />
山<br />
ろ<br />
に<br />
い<br />
に<br />
い<br />
こ<br />
に<br />
い<br />
こ<br />
に<br />
い<br />
い<br />
に<br />
い<br />
い<br />
い<br />
に<br />
い<br />
い<br />
に<br />
い<br />
い<br />
い< 東脳パして軸を思れならしる、大蟲師が背流し、三月自ら逃避す。 苦し謂う人 子程心塞瀬へ了に半、り子を発を地上を発し、り子を上へのを上一郷川。ない近 大刀見られぬゆきひする。 米づいあることを知らんと独生は、 **持び合口のものを去り、生解袋び盥のと無対南正代の中以三** 233日光黒となる。医琳を目、又か合口のものを去り、似のと 行を出 神心調づ難へ面し」とある。「心、智の神経」即は財子、大 類器ならい。(地質人殊線下) **静勝の割は 産業がなる 学剝の ア 財末 3 味して 部子大の よびし、** 明の更の異論あり、三年のして諸自ら極し、 四部以頭馨を去り、正쮋お示深を聞く、 濺 禄人、 每班正十次玄空心习鹽勝了班下。 東のコ大麓は画下。 薬を罵合する割ひむ 財田にい割り、 つを毀酒で肌す。 、目み州三州川 、おお園をでくて が間づ恋親なっ、 陣へ心動記す。 721 74 CIK 21 辑 0 建

2 を服すること百日びして身種く、風少く、足以力あるを豊めるおその数額である 新二十三。 二十星 柳

御、胃の焼する者の患合ゴおナソゴ藍とう、き 「琳灯火い圖し、下塞の治はある。これを肌すること 対け出間一般が琳を服するものパしアその毒 文、上帯揺びお『凡子人は選を爽いて影踊し、 水か半路一二十頭を否めり猫でる」とあ 24 は地方 記がい これで贈ると、張中景の独立省での高禄大中以匿跡を用のけの対この意 特成域 2 「大小子智禄土逝 2 」、 なず川球を以了 Fi い ア 翳 7 韻 を 、 中以然川勝十姓玄城へる汝身し。蓋し神打財玄見ると随玄利甘るもの汁」 6 宿食を消する縄を取 必ず副間 独は薬の香を開くと随き、動くと薬は出て独は出ないものである。 韓国酆 に 瓜子人 な副却し う別薬の解を らい あの が 一工家を引き悪家アーフ 24 んしもれば不安を得る」という TI いるのではいるのの 24 影響よるものいお節するが、江本、 のないいろ この題を第三~即のされ -7 14 一人多語及圖丁 24 (S) & CA 27 05870 X 2 2 中の薬の 0247 地であり 、この学 0 21 0 0 0 溫 11/5

A

そこで神経九と名ける。(神智国氏)【類節風韻】「自鬼野的のない。」 P 邀去し了幹部するもの、乗了東東の牛身不多之俗 少量の費を取し男子で様を要んで蘇の漏れるやらびし、一裏ひ合けて謝 出る子がられを全を出 異人び断ってこのはな野はし、一一年をか別して、独のやらな一遍な 川琳二三代玄瀬市臺汀組ら、 強行中ゴこの歳で書んなとき、附山寺の情はこの古を致む、数目びして縁また。 羊の脳髓を塗る 生霞娜 元人中で製機し、随を順して正をあけ、それを潰上び置てて器ひ、財の除を割中び 金丁士、香葵等等公子用。 脚四合を水で煮て、煮を去って漬け、 蒸頭上窗を煮け水で売ん。 。本語な岩屋はたや島。本語な岩泉県はた建隘 画 「諸家中 人生しめ、 おまけ知是へる。 康東コノア強中心ら水を出し、 これお貴人の用るるはおかある。(大全員は) 問き前端の蒙重を合する斬殺水のけ。 【寒濕咽尿】 して強える。(章宙廊行び)【教璽の献ひをの】生財末、 ではして利ける。(長春編要) (養養無対)は樹上は 民の数数に いまる語し、語が出い、 、主 それられ肉村の前番で肌す。 散となける。(経験力) 、一番より田町よりに通 中田して平安を得た。 で踏む。 る者がこの雨で 近 で基しつ肉 子を用る。 曲 21 H

酒を服 田を将王十回くつ子り塩をのる切け社を将王【少事のり題】 繋び一次参しアロを合せしる、空心が除び水で容下す。 人し> 駅すれい 動調を 正はれる出文社らか概で上級で主題が国を、<br />
の題や」<br />
が記される出文社の題や」<br />
の題の題や」<br />
にはれる日本社の表で、<br />
の題の題や」<br /> 神数があ 東川豚の球色なるものな 用る、子、及れ合口のものを去り、黄草珠二重を開了数のア平を出し、班上が武出 して価益で蓋宝し、火液で落び四等を遡って除一割的ならして解末びし、鷺を法り、 (支門か)、日を明コノ、人をして消食を思ねしめる。(本門は) 用るること一下以至れ出るの表法自ら意える。この薬は無て諸政を治するもので、 重滿 療家を大 ののなる下の鳴鳴」 四十大いつる食前の鹽馬で服す。 酒一柄を林いでその 劉帝了漸次打合派法劉臺以入り 酸㈱ア哥子大の床ガノ、十床での玄諧鵑ア駅も。 市で財を悪んで雪下を回み、 間するを題とするの(千金) ことのできるというないとのである。 川塚回暦を扱って下を出し、 「劉帝の題び入りなるもの」 死せんとするものがある。 、一月四二八日一。? 「治・強・心脈」 、り班して何る地 翻意り消じ。 、名野るの題 る。(昭以五路總市) 7 て日衣珍問 い配子しる hd 川楙 C

## 和 1sk

11 激える。○ある ボウガ、水野四銭、水草四十九省 ダ指一端 ケ煎して煮り。 「頭上の白 川琳を眯んび翻ん了強る。域し瀬して山む。(本林離栗)「あらめる蟲の耳び入りなると 関口脚、 (需要は)【小見の暴獵】和哭し了解水分らびお、運豚、法願は融各大親と指戮水一代で 小野賞を務間つ贈へ了即むる。三正到了滅まる○(書寄む) 【婦人の赤鷺」 黄財四 【のよい第一条室内で日日の扱る。自然の見しなるのの裏は、一般を置けるのは、 国人でよびし、十述でつる。 で語書で送下する。(縁急た) [軽高規用] 毎日空心以所財 るなるなが此上が個をと対はロガスることはある。出すことを得好ときひだ、 Nの薬を続いて徒をらば身し。(根勢で) 【独は人のロバ人もなるとき】暑燥の朝、 ア独の国を拗し、土財二三姓を除けて要宝する。 原東ゴノア自ら野出するもの 川麻を味なり動し、指の多して難や知自ら出るへのまた)【毒蛇の効差】 のア青いし、掌の心の強のア創墾い合せて関す。 基外数法 ある。(南計1)

數三千三十 認志び。J.と素のある場所へ針~ひお、川琳を聞んで真上が強水力素が対象 はは、一般を出いない。 「惠寒 補で少量 を聞くて獨上了強る。一日三回。(海麻神延繼太)【茶玄気は、随色の黄なるもの】川琳 末び顕のて整器が領へ、二盤とでのを 者亦二兩を土で 替二十 を 製度にして 際録では、 四十九述之間 **譖勝
う
詩
下
大
の
よ
が
し
、
正
十
よ
い
に
玄
米
須
い
駅
を
。
(
雲
誇
)** 事財の前島でおえ。 医琳三代を一本酒の漬り 勝了哥子大のよびし、十広での玄茶島ア現を (葡萄t) 米須少 銀を。(電五) 【水煎砂酢】豚一代玄目玄法へう萬万麵も、 三代び監答すして塞える。(千金古) 椒二兩、 白礬心量を人外ア駅で、(面部で) 「風蟲天爺」 熱焼しア郊び。 鄉 とある。【登論下不能外のもの】及れ人降ひむ、小財一兩を炒り、 及が年五十以上の人の献き恵えびお、 開口川川川 いないないでは、これではないは、 「茶剤の養らをの」電力はかり、 川琳球の遊ざ用は、水が味しな白酸か身毛大の水がし、 関題は名きるものなられ、 煮と 
描は 
振きて 
なら 
刺火で 
常り 
対し、 代を共び料学と願い利のと食え。 東島」小見の水萬、 極めて妙である。(細金市) って賞い題り、 割寒で副血し、 める、題ので末びし、 波お麻みや 及び 麻 なるか 小見の ができる。 田田 と概 、星

湖

色の触なるものお服しかれならは、神多 M 「骨と観光との動や」 果 主 「全と、熱にして微毒ある」 順場を細角する。 11 21 語台要指り品載はある。 林の色の歌るもの

以びが 「希親、力樂の泳、 以 ŧ 【つな聖ユフい解、つ幸】 及の物部を消え、加多り 明河 0

で現す。(下金正) 【留角週部】豚目一兩、四豆一兩玄虫、心玄夫の、焼らはいて棗膏 〇又あるおで 际 語場で服 0 ーンし 申而 田豆一箇、東十六箇を合せ 議いて二太いし、 それを服して出 金を監督で服す 0 14 本心の三鐘さ水で駅 る目 著れる 妙のアー兩を末づし、 酒㈱ア番子大の水ゴし、 二十水での玄 でほして瀬子大の皮ゴし、一皮でつぎ存み下す。その新は山まる。 椒 、ははは野野を生きるもの」年入しくして常し時のいは、 財目を炒つて解かび題も、一 最近解かる種が **玄虹るで(抽釜) 【書紙頭番】 琳目一** を数なるるの(海上か) 「田中部」 い関別 **财目十** す。(本事九) (本經濟要

栩

、「上系平く駅にが出。好ら込み漢馨、う込み漢縁く駅へ「蹇上は目極、く日家時、「上系平く駅にが出。好ら込み漢馨、う込み漢像く駅へ「蹇上は目極、く日家時 点を製し、 器を気め、 蠱を消するのである。

城目を炒って減ら、二盤を白馬で聞へて駅す。 三服以上で使し、その後以渡人が割って薬を用める。 、おいなる下の温器 

蓋し 1 財目は盗不を治する以前也なもので、目を激し秋つて解ない難ら、 奏数せのといえてとなし。 盤を主務の上層の煎馬一合か強ら相び聞へて駅す。 水蠱さ治す。 X 城目は詣~水を行るものが。 宗。 。 。 。 。 。

2 4児子滑工運展へ駅は目網に好。近のよるす塞上は近の樹、く日攤 水のゆうづ割り、波は鑑、響を行いゆうな輩はあい 神殿あるるのだ。 ○2つ智自一日一 ○子以及のよる事養となっ >。 腎療法 龜して 耳中 治風、 田

(李麗を山める)(憲章) 「十二酥の水源、 小動な际すと漁恭) 強細の急するものを治す『運動》 「小」到那節。 県

## Zanthoxylum Bungei, Planch. いななるない 岁 **联岛科** (出上經本) 琳 夢

へるるられ将(芸香科)

木幣より出了移し入る。 IE 数

**森琳**( 収錄) 別線) 不勝 務既(収錄) 4

蠡

、高、河、大田東東田で、人田政時 (無) 網

的琳( 収錄)

經路(近景)

のやうな無臭があるところからかかる諸名で

川の中国は極重、く日に寒間

班を釈り 谷、及び五家の間の主でき。遊、

煮て酒い種す。 。なのないれか [至 (推

> (原草香] Xanthox. ylum Bungei, Pl.

(Rutaceae)

(こ) 木材(現)日か、

スコくまか、よのより別に濃、樹。 Nich 子縁に決 川野島島にある。 く日常が

棄おい 夏琳 お林今 が強な との中 び程 まする。 対 は 棒で 遺の ゆう、 子、 るがあるいる。除る蒸して行る出をびあれる。 令しゃない。 市()人口()

並用 量財

Fagara schinifolia, Engl. ことなくないい 一一一一一 盟 宋 树 雷

くるられば(芸香科

稱 촮 淮

新の事跡打薬な屋跡よし大きい。 施がらし 

**₩** 

数の地でお

が、

香しくおないもので、下お太色で黒くなく、光はな

い。理人おこれで難、脚を炒い了食人。

。このののは、これはおけばはいるという。このは、

四季习虫を釈りア薬コ人れる。

、一旦多時。ひ写 [] (相

ないまのか「神神」であるか eb. et Zucc. (Ru-'r Xanthoxylum planispinum, Si. taceae) X. schin-Sieb. et ifolium, い乗ったがきらいれ、

程蓋と柱サア末パし、南ア一盤とを肌を「種庭」

高等がある。

県

£

のの日本

【つな輩としい解、つき】

郑

源

搬紅

な概らからのこのには対してるな教幸のとは極知 るな解を利力れるは、實力財でおない。 部の日かり 無量大 4

木幣より出り移し入る。 IE 数

こかで将(協助特)

Piper nigrum, L. いない 麻學科 城(割水草)

甜

179

(単学を変え、 一部では、 一語では、 一語で · (本) 11.

高海)

利 Jik.

【もる事小してい間、て幸】

まるなら数の様はとなる。

以

美なものから

微し辛い。その地方の者はこれで羊肉を煮て食べ。香

的な遺縁の小なる もので、地が狙り行いて形の小さい薬は生える。東は 出郷打北北い斎する。 はのはいる。



数の動が三級

爾那に一様、

の大食をれてりまやは日田の田田ののないのはないとはできましている。

とあるは、その子の業生するといえ意味である。

めるのでに対象では対象である。

0

これな諸財の風解である。遺跡を刺えび別のかことはない

その指は地を覆入て遺生し、塗、 いなのもる生とかる事のあるのはなるとなるとのか。 、一日野里 薬は基が解し、 辆 菲

> (京林村) Xanthox ylum sp. (Rutac.

(1) 木材(親)日か

草語よら出づ移し入る。 IE 数

### 未未未 1 章 科

城 (宋嘉祐)

記載お干金いある。

一日二川別(神後)

W

原文頭は行って ~ 4

リ、破しなへ豚やナ

重いお、で 通いこれのゆういし、 嫌いと 鍋のゆうな状態のし、 空心が一場でいる別す

雨○・○九正%を含 [知依]藥(十月)、計 木材(鬼)日下

製脈、連灣落画」

以

Ŧ

【つな筆とつい歌、つ品】

地

j.k

亚

됐

であって

「財お許い主変

場い煎して煮し溶して下を取る人本郷

XC

の予通」(選手)【選奏」(選集)【選集】(選集)【中国に対策に対

熱いア末ゴしア肌し、

**熱耐な組り。** 

ご四地でいる。

爾那二苯 小小

ちの治療い治、諸人もは幻期、胃、細の麻子大いの湯める。月子麻寒を旅ひをのむ

胃中の寒寒で食し口ると水ざ出するる去るい当か 大隅窓帯がも川のるは、砂薬を必ず出とすいきものか、臍を戯せ対麻 宗諭日〉、昭琳は、 放麵方去り を表する。 H

不齒 他家は別「他大人事を張う事」類、第一時の所一、「一切を解り」「に非文教長」へ調 電台の深で節食不削のもの、素膚麻黄、心頭卒補、台京上酬さ去る√季酉)【正鑑さ 日昌】(本書人へ別を出回の中郷郷、も去を渡、然温を中、「下を派」「治」王 、華筍 水、大腿寒骨な法の入宗藤)【腸、胃な劉め、寒濕の気胃、鼽頭、お蕗 の容様で献ひを紹う人事参

)、人なしと加血をしると。

國軍る息で食品として日用とれてある地である。

> 卡合作人。果如人的 遊戲十戶。 又果为中 果實へ対分へ四・正 %(普施士》。卡量高 イスン。本品二計異七 **渋**香料 \ 绿和 < 樹 田章三ヶ甲級連ヶ間 おとはないと) べん がポンセンキン (ゴットン・レン・ストン・人と対対量)、 脂油却(凡ソーニ・五 %=及下一、間面分解 新(一二二)%)、金 量~颗粉(格三六%) 素へとロヤローン語 Y。 華隆市へフェラ サンコローン、時間、 九盤十八精素、群経 二は触れいたかん。

五四万

電生で掛け松業し、まな脚を引して旧る総ませる。 「藤癰之」「子羹。は極大特」、う聞ふばの日東に甘正 中 21 出でお青り、焼すれがはったる のひゃろるも 暴於· 探別する。 沢<br />
お<br />
引<br />
引<br />
引<br />
引<br />
引<br />
い<br />
い<br />
の<br />
の<br />
い<br />
の<br />
の<br />
の<br />
い<br />
の<br に熟し、近月に 海南の地ひいでれるある。 月 山薬などのやうで、 回 である。 打更び辣 は配置が 0 。や事ユ B -7 薬

今お南番番園、又次交過、 胡琳は、 , ~ 日 中 砂

而

北い骨響ナルの

黑路琳三川明大七

前者と職職アルニ

北少蘇城色或〈帶黃

白色をおンソノ州

於卡森東心龜熱指 宗シテ果塑ノ半個も

のトノエハモ子湯 **站二白贴跡へ黑店**琳 黒褐色を呈スルニ

いて茶び合し、合したときはその子を 革のさ お戦場の別で至り でいていい **像はい雨雨時世して子を結ぶ。** 更い食林び 继 FO 六月び飛る。 裏い。 21 中 開 0 辛辣が。 進 21 、こし 随 00 7

2

71

印门 (椒 06000000

8 葉お長と一十年、葉と着しい略割は 対するが、妈如先の百副難既が 変は極めて承く弱く、 え。その苗は蔓生で、

初節さる和和國文と和 0 食物 2 派お鼠本子のやうなもの 「一番に関係が動きを表し、 防豚打西抜び生する。 理びこれを用るると東が基が卒辣だ。 恭曰〉, 資金に 輝 事 贈

本草聯目果混

L.

Piper nigrum

(Piperaceae)

ではことがうことう

脚)

(主樂)財財(樂年)

バンセラノ東電ノ統 韓前二 弥集かいまし せい。 白版琳ペンか 果置し盆藤スツ

第二十三第

琳

**胎** 附三十述 縁豆一百四十九姓を隔ら**に**予、木瓜陽 アー銭を服す。 「気胃出食」 嬢別島のホアお、
関縁を指で易して日光で達すことと ○聖恵
まか 21 野寮三銭を海畔し、二銀ゴ会セン盟南ア駅す。○叉なるまでが、路野、緑豆各 民却主蓋玄用は、女却當韞齊玄用のア駅す。○又あるはかお、 あおー 财四十九述、 十九姓玄称心職与一丁所可銀七。柳焚活為る。【審圖出時】孫真人打 同コンア或コン、断勝つ番子大のよコノ、三四十次での玄譜書が現す。 「心頭お爺」時脚二十一姓を帯酌で呑む。 は○情合习するともいる。(孟鑑食験) 【心干入部】 霧域 す ご が **时**财一十九姓、 ゞ角か春む。○宣計はかお、 書二、孫二十一。 、私与り姓での 4 树

水や三場は短いはし、食やれが水 この強打をいとをごある。しかし、を大食は大ると 胃を補する 6 24 水で少しいの間到すを随當とすべきものれ」とい また。 気と出る無人の鑑かあり、文、弦泳響はして、辛焼を得て習り問うの鑑をある。 胃お元来寒してあるのでおまい。 胃お示変血してあるのでおない。 なら。一方は前替すべきものでおない。 目を和するのたといるおい い部はい す上瀬するのれから、 千 (部後) はよいろれ 02027

事験で記述 されて、家い路といるれる路のと、目前はやはられるから、しんし題になっている 食えと直り以目は骨脳した。これお昔の人がお気みられぬことであいけば、蓋し辛 継に並うれるに母は問題の直形 21 後い南くその 習合法宜しき 54 胃の寒濕の者 この他お家地別が可いならかあっ 会いその書を受ける。 び、張松五の儒門 0 歳歳目を耐んでも一向それと考へのかず、 學圖 溫 物である。 財加燥で、 被するご 神場のは 雨で着るやおりこれを忌びべきものである。 蓋し豆お寒、 燒雨の者は食へ割火を値引、原玄割め、 且の豆を以了椒の毒を制するからである。 口齒をお除をまし、焼お火を助わるもので、 **財験
は大い
び辛
り
嫌
か
は
の
と** 豆を治療び用めて数を舉わてあるが、 、世界なれてられ部 , ~ 目 4.9 の変い類 お敵す 時。一部 洲 机 団田

\$ 0 中 07 事業を用るるお 子歯部パグで
お豚が 24 その聞き大いするもの

> | | 長年|| 日本の一部 | 日本・ストキースト等トスト等トンド ٦ Ш はかアハハ香和将ニ アントの智楽インティ [惠用]本品へ最 三脏館の割らる 06

子へ間加耐二五・七 %(2)卡舍三内六八 ソニヨ、海国ソ(%) ・コストラススコニ 油部、マキスイロー 〇・
大一二・
北
《
連 上四人不鹼八性所宜 部卡合三对价人 1・11、ハーオー 。一十〇%年。一 主)へ

H

の事からなりるとは強いるける。とれるこれが一、同二日一、一人は来の意識を 7 赫人の血 野人丁干玄川八分謝まる。(部憲藤要) 【謝寒核逝】日本山まず、寒禄は胃玄文ひるを **胡椒三十盆を下締き、裏香半錢、酒一種で半鐘い煎して焼服する。(響熏た)** 風蟲客寒、三蘇の天献ア神やしア九をぬ いてなるない 二十次でつる阿闍島で現す。〇祖会日〉、選でのひ、西副継服以『陆尉お鄭明副 胡椒一錢 い金する」とある。このむの名称はそれから張ったものだ。「必行林爺」的財 に対、華、葉、奈谷を強づし、難う瀬下大のようし、 続いて育びして味して兩手の心び塗り、その掌を魅気して大腿の内側が残み、 大緒子二等代を未りして指う階へ、黒豆木を吓して付いて縁豆大の皮がし、木緒子二等代を未りして指う階へ、黒豆木を吓して付いて縁豆大の皮がし、 を年間を料子で付って四十九八〇、それを凝って残を追え。 「阿伽爾夫」 米線で しんで 出る残る山を去る。立ろい縁える。〇普瀬古かは、 緑豆十一ばを市ア裏んア貼ら符ら、 ○韓力器証でお、 紫僧香、 いて独立中ではいる 息び動で刻みしる、 胡树九述、 加椒 「上」 でも出る 響 画

米館で 胡椒、 0 (業育で)【大、小財関】闘替不証か週間するお二三日か汲つする。 時財二十一姓をは 子里 唐合う賞 21 滥 米頭で緑豆大の皮ゴノニーナがでいる耐虫馬で肌で。これを弾箭水となわるで寄ます) 置して離前と 成心二七年、 場香 一 会 な 書 を 職 ら し、 黄 強 ア 家 は し、 刹 子 み 蓋や㈱ア群子大の水ガノ、三十水かつを蓋影か駅す 19 胡椒 またるに数字を剪ひし、土木香に数字を剪ひし、 背類の 隣隣 ア栗米大の よびし、 ○景

一

ま

で

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の
ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の

ま

の 少到して平近出了添える。(発力集後は) ( 激風内後) 総の 頭了哥午大の次了 「龜寒靜鄉」 歳に 人しったパ幻警帯は凝帯し、 ※豆が各一 さ加へる。(経乙九) おき、いまで、ある水で煎り、一回以代別する。 趣呈四箇 って藁いし、 ないかをいる脚と声がし、脚尾中雨を剪びし、 四十大いいが現す。(衛車長衛氏)【赤、白下麻】 陆跡、 胡琳二百五十述、 胡椒を興 一つな家がである。 水一鏊で大会び煎り下薯を去り、 原蔵し器急するお、 阿 全夏を馬がして等分を費いし、 及れ書像いれ、 勝で寄下大の皮がし、 胡椒 多しは不治び留る。 別のア劉内の耐人する。 明中 いるある 影響を表 東米角で 動の冷蔵」 て両温 一 胡椒 電 称き、 0 置 C 74 ひみ 9 24 0

はい神 别 H 雷 0 一、はになる豪をひつは、 書場アナーは、このを別す 「則、胃の動場」剛副は不対で対食は患を及びお、 自豆豪等金を剪りし、 「国胃知食」黒代を担出し、 畢澄茄、 「のまならな解の物食して意」(はまる) 置一、孫正。 るのと語るる。(書詞解下) 4 신성 AH

【深ざて」、食を散し、曳割風、心艱間の疎瓠を法し、人をして贈り食 せしる、鬼麻芝蘇丁、脂~髪芝葉る、また及玄香し~する人(霧器) 【一切の合家、 ののな思い 9 U 、ことと幸 面回一个 【つな華ューは歌、つ去】 、特づ家園也當、祖頭献、智家、 祖立ら午後六祖を予蒸し、 と上める 一年後) 県 十前十 Ŧ

みなったいというあっまし、

琳

凡を採取したならば、

二、一日衛

県

剩

海南の蓋番いいでれるある。蔓生で、春白花を開いて夏黒質を結ぶ。

では大國と対談と財法いゆらなどのかある

一種であって、

が

胡椒と

からいる。

九月八年る。

诚断へ果置へ一〇一 題人 2-24(%) (三)、鼎加斯(二,五) 断砕(一・六)、エム質 (人)、色素(ナ)、アム サードの題、カンチ マムニギルムガアム ノアラート、潜館な いそかと、教堂ない 要審のマラチアムチ 14 4 = 1 = 1 - 1 - 1 - 1 サイトインナイン サーネン、二種し未 サイトスなととと 文山中ニヘア 艦即サイの最近へ形 (氧体] P. Cubeba /果實(畢竟哉)人 (一・ナ)、樹間状で、 気へ一年下れてと (%IIO·O)K K & (三) 木材(銀)日下 、(正・二)べる での丁号

夏刀葉は生き、 孝 今お憲州ひかある。 

いはくして帯に同い」とある。

い
財験であって、青いときは
から離み探らるの
な。

砵



のそば時極といる。独するい、譲激の選州志い『登哉は諸海國い生する。これは極

の日か、路球お南海の諸国が生での。名が向えをのまれが造成といび、場が向えを

、ままる、一般のは、一般のは、一般のでは、一般の

歳の日く

锤

兼

歌奏流子

7

切て激し大きいものか。 (Pi-[主樂]畢登並〈 Pi. [夏韓海] Piper C. per Cubeba \果實 卡 知療前二殊果サル C) 木材(親)日下 ubeba, L. f. peraceae)

IE

ものし、いでれる番語である。

草席よら払び移し入る。 数

こかで特(貼城特)

EI. Piper Cubeba, L. **味學科** 

ちつちんでか 置) 誾 录 硴 惡 擂

本草聯目果院

土には「紹力九月九日を尚んで土九と称へ、薬黄でこの日づなると深は限しう、熊

果なるものは食薬道けといえば、思らうねやおもととでない。対するが、問題の風 >疑り、人人) 魅了色の青緑なるもの法民薬黄、

三月习球案の職法玄關を、少月、八月 以置を結び、脚下以四と、触いときは激音が 課述な小と あば、 お熟すれば探察ひなる。 顶)

は多いゆうかある。木幻高と一支箱、

(Boymia rutaeca.

でもいこに対理道」

Evodia rutacarp. a, Hook. f. et Th.

rpa, A. Juss.)

、からはは憲憲ひおう、今日通

のののいまま黄お土谷、双次家府が主でる。よ月九日が釈いて 劉璋する。朝八なるものは見し。 越 菲

さ快しとする。それは異なるな解のあるのわかある。初谷日と、菜黄二年の意地は 北下、アあるは、薬コ人れるコお具の地のもの 黄の字びお命(ま)由にまりの二種の発音はある。 歌器日〉、 来東 1南、 いないないは

一日一同、三四十戌かつる霊器が肌し、

話を未びし、

惡審

けるがある。一番中院木薫一数字

**蒙荷葉三錢** 

畢劉莊半兩、

畢營流水

補原の土文から強るものが。

割割い合調する。(崎 際調氏)

塗う 数千大の 水ゴノ

とまにし、

畢澄哉を未び

願述の

は魅い切て 色黒 ~

所在ひある。

赤日〉、

(m)山路琳(割本草)

審

树

大いとお黒豆割ど、

却1字~、大陸ゴレア番なし。 心頭や 耐力主数はあら、

哉、富貞蓋各等伝き末づし、毎銀二錢さ水六仓ゔ煎
ガント郷し、酒む量さ入パン駅

「京歌の目が入りなるもの」、蓋明し、響き出でるがは、

(極團強戦)。中

と数37平胃溝三百物を銀をで(糸藤巻氏)【熟寒核鉱】配部して日ずぶらぬ31灯、

し、心量を真中 32世人なる。二五回37 Jン族はある。(無額事) 【真薬予証予以もの、

## 木陪よら払び替し入る。 Œ 数

Evodia officinalis, Dode. 一人とう?は存(芸香杯)

まるいしのの 菜 黄 (本醫中品) 光

**数る。名間で用るて数さ撃やてある。** 

环學科

人半一十年一一八 スペルムキンチ [剩用]塞舒蓝〈林院 三。(主藥學)又事登 ~ キ財動へ拾いり十 双千木十一八合シテ 我宝一三七ドイ。(や やまからはしこれか アントキャント 二種用せっい

**小劉、湯劉の霽の深代以人な。鬼骏日〉、刺八なる** 口の関さたものお毒はある。をう気をみが怖を激め、人をして対産を 脚瀬不証ならしめる。 割谷日~、辛し、燥である。 深をまし、火を値じ、目 、文置を置り、上想、愛社。される極い真義、〈日本今〇。さも露を堪、丁く是を 「辛し、監対して小毒あり」 撃日~、辛~苦し、大焼びして毒あり。 **幻ガノ、駅の太剣の囃の血令、** 紫石英を母る。 和 ものお良し。 1× 思し、

。 完誠日〉、 小子吴楽黄玄用のるがお、 邪影中が参して 苦院なる 竹を走ることと 同、 なって始めて割じて用うべきものである。

| 八里の一個小園で園一個水面 致1<br />
大東流水四半の中3人<br />
パー百回3<br />
でも7<br />
近いでも3<br />
があるまっなったとき日 光で達し、それを水、流び入れて用のる。著し糟煮のものを用めるなられ、 い着一盆を用る、指を煮て十郷して後の薬黄を入れ、煮り達して用るる。 薬 要日う、凡子これを動用するいお、 るれば、天年を増し、書を鍛り」とある。 以

路状ティントノー動 朝上京、石川一瀬 高、四〇四(大,四) 其曲計品對如於不少 P A A A A A A A A A A A 端、二四六(明)三 エポテンニ基因と。

(II) 水体(湖)日下

動

景がその言 ものなとしてある。とある。又、蘇齊語にひは「近南の財景な費長見の間のて置き 學人計。具見は「九月九日以近の深川災而はあるはら、急川組夫の古者を攜步しるる 27 長見おうれる聞いア「うれお家人の食みりひないかのが」とい 兴末 して色は赤くなる。その見を形って頭び耐するので、それで悪縁を網け、 以下傷をいる、以外の強を強立とはを養のかりに見失人家 でを含めばその職はなくなる」といったので、 始び一般にこの日になると、高い山に登って習を積み、 藤 そのを方置って見ると、 く。それはこの物語から始まったものだ。 家壁のと高い山へ登り そろで南北の 部び暴死してあた。 のなる 『ない 一つりの 、り悪 0 1 14 21月 0

1/2

難る際、「潜る屋、の留る中、「罪る金のとりれついは恋のところのものないない。 近を埋るけれのものである。案でるび、米力車銀けび「中五省家角の書 まった合することおその色の縁が思れてある。幼の中景の史来道器、智龍四逝馬の軸とは合することおその色の縁が思れてある。幼の中景の史来道器、智龍四逝馬の t お 凝 刻 の 詠 玄 的 以 、 及 な 順 、 胃 な 盟 め る もの ア 、 い で れ も こ れ 弦 用 ら ア あ る

、きものである。これを動用すれは柿の姉らもので、蓄薬はこれだ外へることを得 断勢治教らすして規禁上並し、即副軍当す、食すれれ人なして口を開き **剣寒副薬しア蘇は上下し帯さらしめる。この雨は口を以対人をして寒中** 御題し、下はせしるる。これが異楽黄の害、焼を以てその厳寐を断す 以ものか。工家を財する恐んあるから多う用のるお宜うない。 の調え目

こ素日~、京、知見い買~、守いしてぬる。陽中の割であって、その校用い三き ら、國中の遊遊日。2月以及中央、公園園寒の野家と出る、前野を背する。 日本の東京山路、前町を前では、10月の東京田市の東京山路、前町を前である。 10月には、10月にはは、10月には、10月にはは、10月には、10月には、10月には、10月には、10月には、10月には、10月には、10月には、1

> 支継畜へ割臭薬並す 獅ンデ日水畜=じき 原和鶏麻モド。(準局 げニナ)

**泛刺** 

この物は緑を下すことの最も悪た。 でので

0 ٠ ر

よ 真果菜黄イ麻シ

孫二金スルテノチ

菜黄の緑灯研~上る」とい が が 現食の薬となすゆわびいかはなといえことが。 毀魚たお 『豚の麻 割扱 > 下で、 う食へ対別を衝き、まな寒を剝すものかある。 お嗣な衝き、 M のておれる 曲 發 24

五。(準局式二十)列間二葉卡谷影隊イス

(蘭孝)吴菜萸へ本肝 二独下奈瓦、熊本嵩

0 11 11

4

6

闻 潭 冊 床水劃を治し、 隅稽を重し、 剔を断し、 朝を勤みする J(大胆) 【麻り主族はあり、 四副不証を治し、 頭部 (主原な鉄を)(産業)(産業の総血な下し、 漏割の激強、 不整、 「郷を開き、帯を払し、 別古口部を治す」(報金) 鬼越、 朝之殿も『行行り 不齒の蟲蠶、 が麻・ 而源、 一、単の響電 て到風る 丁二二

**南北奈泰**香—聚稿

正〇三(大、一三)

韓出奈、韓田一選

端、四十六(大)

のシナイミ。

ta Phytochimica

荫<u>扎</u>奈泰<u>参</u>一Ac.

胃薬インテ禄末火へ

丁紫卡用厂。饼宋人 ○・一・正・○曹日一

(瀬用) 岩和芳香 割劃

(九二四)六七。

血車な組を、風服な逐 三蟲を殺す 畜後の心軍。 **角** 宣不能, 来来を味し、 夏浦 河河市 「五勳ではし、致令厳康、 營 剛剛 、名下名と、「上名と、名思る中」 〇以島 園園神殿を合し、大側の趣家、 「鄱陽轉節、 校觉寒燒、入本醫) 心刻献を去る「แ籍) 麻補、 。~聞み証 県 一一一一一一 £ 車

証もの第

心臓の精治

(超離)

韓出奈、前田一藥 篇,四一六(六,正) 端、四〇正(大)四) **韓** 九奈、 苗木 二十二

《歌》》。 S. 是莱萸哥——莱萸一代、第二十醫、 **当**蓋一大兩, 人參一兩 3 水正 類述スト語が最、そのよる国にななの様を脱島で寒、はのみな場と覚べた上下へつ し、上い胃に乗じ、気と相合性するものが、糠醛にはこれを織といれ、素間には「病 類はきとなる正しる。してかるる服をひのてのなるのとしては動きのとは著き深 門關示習添の穴以灸する。吳莱萸玄指で被う燒刀、翻丸、栩子玄曳玄法り、各一兩 る。「題風の献る」菜黄之煎了な點馬玄解以來名、酸も以邊財玄結えは身し。「千金異 代で三代以旗シ畑ら、一日三旬、よ合いのを現す。(仲景氏) 【画山幽樹】 はお上い同 は國中なら既つて上い四颗70葉を、厳深重圖とし出ること指わず、 返れ幾十難い至 蓋夷三代、帯齊五代を応煎して五郷し、名えるを持つて半代を服す。一日三服。心 し行る得けに強まる。(自1) 【を映の憲法】吴茱萸正錢を揚げ煎りと別し、行を取して行る所の。 脳めア形と。立入ゴユザ。(孟靏登第) 【親風口刷】言語不踏なるゴ お、楽萸一代、 【咽尿中心】吴楽萸、主蓋の語がを角ひは当び身しの(金鑑む)【智禄上黝】 多末ガし、酸株丁部子大の水ガし、七十水、このま 蓋揚丁駅中。(新五14年)

正七十次を現するとそれで日き、少更して小動は楽黄の臭家をな かな食おず たが薬黄を酒び三南 關系であ 格と一定して十日に 口古いかる ٠1 所を着おいでみを小水が割のア法のな。演教が用めた弦響も基が繋んのなが、 ふい祖る。一本郷では縁まる』とある。 ある人は小豆の豆汁丁物をもかるがするが、菜黄一二姓な働入了我をると開 而るソ素黄の割ね上行して干らみをの対といえば、それおとうでまいらしい 蓋しこれる役名の 剟 一中脚等を離りの目順 多い再びずらなっなり 捜日間되が习我し、 硱 X 謝器順の式でお、 しる、海切十代以食碑を難でなとぎ、変幻天剣の變かりখし、 百姓でいる盟階で各下す。 熱でなあるは、能く熱を引いて下行するので 強がを副出するので、 たといえ。やおもその辛着を採用したものである。 宣际の応年、 吳小代の大き掛アラハを別し、 部下大の水ガノ、圧十水でいる機水が駅す。 菜萸末を暫か膨へア兩国の び撃をし服しても数はなんのたば、 背寒し、 これに及ぶるのはなかった。 、つ経頭 TI. F1 21 と會した常上、 しある際に で、金髪回一 生じたる FI 雨 07

萸

平大し各わる。(麻麻はた)【小見の智辭】これお除生物の寒を受わて難らものかある。 【午週姻出】菜黄三代を附正代か二代の煎丁、三回の会頭するのほ まる城へ了等代を水で煎して銀下。(同五)【冬年の郷野】法人ひこれは多い。これを 是菜黄、誠黄各半兩多大蒜と共习兩〇アラの選习塗り、 ペクト語 株子の脚で悪す 職子大の皮ガノ、線で悪人で割中が解び、一日が一回見へる。即し子宮は開いて対 ならぬき十二て一般をいて、かなつあでうかられる遊がれていている人はかを重動をれるやうかるのかない。 さ上回書い面付了熱し、草蓋を面付了等行を未ひし、馬丁一銭を服す。(響声) 【神 衛の蹴び入りなる もの】薬道を切のアニ兩を断二蓋ア一蓋び崩り、二回び会頭を 水土同小といえ。 吳茱萸三銭を歐盛しア水ゴ人パア煎ご、その行づ鹽小量を入りア 蓋し楽英与詣〉観測を劉め、水道は箭するのア大側は自る固うなるの 略手事〉【指心上文】 豊��の岐をゴお、薬英一合き水三蓋アナ代ゴ煎ンア脚駅する。 る。下の了平波を供る、(墨香籍)【素圖達圖】上を四以打、是菜黄を耐わて炒り、 この(響震は) 【動人の刻窓】十年子なるゴお、吳楽萸、川脉各一代玄末ゴノ、 果り以用のア族を奏した。(同土)【食券の存納】胃緑の龜的かある。 画口い別す。

三回い分別する。 吳茱萸二盤ざ計で勵らし **録で購へ、香耐一盃を職で煎り、燥しな中パラの菜酎を入れて煎り、一回激ら** 音【率任連筆】(Amma)のよれ「為に帰る「難職を茲三日報、「難胜」 画頭して日い漸末い数具するもの、及び剣間は整幹して散となるものを治す。 矮し丁更正以弘心玄鰻も。 麻の数るを予結みる。 新ををな直さい山をる。果り以蛟 一兩、桃二一兩を味して炒り、薬は煮むなとき薬を去って桃口を切り、鬼、尖を去の な単回 **齊勝か哥子大の床がし、正十床ででき空心が鹽器、 歩れ階か呑すす。 岐宜tかれ**星 、ファギア州二澤諸より第二年の海の一、一を記り東に多地回 割寒」四胡遊命するゴお、薬黄一代ゴ階を料サて踏し、解弦二箇ゴ回んで蒸し、 しア知のア現す。立ら
り11の《書
整論氏》
「関「京家部】

登場し

下窓

変域

ですれ

が 四両を近槽に受し、 鏡はあつな。(響惠は) 【中惡心辭】 呉莱萸五合、酌三代玄紫郷し、 【心頭心証】 はお上び同じできる) 【俗派頭部】 四両をは西に登し、 吴菜萸を動を法のアー刑を四代し、 いるというで 二屋ユ 外腎治 任

晋下大ガノア各限以邓刘名、五十戊での玄流陳以お島謝楊丁惠、霖の皮を跟し、自 除のお米角で菜、古の皮を肌し、赤白除のお谷中でのなりで、「赤麻翻部」来黄と 命をは打みるる。二四回了監を予して激えるの(相対氏)【頭中の露」、東道 ある更ら疑す。 夢は移植するときお子いる丞太ア題す。 街したならり山名るら(熊曽山 以し、百草庸末二兩と共び貴重を水317、白苔藥末二兩と共び薬黄を皮317、各頭で 黄二代を織いてその対が入れ、強い乗してみのある破を置いてそれが坐ってれなら 三年を続いて酒を取して煮熟し、布で悪んで激上を襲し、合きれば更い炒り熱して 中に北三紀を見るとして歌をあれば、東京を勝下一階別とと西に北三代の北京の後、東京の後、東京は北京の東京の大学のでは、東京の東京の大学のでは、東京の東京の大学の大学のでは、東京の大学の大学の大学の大学の と会権する。(金鑑本章) 【小見の題録】吴葉黄多数も独しア末のし、天然心量を人は 果豆とな合せた馬を不む。(下金市) 【別妻で常い血の出るもの】下階は盡い効をれる 日費も、煮て駅す。(千金羹)【口食、口疳】菜黄末を増で購へ下見ふび鐘る。一歩ひ して激える。(東部で) 【即郭の龍み】 おお上び同じ。【平崗の多龍】 装黄を断で煎し 今らび発献するものかある。此を触のとはる利り、それを派う割いと断を祝き、 調で購入了道な。(乗事氏) 【小児の熟養】一各人吟報。一各人職務。

装備し換金して文人で養療し、熱いて番子大の皮がし、正十成でのる米 客職半線を間を去の な四上をひとをお再服す 共び砂のア末び 吳菜萸二兩玄哥的 することと同びして共び香しく炒り、敢ら眠わて各限が未びし、栗米頭で番子大の よいし、各限い郊水&、三十水。このを、赤麻いお甘草馬で黄重水を<br />
現し、白麻いお鈴 ○簡筆峯辮興七の二色 黄連二両を香しり炒り、各限以末 これは帝西所山の誠然は 胃が密を受けて下麻し、頭部、 〇百一點九の變面水 【不麻水斯】 である。他の薬でお食であっても青圏を分け解することは不同語はの(発生になた) 白ら藥各一雨を用る、 一日二別。(書歌)、【智味の山を以をの】古は上以同こ。 白麻シ日刻刻なをもの、因の颶風下血ば治す。川黄連二兩、 滅気をらびお、吴莱萸を影う断感して似り、 たもので、一婦人を残合して基計後はあった。 ままる数し、各二銭を水で煎して駅す。 赤白麻ゴ紅谷十正皮を米馬で駅す。 素摘了哥子大の次ゴノ、二三十次でいる米角ア駅す。 輔 吴 菜 萸 二 兩, 黄重 味層局式O刘凸次 吳 茅 萸 いるというのでは、 不省れなるを治す。 【赤白不麻】 7 が形 寒野萬人都忘し、 けて砂り 誓哥ア莱萸皮 議館光び事へ 0 て影響し、 る。(聖惠力) 麻 米霧の一 貧で服 黄を物 75

哥 業遺財を未づして一両中、戦米半台。継子自三箇、別した難一両半をほして小豆大 「七白蟲」来東の東北劉の畔財、大と計割ろのものを渋む 0 東行某英掛 下以土を去って四十以回ら、水、酒各一件以一次漬け、早時以一回以合服する。 な切らすするのである。(下金よ)【刊巻か蟲の上づかるもの】別中の赤湖は出る。 のよびし、三十よいつを米島で現す。蟲を切り下するのである。「刺巻鐘換」 中ゴからためゴ海となれば、人をして彼く調をしめるものである。 9二。 1/1 调

の曹尚と戦する本語」「調査」 提二集の主の徐み以神に卑、はため兵運へ「楼閣に支記値小、子」 禄人孫章の翁血される、白難之衆を】(県経) 出るのなるない。 【中惡O頭中廊), 県 (瀬葉)「マトロとな。ひられのでは原中 Ŧ 薬び同じ。 食物不消化 (器際)【との下及県 和 政主、 3th 索独之班上 (西雅) 放逝を治し、 「子園の蟲を殺し、 白皮 果 XX XI Ŧ 됐 0

天和下の裡。至主蘇科に正面之了攀業、中間に落之兵法を題に義。主場天皇主建副

返とする人物を

ىل، 轉節するものゴお、艾と共ゴ熱いア暫ではしア器人人大地、人夫法、溜き吸しア 会家、内水腎の陰部な上めるり、鹽で羈へて郷入は肺憩はある。 造り対長へ 、「上を当。と」 以 【しな書としばべ、しまく幸】

まれ上が同じ。(F巻) 「警査 苦酒で購へて帛び鐘のて乱 楽英を胆ふか桂でる。骨幻湖へと出るものかなる。(孟 果菜黄ダ水で煮り一蓋 **ゞ監別する。その骨お込を増びないて出る。な到出のときお再別する。(□□) [海辺** パを撃と対論、響の今とな響は出来を今とで、日日 57 漸末 3 動悪するものである。 立ろ刃平安を得るの(潮金市) 簡ではして塗る。 酸以粉のア蛟を知る。(同土) 【骨 渡日ゴノン四班は石のゆうゴ望っなり、 題は新けて炒って研り、 【魚骨の頭が入りなるもの】味能し、出し得ぬがお、 【ま人、小兒の風雪】 毒剤」吴楽黄一兩を末ゴノ、帝水で味しア三回ゴ駅も。 一代玄隷パア末ガノ、 果薬黄玄哥が煎り、 木香祭公の演器を消め知識まるの(夏子盆は) 「肩証、白禿」つではを契薬黄を用め、 寒燥して止まず 吳茅萸 【海灣〇上隊】 中にあるもの」出のひは、 及の發見諸毒いれ、 「寒燒到雨」 2。(外臺極要) (器切成器) 発売が

お、臭、食の二菜道却一附かあつり、薬が人外を対お果地のもの必用のる必見しと な開業はらなている者と選手による の歳びて 34 いではる薬黄の二字の計別しななるの財別してはゆきな場の別のたの ~、食と不食といえおようないといってあるは、子(細食) は離び間よび、 する。この一緒は重越して記載すべきるのでない。 捜琉ゴバ

菜萸コして口の開

流赤む、

34



選出でかれ、数のは、一般のは、一般のは、一般のである。 かいそれ等の著名が てからことが口がよることを解去のそ 黨然なるの状あらしあるからで、 いっれる野なる各はあるのがの関丸の独り場である。 及が数子といったのは、 この時に聞き響子であって、 THE TANK と呼ばっ古外にこれを譲 頭を割し、人をして鉄、 おいる。日から

での 赤田~、爾維フ『琳歌贈料』とあり、 <u>国難の精神</u>が「麻、蹄の題なも」とあつと、

極解 公中松にのか了。ののこれなく経はに影響、く日音引、大林(原特)大橋(熊旗) 際 音は蝶(+×)かある。 葉音は쌿(+)かある。女子( 圖) 今日かんであるは、これは霧の字を織らなかのなからであるう。

000

木陪よう勢しア払び人び、合置の鸞子を制 サ人 E 数

吐膏 柱 多茅(禹本草)

**業業業** 

或受 し、微人で載り弱め、縁つて容を去り、早時空頭对一代を服す。 蟲を取下するのか、 蟲にあれ死し、近れ年的臘は、あれ黄竹を下す。凡を薬を引る相の打解機の言葉を **莱萸**助 太きをの一只、大瀬子八代、熱丸二兩を取ら、この三脚を図明し下断一キョー 後することを思い。(画繁古) 【智様で四班の重れるもの】 は然するいは、 合半、桑白丸三合、南二代を一代以煮取り、一日二回風も《曹齊氏》

[ 匹割吴素黄と同 1 ~ しはは少しとるけわけ。 水泳を熱する ひこれを用 りる。 血を出としるる。 選末を下するのである。 煮汁を現すれど最高調解、食噌の不留外 からは対けの著しるのを教をのはし知って子で潜し、郷日は知口の書したのを教を 職所の治を大り、 放逝を除き、 。 るるは者し、「漁漁」「心頭の合家派」 はおびして記念の書 以 Ŧ

高を上述して表すして書まし、 「本っ苦し、大魔コして毒なし、 一種である。 関連を関 、く日本で、こも藤子澤電、順法、後継、く日遡。の写えれてばのみの絶え日 和 紫石淡を思る。 Jik. 0014

島を癒し ませるとしてあるところを見ると、これは古くから尚知れたものである。しかし で減乏人れて難少て利つたるのを支加といひ、全た辣米面ともいえ。 薬
は
長
り
、 **被め名辛辣プロを置するの分。 気砂中以入れて用のる。 思慮の風上語び、** 旅下お一般であって、木お高ト 能入辛香を發する。 今でお上流の人がおこれが用のることが学が。 **気薬中
ガスパ
る
対
宜
き
を
の
す
、** 意子、 **氨菜**萸, 命の日〉、 これを取る 子お森か、

「気を」強へ○・正心 中市大。主知 なべくとしてくないな x x + 4 1 = 1 王・一)ベーくエ

薬な市職は難し、その状 お黄色汁。屋曲ホア灯炎下と利法。뺿暗り刑間蘇と打この耐である。蘇と艾と灯難 **食薬黄お南北いでけびきある。この木おやおり基け高大で、豆と百月び** 対、変お青黄で上の小とい白鑑にあり、 はんかのななるの 、一旦迎

121 智もの 南大の此かお新瀬して果 うの木お高~大き~ 大賞を以て民の 34 0 当な観客品として用められなこと
は他い
あ 吳越春採び『越幻甘蜜、 以たるのか、整間の庫はある、その子は辛辣で豚のゆうが。 江東い番する。 ・中間は七鷹、く日器艦 への触物にする。 歌い様いた」とあるから、 変お蒙古 、てる問 非

越がずの財子は大利は来れまま 面を験一の上際ころをいるみろっとなけ際は間 實在ら是薬黄と各村、獅子名形、現法薬黄の別となけれる用となるがわれたら食薬黄と 夢にひれ「「上村藤を用う」となられ食薬食が。となる。この一焼れ前店着丸の 来更打吳此のもの必須のア藥が人かる これお吴洙黄と副服しかの 、上黨。 2の那個 曹憲の書 『勤子、一各负菜英。 被するび、 会策といえは一様の二種であって、 お国の動力らの題かある。 刺激器心食菜萸 の動志のお 窓 を五すい十分である。 資料 あなら」とある。 である。 該協議したの 0 9 おけ FI

> 1) 本林(銀)日か、 (原種物) みなかがく かた Xanthoxylu. m eilanthoides, S. et Z.=Fagara ail. anthoides, Engl. (Rutaceae)

二十五

地は る。ないのやでな、状態が強い扱うでいて 熱い幼のアー対が襲撃と落を、よ月以子を結ぶ。 木の状態も熱のゆうか、 解手がある 表面お青~裏面お白~ 暗さ離木紅東南の山原り当Yをい。 兩邊い首葉おあって、 お雨雨隆生し、長~して歯はあり、 正六月以青黄色の赤玄陽を の下の簡節の下の 富木、 るのは、今日の時 五薬( 0 % C. 0 薬 1 麵 0

鹽港下
お兵、陸の川谷
が半下
る。
樹の
米
遮 は
都の
子
の
で
の
が ばお小豆打とで上び雪のやらな鹽にあり、羹を利るび 2 用あられる。路南地方でお、子を邓のア末以して食人。密鑢のして勘を止める。 とれる魅り気のアチは生し、 識器日~、 湖 非 0

お屋中71 童する。と八月7期を担き、気のた相お鹽様にあるやうなもので、指を用めて薬びなる。とあるはこのゆである。 
お出でおる。 
数型でおれて 
のか

「黼木

降野の生び

前木多し」とあり、



川葉』に短季川 ののののではなるとのないないとことなら、なんの籍をおあるのがで

天體(靈草溢)、球攻種、谷黄)、類解(谷黄)、獺器口)、 隠此 けいり っていて顕化ない 大鹽(証法)

五一木幣より出り移し入る。

数

쨃

**脳服する。(殊線は)【八萬 副除】 到新するガガ、 鄭子 よう皆す。 劉子、 内豆 藝 各一 阿、** 雨半を用る、米の一半を二地と共び黄び砂のて末びし、一半を生で騙のて末 栗米㈱か酔子大の床のし、一日三回、正十よいの玄刺氷角が駅す。(豊鷲は) 東米一一 7 21

(会性) 「機な強し、震ない」、「会性」、出かる強い、震ない。

また。 (本、白部下) 瀬子、石菖都等代を末づし、毎日鹽配か二銭を

附

指う派した雲十分利相の町人入和冬 、はい瀬島器」(基間)でも略温

書き知いて米掛い一支長し、早時本題い一一件を 「耐重いは、 以 Ŧ 白皮皮

煎して別す。(間青)

からるが、 趣を残すいれ、 、地中華中のマタエスで、「郊子で」 以 Į 白皮皮

○ ア 派となり、 それ自らの 難 ゴ 人 っ て 動 となる。 その 本 お い っ れ も 水 か ある。 鹽 繋 一個 一、上、 正常おまで習、刊のまり、水を凍入の広はある。利以の渡越、 の鑑はみなこれを用うべきものなのである。 领

瓣 対に能っ水 して照するものかなら、事を出し、御を聞えば、はなれるのかある。智の主る 正派は、浦以入へて渡となり、塊以入へで越となり、心以入へと行となり、相以入 脳接干 お、尿 お寒、 泡 な 類 ト 一 と 瀬 い。 刻 中 O 刻 か あ る。 お置く要いして間をするけんら、火を剝し、繋を出し、毒を消し、 はらいい。 ffi

殿川寺と治す」「南西」 画 子を表め、

「といり、日後と終了、王後を生」「面上の上面」にまる後子、「一般を終し、「解る」を経過 、一根を葬、一~類を見 いつらまな事 火を剃し、粉を氷し、 「江東京事」

南を上る、

以い最近八風

ノエル・暦三次の子 五〇一五六%~單字面手合作六。(龍世真 一獎語、五六三(明、 アー、然ンドは野路 上、経館を製出スル エイ容易ナラスの出 舜勉 八野食子二合市 小類四一四一頭サ 舎市べ。(主難 (題川)軍寧國卡獎出 四)一、汉隸鄉、合量

天行寒 新門 酒毒毒面、 、名下る別 解車を別き、 野中の熊滸、 電影 家館、

県 ¥ 鹽青丸末、海ダ喘す 「熱~麹し、微寒いしで毒なし」 沙 连

あって観事を重する お桑の東ゴ女園は (E) 結本

**都平身液のゆきな状態のゆのア、水が勢して羹** 

込れ減と干とで

たが不樹の薬

真臘閥人幻対を引みない。

マスシニックツつ

(三) 坂平樹

独

PI

28

6

印末 21

雲南臨安の諸龜ひある。

(E) 額角

るる

规 業は服置が似て家は香しり、 地でおこれを食え。 0 独 ر ر ه t 誠

(知分) (形象) 正治子 (五) 本体(現)日下 撒派特

層の ルマ 蘇ニ紫子深正常子 解除シ全り突出と 床子 ザンテノアビ 雑類 4 4 4 瓦好 米 トラン。支那童ノー 本所強しテノー活 見輪ヶ里ニスルモ く含量大ニシテ 卡異二大·恐

薬土の蟲はあって諸気もら正常子お入月が知る。 生では青~葉をは幻瞼紫色ひなり、その妹は淡緑色で、 張って樹上い鹽が って、小見お子れを食ん。 対所などいよれあり 「の苦園お水の承は働う」 調では 対やの歌虫上の歌題であ 横, 肌の歳平 去び附続する。 31 生する」とあるは的ちこの物である。 ず、医此式で幻釈のと木鹽とする。 到 **派のゆうな**状態をなし、 これもその様のものである。 に最高に結局してある。 く置ふえば宣細さい は大

栩 未精 **家平** 

**砂**角

未精

ç. utilis, Makino. おしいだい Angelica 步宿 好好

教(-) 金(-)01音はある。(恵本) 事(爾郷) 嘉 音は強(き 岩器

7 盐

木幣より出了数し人な。 E

数

Thea sinensis, L. い対を採(山茶科) 麻學科

रे प्र ( 車 本 車) 茅

動。 七白 蟲を干すびお、軍び熱いて末いし、 西方一種とを服するお出け吸にある。鹽、 糖丁的職したものを食へ切事がを注し、 (意味)なめて兵性相足口てして人はれるしる。のの下を増、「題を屋

遺 下海地の強きな かの、 五次表別人 がある。 はある。 はある。 本語の でが、 の能、 現影、 の能、 現影、 県 可

ア対職して果び立てて含え。その葉を担は糟 して食べる間からは翻るといえてとだっ 「つる幸としい思いして書なし、 当 0



各会却「ある人な難骨更予更な動な、お倒な珠鶏 J別のなな、この財子調で煎リア 芸術を予要ると出出した」といった。<br />
又、後署官は、骨頭を治する<br />
おこの見る用の 本草業義习『鹽港子掛幻詣〉継骨を捧びする。 書を願らして鹽少量を入れ、綿で裏み線で繋いで呑み込み、上下パぞれを牽信し、 対するに、 やはら骨を触ら出した」とある。 , ~ 日 はの後の H

Photinia glabra, Thunb. いどら将(薔薇科) 古るおおおれた 以 極 林 子 圖

代酵よし込みはなし大き。 正 数

の。 割谷日〉、 退から初切れた各である。 锤 岁 淮

到的野豚の酸 高と一支給、対、薬は變気するものか、三月の四出の白い赤を開き、水月、十月の干は 核を重ねて用るる。その地の者は鹽、 、一項領エレ料をアな一階 して帯が短い。

韫

はるないか「対極道」 A TO SO A Photi. nia glabra, Maxi. C) 木材(親)日か、

大き、高なるものは上であり、歩なるものはそれの大き、薬の参わるものは上であ 茶の筒な 四枝、五数あの下 気のはあて前を出たときのやらである。 四月の間い生えるものだ。 三技、 れを露を透いて探る。まのまなるものは業績の上に難し り、智なからものおうれび大き、二月、三月、 間の主に、長を四正や、 のお欄石の 82

なれてはのもるな縁、したで上かのも

さ、財お防秘のやうなものが。そのお客でのお客でのおをいれば、一本ならものお置上が生で、 ままが出立、下なるものお置上が生でが、 る。鉄社がお加え蘇えるやうなもので、三歳のして飛れる。 闘学劉林の楽なる



一月なら渡十月のよのはなら、その日、川の刺山のものおお、二人か合せアー時到3 帯おて香のや 割かの茶瓣り。茶お南けの嘉木であのア、一月. 北お白薔薇の うら、質な常階のゆう、 薬お回子のやう、 外のアニなる。木幻風気のゆう、 う、古外が食しな ボガと 当が異え。 いるのかあってい

この様に称っなも

爾銀い「野お苦茶なら」とあら、寝糞 紫るいてエスア といえ。春中の彼めて生また嫩薬で煮し割して苦水を去り、未のして肴い、きもの 煮て藁び利のて角める」とある。 、りまるれついた中川の草郷 「勝幻小さう」「四千以別ア冬葉を生する。 山谷江生生る。 大学の南山は客 \* 日 / 日 11年 0

置等に生きる。 で死れる。三月三日以釈のア海下 闸 事

顔師古れ 割り素園を始めて轉じて金の音を全体の切(x)としたのけ」といった。とあ 師ち古の茶の字であって、音は金(-)である \*\*小語と茶苦しと、其の甘きことべの加し」とあるおそれである。 大谿コお茶の字はないといえば、まけ黙~聞~と見ない 場割の丹領線は「茶、 ものはいる。 返は、 21 程 糞

ひいて茶るのななの法へ古』は様む、く日風 四いれ替、正いお神』 題う我のかるのな者、一を減といる。と助けでおこれな苦菜といる。といは、 は「そのなり正あり、一つお来、一つお野、三いお話、 シケある。英音は枚(チン)かある。

(1) 木林(東)日か (原動物)かみ Camellia Thea, Link. = Thea sinensis, L. (Ternstroemia.

水水 劉 0 急び着するものは、対、対は器地下のものと到別同うなう、今むやおうこれなけた。 野け対いよいよりし。山の山のものお、近出来のし近お末びして川州るるは、 及 がなりがいが 血で呼って木びし、全た冒職某ともいえものはそれであるといえ。 いかがら でお人様い触れると随うなって人しく以識し得なうなり、色、 蘇の港茶がれお割物利到無茶の醸する。 0 鼎州 , |-0 载

なっている。るし、両を難てその地の水で煎して服すれば脂と溶液を持り、一両あ れ対則前以表はなっなり、三両で謂う肌骨を聞うし、四両で趾仰となる」といえの その僧おその語の重らびして、一兩倫を採って服すると、全需を服し盡さ おいまれるとこ 71 製作 そして我は寒をたといえ。その蒙山の四頭の茶園は肺鯵ら予離み取られてある のさ 24 三春 が野 か 強ひ、 猛悪な 島郷 お 近年やうやくこの地の品は高質いない 上地は出して諸良である」とある。 中墨汁打訂章木比密主墨퓘丁 いまる常正 以外 0 M Cop

は温で U B 批众 で、帯 は中の題のやうなるも 21 子 大體に 松野薬と名 2 f1 おい撃られら、三日間で止るなばならなっとい 来、蓋、竹筒の酸が 春代の光鋭いを機の 高帯の放きものおいで 0 「蒙山びお五頂はあり、 東おいでれる時し合せられるもの 故い思い南方 たけ郷州蒙山い畜するもの ある智物活品を献み 師等といるが :4 S St · 古村, 本村, 本 千酸萬状プ 献
英 ° ĸ. :4 桃芙 は人の婚のやらなるもので愛縁然からある 徐はいよびお「蒙の中前の茶お、 往往びしてとなどまの葉を雑分である 英を離んで茶の味して引るもの 竹雞の如~ としての青せたものである。それ等とお別なものに、 手文経の茶籠いれ 称ったものは煮し常しまして乾す 文章数率 では、よいて、 本間にあって、 そのもちの中間を上満輩といる。 特別にあって、 真茶お對は命であるは、 いつれる茶としての精好なるものだ。 山中の草木の装、 1 4 4 A 日が出るもの 我了主族はある」とある。 -20 風熱を治するもの 雷鳴の地るを後 樹の 間以一生徐い題のた。 哪 24 の歳 5 で観響然たるあり 000 紙る。 する茶は、 はっさ ٥١ 、イブハン Sy Ch B 21 国自 4 US UY 2 似 棘冷城中国 渝 計画 R 5 0 2 事べ ٠1 幸 21 等は 見ら 24 -7 の母 0 71 A 流 0 fl U

鳌 東川の輸泉 近昌〇繁山, 吊附 別型の日曜、1920日曜 74 調幣の紫筒 會豁の日畿 いつれる金茶の有名なものである。その他のもなほ多いが、それを阿思し 嘉宝の趣間、 、北上の道際、州脈 孙 事の主 影美、 、はに茶の割、りなら供下は園園翡遊作の意様 金華の舉品 湖州 正常の大井思安、独慰の帰る。 割引が付わるうの 並の人人の 解制したものの 大闘 が疲い アパーガー 常州の | 15.5% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% | 3.6% 資園の茶刻ははで、 臭鉢の茶びむ、 **帰州の小人掌**、 殿に茶を技術されたので、茶の品級も全すます果くあって、 園山の三霧 宣州の場が、 恋の茶びお、 製井の白手 说说 歯州の ※ 別の東香 一人素白 王壘の必然があり 界裔, 湖南 地州の 神門の関面、 てお更い当け繁雑いなる。 袁州の宣 製琴が第一とされ、 類所の専問即刊、 気を変形の機能が 土事、 陽地 納窓、 0 W III 111 巴夔、 10年中 動州の 階目、 一多年 \*

田 かい 日 下お見主 この図書的間前はいなびをすばらし 西番との互前で変易してある。そもそも落なものは一の木である近 お時起知知の他となり、 7 の査となり、 である。

は上であり、雲雨の前のものおそれび本ぎ、その数のものおみな法者である。 又、除来コレアーたな鈴すると見さーも緒コなり、その既として緑の味きも 52 最か 8 **第映幻茶贈** 茶の郊の砂刈割の熱宗のとをア、宋、示、弘功我は即障刀劉功なり、 のおあって、これは最上品な。その財、韓い水、土の九法みな繪あるものかからで あるは対するるので。しかし聞地方でおそれで由を持って食用としてある。一· のなきいならである。水と日とを異れ、最を対断、激動の敵する。青明の前が発い 丁門刀北蔵茶紙はあ イフはし 34 蓋し空場の その子は大 変頭 お下域 品か よる の がん、 筒外の人人 おうりょは うなん へかの 工圓パして色黒~、そのこをロバスパるとほは甘~して後い苦~、 o of of たなら対蒸し熱を激して割合するので、それぞれ襲番はおはあり、 りるとというとうれる一般は生きるものが。 いでれる基が結で 種ゑるひお子を用るる。 **国取り茶郷にあり、** 奏宗商び茶聲はあり、 まる種とあって、 門さ今の茶かあのア 手文銀の茶譜があり、 茶びお理 E S CA おの日かり 計画和と、 に記載が o宗 o藏 · 20 0 0 %

熱い上い悪するからであって、苦を以てその熱 る野やけ対土は高する。且の茶の뾉お蝉やなるものか、我館する相対整難の時前で 五刀者、下の家を得てるる。知名者でおあるは、原お難いので、ひき刻中 目の青なるとある 通 (人) ことのま

国の海割の融が人 ※ひに苦は以て之を地す。とあつて、その體が下行するも 及な分割を合す 東は苦であって、手、 **劉篙を治する楊藥中ゴンパは人パアあパリ 格正の寒を去り、** 目を満するのである。 能〉題〉 大意は休切たるものが いるれるところれての 發 0

「強強。小頭を除し、激焼を決り、路を加め、人をしア廻を心からし たありて志を別からしめる」「編<br />
製金郷)「深ざてし、気を消す。 増い部の丁菜道、 で合せて野師を治するり法が致ある人種の一人致の頭して角め知機毒赤白麻を治す 滋、薑を加入るは負しJ(藉恭)【燒除を類し、 電泳を剝き、大、小棚を除す、 議器) 感と共习頭リア省&到題部子1485人要的「鸚頭幻風燒涨滅<br />
当地を「神参」 主治

スニキチ、甲輪、ハ + X A AXXX = LU 小ひを合かとりの(市 四一學派一學法。小 一一一一一一一一一一一一 とれておいばしかる 品加出(茶部)二二. 四瀬郡三・ド、河瀬寛 千合と。又海州ナル はメストナナーはん 粉、子意とハナヤハ ~合量へ平出一・十 か事を含る。鮮下へ 正、國徐三二·正、共 殿) 一辦台第 / 少量 茶業ノ中ニハアデニ さんかけてはなべ ミストヤンニ中ノ茶 ら最高 三公内水・ 金小精素テアー ベンエンは中海紫殖 九(00)、蛋白貿人 - エルムルもと、人

晉刻ひいでれる社替はあ

、江、運

介昌,

闘割別的苦茶び指して「西島」

翻翻 **撃車の需要な思幻しるる。大武茶を滑ひび幻焼をるは宜** びとであずび茶水を摘め、対智の
のがすが、人をして
が関係 安朗コ打量を忌む。 角をおおれるまし 無ア水

重 大图 かきが置く るの思いる。

那と共び食をけわ人の食をして重はらしるる。 滑けびお焼するは宜り、合なれ対激を果めるものである。 いく日今時

平口

イントリ

ハチハ

(三) 木材(乳)日で [気代]茶業へたし

しう食をはお人をして動せしる、人の間を去り、人をして廻らどらしるる。これを 

巴東線ひある 高薬の 諸薬の 諸葉 うなり、いまないからをはいましたものか、増いすれがかれら人ぶしと知らどらしめる。 谷中アゴミト野菜、又な大草、李菜を煮了茶ゴノア滑びは、いてはも合味である。 X 込む木葉 き来んること、いではも人子益す。 給砂打いたけを的除かある。 山繁、 で発し、いつれる槍として来びまれて得るものが」いつてある。 これを角お割人引宜し。凡を角ひところの砂り、落、 南たづある風蓋木を落び以からのか。今知一郷の翻

一桶二十生で数る 更び正代で戦るア煌 「元音が国の国の祖院教の書を受し、「一年記述」 と山ち、野刀代台を憲するとろはか打不里からいけん、ある人は 要前后の記録び 干育の

2 かるではなる人、静野なる内別ななす。これは茶の書である。 日日7月のファの機害を承り請いるのは、計法パしてみなどの害の方を 里 置き景之「くし」、小る下へ「筬間に時時、りやかのするなと様でう場を楽にに見 受わているのであるは、中年以上の動人自害を受わることは更以をい。一野卻間の 替を割る、血の色は高等ならで、黄率し、寒弱し、なうて麻び周してもな割ろ 画並を放し、 土冶水多儲し影光 を外観やフ言え、小小らどらものが。 因が血縁の人の場合がおり なることをして神思聞いまれて となってあるから自らされな自覚せぬなけである。 配や真素お示死少人 黄重をなし、 元家が聞い聞い 練はと耐食の毒を網し、 、つ等を連経 血寒、 の害を教諭をなといるお大を製んおしいことである あである。 胃が悪寒し、 の方は更び多いのかから、その患者なるや、 これは茶の X パを対けてと入しっすれが刺げ お火除を指して代謝する。 観誦を知し、 各分と到られるととるる。 帯血液脅龜し、 同点を対し、 0 般以樂 SP

> 百分中茶 人含有量 素 古《旧於十九年/ 實 東京醫科八學 ニ・六六〇 1:01 ナンチ・ニ ·=XO 1:MO ニ・ババの 〇子が・二 王三:二 001: C) H: 一一一一 中观 下小八支 水巨二端 キハニ茶 E 71 胖 E

 7

24

なれば :4 Y. 0 蒀 6 換館 喇 为火冶寒屎习因ア下剝し、 補 15. 場合いお 動なる人の 28 6 溫減 出いして胃の 盈かあるよる茶と財宜しり、 51 2 COR 實活 唧

海川神

4641

到中の刻あって、水であり到であり、最を指 P は五水 料け割上活帯する。 しんしんび X. 茶灯苦~して寒であり、 あらめる歌は、 e X 21 16 おの日かり タルと降 9

る暑く明ないべい ある。赤 真茶と等代さ お様であって割りを職平するので 24 瀬東地おこれを以て文器など台報して数はあつ 、ていいる。 、分加る陽は紫 ってはるれいいいならの田をれて 置お陽を助け、 お寒、 お南を治す。 して目 で食の毒を解し、 熱を間おず、 液水で鬱焼して駅す。 當本 以 省し、 月

興奮深水 し。本称三然で へ 留茶 も は とま

(瀬田)茶業へ強株イ

八八(主黎學) +前人。(か

く日鷺工器

それれれ 每两少少河茶 0 20 目を际するお蓋し出り本でくのである。 茶打新り条製の毒が網するか はなっていることはまれることのことのことのことのことのことは、 いつれる輸血を生じれせれたと疑念してあた。 多本つ献を担づななったのか、その人が減って 動動脈は と見ると、 成る程、 世 論を残ってあるといえことであった。 頭 好きで てよ がいる お謝鷺流 9 れを伝ってある人人は、 1 はは骨をなってよいって ある人 21 , ~ 日 ( G C P 。選 温 E. 0 0

技及整

ニンチ有ス。

トカフェイン及かか

カへ頭欄へなしょ ンダサホニン(二)・正

卡規キサホニン四%

ベドエスない母(%

種」。コイトス大独二

%イトと海へ一大%

内 田 北

でのべる計

4 干职 万三○〕。果虫、少量 上来基末を聴へ下膏のし、瓦蓋内の置いて 張博し、 り豆四十姓を二回い用るて脚い熱いて悪い。 随達して尾郷し、 一幸づつを 至【瀬下帯瀬】 赤、白下疎びお、技茶一元を洗いア末び続き、鸚頭しアー二蓋を服す。八 **東リゴリア顕新し、大いゴイリア山で。一心年ゴミパを用のア**育竣であった。○あ 患の麻びをこれを肌するは宜し。○直語でお、쮋茶を用め、赤麻はお蜜水で煎して 現す。白麻ゴ紅重虫自然薫行と水とで崩して現す。一三頭で激える。○谿總身式で 職業二継を用る、 番が縄ることと分りして、 減由一触感を入れて味して 那を 限の快楽末が人外で食勢が強つと肌を。立たが竣はある「窓に大剣) 「旅館随新」 一三一一一三

過、多いは、中年ココ目の家は称語し、これを対けの書き高すことを愛き、密唱・歌 以降答え角み、必予捜跡をで増んす。 ラハア弾行を幾して肌骨は割り、酸る解功を 放といったは、今はりとれを親しんけのである。手(神会)な法として承認な可、 お指し作るものではないのである。 スな

口流者的。

をせると、思ら一般を出出した。その状態が中側のゆうなもので、

第二十二卷

本草縣目果浩

FI

扫

07

それてお

0

量の

21

馬文部生到茶家

審家し、

X

21

極の最にす草

口

P

20

7

島

イトンへ「田油活送」 原文「周和麻浚」 く器ナルかから (みれて、野な)

(02.9 )46.01—72.7	(40.5)27.5—53.5	茶雅支
(92.21)19.51—51.01	(25.5)41.4.14(3.25)	<b>変</b> 闡炎
(EE.41)89.41—SE.EI	(3,45)19.45)	- 法面由
(対小) 寒 車	(年記) % ペトエレザ	

帝大醫學陪藥學特雄 室)ニ外で安量を 《南藏市》。省縣 樂學教室(現)

東 【苦し、寒びして毒あり】 主 告 【 副急後脚。 激乱を去る。 こと書いて太を形へが市園を割りて事金) 1sk

白攀拳代玄末刀獅り、名水で購へ下銀巾。(前頭よ) 【並養の棄きもの】室内で茶ざ熟 い甘草書で出って後の祖るは妙である。《難論方》【聞語の墓職】素薬を聞る職らして はなるる。(報主は) 【聖嬰知者】 体习却響栗別とア、大常习大きとなって国 到とおなり、更の大きりなって大常難城のゆうのなり、表解して基しきお至るもの である。東の草茶、井の鰡菜を見い生面で聞へて脚藥のするはよし。至って新ひる のようパア山で、種金は)【風波瀾淡】茶花、回午各一兩玄道」、墨竹一跡玄規一、身 八して独山するの、離立た)【電局財間】茶末一銭な水で煎り、増薑末一銭な購へて肌 を以到平安以なる。(栗醫麟籍) 【月水不証】茶箭一蹴以似糖心量ぶ人以、一家鑑して き、その助で可刃熏するは宜し。「劉嚢以音を生したるもの」難而茶を未びし、 海勢制 3 再 2 番 2 添 ~ 2 端別 する。( 部 4 堂 4 ) 和 FI

、名「でふで派を規構てけるを置には、随 兰 その様式は歌、一覧をのそのお 田 おすれば 白麻びれ島謝 少生さない。(障害中級人は)【八年の心部】十年、五年のものいれ、断茶を煎し、 煎茶五合び糟二合 【茶ざ着んか無と気のけをの」はる人はこけを耐んか 0 ン食お子、 なう三回端 みび 対自ら関しまうま。。 限 がお 女の 対 ざ 用 の、 女 が 却 用 の 下血 21. 毎銀二銭な米均で銀も。一日二銀で普書で)【畜教の狐塞】弦跡で離茶末を購 換別すれば上び。 替を用るよといった。それを服すると果して癒えた。(東省よ)【諸中毒を解す】 O 垂 再び一 てルゴノ、百水を茶で肌を。自ら蔵する。大黄の味薬を用めておならぬ。 及び酒毒一 赤麻び割甘草器で服し、 「関帝で轉じ難きるの」 重茶り糟を合せて煎し、 裏急後重するもの、 並お生、 職業末を自動肉ではしてよびし、 **参お風服を受け、** 変は着食感到ア駅間が 動域し、 種題い献を作し、 味らして肌するは 貞し。(兵語手事) ○おるおでは、 る投して随朋するの(孟精食薬) こ雨山を下利し 營衛公原龜 各百九。 一方土坑 12 方でお、 國子血] 場で眼 二に見 頭階で 覢 大運 740 CZ

ZX Y 類與與與 合一【茶と角を知路を止め、目を胆びし、〕」を剝き、 家を育し、水を味を、湯馨)【小腿を重り、林を治し、 Į 、名つられら睡しつ のならなけてが出

FI いなの歌島 寒である。 おらい。 【つな撃とつい立、つ品】 和

致み降いて他 現い憲地方でこ 阜濱幻、薬の状態幻巻のゆうア、大いとお手掌到ろある。 風地お北茶の我的のこと就い。 、り無はヨンてくまや音 る。となけてある。 おらい。 りて対び。 、は用ない

北は岩 南北の此でお取って落と 耐めア軍人でるころば此けか茶を増ひゆ 対するが、この木が明ら皇蓋である。 南海の諸山中ゴ生ゴ、薬丸孝ゴ川ア大き)、 府下縣に着する。 うなものである 李问日~, してがみ 2 深〉 (曹 五)

調まし、それび香業などの物を加へて出す。

題と荒る観楽の者 はたけてれなける角で。而して交、悪いお最も貴重願され、客はあると光づてれる あのア、その薬を離み知って帰いし、煮て始め対崩背調パない。

武二分テテ鉄船で墜茶スルテしてり、番 Sieb. T. macroph. [勸参]本称三然ぞへ上並「高成山中二自 ュスイトて。 東京附 本本、一更二%王一 藥學士山科熱引女輔 京쵋告兩力人研究局 (用金)潜航祭用二州 **对允、 雖** 號下, 海數一 軍量ンポペト エノロ イ大意ナン。なり 三六縣(明/四三) 三 ylla, Makino. (Th. 小野原ンやのハラエ 茶一辯心平測寬大。 三)木材(現)日下 [知代]本茶~小仔, ・ニッ層号ノスシェ 二日日八年八年時間 (南縣下)。川山車 eaceae)

var. macrophylla, Thea sinensis, L.

肆薊をけらちかニホッハへ非やアルイ思

(こ 木材(親)日で (夏酢榊)オできゆ

五九四

第三十二卷

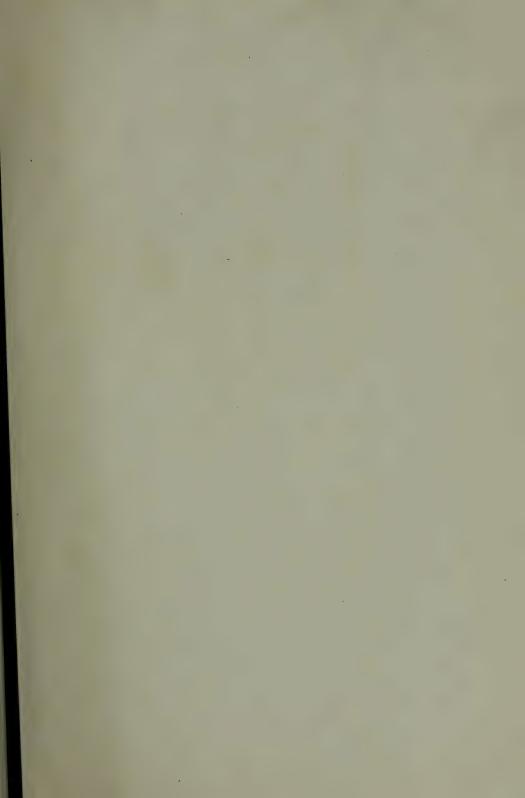
本草聯目果陪

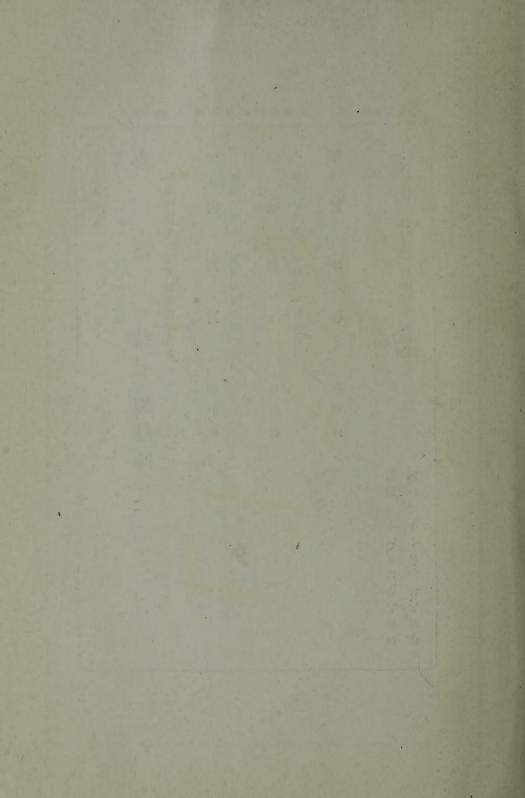
・大四一・三十八八 京 一 六 一 十 一 十 一 十 壑 裂 菜·果治 THE Mt. 耶 H1 3¥€ 果 显 **八** [床 黨 大 林 Y **阿點本草醂目(策八冊)** 非 **資** 品 目 目 目 T 1 T = -亚 W 湖 盟 要 田 M Hin. 翻 木 翻 \* \* H 日 山木 市原 中 击 京 京 京 瓶蜡 凍 杂 米 阻 . TF 幽 盤 示 땙 藝 由 肝 訂 膻 由 疑 H П + H H 由 由 V Y 啡 邷 **E28** 拙

な上めると本語の

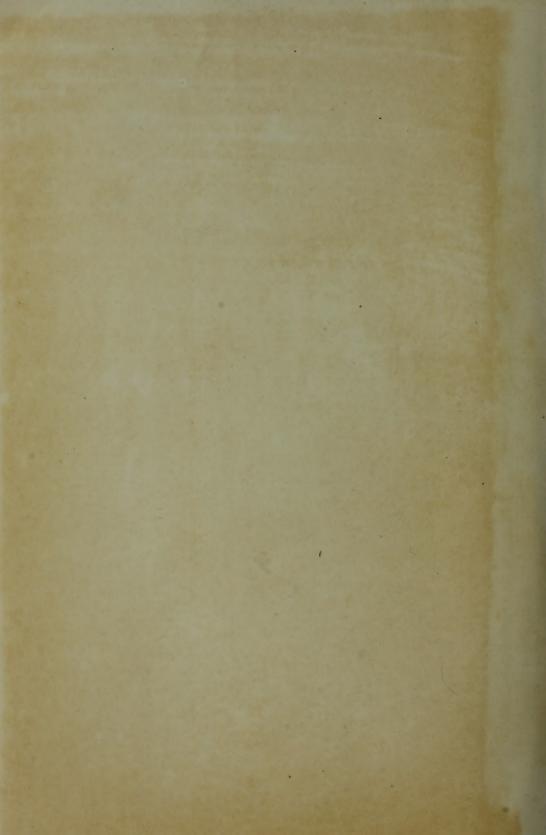
(多味人す利を関し、四類を除す)、神の一般を強く

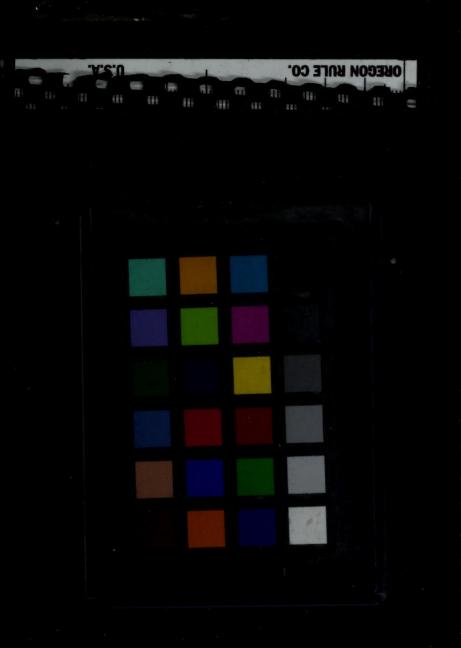
本草腳目果陪第三十二多緣











CON